茨城県教育財団文化財調査報告第30集

# 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書11

## 南三島遺跡6・7区（下）

昭和60年10月

住宅・都市整備公団　茨城開発局
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第30集

# 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書11

## 南三島（みなみみしま）遺跡6・7区（下）

昭和60年10月

住宅・都市整備公団　茨城開発局
財団法人　茨城県教育財団

# 目　　次

## ― 上 巻 ―

序
例　言
目　次
第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査方法……2
　　1　地区設定……2
　　2　基本層序の検討……2
　　3　遺構確認……2
　　4　遺構調査……4
　第３節　調査経過……6
第２章　位置と環境……9
　第１節　地理的環境……9
　第２節　歴史的環境……10
第３章　南三島遺跡６区……14
　第１節　遺跡の概要と遺構と遺物の記載方法……14
　　1　遺跡の概要……14
　　(1)　遺構の概要……14
　　(2)　遺物の概要……14
　　2　遺構と遺物の記載方法……16
　　(1)　遺構の記載方法……16
　　(2)　遺物の記載方法……20
　第２節　竪穴住居跡と出土土器……23
　第３節　土壙と出土土器……270
　第４節　溝と出土土器……413
　第５節　埋甕遺構と出土土器……427
　第６節　炉穴と出土土器……433

第７節　土器以外の人工遺物……438
1　把手……438
2　土製品……448
3　石器……473
4　貝製品……492
5　古銭……492
第８節　自然遺物……494

## ―― 下　巻 ――

第４章　南三島遺跡７区……505
第１節　遺跡の概要……505
(1)　遺構の概要……505
(2)　遺物の概要……505
第２節　竪穴住居跡と出土土器……507
第３節　土壙と出土土器……636
第４節　溝と出土土器……743
第５節　埋甕遺構と出土土器……764
第６節　地下式壙と出土土器……773
第７節　粘土貼り遺構……778
第８節　土器以外の人工遺物……779
1　把手……779
2　土製品……781
3　石器……794
4　古銭……803
第９節　自然遺物……812
第10節　グリッド出土土器……812
第５章　まとめ……813
第１節　遺構……813
1　竪穴住居跡について……813
2　土壙について……823
3　溝について……826

4　埋甕遺構について……828
5　炉穴について……831
6　地下式壙について……831
7　粘土貼り遺構について……832
第2節　遺物……832
1　土器について……832
(1)　野島式土器について……833
(2)　加曽利EⅢ・Ⅳ式土器について……838
(3)　有孔鍔付土器について……845
(4)　器台形土器について……848
(5)　台付土器について……853
2　土製品について……855
(1)　土器片錘について……855
(2)　土製円板について……857
終　章　む　す　び……860
写真図版

# 第４章　南三島遺跡７区

## 第１節　遺跡の概要

### １．遺構の概要

南三島遺跡７区は，南三島遺跡を１～７区に分割した大規模な集落跡の一部である。

調査の結果，縄文時代の住居跡，埋甕，縄文時代を主とした土壙，時期不明の溝，粘土貼り遺構，江戸時代の地下式壙を検出した。

住居跡は６区同様，縄文時代中・後期の遺構で，数は37軒である。調査区の全域から検出されているが，遺跡西部のＥ２区，Ｅ３区は数が少ない。住居跡37軒の中で，炉を有しているものは20軒，炉をもたないものは15軒，炉を有していたが，土壙等で削られたと考えられるものが２軒である。

埋甕遺構は５基で，遺跡北部に１基，中央部に３基，東部に１基検出されている。そのうち住居跡内から検出されたもの４基，住居跡外から検出されたもの１基である。

土壙は468基で，調査区の全域から検出されている。形状で多いものは，楕円形（不整楕円形を含む）が318基，次いで円形（不整円形を含む）が76基である。大きさでは長径が１ｍ以上２ｍ以下の規模のものが242基で半数以上を占めている。

溝は11条で，遺跡のどの大調査区からも検出されている。なお，６区の溝とつながるものが３条含まれている。

地下式壙は５基で遺跡南部（Ｆ３区）から検出されている。そのうち４基は，第４号溝の南に横一列に並んで検出され，残りの１基は第７号溝と重複している。

粘土貼り遺構は，２基で遺跡南部（Ｆ３区）から検出されている。

### ２．遺物の概要

南三島遺跡７区から出土した遺物は，人工遺物と自然遺物に分けられるが，その大半は人工遺物である。

人工遺物の出土量は，収納ケース（60.0×40.0×15.0cm，60.0×40.0×20.0cm）で60箱であり，土器，陶磁器・土製品・石器および金属製品である。

自然遺物の出土量は少なく，収納ケース３箱である。貝類が極わずかに出土しただけで，他は馬骨である。馬骨は６区と同様に遺存状態が良くない。

人工遺物で，主体をなすものは土器で，縄文時代中期後半の資料が最も多いが，近世以降の陶磁器片も地下式壙や土壙から出土している。住居跡は，37軒検出されたが，遺構内出土の遺物量

は6区に比較して少ない。また，特に多量の遺物を出土した住居跡はないが，第15・27号住居跡などが多い方である。遺物の出土状況としては，完形品が出土した住居跡はなく，破片が覆土中に詰まっているような状況を呈している。遺物の接合関係としては，第23号住居跡と第409号土壙とは，相互に約50m余りも離れているのに，数個体以上の土器が接合関係を有し，ほぼ完形に復元された個体もあったことが注目される。なお，第409号土壙は，特異な形態を示しており，特殊な遺物を出土するなど当遺跡の中では異色な存在の遺構と考えられる。住居跡の大半と土壙の多くは，中期後半の加曽利EⅢ式期のものと考えられ，これらに伴う土器も目立っている。第35号住居跡は，後期初頭の称名寺式期のものと考えられる。その他の時期に属する縄文土器片もわずかであるが出土している。

加曽利EⅢ式期の土器については，6区の出土土器と比較検討して位置づけをするために後章にてまとめて検討する。

第10号住居跡の覆土中から逆位で出土した土器（第1号埋甕遺構出土土器）は，注目すべきもので，土器の文様にも異質なものがみられるので，後に若干検討したい。

6区で指摘した有孔鍔付土器，器台形土器，台付土器も少量出土している。

土製品には，土器片錘・土製円板・有孔円板および耳栓・茶匙状土製品・動物形土製品などがみられる。土器片錘は全体で303点で，土製円板は24点，有孔円板は18点である。耳栓は，第409号土壙の覆土中から出土した断片が1点だけである。茶匙状土製品は，第15号住居跡からの出土品であるが，特異なもので類例はごく少ないものと思われる。動物形土製品は，第409号土壙内のBピットから出土したもので，顔面のような施文がみられる。第409号土壙の形態とともに特殊なものと考えられる。

石器のうち，定形石器としては，石鏃・磨製石斧・打製石斧・礫器・磨石・石皿・敲石・浮子・砥石などが出土している。他に剝片も若干出土している。石器では，磨石27点，砥石14点，石鏃9点などが多い方であり，全体の量としては少ない。砥石は，縄文時代のものではなく，近世以降のものと思われる。石器の出土状況としては，第31号住居跡の床面から石皿と磨石が共伴するようなかたちで出土しているのが注目される。

7区では，近世のものと考えられる地下式壙が5基調査された。そのうちの第1号地下式壙からは，130余点の古銭が出土しており，大半は寛永通寶で，他に宋銭，明銭も含まれている。本壙からは他に完形の灯明皿3点，染付風の碗の破片などが出土しており，江戸時代の所産と考えられる。他の4基からは，遺構に伴うと考えられる遺物はほとんど出土していない。

第4号溝の覆土中からは，常滑の大甕の破片が出土しているが，これらは本溝の時期決定に有効なものと思われるが確実ではない。

自然遺物は，第358号土壙の確認面に点在していた微量の貝類が，縄文時代中期のものと推定さ

れる以外に，縄文時代の資料はない。シオフキ・サルボウ・ハマグリ・ウミニナが認められている。第3号溝から出土した馬骨は，歯の部分以外は遺存状態が悪い。

## 第2節　竪穴住居跡と出土土器

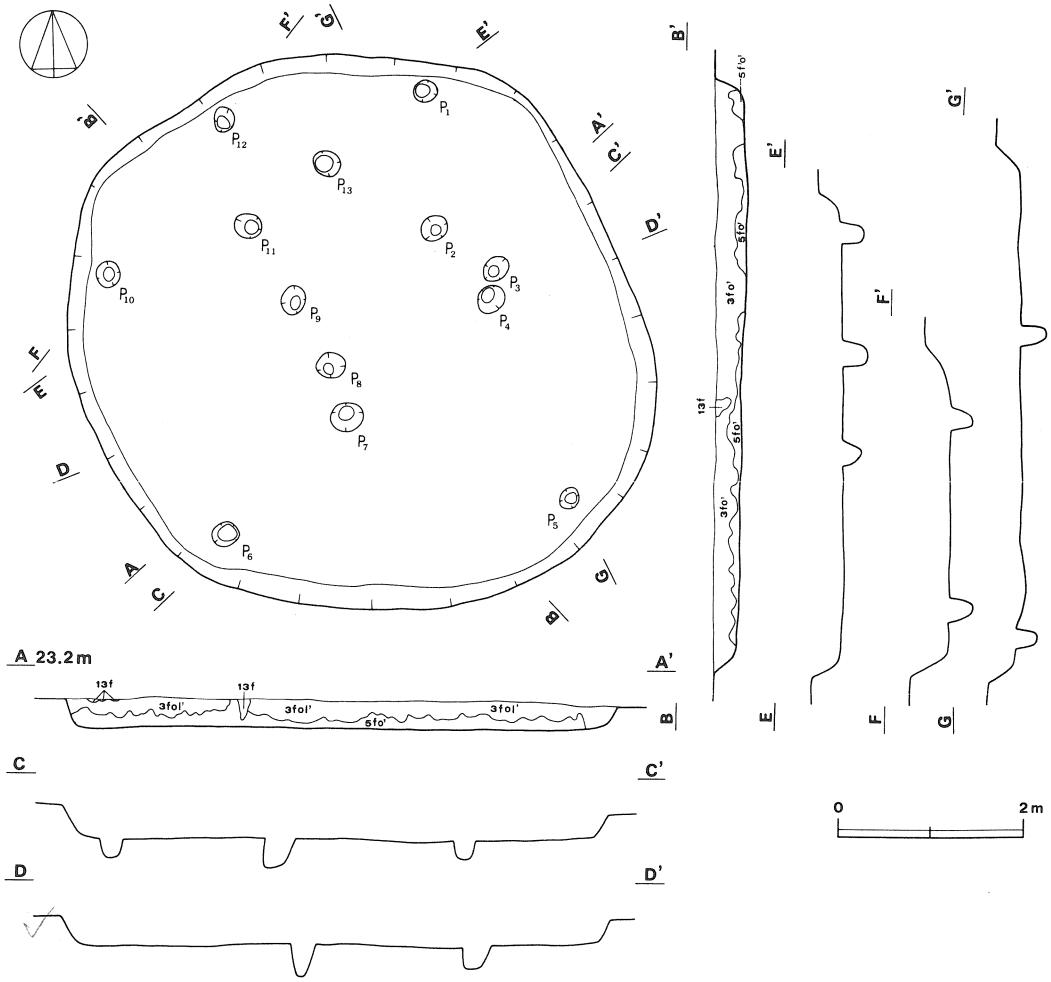
**第406図　南三島遺跡7区遺構分布図**

**第１号住居跡**（第407図）

本跡は，遺跡の北西部D2$d_6$区を中心に確認されたものである。

平面形は，長径7.0m・短径6.2mの楕円形で，南東側が外側へ張り出している。長径方向は，N－61°－Wを指している。壁は床面から外傾して立ち上がり，西側で一部軟らかいところがあるほかは，硬く締まっている。壁高は，24～39cmである。床面はソフトロームで部分的に踏み固められ，平坦であるが北から南にかけて低くなり傾斜をしている。ピットは13か所検出され，規模は径28～36cm・深さ20～36cmである。５か所が壁際に，８か所が中央に集中している。そのうち$P_2$・$P_4$・$P_7$・$P_9$は深さが一定しており，中央を囲むように台形状に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は３層からなり，黒褐色土・暗褐色土・褐色土の順で自然堆積している。１層の黒褐色土は軟らかいがほかは締まっている。



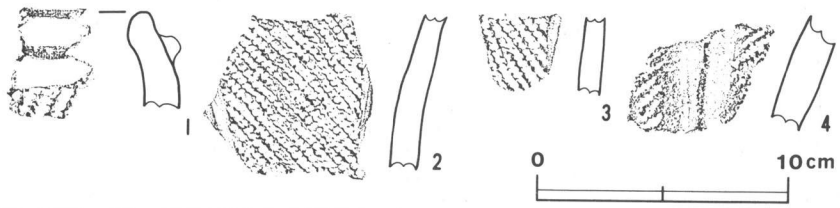

**第407図　第１号住居跡実測図**

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

**第1号住居跡出土土器**（第408図1～4）

1は，隆線による口縁部文様帯が構成され，以下に縄文が付されている。内面が剝落している。2・3は，太めの沈線による曲線的区画内に複節縄文が充塡されている胴部片である。4は，断面三角形を呈する隆線が垂下している胴部片で，胎土に長石粒を多く含んでいる。

本跡から出土した土器片は少なく，時期決定は困難であるが，出土土器から判断すれば，加曽利EⅢ式期と推測される。




**第408図　第1号住居跡出土遺物拓影図**

**第2号住居跡**（第409図）

本跡は，遺跡の北西部D2c$_8$区を中心に確認されたもので，第1号住居跡の北東側1.5mに位置している。

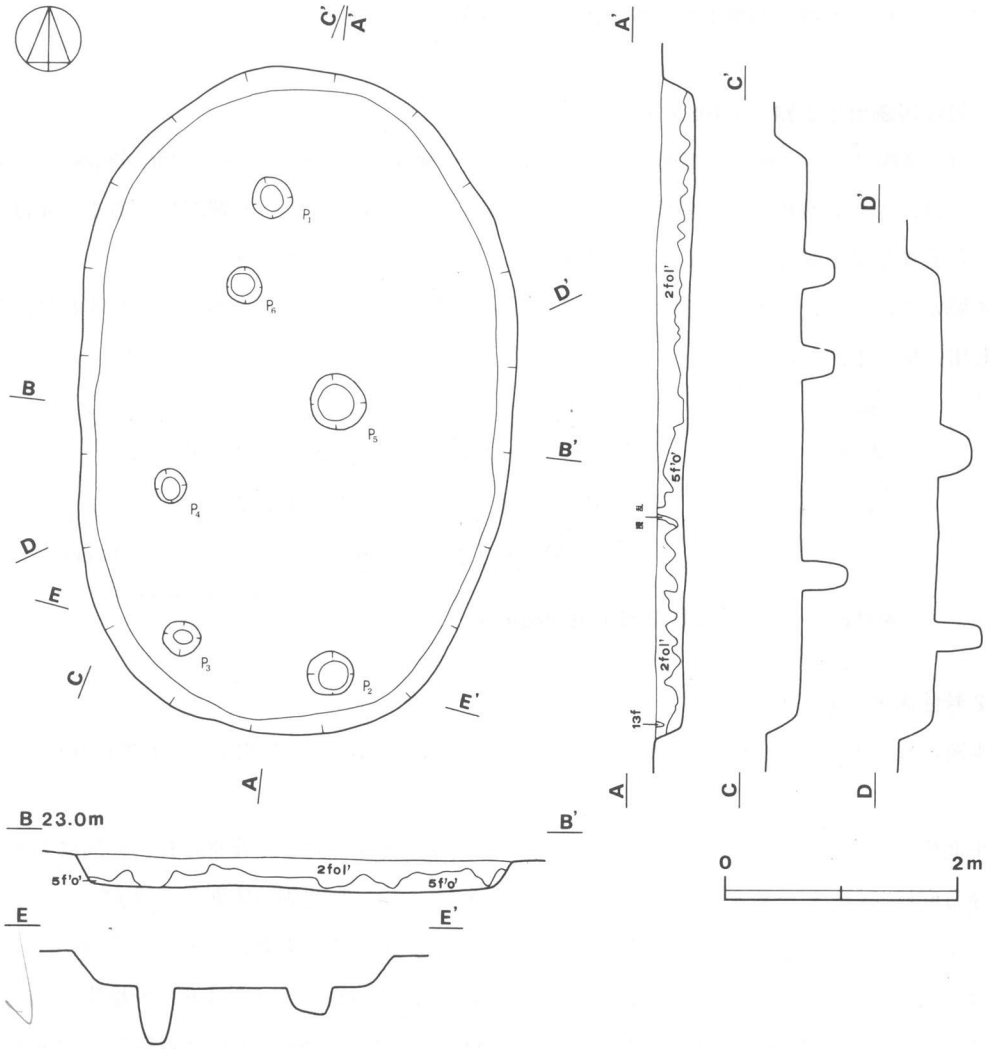
平面形は，長径5.8m・短径3.7mの楕円形で，長径が短径に対して非常に長い住居跡である。長径方向は，N－3°－Wを指している。壁は硬く締まっており，北側が床面から垂直に立ち上がっているほかは外傾している。壁高は，22～30cmである。床面は北東側の一部でやや低くなっているほかは，平坦である。ロームの床でよく踏み固められている。ピットは6か所検出され，中央の2か所は径39～44cm・深さ23～28cmで太く比較的浅いが，南側の2か所は径30～32cm・深さ40～49cmと深くなっている。配列が不規則なため，主柱穴は判別できない。炉は，検出されていない。

覆土は3層からなり，2・3層が覆土の大部分をしめている。1層の暗褐色土は耕作土で厚さは薄い。2・3層は，暗褐色土・褐色土で，ともに締まっており，自然堆積をしている。

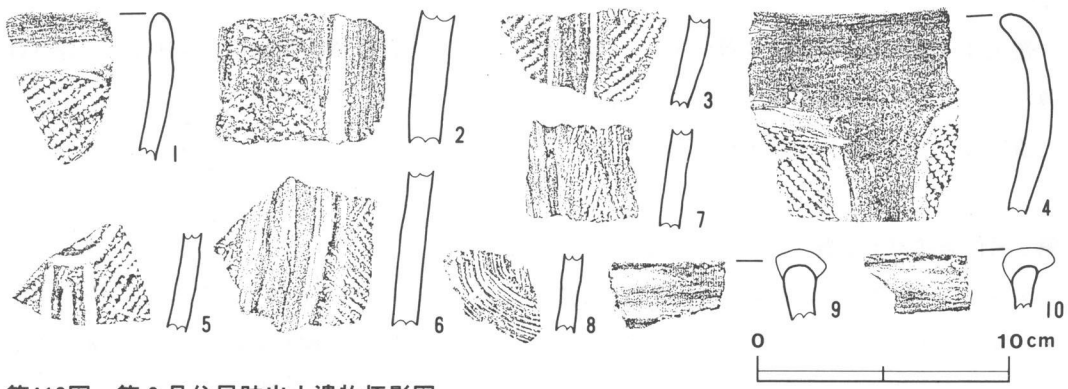
遺物は，縄文土器片が覆土から50点出土している。

**第2号住居跡出土土器**（第410図1～10）

1～4・6は，本跡の確認面から，7は，土層セクションベルト内から出土したものである。5・8～10は，覆土から出土したものである。1は，口縁部に1条の凹線を巡らし，以下に縄文を施している。2・3は，直線的磨消帯が施されている胴部片である。2は厚手で，3は薄手である。




第409図　第２号住居跡実測図




第410図　第２号住居跡出土遺物拓影図

4は，幅の広い口縁部無文帯を有し，逆U字状の区画文が沈線で描かれ，内部に複節縄文が充塡されている。第1号住居跡の2と同一個体とも思われるが，接合はできなかった。5は沈線による施文が主となっている胴部片である。6・7は，細い隆線による区画を有する胴部片で，6の隆線の断面はやや鋭い三角形を呈し，7は低平な鈍い形状を呈している。8は，曲線的な条線文が施されている胴部片である。9・10は，無文の口縁部片で，共に口唇部が平坦で肥厚している。

本跡から出土した土器片は少なく，時期判定はむずかしいが，出土土器から判断すれば，加曽利EIII式期とするのが妥当と思われる。

**第3号住居跡**（第411図）

本跡は，遺跡の北西部D2$f_0$区を中心に確認されたもので，第2号住居跡の南東側5.2mに位置している。西側で第4号住居跡と，床面で第283～285・313号土壙と重複している。新旧関係は，第4号住居跡とは床面の切り合い関係から本跡が古く，土壙とは底面の切り合い関係から第313土壙を除く他の土壙よりも本跡が古いと考えられる。

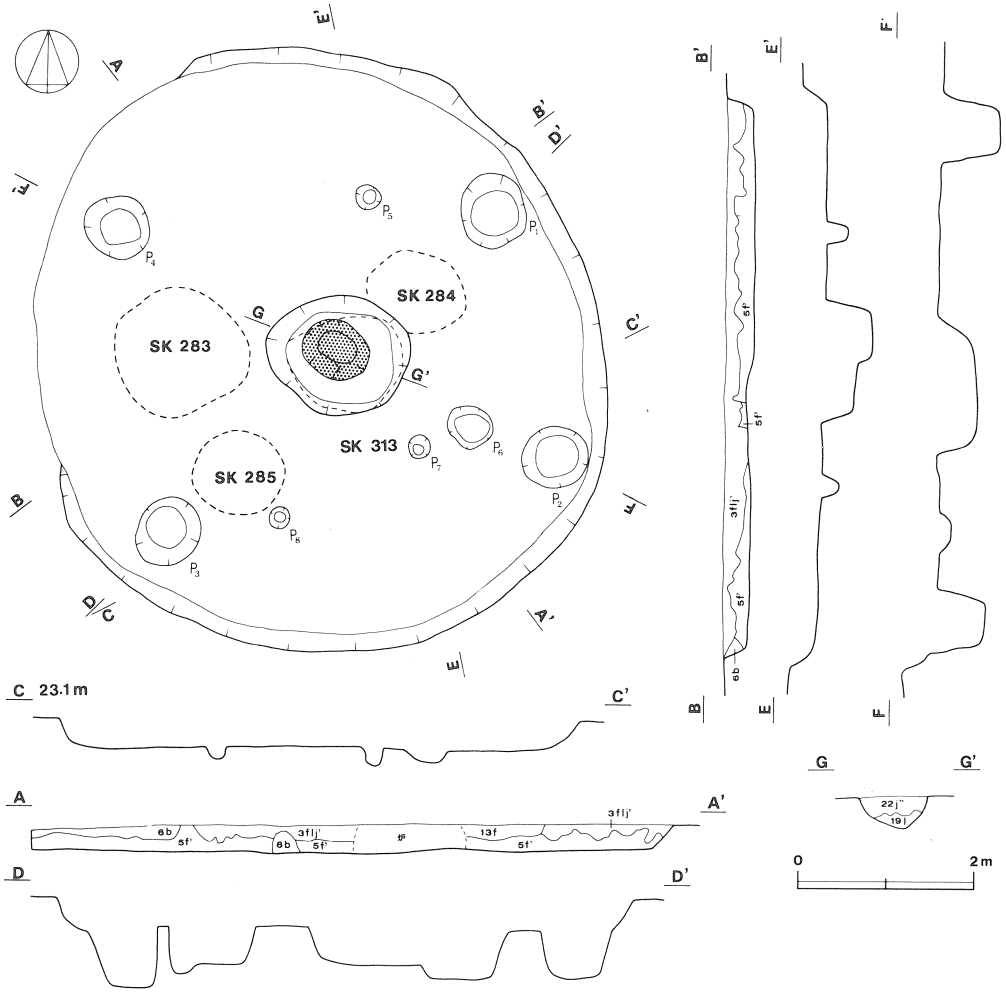
平面形は，重複しているため，形状ははっきりしないが長径7.0m（推定）・短径6.6mの円形に近い楕円形状と思われる。長径方向は，N－45°－Wを指している。壁は南側が一部攪乱を受け，西側で重複のため欠損しているほかは，硬く締まっており，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，26～33cmである。床面は平坦で硬く，重複部分が5～6cm低くなっている。ピットは8か所検出されている。そのうち$P_1$～$P_4$は径80cm，深さ55～70cmと太く深く，炉を囲んで対角線上に並んでいる。また，$P_5$，$P_7$，$P_8$は，径26～30cm，深さ14～26cmと細く浅いピットである。この種のピットがもう1か所西側に存在したと思われるが，検出することはできなかった。第283号土壙によって欠損したと考えられる。$P_5$，$P_7$，$P_8$もまた，炉を囲んで対角線上に並んでいる。このように，ピットは炉を囲んで対角線上に並んでいるので，太く深いピットと細く浅いピットを対にして，使用したものと考えられる。炉は本跡の中央に検出され，径76cmの楕円形で，床面を16cmほど皿状に掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼けているが，炉壁はそれほど焼けていない。

覆土は5層からなり，2～3層が主で，暗褐色土・褐色土が自然堆積をしているが，一部攪乱を受けている。

遺物は，縄文土器片が覆土から40点，床面から5点出土している。

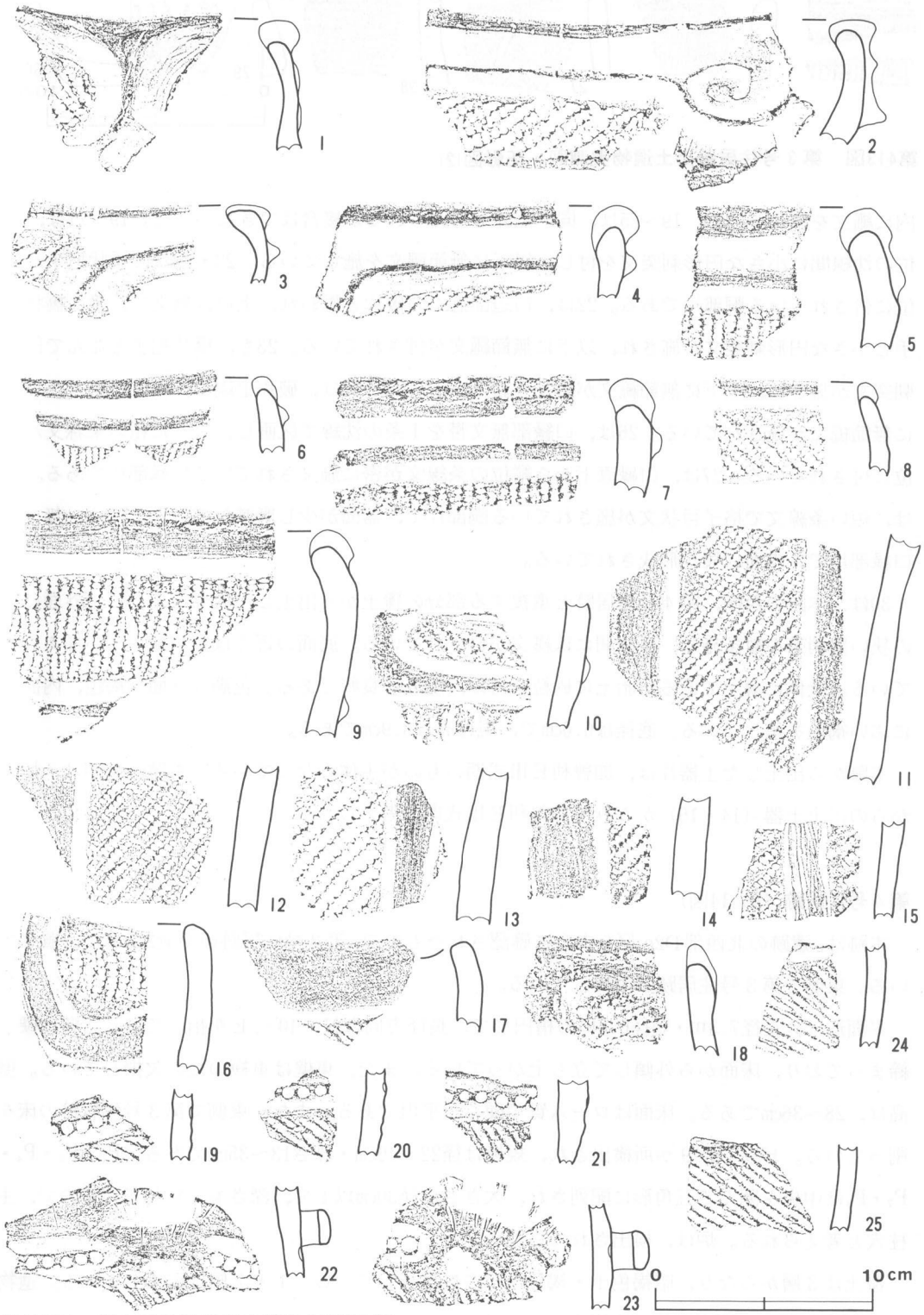
**第3号住居跡出土土器**（第412～413図1～30）

7～10・27は，本跡の確認面から，14・15は，炉内から出土したものである。その他は覆土から出土したものである。1～4は，両側にナゾリが加えられたやや高めの隆線により口縁部文様帯が構成され，区画内に縄文を充塡している。2・3は，同一個体と考えられ，渦巻状のモチー

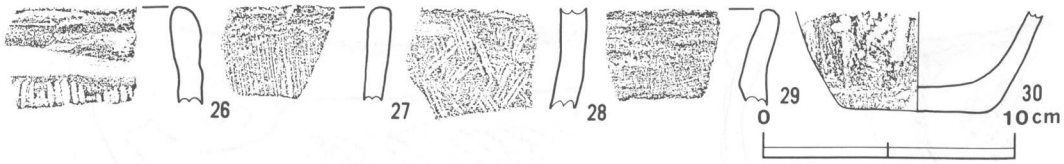



**第411図　第３号住居跡実測図**

フと長楕円形の区画が施されている。隆線は鋭い断面三角形状を呈している。１・４は，やや鈍い隆線で区画がなされている。５～10は，やや低平な隆線と太めの沈線により口縁部文様帯が構成され，区画内に縄文が充塡されている。５～７・９の縄文は条が縦走し，８・10の縄文は条が斜行している。６はやや薄手で，７・９は厚手で，太い沈線によるナゾリが顕著にみられる。８には，隆線が現存部には認められないが，形状からこの類に含めた。10は口唇部を欠き，胴部に直線的な磨消帯を有している。11～15は，直線的な磨消帯を有する胴部片である。13は，複節縄文が施され，内面は剝落が激しい。14は，器面が若干磨滅している。15は薄手である。いずれも区画間に縄文が施されている。16は，口縁直下から２本組の沈線でＵ字状の区画が施され，沈線間は磨り消されている。区画内には縄文が充塡されている。17は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に縄文を施している。18は，口縁部文様帯を低平な隆線で楕円形に区画し，区画




第412図　第３号住居跡出土遺物拓影図(1)




**第413図　第３号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)**

内に縄文を施している。19～25は，同一個体と考えられるが接合はできなかった。19～21は，横位の沈線間に小さな円形刺突文を付し，以下に無節縄文を施している。22・23は，橋状把手が横位に付されている胴部片である。22は，口辺部近くの破片と思われ，上位は無文で，境に橋状把手と小さな円形刺突文が施され，以下に無節縄文が付されている。23も，橋状把手と並んで円形刺突文が施され，上下に無節縄文が施文されている。24・25は，破片上端に沈線文が巡り，以下に無節縄文が施されている。26は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に粗い条線文が縦位に付されている。27は，口縁直下から縦位の条線文が密に施文されている口縁部片である。28は，短い条線文で格子目状文が施されている胴部片で，器面が少し磨滅している。29は，無文の口縁部片で，内面に稜が形成されている。

30は，本跡の西側，第４号住居跡と重複する部分の覆土から出土した底部片である。外面に幅の狭い磨消帯を数条施し，区画間には縄文が付されている。底面の近くは粗い横ナデが加えられている。全体に薄手である。胎土に砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面がにぶい褐色を呈している。底径は6.0cmで，現存高は3.9cmである。

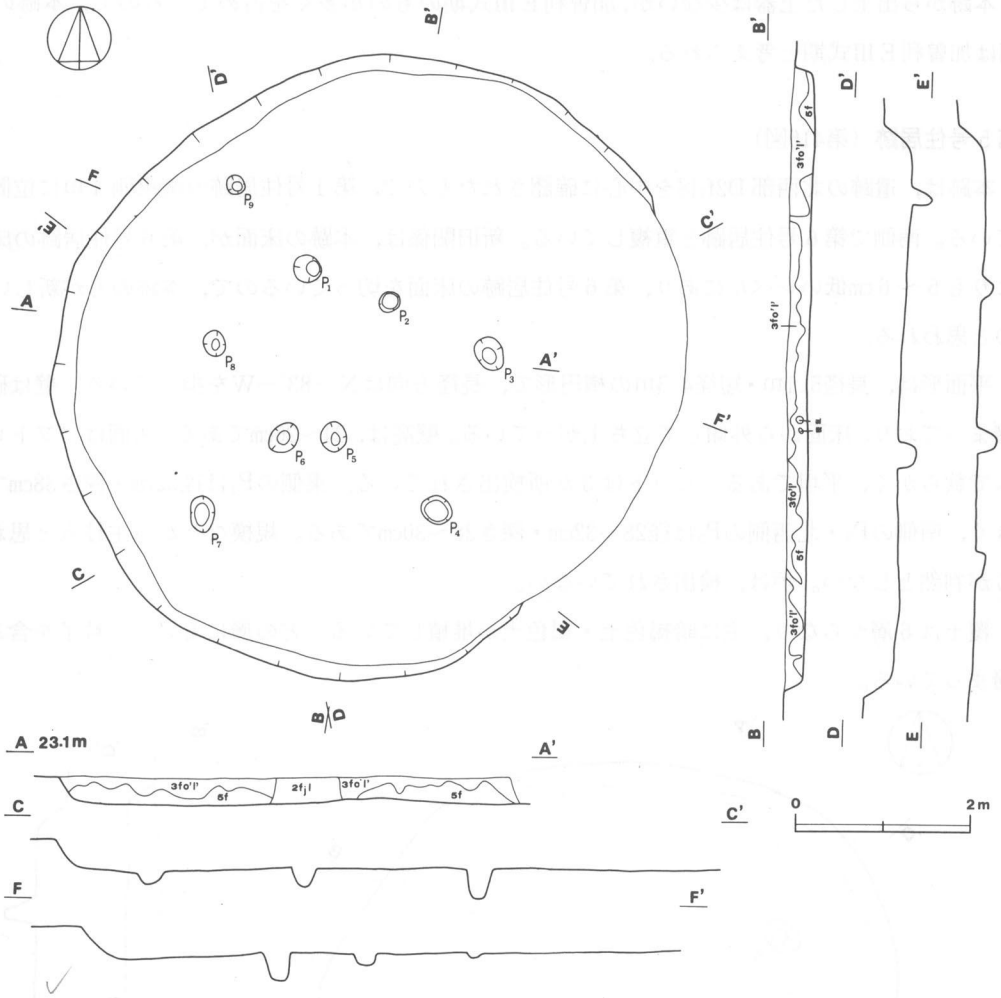
本跡から出土した土器片は，加曽利ＥⅢ式期のものが主体となっている。本跡の時期は，炉内からの出土土器（14・15）からみて加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

**第４号住居跡**（第414図）

本跡は，遺跡の北西部D2$e_8$区を中心に確認されたもので，第２号住居跡の南側2.5mに位置している。東側で第３号住居跡と重複している。

平面形は，長径7.3m・短径6.6mの楕円形で，長径方向はN－40°－Eを指している。壁は硬く締まっており，床面から外傾して立ち上がっている。また，東壁は重複のため欠損している。壁高は，28～36cmである。床面はローム質で硬く，平坦である。また，東側で第３号住居跡の床を削っている。ピットは９か所検出され，規模は径22～40cm・深さ13～35cmである。$P_1$・$P_3$・$P_4$・$P_7$・$P_8$は中央を囲んで五角形に配列され，大きさが径30cm以上で，深さも一定しているので，主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

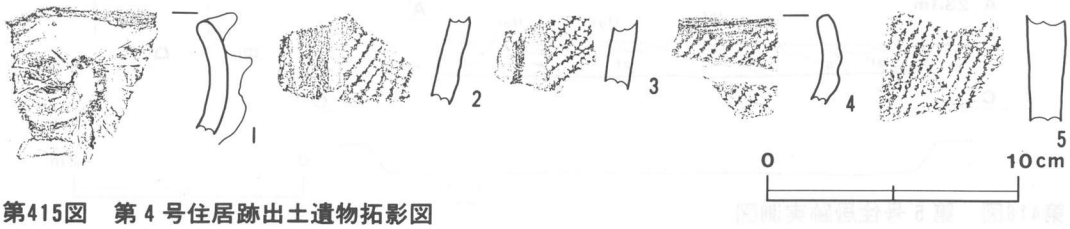
覆土は３層からなり，暗褐色土・褐色土が主に堆積している。１・２層は締まっている。遺物は，縄文土器片が覆土から10点出土している。




**第414図　第４号住居跡実測図**

**第４号住居跡出土土器**（第415図１～５）

１は，貼付隆線で渦巻状の区画が施されている口縁部片である。口唇部は，平坦で肥厚している。２は，沈線による直線的磨消帯を有する胴部片で，３は，隆線による区画文をもつ小片である。４は，縄文地文上に横位の沈線文を巡らしている薄手の口縁部片である。５は，縄文だけの胴部片で，胎土にはやや大粒の石英粒を多く含んでいる。




**第415図　第４号住居跡出土遺物拓影図**

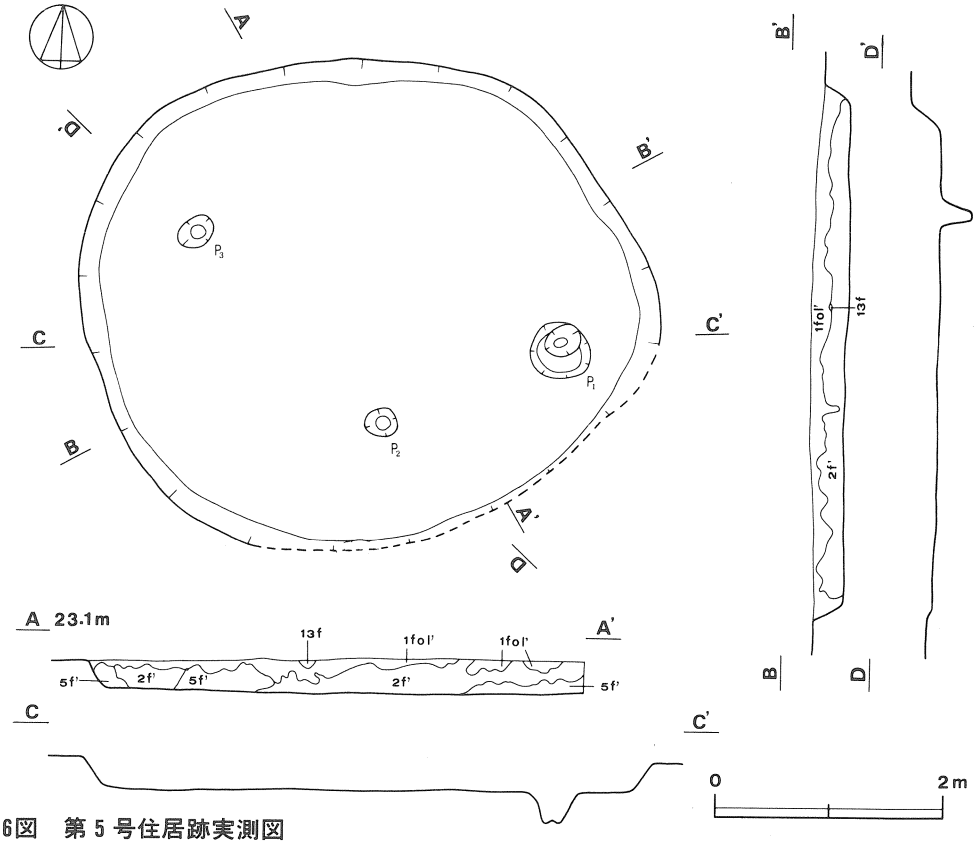
本跡から出土した土器は少ないが，加曽利E III式期のものが多くを占めているので，本跡の時期は加曽利E III式期と考えられる。

**第5号住居跡**（第416図）

本跡は，遺跡の北西部D2f$_7$区を中心に確認されたもので，第1号住居跡の南東側4mに位置している。南側で第6号住居跡と重複している。新旧関係は，本跡の床面が，第6号住居跡の床面よりも5～6cm低いレベルにあり，第6号住居跡の床面を切っているので，本跡の方が新しいものと思われる。

平面形は，長径5.1m・短径4.3mの楕円形で，長径方向はN－83°－Wを指している。壁は硬く締まっており，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，24～26cmである。床面はソフトロームで軟らかく，平坦である。ピットは3か所検出されている。東側の$P_1$は径52cm・深さ38cmで大きく，南側の$P_2$・北西側の$P_3$は径28～32cm・深さ28～30cmである。規模などから主柱穴と思われるが判然としない。炉は，検出されていない。

覆土は6層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。どの層にもローム粒子を含み，締まっている。




**第416図　第5号住居跡実測図**

遺物は，縄文土器片が覆土から15点出土している。また，南側の床面から有茎石鏃が１点出土している。

**第５号住居跡出土土器**（第417図１～５）

１～３は，本跡の土層セクションベルト内から出土したもので，４・５は，本跡と第６号住居跡との重複部分の覆土から出土したものである。１は，太い沈線による直線的磨消帯を有する胴部片である。２も，同様で単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。３は，粗い縦位の沈線文を地文とし，太い押圧を加えた隆線を貼り付けしている胴部片で，内面は少し剝落している。いわゆる曽利系の土器片である。４は，縦位の条線文が付されている胴部片である。５は，単節縄文ＲＬが施されている胴部片である。

本跡から出土した土器は少なく，時期決定はむずかしいが，出土土器からみれば加曽利ＥⅢ式期のものと考えられる。

**第417図　第５号住居跡出土遺物拓影図**

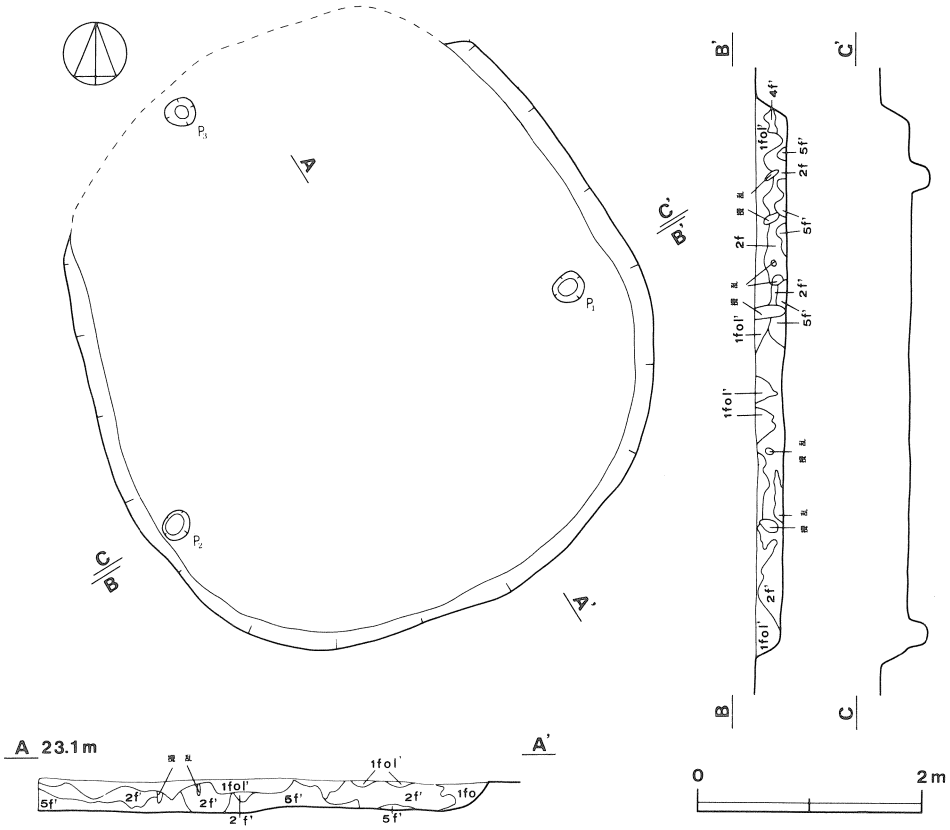
**第６号住居跡**（第418図）

本跡は，遺跡の北西部D2g$_7$・D2g$_8$区を中心に確認されたもので，第４号住居跡の南西側1.2mに位置している。北側で第５号住居跡と重複している。

平面形は，長径5.5m，短径5.0m（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N—30°—Wを指している。壁は硬く，床面から外傾して立ち上がっている。また，北西の壁は重複のため欠損している。壁高は，21～27cmである。床面は平坦であり，ローム質の床であるが，それほど硬くはない。また，重複している部分の床面はやや低くなっている。ピットは３か所検出され，規模は径26～34cm・深さ17～24cmである。壁にそって配列され，しかも柱穴間がほぼ等間隔であることから，３か所とも主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は６層からなり，暗褐色土・褐色土が主体である。どの層にもローム粒子を含み，締まっている。

遺物は，少量である。




**第418図　第6号住居跡実測図**

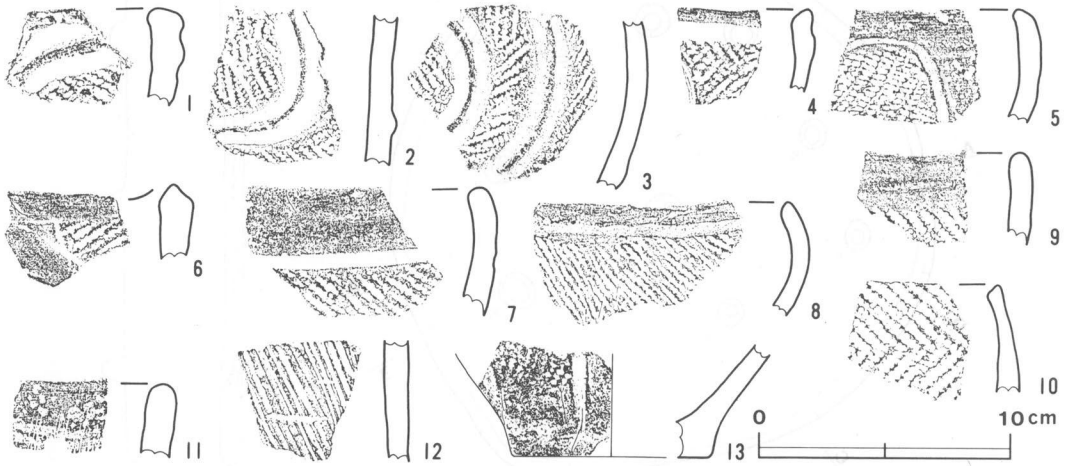
**第6号住居跡出土土器**（第419図1～13）

1～3は，両側にナゾリを加えた隆線により曲線的モチーフが描かれている土器片で，モチーフ間には縄文が充塡されている。1は，口縁部片で，低平な隆線で施文がされている。2・3は，胴部片である。4～6は，沈線による施文が主となっている口縁部片である。4は，口縁部に浅い1条の凹線を巡らし，以下に縄文を施し，沈線文を加えている。5は，口縁直下の逆U字状の区画内に縄文が充塡されている。6は，細い沈線区画内に縄文が施されている。7・8は，口縁部無文帯を1条の沈線で区画し，以下に縄文を施している。9は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文を付している。10は，器面全体に縄文が施されている口縁部片で，縄文は羽状を呈している。11・12は，条線文が付されている。11は，細い縦位の条線文が施されている口縁部片である。12は，粗い沈線に近い条線文が斜位に付されている胴部片である。

13は，本跡の覆土から出土した底部片である。外面に太めの沈線が2条垂下し，その間に縄文が施文されている。底面近くは横ナデされ，底面は平滑に調整されている。内面は軽いナデが加えられている。胎土には小石粒や砂粒を含み，焼成は良好である。色調は内外面とも褐色を呈し

ている。推定底径は8.0cmで，現存高は4.1cmである。

本跡から出土した土器片も少ないが，主体は加曽利E III式期のものである。したがって，本跡の時期は加曽利E III式式期と考えられる。




**第419図　第6号住居跡出土遺物実測図・拓影図**

**第7号住居跡**（第420図）

本跡は，遺跡の北部D3b$_1$区を中心に確認されたもので，第3号住居跡の北東側8mに位置している。

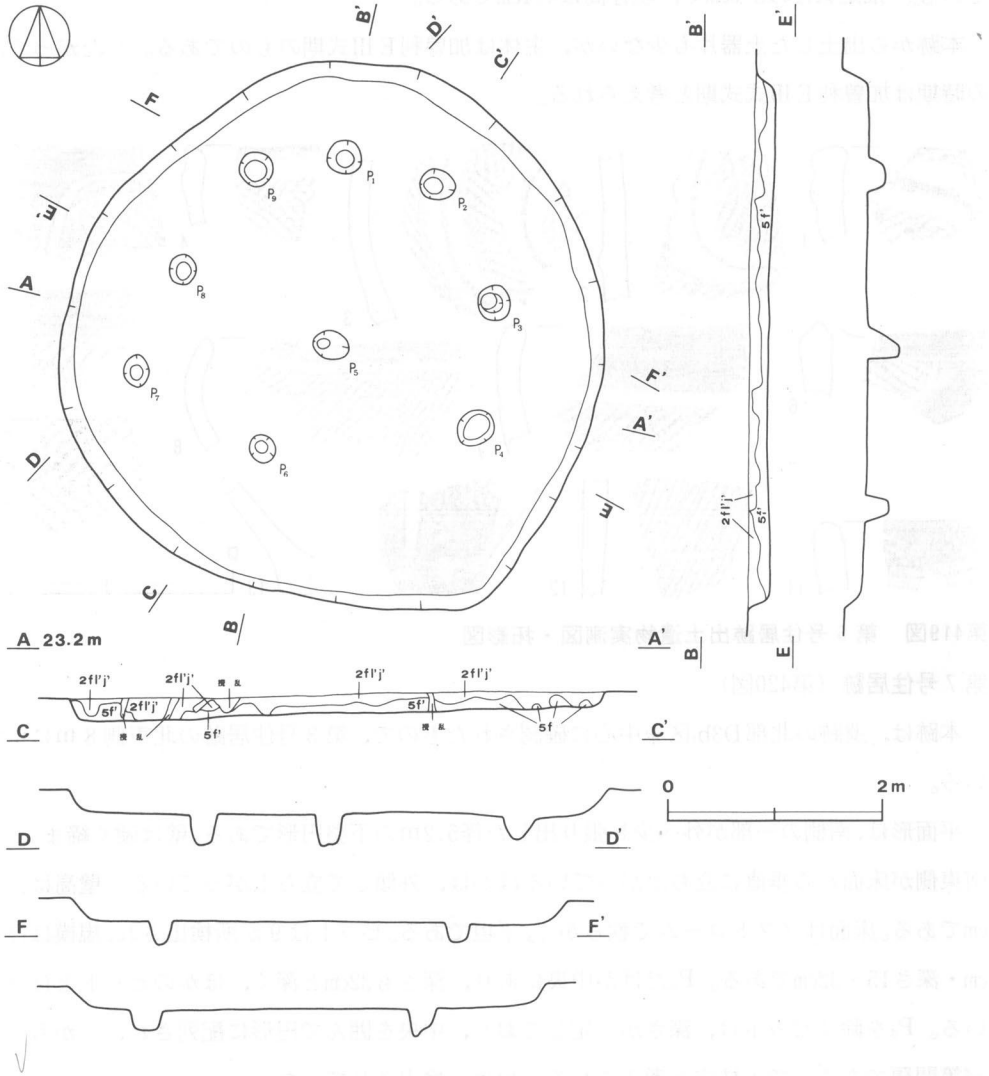
平面形は，南側の一部が外へ少し張り出した径5.2mの不整円形である。壁は硬く締まっており，南東側が床面から垂直に立ち上がっているほかは，外傾して立ち上がっている。壁高は，15～26cmである。床面はソフトロームで軟らかく，平坦である。ピットは9か所検出され，規模は径28～32cm・深さ15～32cmである。P$_5$だけが中央にあり，深さも32cmと深く，ほかのピットとは異なっている。P$_5$を除くピットは，深さが一定しており，中央を囲んで円形に配列され，しかもピット間が等間隔であるので主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は3層からなり，1層は耕作土と思われるので，2・3層の暗褐色土・褐色土が中心である。2・3層は自然堆積で，よく締まっている。

遺物は，少量である。

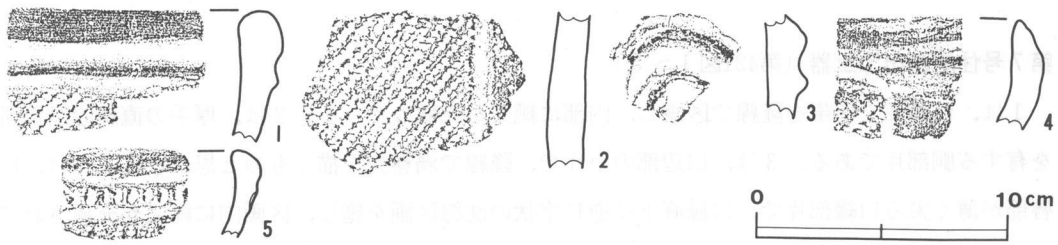
**第7号住居跡出土土器**（第421図1～5）

1は，口縁部文様帯を隆線で区画し，内部に縄文を充塡している。2は，厚手の直線的磨消帯を有する胴部片である。3は，口辺部の小片で，隆線で渦巻文を描くものと思われる。4は，口唇部が薄く尖る口縁部片で，口縁直下に逆U字状の沈線区画を施し，区画内に縄文が充塡されている。5は，薄手の口縁部片で，口縁部に2条の沈線を巡らし，沈線間に刺突文が施されている。




**第420図　第７号住居跡実測図**

本跡から出土した土器も少ないが，そのほとんどは加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本跡の時期は，加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

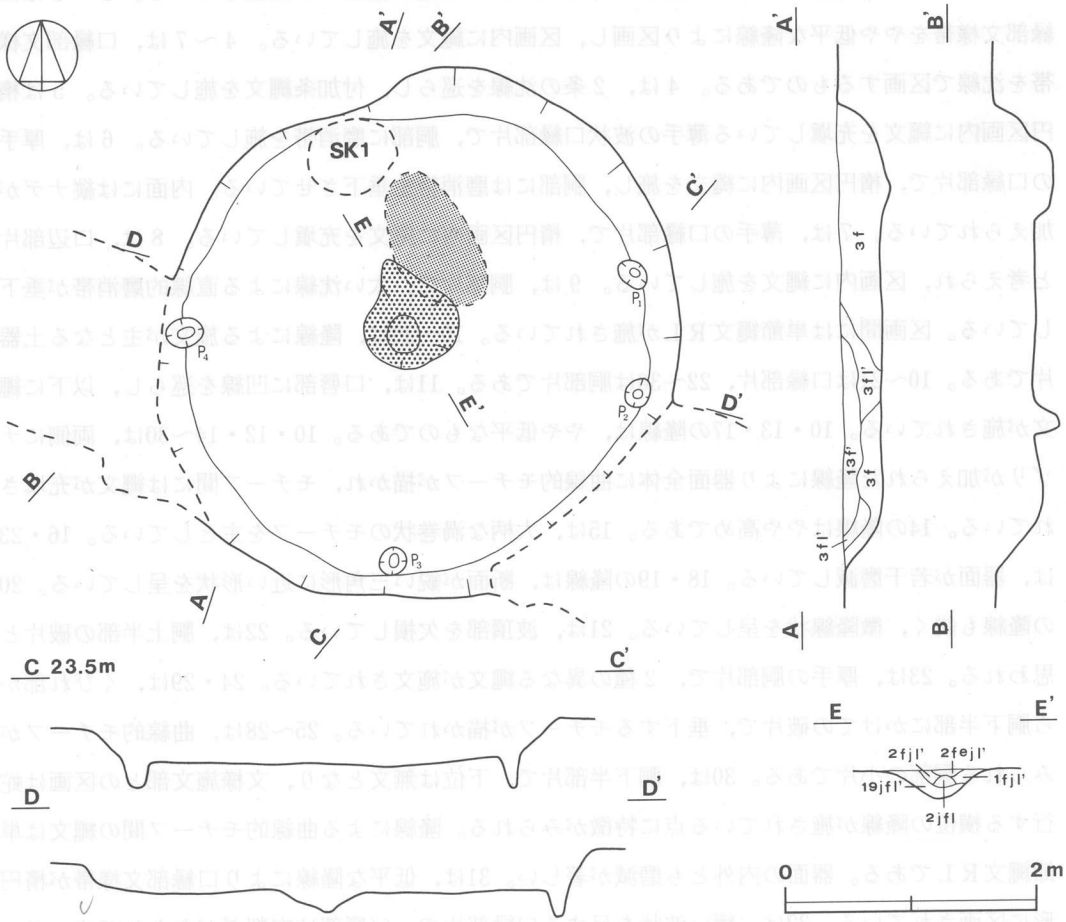



**第421図　第７号住居跡出土遺物拓影図**

**第８号住居跡**（第422図）

本跡は，遺跡の東部E4h$_4$区を中心に確認されたもので，第３号住居跡の南東側7.5mに位置している。南西側から南東側にかけて，第３号溝と重複している。また，北壁を切って第１号土壙が掘られている。溝・土壙との新旧関係は，本跡の壁との切り合い関係から本跡が古いと考えられる。

平面形は，径4.2mの円形である。壁は覆土と明瞭な色の違いを示しているが，軟らかく締まりがない。南西・南東の壁は重複のため欠損しているが，残っている壁は床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，16～27cmである。床面はハードロームで，よく踏み固められた硬い床である。ピットは４か所検出され，規模は径24～28cm・深さ21～28cmで，壁際に円形状に配列されている。北側にも１か所あったと思われるが，第１号土壙の構築によって欠損したものと考えられる。４か所ともその規模や配列から主柱穴と考えられる。炉は本跡のほぼ中央に検出され，径72cmの不整円形で，北側がやや外に張り出している。床面を９cmほど皿状に掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼けているが，炉の覆土の焼土量は少なく，焼土の範囲が北側にずれて広がっている




**第422図　第８号住居跡実測図**

ため，灰を北側にかき出しながら使用したものと考えられる。

覆土は3層からなり，主に黒褐色土・暗褐色土が堆積している。2・3層はよく締まっている。

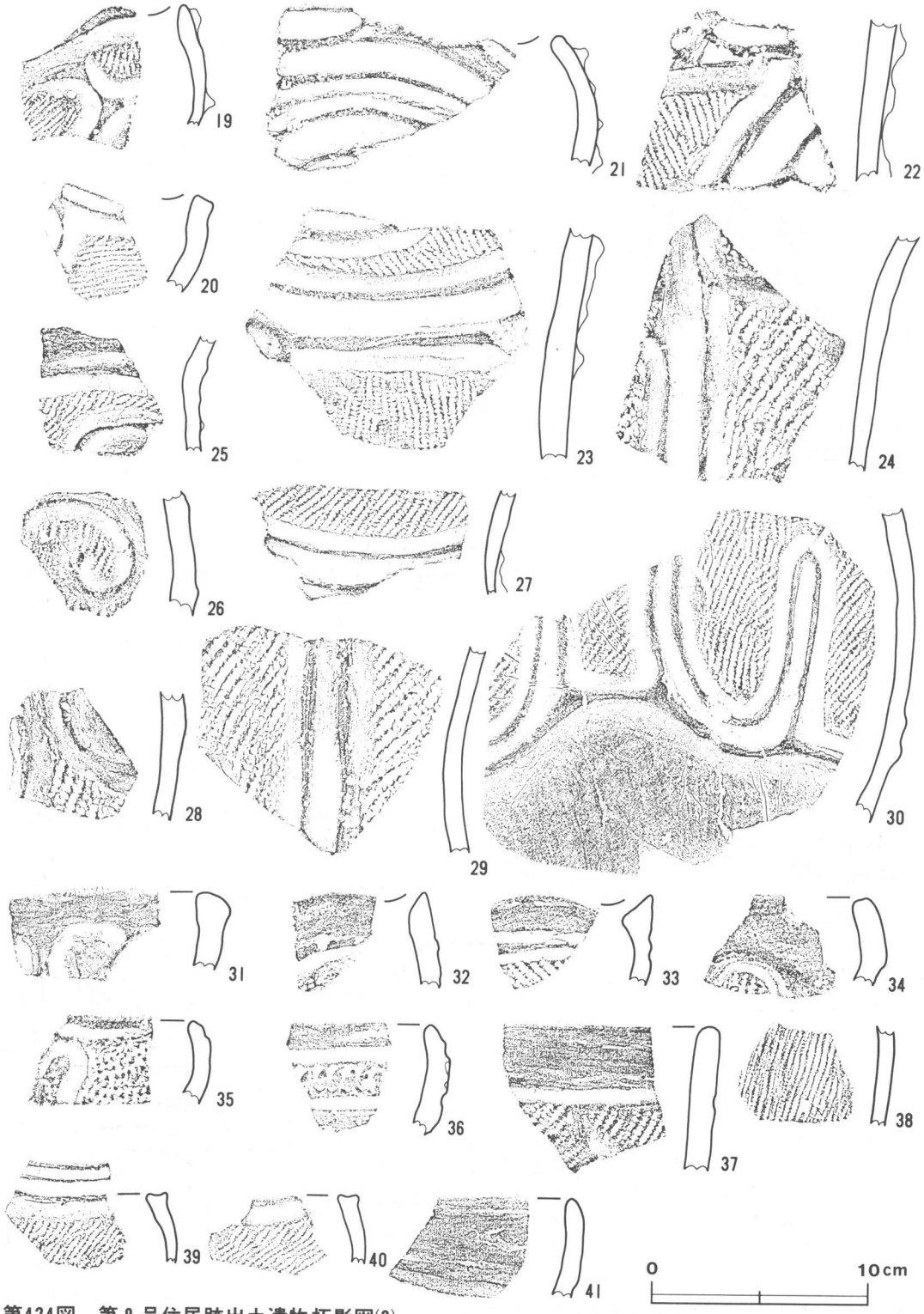
遺物は，縄文土器片が覆土から中量，床面から少量出土している。

**第8号住居跡出土土器**（第423～424図1～41）

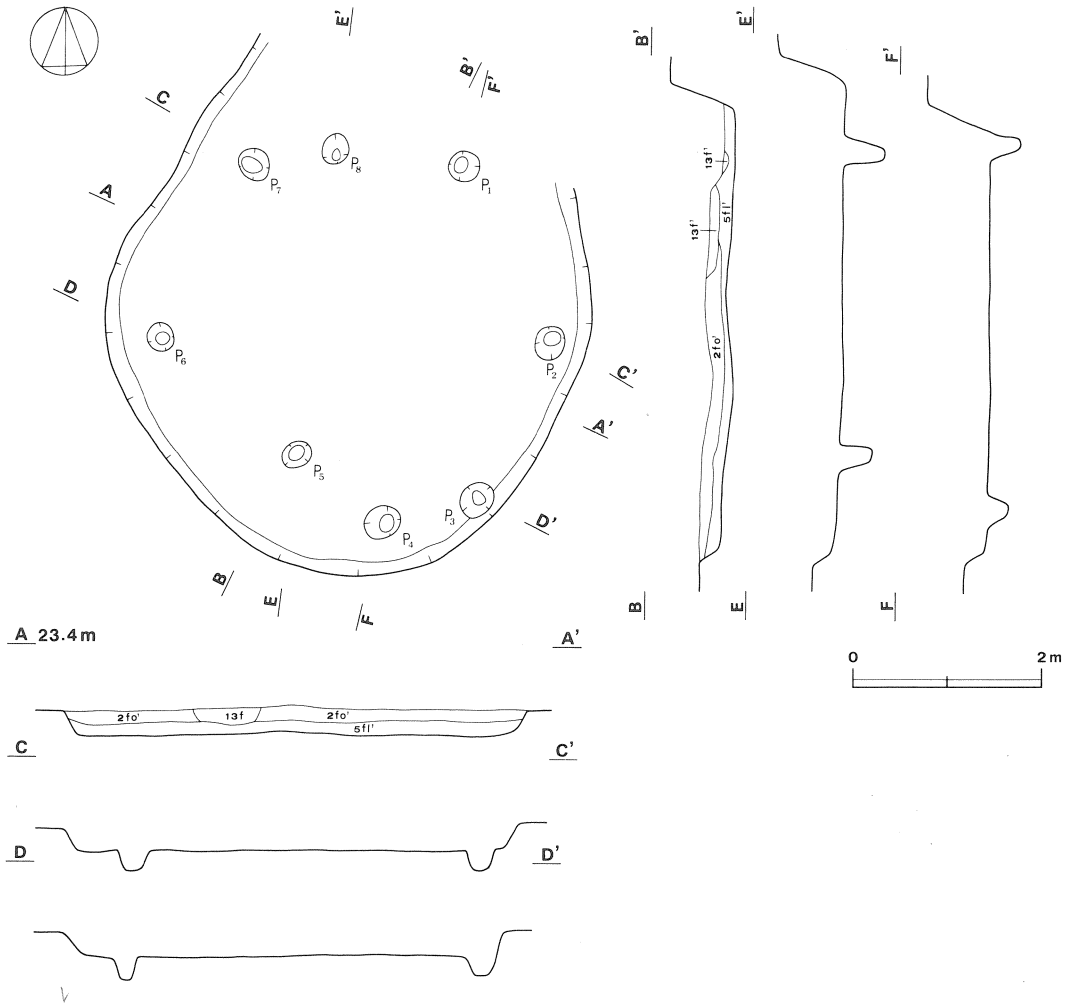
1は，本跡の覆土の中央部から出土した一群と北西部から出土した一群を中心に他の破片若干が接合したものである。非常に大形の波状口縁を呈する深鉢形土器である。残存部から推定して4単位の波状縁と考られる。文様は，器面全体に展開されるものと思われる。2本単位の断面三角形を呈する隆線により大形の渦巻状のモチーフが描かれている。モチーフ間には単節縄文にＲＬが充塡されている。胎土には，大粒の石英，長石粒を非常に多く含み，粗雑である。焼成は良好である。色調は褐色を呈しており，内面はやや赤味が強い。口径は残存部から推定して70cm以上になると思われる。現存高は31.9cmである。

8・28・38は，本跡の炉内から出土したもので，その他は覆土から出土している。2～3は口縁部文様帯をやや低平な隆線により区画し，区画内に縄文を施している。4～7は，口縁部文様帯を沈線で区画するものである。4は，2条の沈線を巡らし，付加条縄文を施している。5は楕円区画内に縄文を充塡している薄手の波状口縁部片で，胴部に磨消帯を施している。6は，厚手の口縁部片で，楕円区画内に縄文を施し，胴部には磨消帯を垂下させている。内面には縦ナデが加えられている。7は，薄手の口縁部片で，楕円区画内に縄文を充塡している。8は，口辺部片と考えられ，区画内に縄文を施している。9は，胴部片で，太い沈線による直線的磨消帯が垂下している。区画間には単節縄文ＲＬが施されている。10～30は，隆線による施文が主となる土器片である。10～21は口縁部片，22～30は胴部片である。11は，口唇部に凹線を巡らし，以下に縄文が施されている。10・13・17の隆線は，やや低平なものである。10・12・14～30は，両側にナゾリが加えられた隆線により器面全体に曲線的モチーフが描かれ，モチーフ間には縄文が充塡されている。14の隆線はやや高めである。15は，大柄な渦巻状のモチーフを主としている。16・23は，器面が若干磨滅している。18・19の隆線は，断面が鋭い三角形に近い形状を呈している。20の隆線も鋭く，微隆線状を呈している。21は，波頂部を欠損している。22は，胴上半部の破片と思われる。23は，厚手の胴部片で，2種の異なる縄文が施文されている。24・29は，くびれ部から胴下半部にかけての破片で，垂下するモチーフが描かれている。25～28は，曲線的モチーフがみられる胴部の小片である。30は，胴下半部片で，下位は無文となり，文様施文部との区画は蛇行する横位の隆線が施されている点に特徴がみられる。隆線による曲線的モチーフ間の縄文は単節縄文ＲＬである。器面の内外とも磨滅が著しい。31は，低平な隆線により口縁部文様帯が楕円形に区画されている。32は，緩い波状を呈する口縁部片で，口唇部は内削ぎがなされて尖ってい

第423図　第8号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)




第424図　第8号住居跡出土遺物拓影図(2)




**第425図　第9号住居跡実測図**

る。沈線区画内に縄文が施されている。33・34は，共に低平な隆線により口縁部文様帯を区画するもので，33は波状縁を呈し，34は平縁である。33の口唇部内面は突出し，内削ぎ状を呈している。33・34ともに区画内に縄文を充塡している。35は，口縁直下に1条の沈線を巡らし，以下に逆U字状の区画文を描き，内部を磨消している。36は，口縁部を巡る2条の沈線間に大形の爪形状の刺突文が施されている。37は，口縁部無文帯を幅広くとり，1条の沈線で区画し，以下に縄文が施されている。38は，縄文だけの胴部片である。39・40は，同一個体で，口縁直下に1条の凹線を巡らし，以下に多条縄文を施している。口唇部上面にも浅い凹線を加えている。41は，無文の口縁部片であるが，下端に1条の凹線が巡っている。

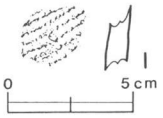
本跡から出土した土器の主体は，炉内から出土した土器を含めて加曽利E III式期のものである。したがって，本跡の時期は加曽利E III式期である。

**第９号住居跡**（第425図）

本跡は，遺跡の北部 $C3j_2$ 区を中心に確認されたもので，第７号住居跡の北側２ｍに位置している。

平面形は，長径5.9m（推定）・短径5.2mの不整円形状と考えられるが，北側約８分の１が農道下に広がっているので詳細は不明である。北西壁は外に張り出している。本跡は第１・２号溝の下層に検出されたものである。長径方向は，N－18°－Wを指している。壁は西・南・東の３壁が残っており，どの壁も硬く，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は，22cmである。床面はハードロームでよく踏み固められて硬く，平坦である。ピットは８か所検出され，規模は径30～40cm・深さ22～44cmである。$P_1$・$P_2$・$P_4$・$P_6$・$P_8$は中央を囲んで五角形に配列され，しかも，ピット間がほぼ等間隔であるので，主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は３層からなり，すべて褐色土である。２・３層は締まっており，自然堆積である。
遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。




**第426図**
**第９号住居跡**
**出土遺物拓影図**

**第９号住居跡出土土器**（第426図１）

１は，縄文だけの胴部の小片で，胎土には石英，長石粒，雲母片などを多く含んでいる。

本跡から出土した土器はごく少量で，本跡の時期決定はむずかしいが，加曽利Ｅ式期のものと考えられる。

**第10号住居跡**（第427図）

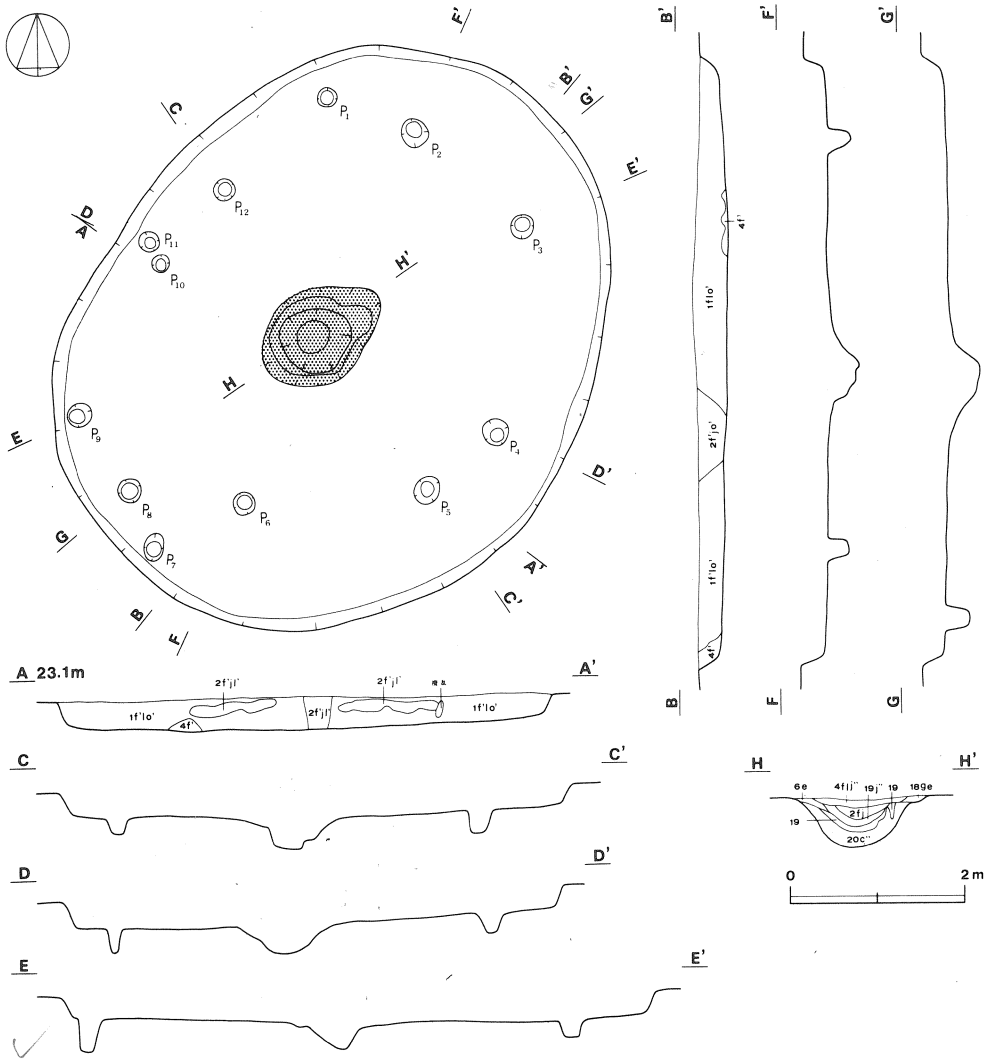
本跡は，遺跡の北部 $D3i_6$ 区を中心に確認されたもので，第９号住居跡の南東側12mに位置している。

平面形は，長径7.0m・短径5.8mの楕円形である。長径方向は，N－48°－Eを指している。壁は南側が床面から垂直に立ち上がっているほかは，外傾して立ち上がり，いずれの壁も硬い。壁高は，23～26cmである。床面はハードロームでよく踏み固められて硬く平坦であるが，炉の付近はやや凹んでいる。ピットは12か所検出され，規模は径20～32cm・深さ15～39cmである。$P_2$～$P_6$・$P_{10}$・$P_{12}$の深さは一定しており，炉を囲んで楕円形状に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は中央に検出され，径152cm，深さ30cmと大形で深い。炉床と炉壁はよく焼け，炉の覆土には焼土が充満し，長期間の使用がうかがえる。

覆土は４層からなり，暗褐色土が中心である。２・３層は締まっている。一部撹乱が認められる。

遺物は，縄文土器片が覆土から575点出土している。

**第10号住居跡出土土器**（第428図１～22）




**第427図　第10号住居跡実測図**

1は，本跡の西側の覆土から一括して出土した破片が接合したもので，鉢形土器の口縁部片である。口縁部に幅の広い無文帯をもち，横方向の丁寧なナデが施されている。1条の凹線で無文帯を区画し，以下には縦位の条線文が施されている。口縁部の上端には焼成後に，内外面から穿たれたと思われる孔が1か所認められる。胎土には，石英粒などの石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。推定口径は49.7cmで，現存高は11.1cmである。

13は，本跡のピット12から，14・20は，炉内から出土したものである。その他は覆土から出土したものである。2～6は，口縁部文様帯を隆線で区画するものである。区画内には縄文が施されている。2は，波状を呈する口縁部片で，器面の磨滅が著しい。3は，口縁部文様帯を楕円形

**第428図　第10号住居跡出土遺物実測図・拓影図**

に区画している。7は，山形の波頂部片で，太い沈線による区画が施されている。8は，口縁部文様帯を沈線による楕円文で構成し，区画内に縄文が充塡されている。文様帯直下に円形刺突文が1つアクセント的に付されている。9～12，14は，直線的な磨消帯を有する胴部片である。9は，区画間の縄文がまばらに施されている。10・11は，内面が剝落しており，同一個体と思われる。12は，やや幅の狭い磨消帯である。14の縄文は複節である。13は，大粒の縄文が施文されて

いる胴部の小片である。15は，口縁部無文帯を1条の浅い沈線で区画し，以下に縄文を施している。16は，口縁部に2条の円形刺突文列と1条の沈線を巡らし，以下に縦位の条線文を施している。17～20は，条線文が付されている。17・18は口縁部片で，19・20は胴部片である。17は，口縁部に2条の沈線を巡らし，以下に縦位の条線文を施文している。18は，口縁直下に条線文を曲線的に施し，1条の沈線で区画しており，やや特異なものである。19・20はともに，縦位の条線文が施されている。19の条線文は，粗く沈線状を呈している。21は，無文の口縁部片である。

22は，本跡の南西側の覆土から逆位で出土した破片5点が接合したもので，深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。外面は沈線による磨消懸垂文が垂下し，区画間に単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。器壁は胴下半部は厚いが，底面は比較的薄い。底面の近くは横ナデにより調整され，底面もよく磨かれて光沢を有している。内面に炭化物の付着が著しい。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が暗赤褐色，内面が褐色を呈している。底径は6.4cmで，現存高は8.4cmである。

本跡から出土した土器は，ピット12および炉内から出土した土器を含めて加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本跡の時期は，加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

**第11号住居跡**（第429図）

本跡は，遺跡の北東部D3$e_6$区を中心に確認されたもので，第10号住居跡の南東側19mに位置している。

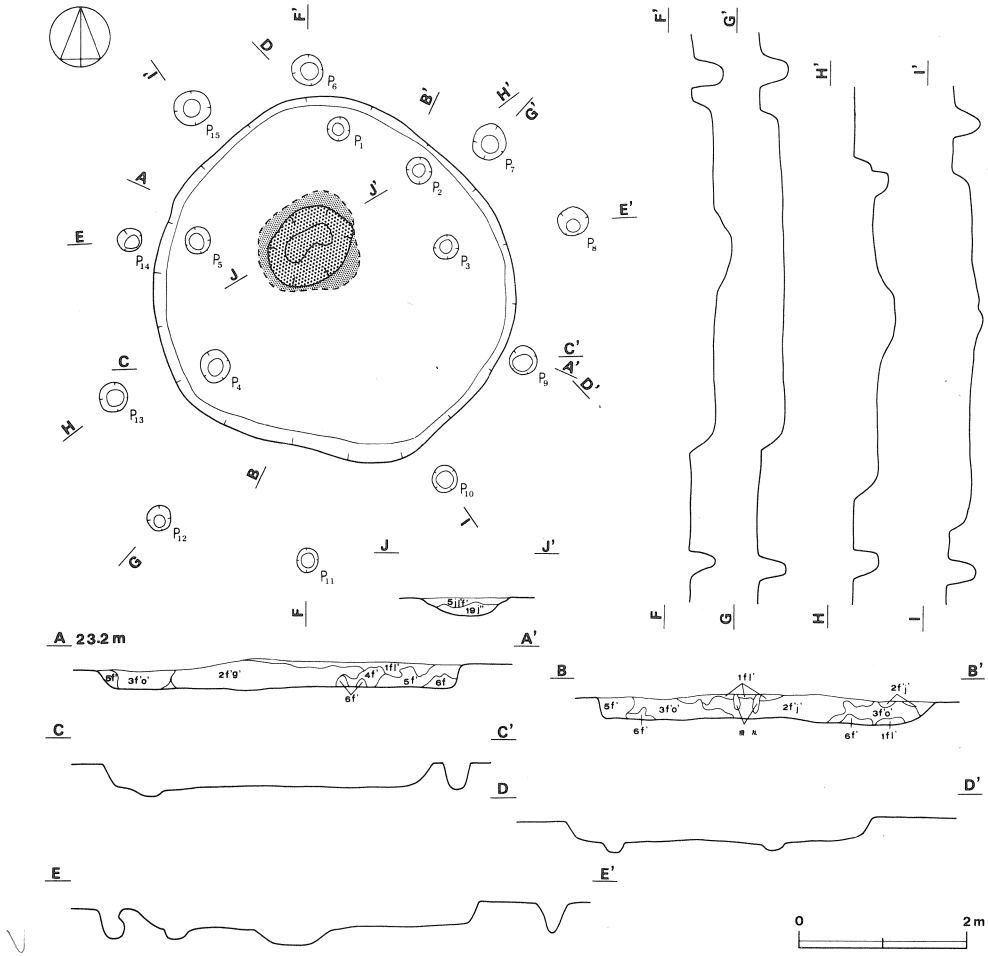
平面形は，径4.4mの円形である。壁は硬く，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，23～26cmである。床面は平坦であるが，炉の付近はやや凹んでおり，ハードロームでよく踏み固められている。ピットは屋内に5か所，屋外に10か所検出されている。屋内のピットの規模は，径28～32cm・深さ11～21cmで，全体的に北西側に寄っているため，屋外のピットと合わせて柱穴としたと考えられる。屋外のものは規模が径28～42cm・深さ24～36cmと比較的深い。14cmから120cm離れて住居跡の掘りこみにそって配列されている。炉は本跡の中央に検出され，径104cmの楕円形で，床面を22cmほどすり鉢状に掘り凹めた地床炉である。炉床と炉壁はさほど焼けてはいない。

覆土は7層からなり，暗褐色土が主である。2～6層は締まっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から210点，床面から8点出土している。

**第11号住居跡出土土器**（第430～432図1～56）

1は，本跡の中央部やや北側の覆土から出土した破片10点ほどが接合したもので，深鉢形土器の口縁部から胴上半部にかけての破片である。きわめて厚手のキャリパー形深鉢形土器と思われ，口縁部で30mm，胴部でも15mmほどの厚さを有している。口縁部文様帯は，沈線を沿わせた低平な

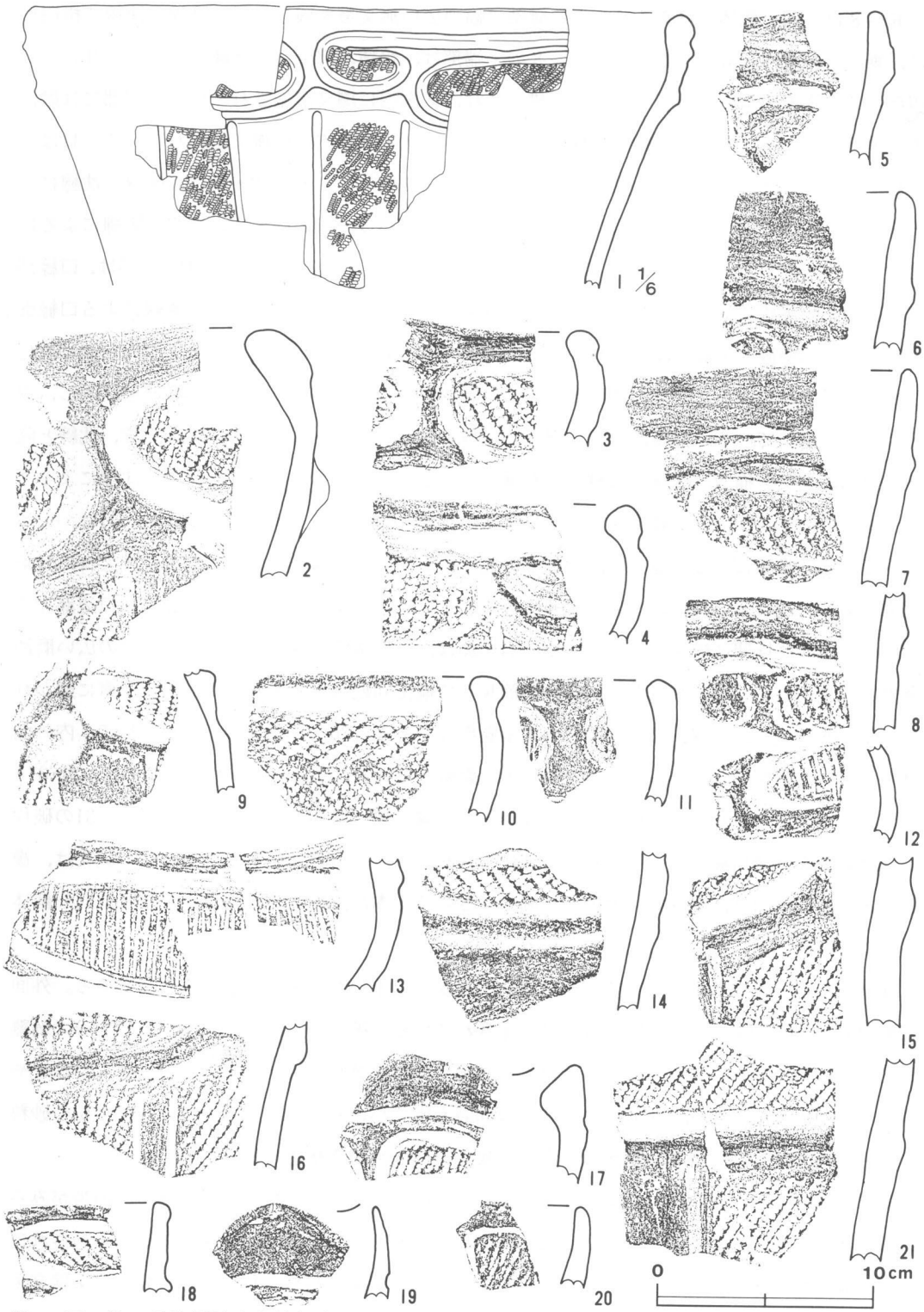



**第429図　第11号住居跡実測図**

隆線により区画されている。長楕円形の区画と渦巻文がくずれたと思われる区画が１単位となって構成されているが，単位数は不明である。胴部には幅の広い磨消懸垂文が施されている。口縁部区画内と胴部の区画間は単節縄文ＲＬの異条縄文が縦位回転で付されている。口縁部と内面は横ナデにより調整されている。胎土には小石粒,砂粒を含み，焼成は良好である。色調は暗褐色，褐色を呈している。推定口径は60.0cmで，現存高は26.0cmである。

18・33・34・43は，本跡の炉内から出土したものである。その他は覆土から出土している。

２～５は，口縁部文様帯を隆線により区画し，区画内に縄文を施している。２は，厚手の口縁部片で，楕円形に区画され，胴部には磨消懸垂文が施されている。焼成がやや不良で剝落部分が認められる。３も，口縁部文様帯が楕円形に区画されている。４は，口縁部文様帯を低い隆線と沈線で区画し，胴部には磨消帯がみられる。５は，口縁部文様帯を低い隆線で区画している。

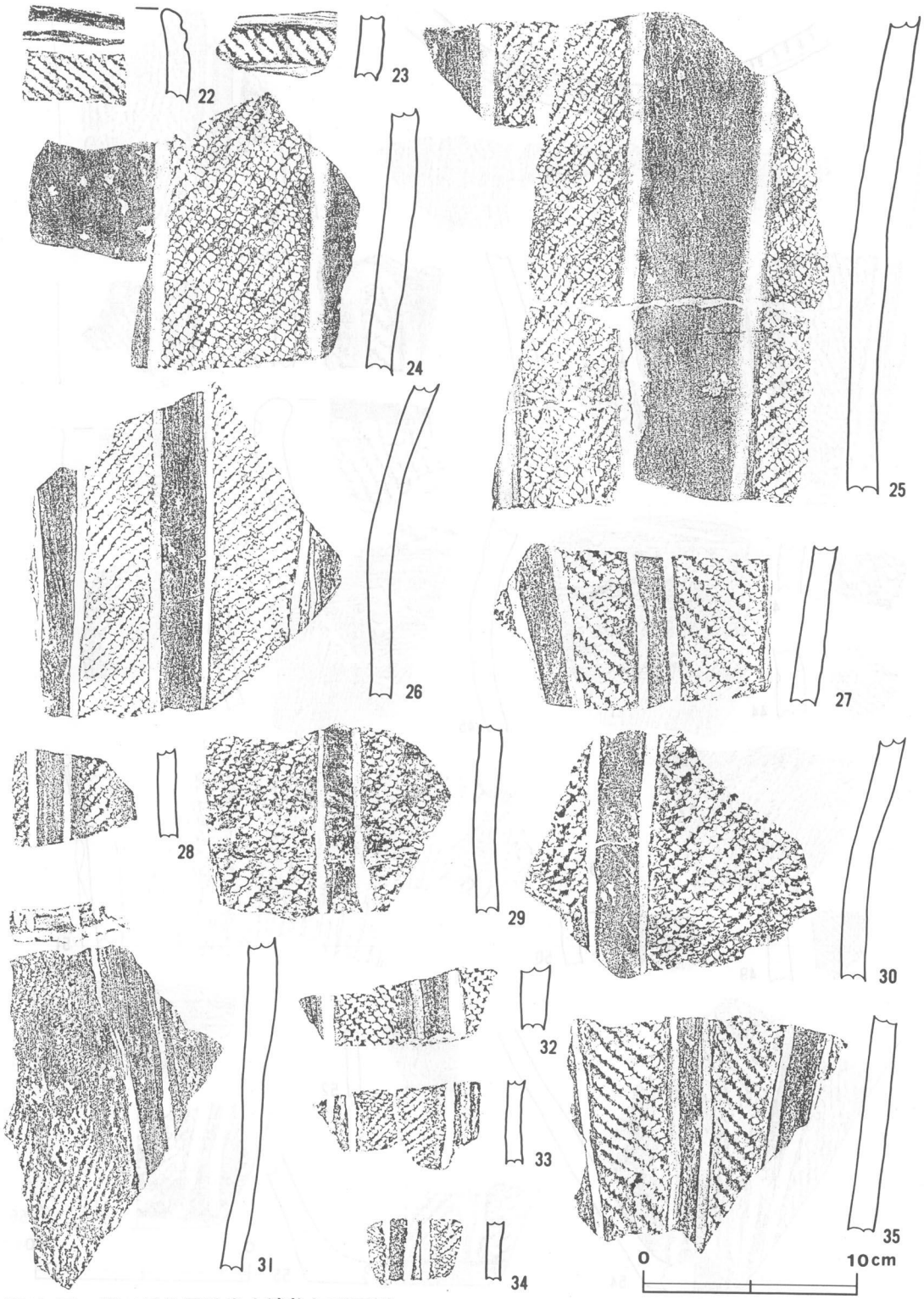



第430図　第11号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)

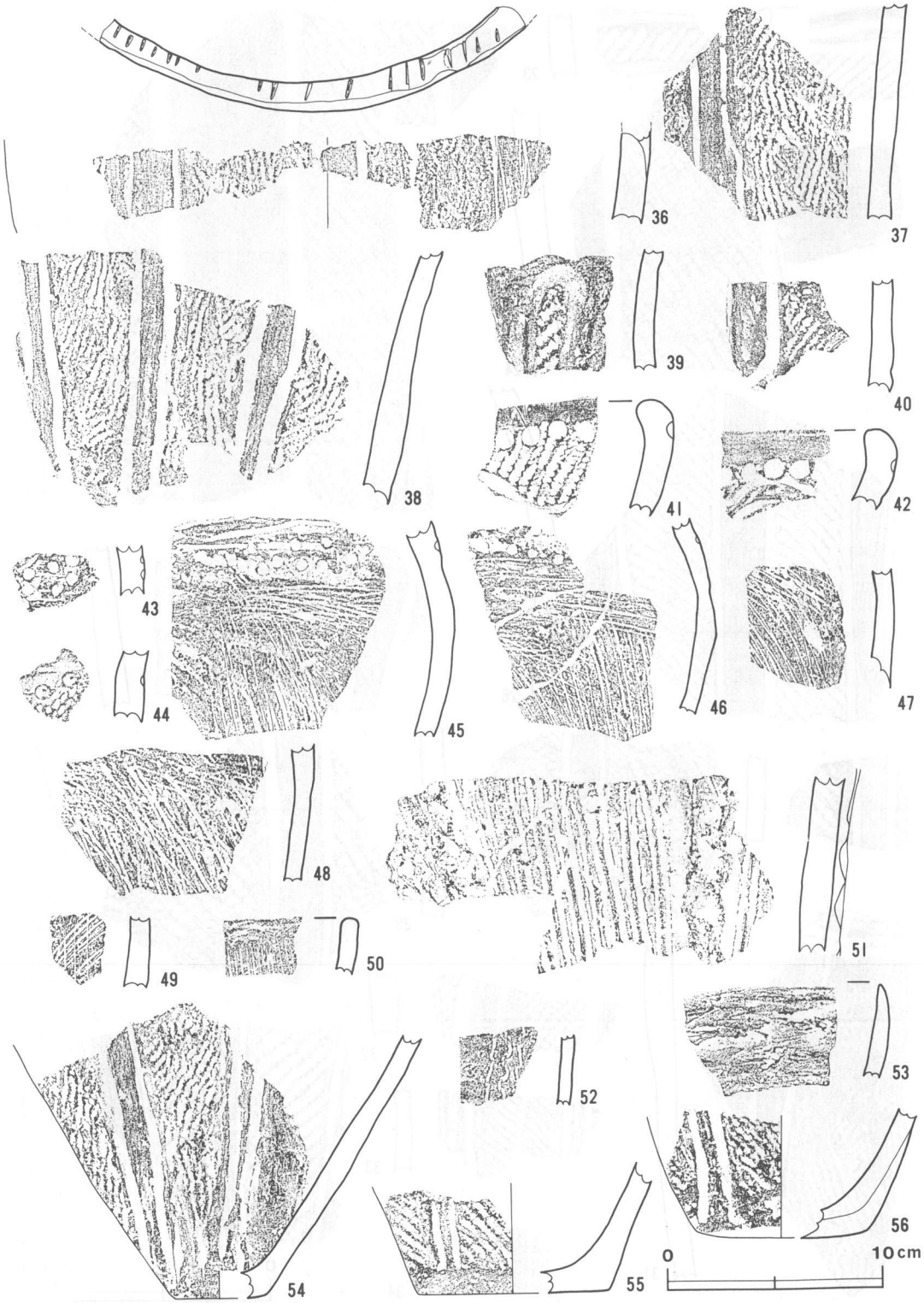
6～8は，同一個体と考えられる。口縁部に幅の広い無文帯を残し，低い隆線と沈線で楕円形に区画し，区画内に縄文を施している。8の上端部は，輪積み部分から剝離している。9は，口辺部片で，隆線で楕円区画文と渦巻文が構成され，区画内に縄文が施されている。胴部には磨消帯が垂下している。10は，口縁部文様帯を太い沈線で区画し，内部に縄文を施している。11は，口縁部文様帯を沈線で区画し，区画内に縦位の条線文を施している。12・13は，隆線と沈線による楕円区画内に縦位の沈線を充塡する口辺部片である。14は，口辺部片で，低平な隆線による区画内に縄文と沈線が加えられ，それ以下は無文部となっている点に特色がみられる。15は，口縁部文様帯を低い隆線で区画し，胴部に磨消帯と縄文を施している。16は，低平な隆線による口縁部文様帯の一部が破片上端に認められ，胴部には幅の狭い磨消帯が垂下している。破片右端に炭化物が少量付着している。17は，波頂部を欠く口縁部片で，低い隆線と沈線で文様帯を区画し，内部に縄文を付している。口縁部内面は突出し，稜を形成している。18は，口縁部片で，沈線と隆線で楕円区画文を描き，区画内に縄文を充塡している。19は，薄手の波頂部片で，沈線による区画が巡っている。20は，口縁部片で，逆U字状の沈線区画内に縄文が施されている。21は，口辺部片で，低い隆線による口縁部区画と胴部の幅の広い磨消帯がみられる。区画間の縄文は，異条縄文である。22は，口縁部に2条の沈線を巡らし，以下に縄文を施している。23は，口辺部片で横位の2条の沈線間に縄文を施している。24・25は，同一個体の厚手の胴部片で，幅の広い磨消懸垂文が垂下している。区画間の縄文は単節ＲＬで縦位回転施文である。磨消帯は丁寧に磨かれている。26～38も，直線的な磨消帯を有する胴部片である。26は，胴部のくびれ部片で，内外面ともきれいに調整されている。27の内面は少し磨滅している。30も，くびれ部片である。31・37・38は，同一個体と思われるが接合はできなかった。幅の狭い磨消帯を垂下させており，31の破片上端部の断面は擬口縁状を呈し，接合面強化のためのキザミ目が付されている。32の縄文は，複節である。33・34は，幅の狭い磨消帯を施し，さらに1本の沈線を加えている。両者は同一個体の可能性が高いが，接合はしない。

36は，本跡の中央よりやや東側寄りの覆土下部から出土した深鉢形土器の胴部片である。外面に磨消懸垂文が垂下し，区画間には縄文が施されている。破片の上端部は，輪積みの部分で剝離している。粘土紐を密着させるために付されたキザミ目が認められ，破片右側のキザミ目はやや間隔も粗く大きめである。左側のキザミ目は間隔も密で小ぶりである。胎土には，石英粒や砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が暗褐色，内面が暗赤褐色を呈している。

39は，逆U字状の区画内に縄文が充塡されている胴部片である。40は，U字状の磨消帯がみられる胴部片である。41・42は，口縁部に円形刺突文列を巡らし，以下に曲線的沈線文が施されている口縁部片である。43・44は，胴部の小片で小さめの刺突文が施されている。43には条線文も施されており，45～49と同一個体と思われる。45～49は，同一個体と考えられるもので，色調は




第431図　第11号住居跡出土遺物拓影図(2)




第432図　第11号住居跡出土遺物実測図・拓影図(3)

暗赤褐色を呈している。45・46は，小さめの刺突文を破片上半部に施し，以下に横位，斜位，縦位の条線文が施されている胴部片である。49のように，部分的には条線が交差して格子目状を呈している。50は，縦位の条線文が付されている口縁部片である。51は，半截竹管状施文具による粗い沈線文を地文として太い押圧が加えられた貼付隆線が垂下している胴部片である。色調は暗赤褐色を呈していて，破片右端に若干炭化物が付着している。いわゆる曽利系の土器である。52は，薄手の胴部片で，縦位の綾絡(あやくり)文が付されている。中期後半のこの時期に伴うものか否かは明らかではない。53は，薄手の口縁部片で，口唇部は尖っている。整形は雑で，縄文がわずかに施文されている。

54は，本跡の南西側の覆土から逆位で出土した深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。胴下半部から底面の近くまで幅の狭い磨消帯を垂下させている。区画間には縄文が充塡されている。内面は縦ナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。31・37・38と文様が類似しており，同一個体かと思われる。推定底径は4.4cmと小さく，現存高は12.0cmである。

55は，本跡の中央部やや北側の覆土内，炉跡の上面にあたる部分から出土した底部片である。外面には幅の狭い直線的磨消帯を有し，区画間には縄文が充塡されているが，少し磨滅している。底面の近くは横ナデされている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定底径は9.0cmで，現存高は5.1cmである。

56は，本跡の中央部やや北側の覆土内，55より少し北側から逆位で出土した底部片である。外面に幅の狭い磨消帯を垂下させ，区画間には，単節縄文ＬＲが縦位回転で施文されている。底面の近くは横ナデされている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定底径は8.0cmで，現存高は5.6cmである。

本跡から出土した土器は，その主体が加曽利ＥⅢ式期のものである。また，炉内から出土した土器片も加曽利ＥⅢ式期であることから，本跡の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

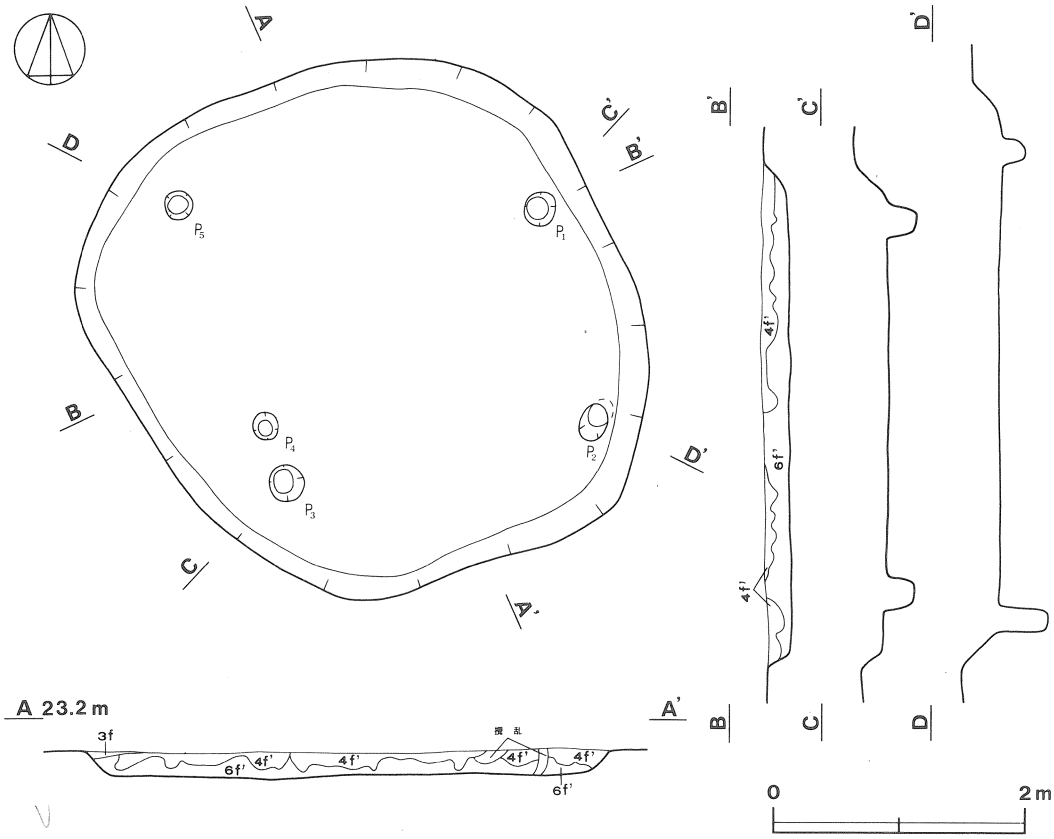
**第12号住居跡**（第433図）

本跡は，遺跡の北部 $D3g_1$ 区を中心に確認されたもので，第３号住居跡の南東側3.5mに位置している。

平面形は，長径4.7m・短径4.2mの不整楕円形である。長径方向は，N－56°－Wを指している。壁は南西側がやや軟弱であるほかは，硬く締まっている。どの壁も床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，17～25cmである。床面はソフトロームで平坦であり，軟らかい。ピットは５か所検出され，規模は径20～30cm・深さ17～40cmである。$P_1$～$P_3$・$P_5$は中央を囲んで四角形に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は３層からなり，１層が耕作土，２・３層が褐色土で，締まっている。

遺物は，有茎石鏃が西側の床面直上から１点出土している。




**第433図　第12号住居跡実測図**

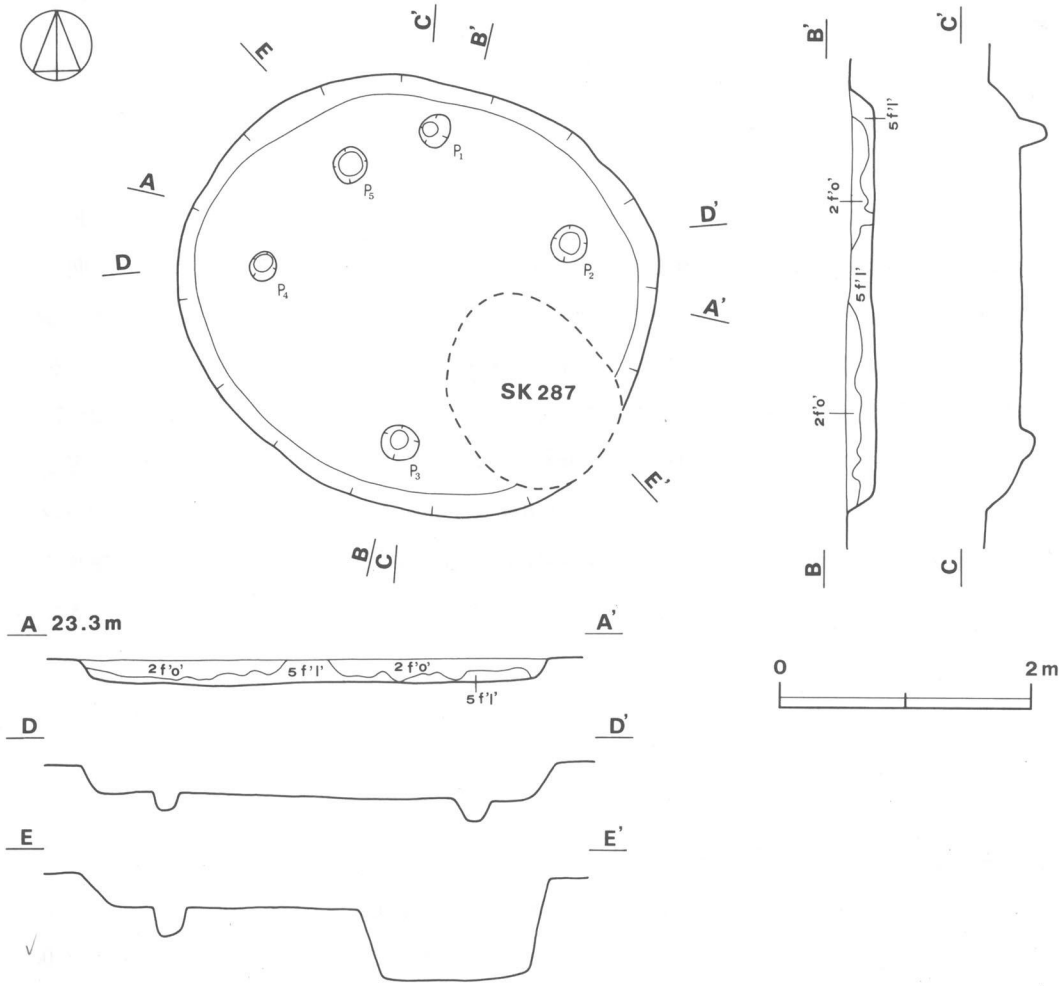
**第13号住居跡**（第434図）

本跡は，遺跡の北東部 $E3b_6$ 区を中心に確認されたもので，第10号住居跡の南側33mに位置している。南東側で第287号土壙と重複している。新旧関係は，切り合い関係から本跡が古いと考えられる。

平面形は，長径3.9m・短径3.5mの円形に近い楕円形である。長径方向は，N－88°－Eを指している。壁は硬く床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，約25cmである。床面はハードロームで，踏み固められて硬く，平坦である。ピットは５か所検出され，規模は径24～30cm・深さ12～23cmである。南東側にもう１か所あったと思われるが，第287号土壙によって消失したと考えられる。柱穴をこの６か所と考えると，ピット間は等間隔になり，残存の５か所は主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は２層からなり，暗褐色土・褐色土が堆積している。２層とも締まっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から30点出土している。

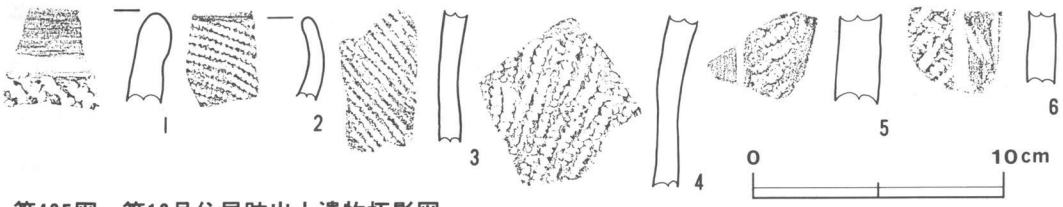



**第434図　第13号住居跡実測図**

**第13号住居跡出土土器**（第435図１～６）

１は，口縁部無文帯を１条の凹線で区画し，以下に縄文を施している。２～４は，縄文だけが施されている。２は，口縁部の小片で，全面縄文のものと思われる。３・４は，胴部のくびれ部片である。５・６は，直線的磨消帯を有する胴部片で，５は厚手である。

本跡から出土した土器片はきわめて少なく，時期決定はむずかしいが，出土土器から判断すれば，加曽利ＥⅢ式期のものと思われる。




**第435図　第13号住居跡出土遺物拓影図**

S1-14 グリット 誤 C3e7 → 正 F3e7

**第14号住居跡**（第436図）　F3e7

本跡は，遺跡の南部C3e7区を中心に確認されたもので，第13号住居跡の南側46.5mに位置している。南東側で第443号土壙と重複している。新旧関係は，底面の切り合いから本跡が古いと考えられる。

平面形は，長径4.3m・短径3.9mの円形に近い楕円形である。長径方向は，N－38°－Eを指している。壁は南東側が第443号土壙に切られ消失しているほかは，硬く締まっており，床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，6～14cmである。床面はハードロームで踏み固められて硬く，凹凸がみられる。特に北側と，南西側は，ほかの床面よりも4cm高くなっており，ロームを貼って踏み固めたものと思われる痕跡が残っている。ピットは9か所検出され，規模は径22～70cm・深さ15～74cmである。$P_1$・$P_5$・$P_8$は炉を囲むように配列されていることや，深さが一定していることから，主柱穴と考えられる。$P_3$・$P_4$は規模や配列からみて，柱穴以外の施設と思われる。炉は，本跡の中央に検出され径62cmで，深さ37cmと38cmの双円形をしている。東側の掘りこみの炉床は特に硬く焼けている。東西のいずれの炉が，先に掘り込まれたかは，明らかにできなかった。

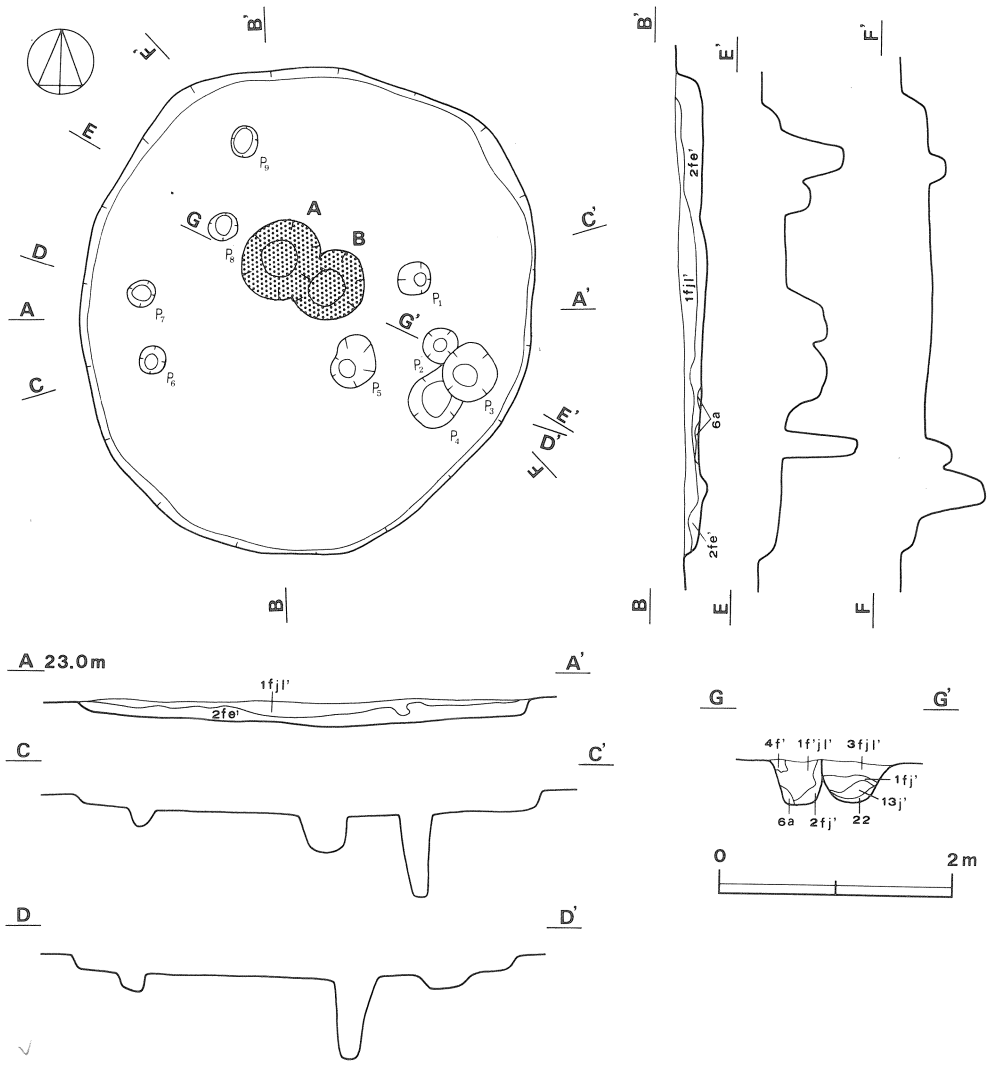
覆土は2層からなり，ともに暗褐色土で，締まっており，自然堆積である。

遺物は，少量である。

**第14号住居跡出土土器**（第437図1～21）

1は，本跡の南西側の覆土の上面から5～10cmほど下で，逆位の状態で出土したミニチュアの手づくね土器である。口縁部の一部を欠損するがほぼ完形である。口径は3.0cm，底径は2.0cm，器高は4.0cmである。口縁部は内傾し，胴部最大径は4.9cmである。この部分に粘土紐を1条貼り付け，粘土紐上に上から下に向けて12か所の孔を穿っている。このうち4か所は粘土紐が切断されている。底部は，指で凹ませて整えられており，高台状を呈している。外面は縦方向のヘラナデにより軽く整形されている。内面は指ナデと考えられる。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色から暗褐色，内面が黒褐色を呈している。器形は，全体に歪(ゆが)みがみられる。本土器は，隆帯と孔の存在および底部形態から有孔鍔付土器のミニチュア土器とも考えられる。

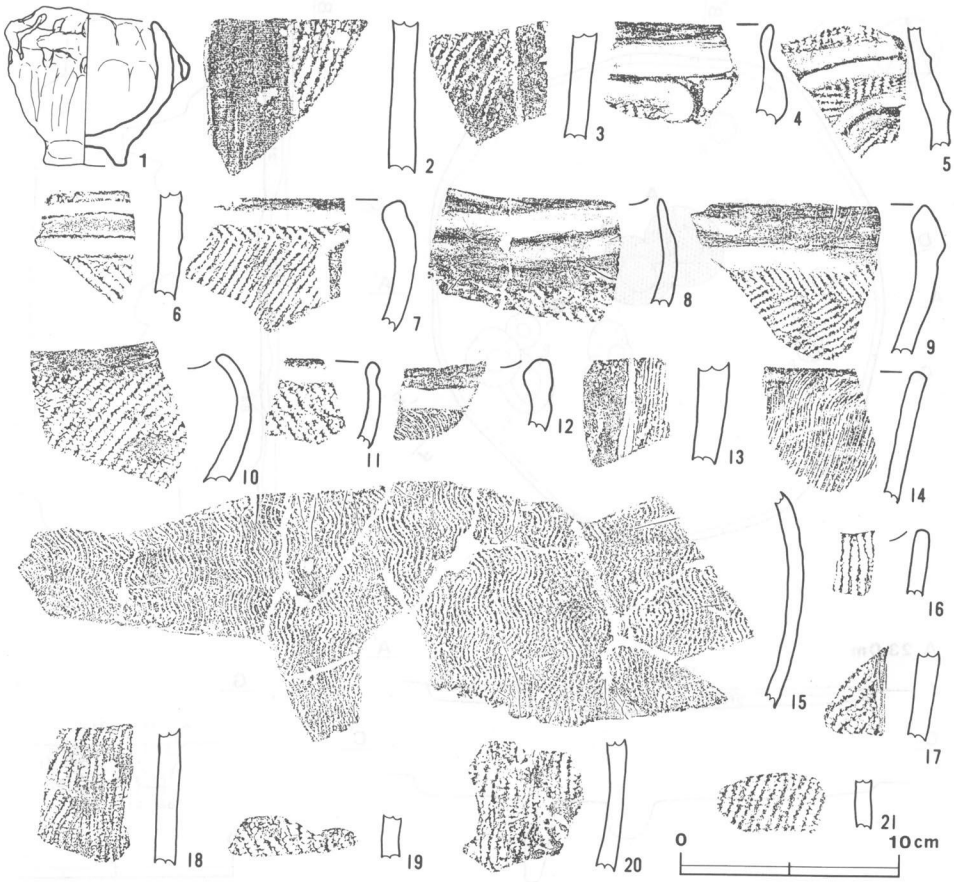
2・3は，直線的磨消帯を垂下させ，区画間に単節縄文を施している。4は，口縁直下に凹線を巡らし，口縁部文様帯を隆線で構成している。口縁直下は器壁が極端に薄くなっている。5・6は，隆線で曲線的区画文が施されている胴部片で，区画間には縄文が付されている。7は，口線直下に1条の沈線を巡らし，胴部に逆U字状のモチーフを描き，内部を磨消している。8は，極薄手の口縁部片で，口縁直下に凹線を巡らして無文部を形成し，胴部には縄文が施文されてい




**第436図　第14号住居跡実測図**

る。9は，口縁部無文帯を1条の断面三角形の隆線で区画し，以下に縄文を施している。10は，内湾の著しい口縁部片で，口縁部に無文帯を少し残し，全面に縄文を施文している。11は，薄手の口縁部片で，口縁直下に沈線を巡らし，以下に縄文を施している。12～14は，条線文が施文されたものであるが，それぞれ施文部位や施文方法が異なっている。12は，口縁部に凹線を巡らし，以下に曲線的条線文を施している。13は，直線的磨消帯を有する胴部片で，区画間に縦位の条線文と縄文が併用されている。14は，口縁直下から曲線的条線文が施文されている薄手の口縁部片である。

15は，本跡の北東側の覆土から出土した深鉢形土器の胴部片である。6本歯ほどの施文具による櫛描条線文が全面に曲線的に施されている。内外面とも磨滅が著しく，整形痕は不明である。




**第437図　第14号住居跡出土遺物実測図・拓影図**

胎土には石英その他の小石粒が目立ち，粗雑である。焼成も不良である。色調は外面が褐色，内面が灰黒色を呈している。

16は，口縁部の小片であるが，全面縄文のものと考えられる。17・18・20は，本跡の炉A内から出し，19・21は，炉B内から出土したものである。17は，沈線が垂下し，縄文が施されている胴部片である。18～21は，縄文だけの胴部片である。

本跡から出土した土器は，いずれも加曽利EⅢ式期のものである。したがって，本跡の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。

**第15号住居跡**（第438図）

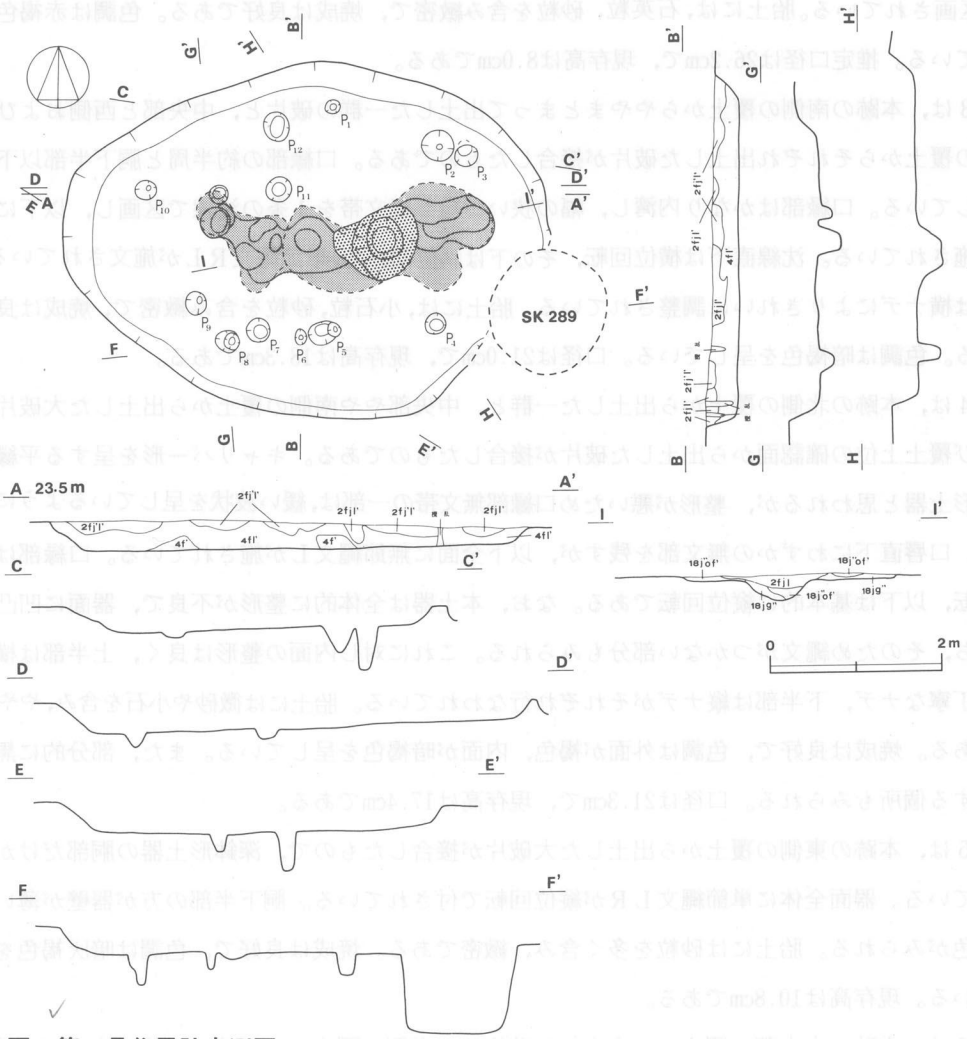
本跡は，遺跡の北西部E3b$_8$区を中心に確認されたもので，第13号住居跡の南西側4mに位置している。東側で第16号住居跡・第289号土壙と重複している。新旧関係は，第16号住居跡とでは，本跡の床面が4～5cm低く，第16号住居跡の床面を切っているので，本跡が新しいと考えられる。

第289号土壙とでは不明である。

平面形は，長径7.7m・短径4.1mの楕円形で，長径方向はN－89°－Eを指している。残っている壁は硬く，床面からなだらかに立ち上がっているが，南・南東側は傾き方がやや急である。壁高は，20～32cmである。床面はハードロームで，よく踏み固められて硬い。炉の付近は凹んでいるが，そのほかは平坦である。ピットは12か所検出され，規模は径22～40cm・深さ12～33cmである。深さが不ぞろいで不規則な配列のため，主柱穴は判別できない。炉は本跡の中央から東に寄ったところに検出され，径90cm・深さ26cmほどのすり鉢状に床面を掘り凹めた地床炉である。焼土は炉の範囲を越え，中央の床一帯に広がっている。床面は赤く硬くレンガ状に変わっている。

覆土は5層からなり，暗褐色土・褐色土が主体をなしている。1～4層は締まっている。

遺物は，縄文土器片が大量に出土し，覆土から531点，床面から11点が出土している。




**第438図　第15号住居跡実測図**

**第15号住居跡出土土器**（第439～443図１～102）

１は，本跡の西側および北西側の覆土の中～下位から出土した破片が接合し、ほぼ器形をうかがえるまでになったものである。口縁部が直立気味の深鉢形土器で、胴部中位でややくびれる。口縁部に約１cm幅の無文帯をもち，以下に単節縄文ＲＬを縦位回転を主として施文している。無文部と縄文部の境は，微隆線状を呈し，稜を有している。胎土には，砂粒，小石粒を含み，あまり緻密ではない。焼成は良好で，色調は内外面とも暗褐色を呈している。口径は18.0cmで，現存高は14.6cmである。

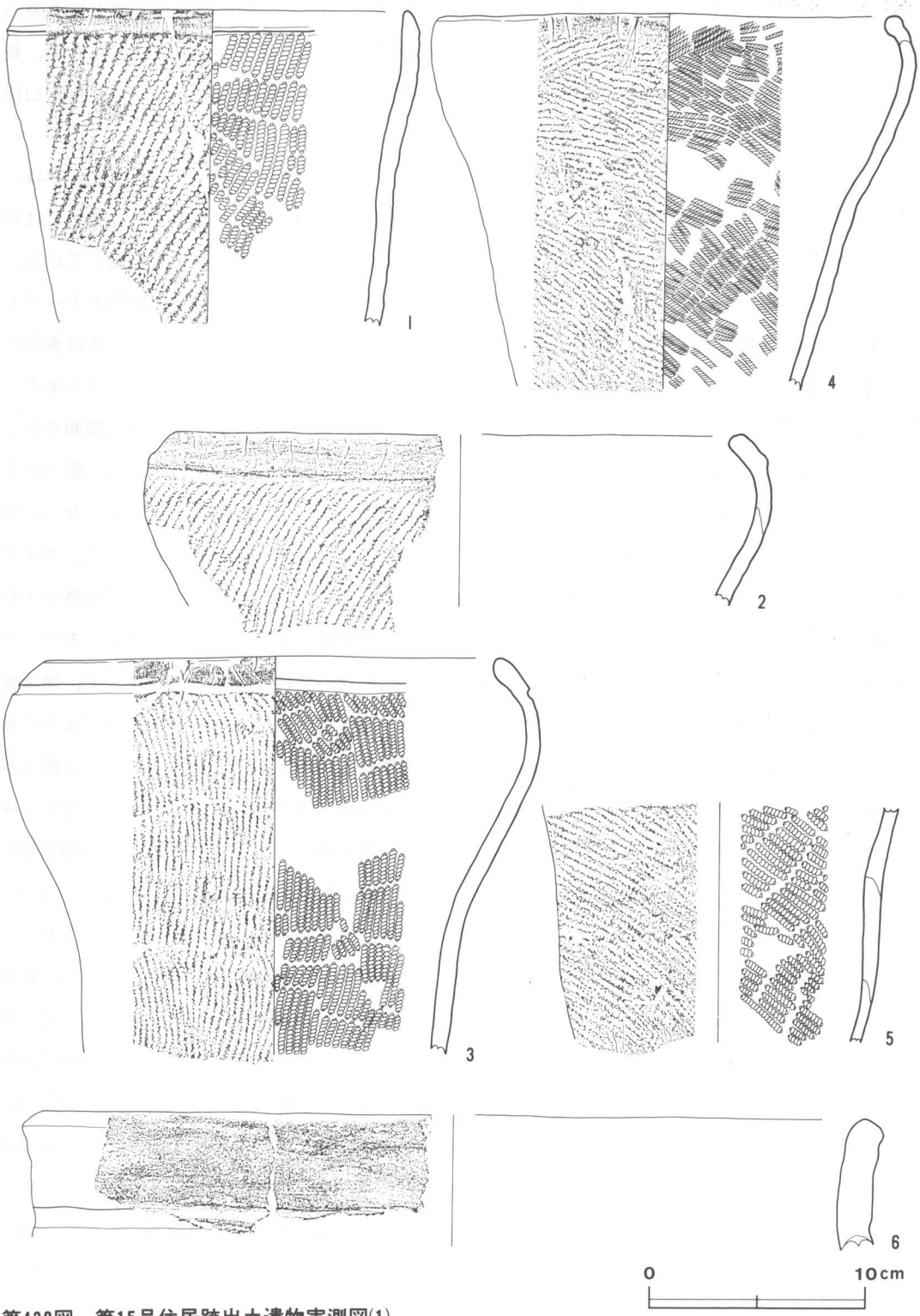
２は，本跡の南側の覆土の中位と上位から，正位と逆位で出土した破片各１点ずつが接合したもので，深鉢形土器の口縁部から胴上半部にかけての破片である。口縁部は内傾し，無文帯を有し，以下に単節縄文ＲＬを縦位回転で施文している。無文部と縄文部の境は，１条の微隆線により区画されている。胎土には，石英粒，砂粒を含み緻密で，焼成は良好である。色調は赤褐色を呈している。推定口径は26.2cmで，現存高は8.0cmである。

３は，本跡の南側の覆土からややまとまって出土した一群の破片と，中央部と西側および北西側の覆土からそれぞれ出土した破片が接合したものである。口縁部の約半周と胴下半部以下を欠損している。口縁部はかなり内湾し，幅の狭い口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に縄文が施されている。沈線直下は横位回転，その下は斜位回転で，単節縄文ＲＬが施文されている。内面は横ナデによりきれいに調整されている。胎土には，小石粒，砂粒を含み緻密で，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。口径は21.0cmで，現存高は18.3cmである。

４は，本跡の北側の覆土から出土した一群と，中央部やや南側の覆土から出土した大破片，および覆土上位の確認面から出土した破片が接合したものである。キャリパー形を呈する平縁の深鉢形土器と思われるが，整形が悪いため口縁部無文帯の一部は，緩い波状を呈しているように見える。口唇直下にわずかの無文部を残すが，以下全面に無節縄文Ｌが施されている。口縁部は横位回転，以下は基本的に縦位回転である。なお，本土器は全体的に整形が不良で，器面に凹凸が目立ち，そのため縄文がつかない部分もみられる。これに対し内面の整形は良く，上半部は横方向の丁寧なナデ，下半部は縦ナデがそれぞれ行なわれている。胎土には微砂や小石を含み，やや粗雑である。焼成は良好で，色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。また，部分的に黒色を呈する個所もみられる。口径は21.3cmで，現存高は17.4cmである。

５は，本跡の東側の覆土から出土した大破片が接合したもので，深鉢形土器の胴部だけが残存している。器面全体に単節縄文ＬＲが縦位回転で付されている。胴下半部の方が器壁が薄い点に特色がみられる。胎土には砂粒を多く含み，緻密である。焼成は良好で，色調は暗灰褐色を呈している。現存高は10.8cmである。

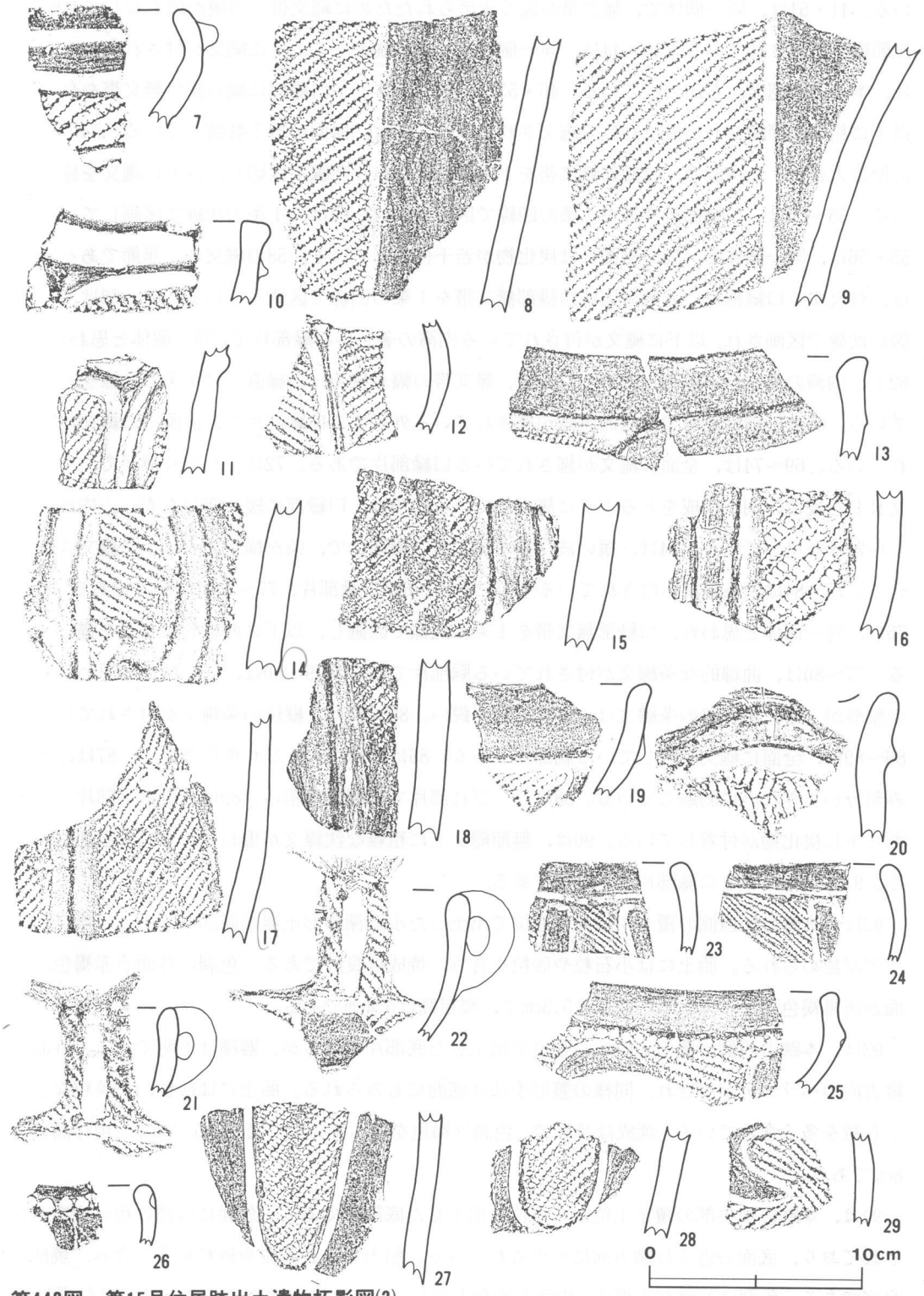
６は，本跡の中央部の覆土から出土した破片と，南側の覆土から正位と逆位で出土した破片２




第439図　第15号住居跡出土遺物実測図(1)

点の計３点が接合したもので，厚手の鉢形土器の口縁部片である。口縁部無文帯の直下に１条の太い沈線を巡らしている。内外面とも横ナデにより丁寧に仕上げられている。胎土には石英，長石粒など大きめの石粒を含み，粗雑である。焼成は良好で，色調は褐色を呈している。推定口径は38.0cmで，現存高は6.1cmである。

７は，隆線と沈線により口縁部文様帯が区画され，内部に縄文が充塡されている。８・９は，同一個体で，幅の広い磨消帯を有する胴部片である。器面に炭化物が付着している。胎土には石英粒などを多く含んでいる。10は，口縁部文様帯を隆線で構成し，区画内に縄文を施している。11・73・86・89の４点は，本跡の炉内から出土したものである。11は，隆線で曲線的モチーフを器面全体に描いている胴部片である。12は，薄手の内湾の著しい胴部片で，隆線による区画間には縄文が施されている。13は，口縁部無文帯を有し，それ以下の器面全体には微隆線によるモチーフが描かれるもので，胎土には石英粒，雲母片を多く含み粗いが，調整は良く滑らかな器面を呈している。14・17は，微隆線により曲線的モチーフが描かれている胴部片である。14は，胎土に石英粒などを含み，黄褐色を呈している。15・18・85は，同一個体と思われるが接合はしない。隆線で区画される胴部片で，区画外には単節縄文ＲＬが縦位回転で疎（まば）らに施文されている。厚手で胎土に砂粒を多く混入している。16は，２本組の隆線によりモチーフが構成され，区画外に大粒の縄文が加えられている。19は，口縁部無文帯を１条の微隆線で区画し，以下に沈線でモチーフが描かれている。20は，本跡の確認面からの出土で，山形状の突起を有する口縁部片で，微隆線による区画内に縄文が充塡されている。21・22は，同一個体で，口縁部無文帯をまたぐように橋状把手が付され，把手上に縦位の太い沈線と縄文が施されている。胴部には沈線区画内に縄文が充塡されている。23・24も，同一個体と考えられるが接合はできなかった。口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，胴部に逆Ｕ字状の区画を施し，内部を磨り消している。25は，口縁部無文帯を微隆線で区画し，直下に刺突文を沿わせている。胴部には沈線による曲線的磨消帯を施している。26は，小形土器の口縁部片で，刺突文が口縁直下に並び，以下に逆Ｕ字状の磨消帯が施されている。27・28・30は，同一個体と思われる胴部片である。Ｕ字状，逆Ｕ字状の区画が描かれ，区画内に単節縄文ＲＬが充塡されている。29は，薄手の胴部片で，曲線的磨消帯が施されている。31は，細い沈線によるＵ字状の磨消帯を有する胴部片である。32は，口縁部無文帯を微隆線で区画し，以下に縄文を付している。無文帯の一部は微隆線が左右からせり上り，突起状を呈している。33は，口縁部無文帯を１条の微隆線で区切り，以下に縄文が施されている。34は，口縁部無文帯を１条の貼付隆線で区画し，以下縄文を全面に施している。無文帯の一部は隆線が左右からせり上り，若干突出している。35～38，40・42・47は，口縁部無文帯を１条の微隆線で区画し，以下に縄文を施している。38は，内湾度が強い。35・40・42は，いずれも粗い縄文が付されているが、同一個体ではない。39・41・43～46，48～54は，口縁部に無文帯を残し，以下に縄文が付されて



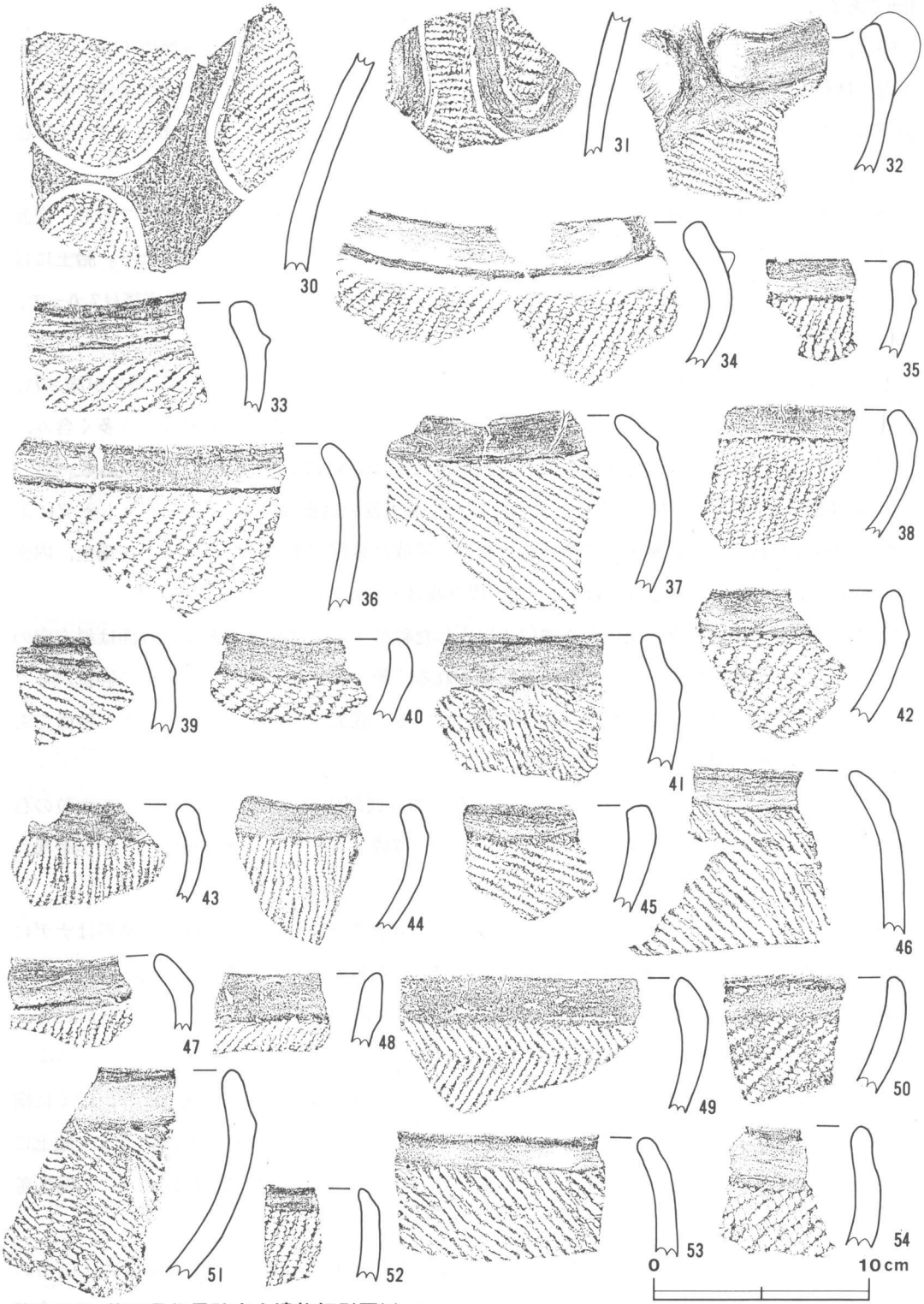

第440図　第15号住居跡出土遺物拓影図(2)

いる。41・51は，同一個体で，無文帯が強くナデられたために縄文帯との境が段をなしており，無節縄文が施されている。43・44は，同一個体で，条が縦走するように縄文が付されている。45は，本跡の確認面から出土している。46・53は，同一個体で，口縁部に幅の狭い無文帯を有し，以下に粗い無節縄文Ｌが縦位回転で施文されている。50は，器面が若干磨滅している。54の縄文の節は大きい。55～67は，口縁部無文帯を１条の沈線ないし凹線で区切り，以下に縄文を施している。55～60は，口縁部無文帯を１条の凹線で区画し，61～67は，１条の沈線で区画している。55・56は，同一個体で，55の器面には炭化物が若干付着している。58の縄文は，無節である。60は，外反する口縁部片で，幅の広い口縁部無文帯を１条の凹線で区切っている。61・63は，細く鋭い沈線で区画され，以下に縄文が付されている内湾の著しい口縁部片で，同一個体と思われる。62も，内湾の著しい口縁部片である。66は，無文帯の幅が狭く，口縁直下に１条の沈線を巡らしている。68は，細い沈線で曲線的区画が施されている外反する口縁部片で，区画内に縄文が施されている。69～74は，全面に縄文が施されている口縁部片である。72は，かなり薄手で，単節縄文ＲＬを縦位の羽状構成をとるように施文している。73は，口縁部に緩い突起を有し，内湾の著しい器形を呈している。74は，緩い波状縁を呈する口縁部片で，条が横走するように施文されている。75～84は，条線文が付されているもので，75・76が口縁部片，77～84が胴部片である。75・76は，同一個体と思われ，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に曲線的条線文を描いている。77～80は，曲線的な条線文が付されている胴部片である。79・80は，同一個体と思われ内面の整形が丁寧であ。81の条線文は，縦位で細く鋭い。82～84は，縦位の条線文が付されている。86～89は，全面に縄文を施している胴部片である。86は，薄手のくびれ部片である。87は，輪積み部分からきれいに剝離している。88は，くびれ部片で，縄文は粗い。89は，胴下半部片で，器面に少し炭化物が付着している。90は，無節縄文上に粗雑な沈線文が重ねられている胴部片である。91は，外反する口縁部片で，無文である。

92は，本跡の北西側の覆土中位から逆位で出土した小形深鉢形土器の底部片である。無文で縦ナデが認められる。胎土には小石粒や砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が赤褐色，内面が灰黒褐色を呈している。底径は5.5cmで，現存高は5.4cmである。

93は，本跡の西側の覆土上位から逆位で出土した底部片であるが、器種は不明である。外面は縦方向のヘラナデがなされ、同様の整形手法は底面にもみられる。胎土には砂粒，石英粒などの小石粒を多く含んでいる。焼成は良好で，色調は褐色を呈している。底径は5.7cmで，現存高は5.8cmである。

94は，本跡の中央部の覆土上位から正位で出土した底部片である。外面には粒の粗い縄文が施されており，底面の近くは横方向にナデられている。胎土には石英粒や砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は外面が赤褐色，内面が褐色を呈している。推定底径は5.3cmで，現存高は4.




第441図　第15号住居跡出土遺物拓影図(3)

1cmである。

95は，本跡の北西側の覆土中位から逆位で出土したもので，深鉢形土器の底部片である。底面の近くは斜方向のヘラナデが施されている。胎土には石英粒や砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面は褐色を呈し，内面は褐色および灰黒褐色を呈している。推定底径は6.0cmで，現存高は3.7cmである。

96は，本跡の中央部の覆土中位から逆位で出土したもので，深鉢形土器の底部片である。底面の近くには横方向の乱雑な沈線文が認められるが，これは整形によるものと思われる。胎土には石英粒，砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は暗灰褐色を呈している。推定底径は7.0cmで，現存高は3.1cmである。

97は，本跡の北西側の覆土中位から正位で出土した底部片である。外面には単節縄文が施され，底面近くは縦と横のナデにより整形されている。胎土には長石，石英粒，砂粒などを多く含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定底径は6.3cmで，現存高は5.2cmである。

98は，本跡の南側の覆土中位から正位で出土した小形土器の底部片である。内外面ともナデにより整形が行なわれている。胎土には微砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。推定底径は4.2cmで，現存高は3.3cmである。

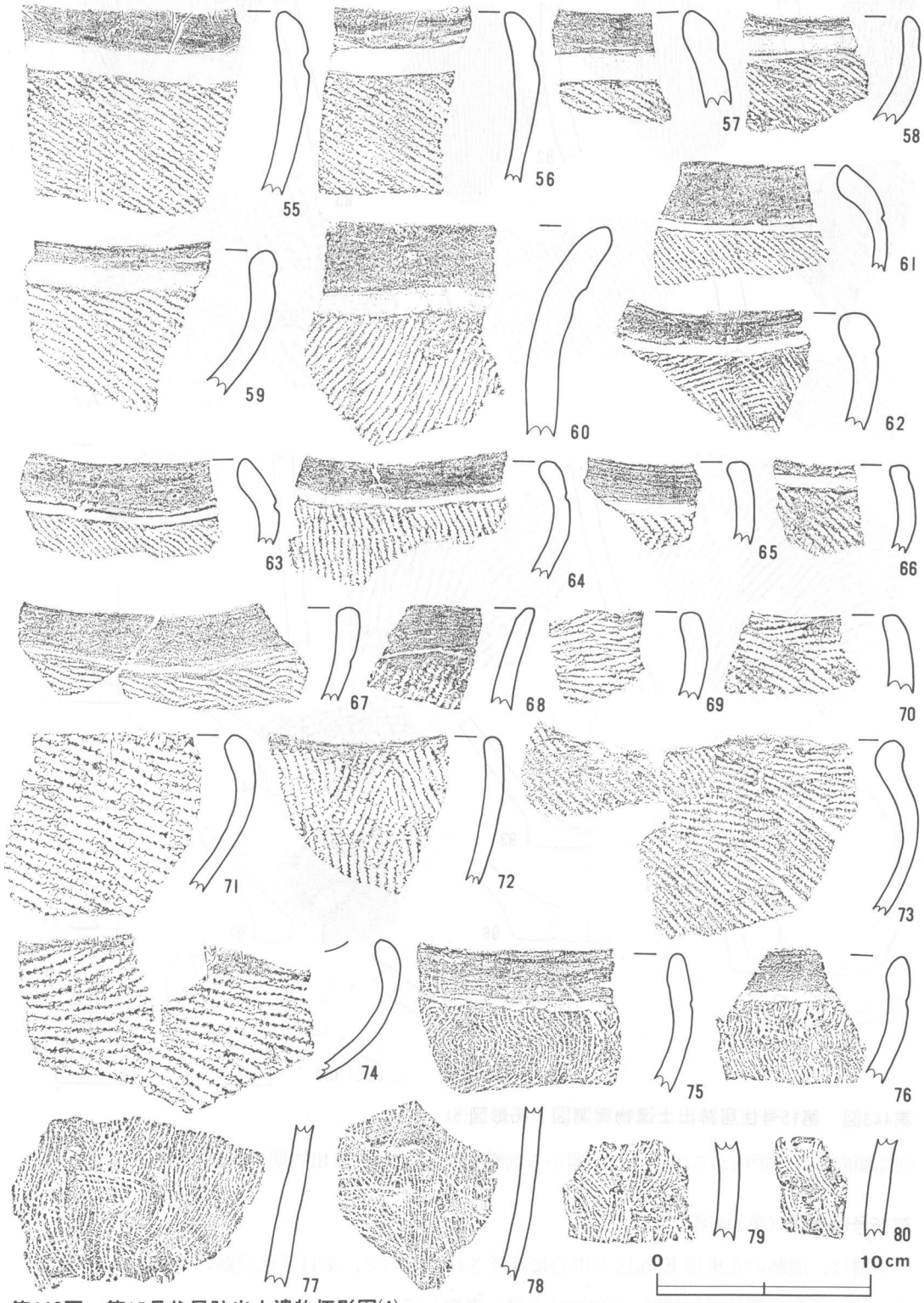
99は，本跡の南東側の覆土上位から逆位で出土した鉢形土器の底部片である。外面は斜方向のヘラナデ，内面は横方向のヘラナデが顕著に見られる。胎土には，石英粒やその他の砂粒が多く含まれている。焼成は良好で，色調は褐色を呈している。底面が明瞭に凹んでいる点が特徴である。底径は5.7cmで，現存高は4.9cmである。

100は，本跡の確認面から出土したもので，小形土器の底部片である。胎土には，やや大粒の石英，長石粒および雲母片を多量に含み，粗雑である。焼成は良好で，外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。底径は3.0cmで，現存高は1.6cmである。

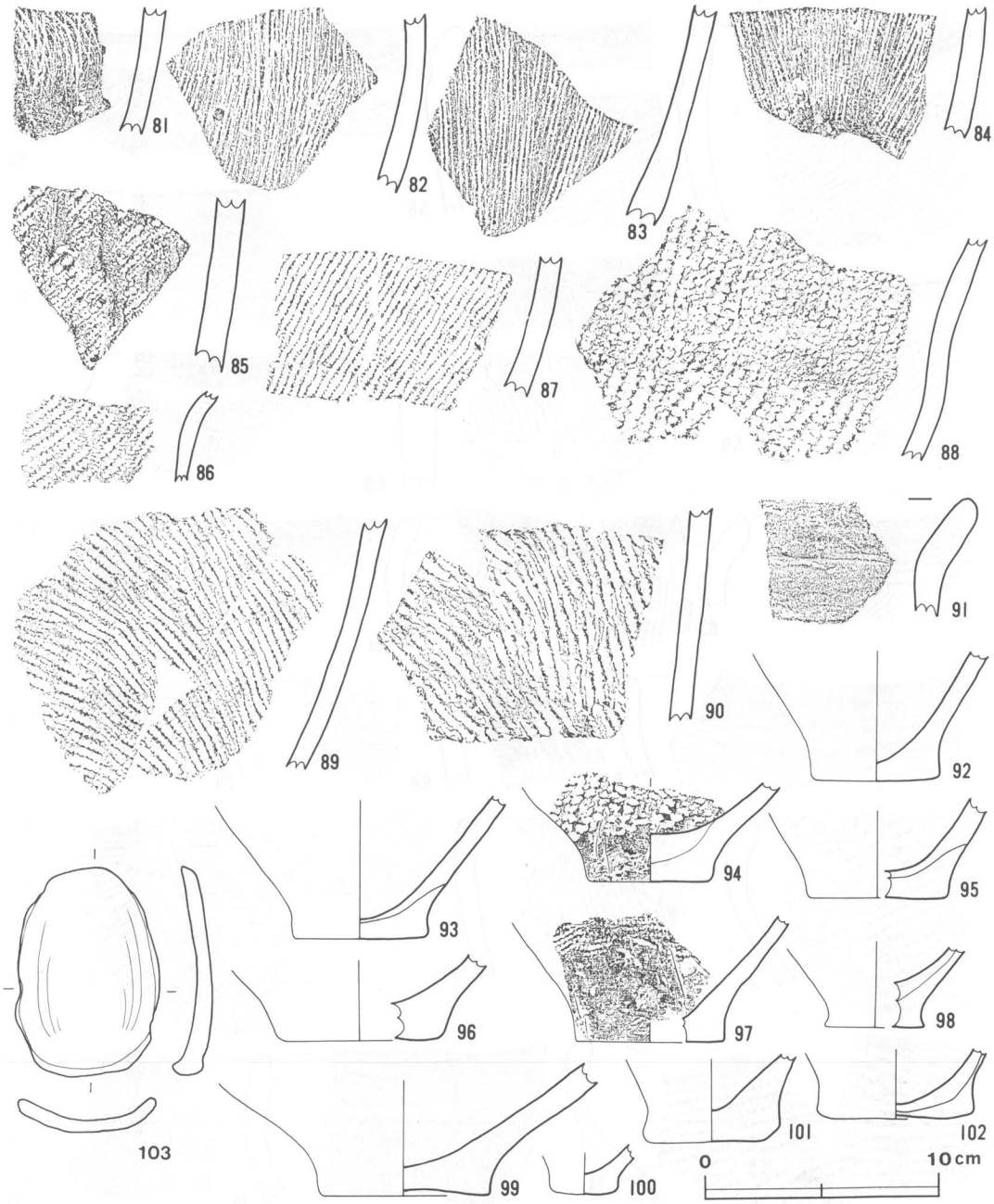
101は，本跡の中央部の覆土上位から正位で出土した深鉢形土器の底部片である。整形はナデにより行なわれているが，やや雑である，胎土には，石英，長石粒などやや大きめの石粒を多く含み，粗雑である。焼成は良好で，外面は褐色を呈し，内面はやや赤味が強くなっている。底径は5.9cmで，現存高は3.6cmである。

102は，本跡の南側の覆土中位から正位で出土した深鉢形土器の底部片である。底面の近くに横方向の強いナデが認められる。底面の中央部が薄くつくられている点に特色がみられる。胎土に石英粒や砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定底径は6.6cmで，現存高は2.8cmである。

本跡から出土した土器片は多量であるが，主体は加曽利E III式期の新しい段階に相当するものである。一部に加曽利E IV式期にまで降りそうなものもみられる。本跡の時期は，出土土器の全体




第442図　第15号住居跡出土遺物拓影図(4)

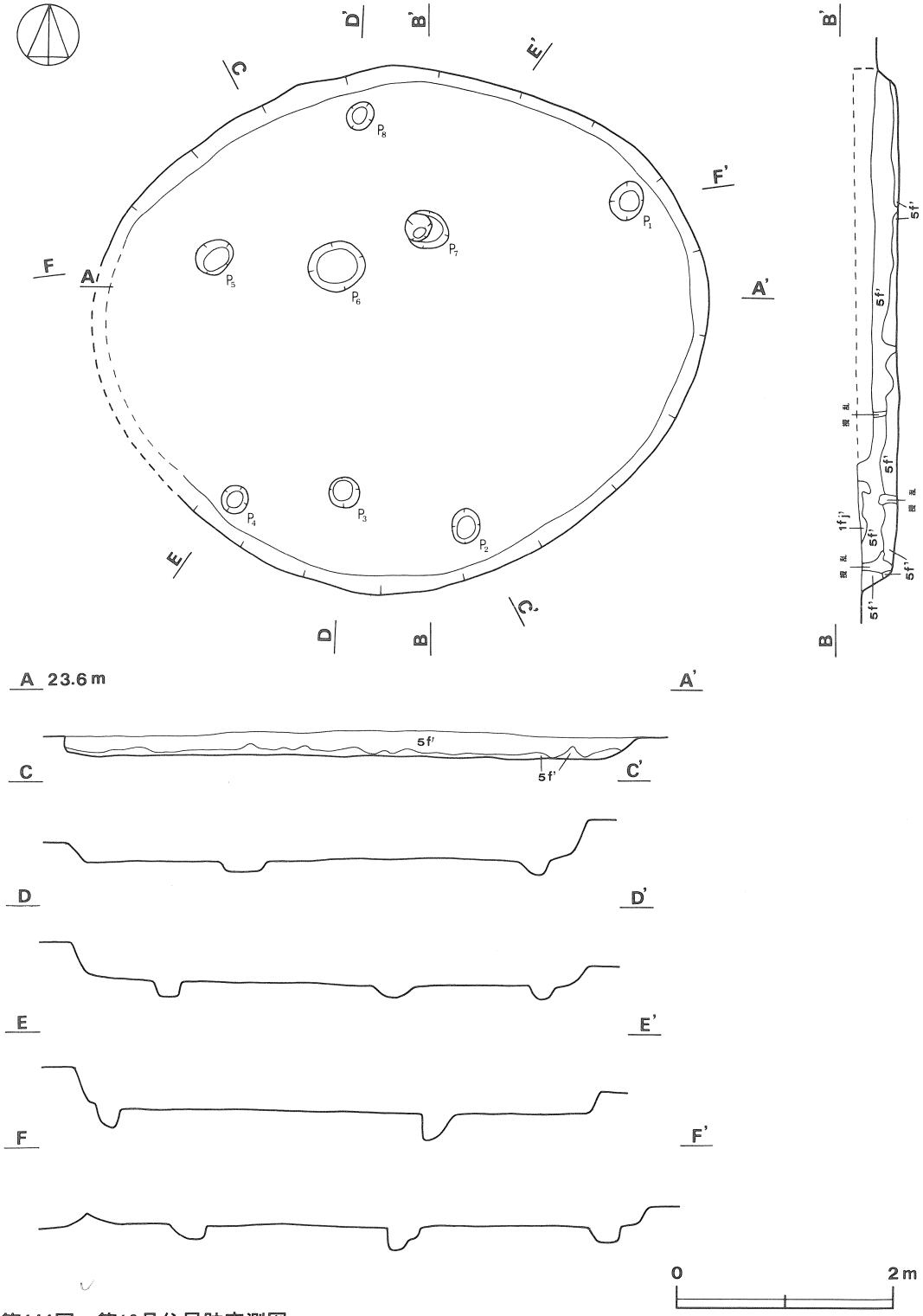



**第443図　第15号住居跡出土遺物実測図・拓影図(5)**

的な傾向および炉内から出土した土器から判断すると，加曽利E III式期の新しい段階と考えられる。

**第16号住居跡**（第444図）

本跡は，遺跡の北東部E3b$_9$区を中心に確認されたもので，第11号住居跡の南側2.3mに位置している。西側で第15号住居跡・第289号土壙と重複している。




第444図　第16号住居跡実測図

平面形は，長径5.7m(推定)・短径4.8mの楕円形状と思われる。長径方向は，N－86°－Eを指している。壁は硬く，北西側・北側で床面から外傾しているほかは，垂直に立ち上がっている。ただし，西側の壁は重複のため欠損している。壁高は，16～30cmである。床面はソフトロームで軟らかく，平坦である。ピットは8か所検出され，規模は径14～50cm・深さ12～26cmで，北側に5か所，南側に3か所並んでいる。特別に規則性は見られないが，$P_1$・$P_2$・$P_4$・$P_5$・$P_8$は深さが一定しており，壁にそって五角形に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

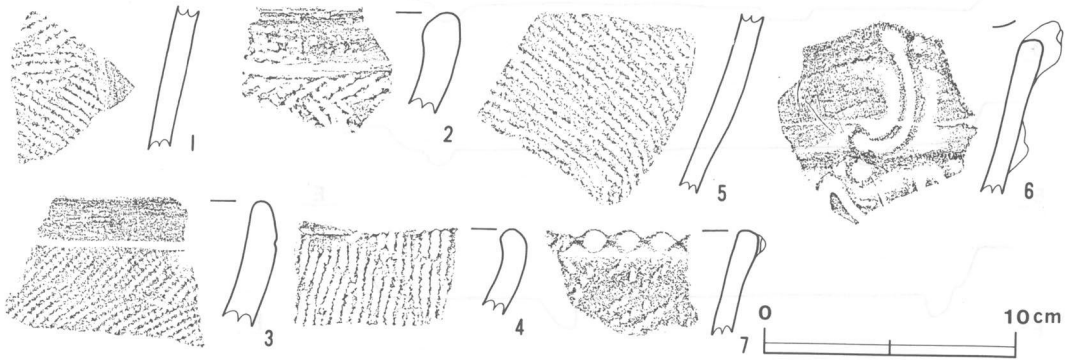
覆土は4層からなり，中間の2・3層が主である。褐色土で，ローム粒子を含み締まっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

**第16号住居跡出土土器**（第445図1～7）

1・5は，本跡の覆土内から，2～4，6・7は，本跡の確認面から出土したものである。1は，沈線による直線的磨消帯を有する胴部片で，縄文も施されている。2・3は，口縁部無文帯を1条の沈線で区画し，以下に縄文を施している。両者とも器面が若干磨滅している。4は，全面に単節縄文RLが斜位回転で施文されている口縁部片である。5は，縄文だけが施されている胴部片であるが，1と縄文が類似しており同一個体と思われる。6は，後期初頭のもので，口縁部無文帯に隆線による半月隆帯が施文され，胴部には沈線文がみられる。7は，後期中葉の粗製土器の口縁部片で，口唇部下に1条の押圧を加えられた紐線が貼付され，以下に粗い縄文が施文されている。器面の磨滅が著しい。

本跡から出土した土器は極少量で，時期判定はむずかしいが，覆土から出土した土器から判断すれば，加曽利EⅢ式期のものと考えられる。




**第445図　第16号住居跡出土遺物拓影図**

**第17号住居跡**（第446図）

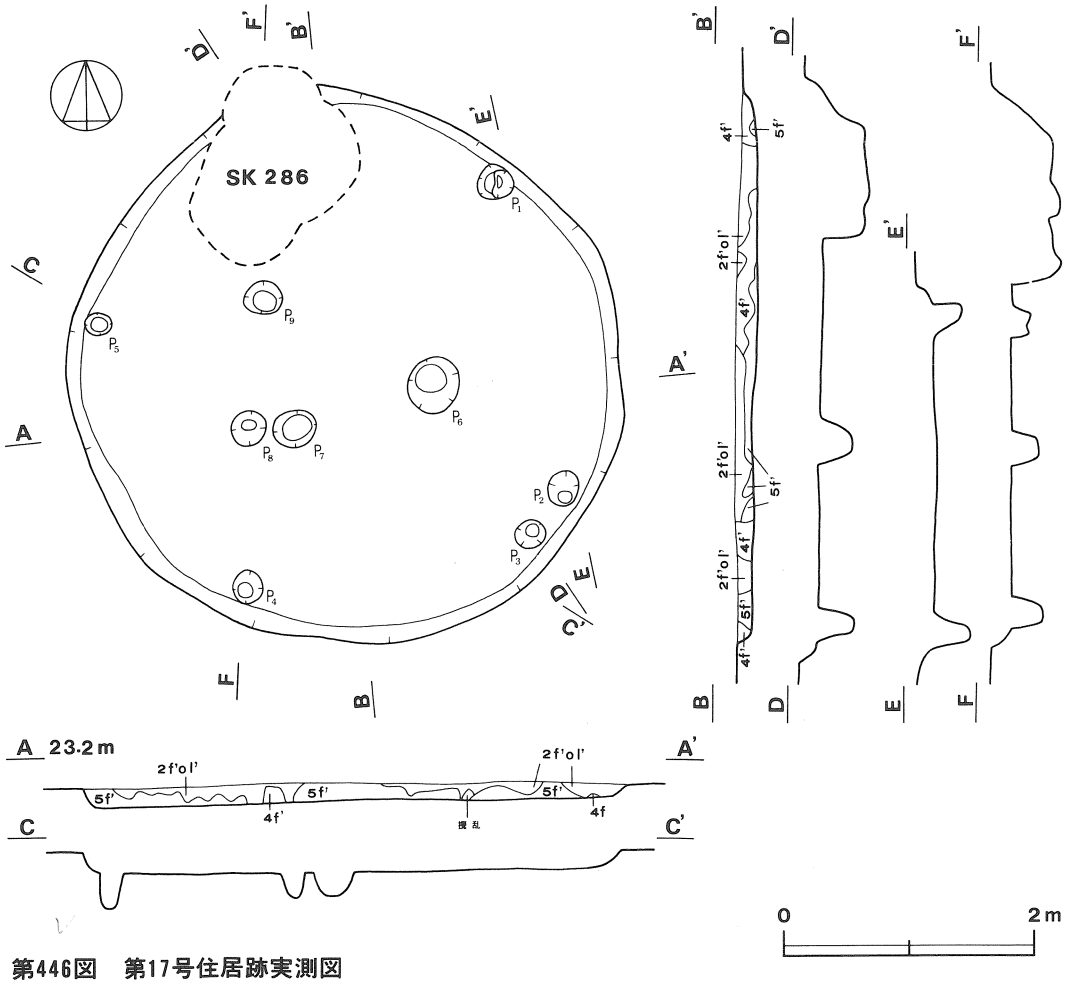
本跡は，遺跡の北西部D3$i_9$区を中心に確認されたもので，第16号住居跡の北側9 mに位置している。北側で第286号土壙と重複している。新旧関係は，底面の切り合いから本跡が古いと考えられ

る。

平面形は，径4.4mの円形である。北側の壁の一部は第286号土壙との重複のため欠損しているが，残っている壁は硬く締まっており，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，12～15cmである。床面はソフトロームで軟らかく，平坦である。ピットは，9か所検出されている。$P_1$～$P_5$は，径20～30cm・深さ29～31cmと一定した規模である。北側にもう1か所あったものと思われるが，第286号土壙によって欠損したと考えられる。柱穴を$P_1$～$P_5$・北側（推定）の6か所と考えると，ピット間はほぼ等間隔になり，残存の$P_1$～$P_5$は主柱穴と考えられる。中央にあるピットは，規模が径36～46cm・深さ17～29cmと比較的大きく浅い。炉は，検出されていない。

覆土は4層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。一部攪乱が認められるが，自然堆積である。1～3層はよく締まっている。

遺物は，皆無である。




**第446図　第17号住居跡実測図**

**第18号住居跡**（第447図）

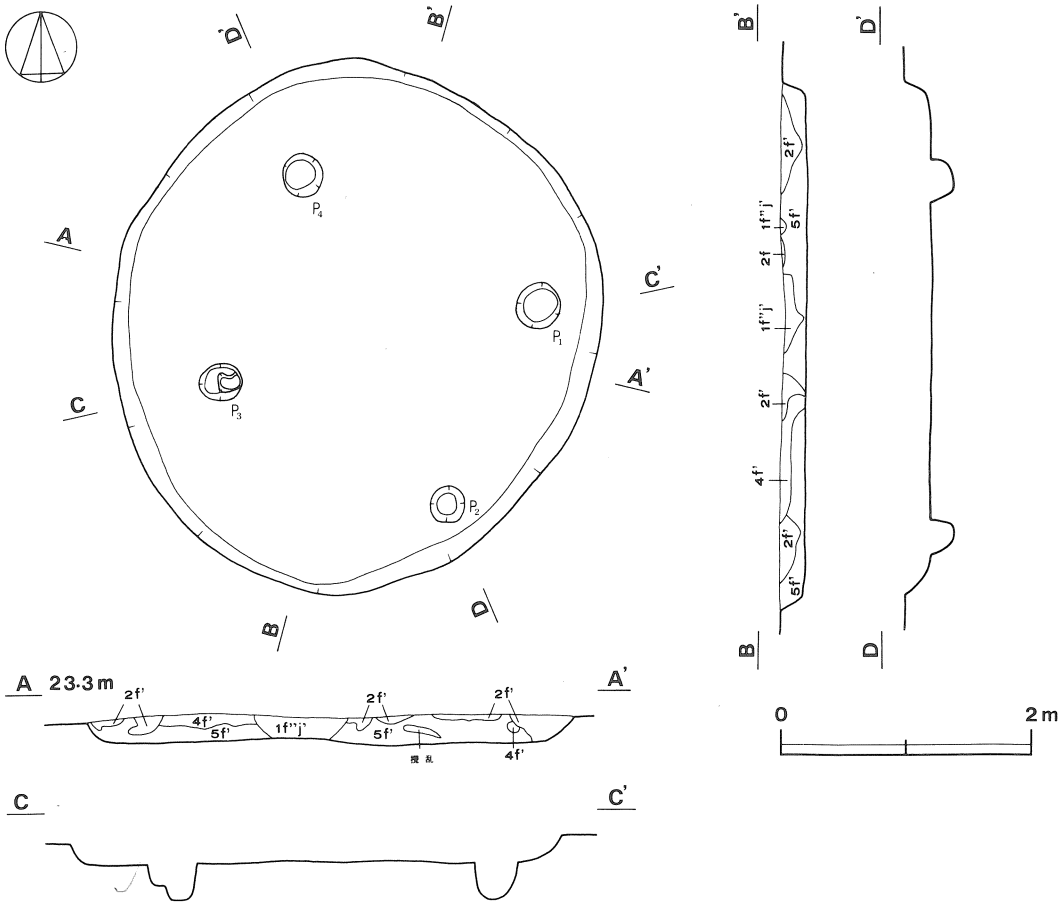
本跡は，遺跡の南西部E4a$_1$区を中心に確認されたもので，第16号住居跡の東側4 mに位置している。

平面形は，長径4.3m・短径3.9mの円形にちかい楕円形で，長径方向はN－0°を指している。壁は東側の一部にやや軟らかいところがあるほかは，硬く締まっており，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は18～21cmで，ほぼ一定の高さである。床面はハードロームでよく踏み固められて硬く，平坦である。ピットは4か所検出され，規模は径28～36cm・深さ18～27cmで，中央を囲んで四角形に配列され，しかも，ピット間の距離はほぼ等間隔なので4か所とも主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

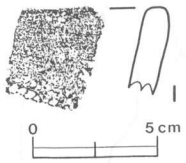
覆土は5層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。1～4層は締まっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から10点出土している。

**第18号住居跡出土土器**（第448図1）




**第447図　第18号住居跡実測図**




第448図
第18号住居跡
出土遺物拓影図

1は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文を施している。

本跡からの出土土器は極少量で，時期決定はむずかしいが，出土土器からみれば，加曽利EⅢ式期のものと思われる。

**第19号住居跡**（第449図）

本跡は，遺跡の北東部E4$b_1$区を中心に確認されたもので，第18号住居跡の北側4 mに位置している。

平面形は，長径5.0m・短径4.3mの楕円形で，長径方向はN－72°－Eを指している。壁は硬く，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，18～22cmである。床面はソフトロームで軟らかく，炉の付近だけやや凹んでいるほかは平坦である。ピットは7か所検出され，規模は径24～28cm・深さ16～26cmである。$P_2$・$P_3$・$P_5$・$P_7$は深さがほぼ一定しており，しかも，炉からほぼ等間隔に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は本跡の中央に検出され，径94cmの円形で，床面を11cmほど皿状に掘り凹めた地床炉である。炉床と炉壁は，よく焼けて赤く硬くなっている。炉の覆土内の焼土は少なかったが，確認された焼土範囲は炉の平面規模よりも広い範囲である。

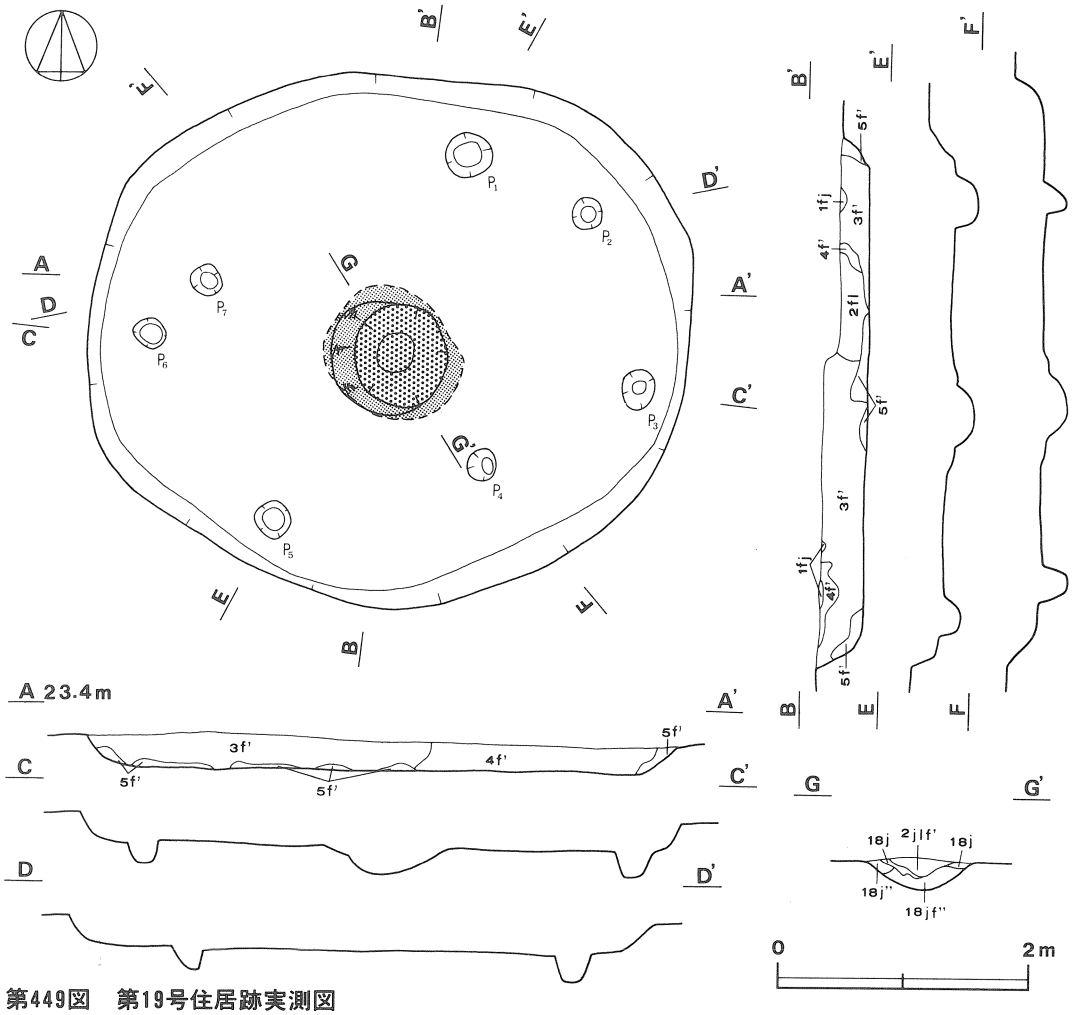
覆土は5層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。5層とも締まっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から70点出土している。

**第19号住居跡出土土器**（第450～451図1～30）

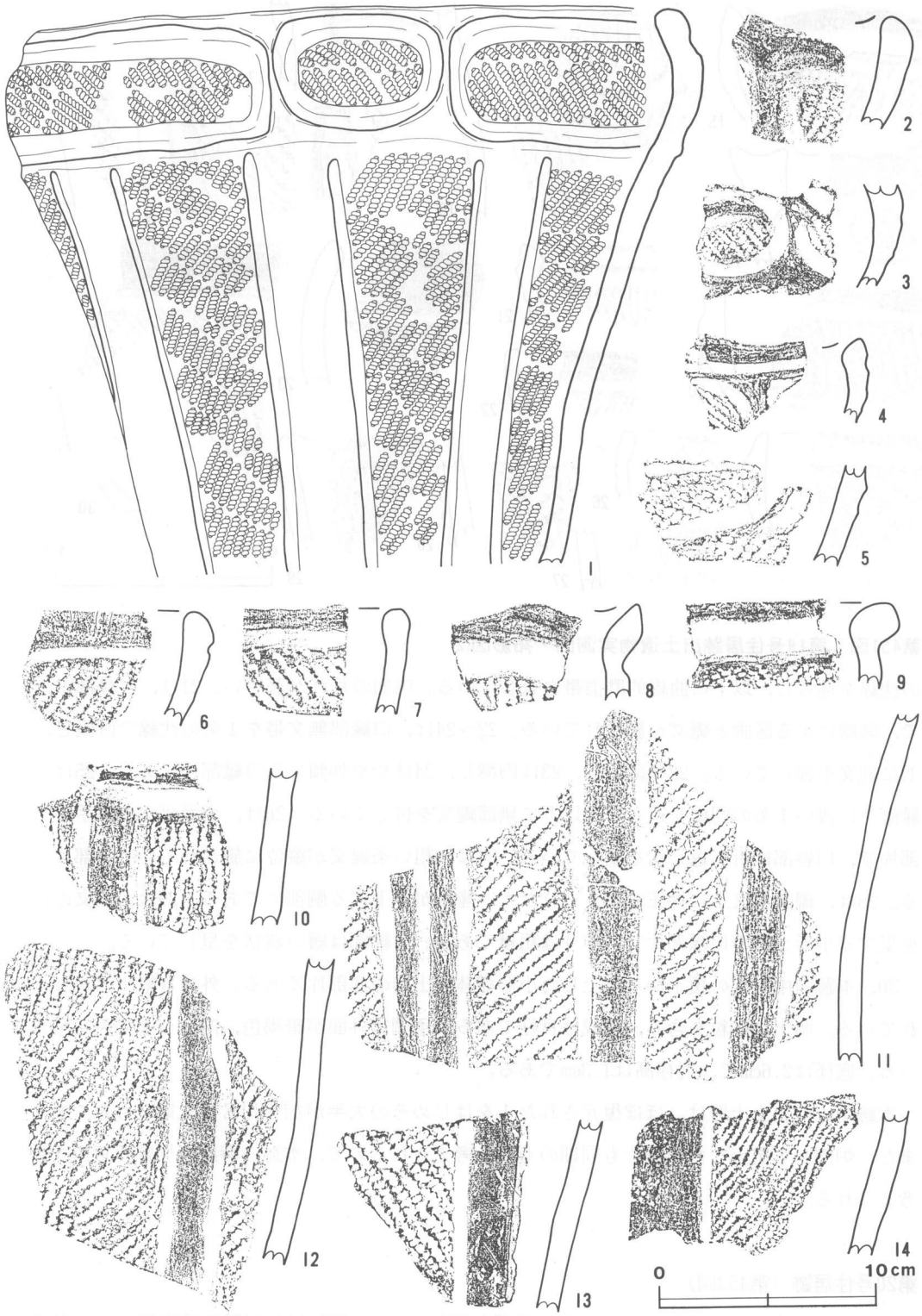
1は，本跡の中央部から北西側にかけての覆土に内面を上に向けて出土した大破片2点を中心に小破片数点が接合したものである。平縁のキャリパー形を呈する深鉢形土器で，口縁部に隆線と太い沈線により楕円と長楕円形の区画が3単位施され，胴部には磨消懸垂文が8単位で垂下している。縄文帯が磨消帯より広い。縄文は単節RLで，口縁部区画内は横位回転，胴部は縦位回転である。本土器の胴下半部は欠損しているが，その断面は丁寧に打ち欠かれており，意図的なものと思われる。口縁部や胴上半部はほぼ完存しており，あるいは炉埋設土器か埋甕に使用する目的で打ち欠かれたものとも考えられる。胎土には，石英，長石粒などの小石粒や砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を主とするが，一部黒味がかった部分もみられる。胴下半部は一様に赤味が強く，赤褐色を呈している。口径は29.0cmで，現存高は25.5cmである。

2・6・20・27・29は，本跡の炉内から，14・24は，確認面から，その他は覆土から出土したものである。2と6は，同一個体と思われるが接合はできなかった。隆線と沈線により口縁部文様帯を楕円形に区画し，区画内に縄文が充填されている。3～5も，隆線と沈線により口縁部文

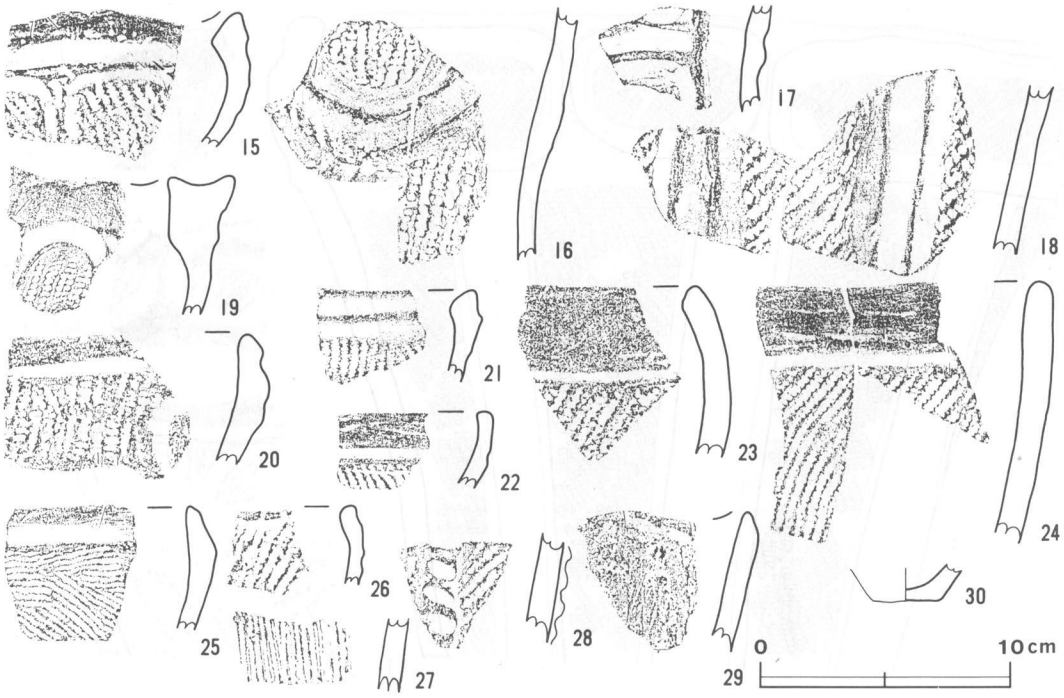



**第449図　第19号住居跡実測図**

様帯が楕円形に区画されるもので，3・5は口辺部片，4は口縁部片である。3の破片の上下端は輪積み部で剝離している。5の区画内には複節縄文が充塡されている。7～9は，口縁部文様帯が太い沈線で区画されている口縁部片で，区画内に縄文が充塡されている。10は，口辺部片で，口縁部文様帯を隆線で区画し，胴部に磨消懸垂文が施されている。11～14は，直線的磨消帯を有する胴部片である。11の磨消帯の一部には沈線が1本付加されている。14は，胎土に長石，雲母片などを多く含んでいる。いずれも区画間には単節縄文が施されている。15は，波状を呈する口縁部片で，沈線と隆線で口縁部文様帯が区画され，区画内に縄文が施されている。内面には炭化物が付着している。16～18は，隆線によるモチーフが描かれている胴部片である。16と18は，同一個体であるが接合はしない。16は曲線的に，18は垂下するように隆線が施されており，区画間に粗い縄文が充塡されている。19は，太い沈線による曲線的区画が描かれている口縁部片で，口唇上面が凹む筒状の突起を有している。区画内に縄文が付されている。20は，口縁直下に1条




第450図　第19号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)




**第451図　第19号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)**

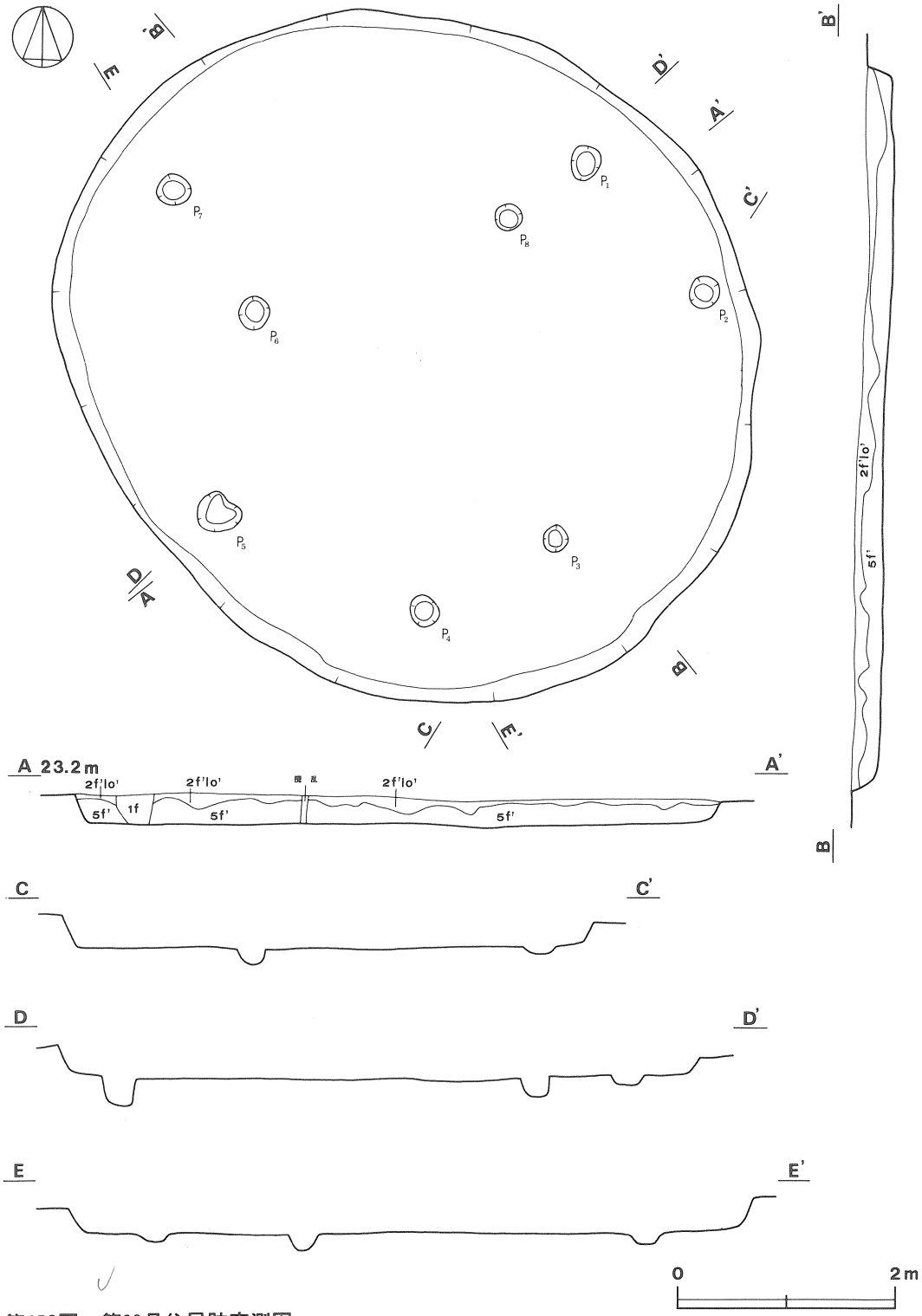
の沈線を巡らし，以下に曲線的磨消帯を有している。内面の荒れが著しい。21は，口縁部の小片で，隆線による区画と縄文が施されている。22～24は，口縁部無文帯を1条の沈線で区画し，以下に縄文を施している。22は薄手で，23は内湾し，24はやや外傾する口縁部片である。25は，口縁直下に浅い1条の凹線を巡らし，以下に無節縄文を付している。26は，全面縄文の薄手の口縁部片で，口唇部は折り返し状を呈している。27は，粗い条線文が縦位に施されている胴部片である。28は，縄文地文上に押圧が加えられた太い隆帯が垂下する胴部片である。29は，無文の筒状を呈する小形土器の口縁部片で，作りは粗雑である。口縁部は緩い波状を呈している。

30，本跡の中央部の覆土から出土した小形深鉢形土器の底部片である。外面は縦ナデが加えられている。胎土に砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が暗褐色，内面が灰褐色を呈している。底径は2.6cmで，現存高は1.3cmである。

本跡からの出土土器は，ほぼ復元された1をはじめその大半が加曽利EⅢ式期のものである。また，炉内から出土した土器片も同期のものと考えられるので，本跡の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。

**第20号住居跡**（第452図）

本跡は，遺跡の北西部 $D3i_4$ 区を中心に確認されたもので，第11号住居跡の南東側11m に位置し




第452図　第20号住居跡実測図

ている。

平面形は，長径6.8m・短径6.0mの楕円形である。長径方向は，N－39°－Wを指している。壁は硬く良好で，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は14～28cmで，北壁よりも南壁が4～5cm高くなっている。床面はソフトロームで軟らかい。ピットは8か所検出され，規模は径24～36cm・深さ10～27cmである。配列が不規則で，主柱穴の判別はできない。炉は，検出されていない。

覆土は4層からなり，1層は耕作土の残り，2層は攪乱である。3・4層に暗褐色土・褐色土が自然堆積していて締まっている。

遺物は，皆無である。

**第21号住居跡**（第453図）

本跡は，遺跡の東部E3$g_0$区を中心に確認されたもので，第18号住居跡の南側12mに位置している。北西側で第23号住居跡・北側で第24号住居跡・中央部で第3号溝と重複している。また，床面では第355～357号土壙と重複している。新旧関係は，第23・24号住居跡とでは不明であるが，土壙と溝との関係では，土層から本跡が最も古く，次いで第355～357号土壙，第3号溝の順と考えられる。

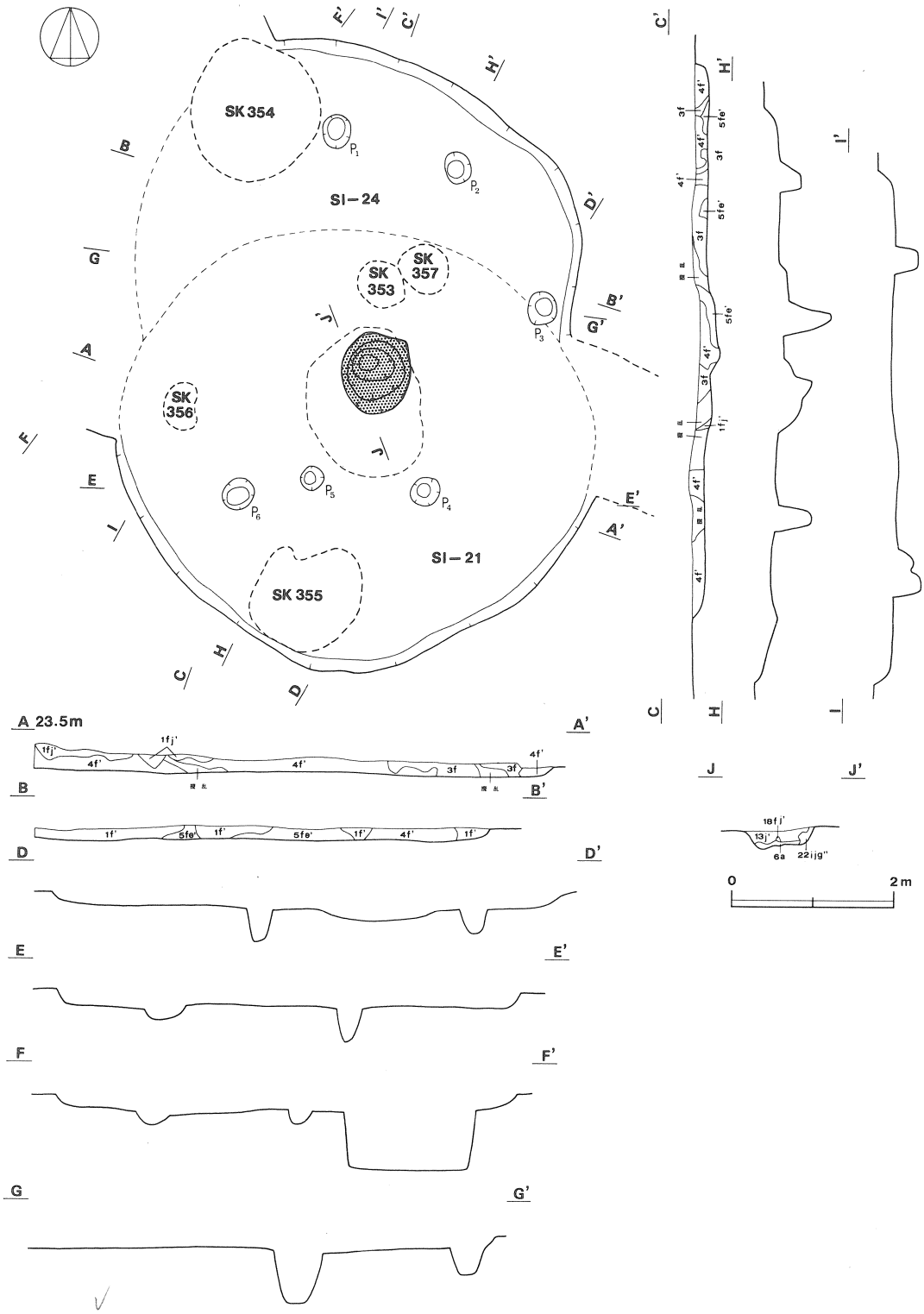
平面形は，長径5.5m(推定)・短径4.6mの楕円形状と思われる。長径方向は，N－86°－Wを指している。壁は東側の一部と南側，南西側で残存している。南西側の一部が床面から緩やかに立ち上がっているほかは，外傾して立ち上がっており，軟らかい。壁高は，12～18cmである。床面はソフトロームで軟らかいが，中央部分が第3号溝との重複のためけずられ，約10cm凹んでいる。また，北側・西側は重複によって床面が4cm低くなっている。ほかの部分は平坦である。ピットは3か所検出され，規模は径28～32cm・深さ40～45cmである。北側や西側にも存在したと思われるが，第3号溝・第357号土壙によって欠損したと考えられる。炉は本跡の中央に検出され，規模は径100cm・深さ37cmで，炉床と炉壁は赤く焼けている。焼土範囲は炉から南東方向へ広がっているが，第3号溝によって広げられたものと考えられる。

覆土は5層からなり，すべて褐色土である。第3号溝による攪乱がひどい。

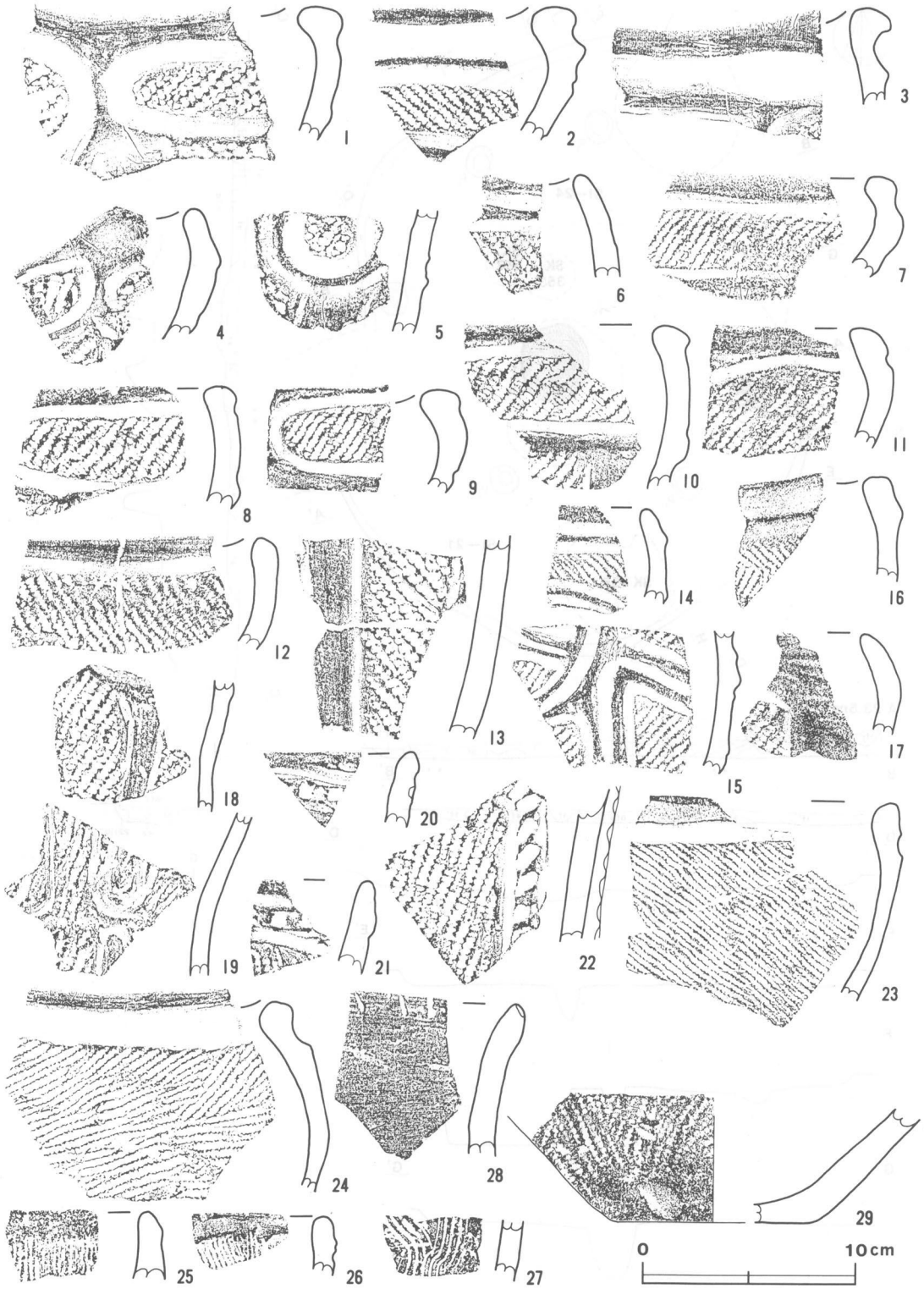
遺物は，縄文土器片が覆土から64点出土している。

**第21号住居跡出土土器**（第454図1～29）

1～10は，口縁部文様帯が隆線と沈線により区画されるもので，円形，楕円形の区画がみられる。区画内には縄文が施されている。1・2は，やや高めの隆線で楕円形に区画されている。3は，口縁直下に1条の凹線を巡らし，以下に隆線による区画がみられる。4は，波頂部片で，低い隆線と沈線により楕円形に区画されている。5は，口辺部片で，円形の区画内に縄文が付され，




第453図　第21・24号住居跡実測図




第454図　第21号住居跡出土遺物実測図・拓影図

以下に直線的磨消帯を有している。6は，内傾の著しい口縁部片である。7は，内湾する口縁部片で，沈線で長楕円形の区画が施されているが，磨滅が著しい。8～10は，低い隆線と沈線により口縁部文様帯が楕円形に区画されており，10の下端には胴部の磨消懸垂文がみられる。11は，口縁部文様帯を沈線だけで区画しているもので，縄文を充塡している。12は，口縁直下に1条の沈線を巡らし，以下に縄文を施している。13は，直線的磨消帯を有する胴部片で，区画間に縄文が付されている。14・15は，器面全体に隆線で曲線的モチーフが施されているもので，14は口縁部片，15は胴下半部片である。14は，器面の磨滅が著しい。16は，口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し，以下に縄文を施している。17は，内湾する口縁部片で，逆U字状の沈線区画内に縄文が充塡されている。18は，口辺部片で，曲線的磨消帯を有している。19は，くびれ部片で，縄文地文上にU字状，逆U字状の沈線区画が施され，胴下半部の逆U字状の区画内は磨消されている。20・21は，同一個体であるが，接合はできない。口縁部の2条の沈線間に刺突文を付し，以下に縄文を施しているが，磨滅が著しい。22は，縄文地文上に押圧が加えられた太い隆帯が垂下する胴部片で，第19号住居跡の28と同一個体と思われる。23・24は，口縁直下に1条の凹線が巡り，以下に縄文が施されている。25～27は，条線文が付されている。25・26は口縁部片で，縦位に施文されている。25は器面が磨滅している。27は，曲線的に施文されている胴部片である。28は，外反する幅の広い無文帯を有する口縁部片で，口唇部にキザミが粗く施されている。

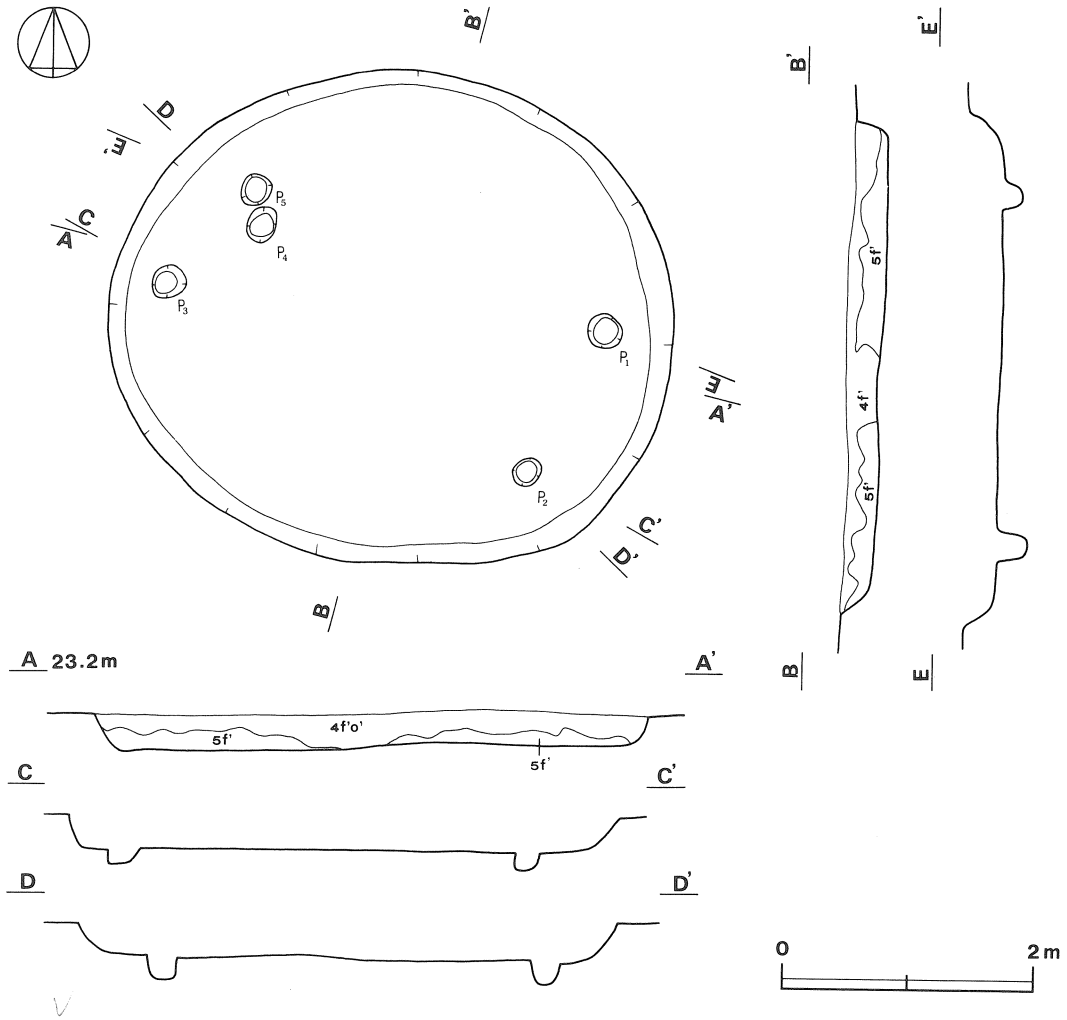
29は，本跡の確認面から出土した底部片である。外面には縄文が施文されているが，器面が磨滅している。内面はナデが加えられている。底面の中央部は少し薄くなっている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が暗褐色，内面が褐色を呈している。推定底径は9.8cm，現存高は5.0cmである。

本跡から出土した土器片は，いずれも加曽利EIII式期のものである。床面および炉内，ピット内などからは土器は出土しなかったが，覆土から出土した土器から判断すれば，本跡の時期は，加曽利EIII式期と考えられる。

**第22号住居跡**（第455図）

本跡は，遺跡の北部E4$a_7$区を中心に確認されたもので，第20号住居跡の南東側10.5mに位置している。

平面形は，長径4.5m・短径3.9mの楕円形で，長径方向はN－74°－Wを指している。壁は比較的硬く，床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は，22～27cmである。床面はソフトロームであるが部分的に踏み固められて，比較的硬くなっているところが残っている。ピットは東側に2か所，西側に3か所と片寄って検出され，規模は径22～28cm・深さ13～23cmで，円形または楕円形の形状である。配列が不規則で，主柱穴の判別はできない。炉は，検出されていない。




**第455図　第22号住居跡実測図**

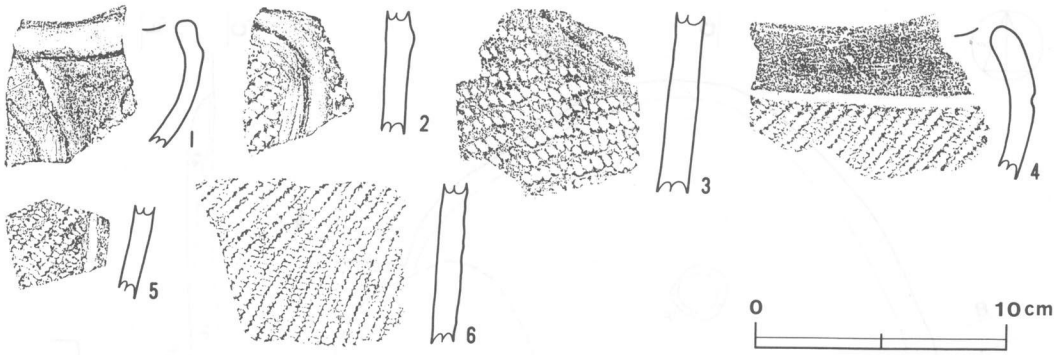
覆土は２層からなり，ともに褐色土で，締まっており，自然堆積である。

遺物は，縄文土器片が覆土から20点出土している。

**第22号住居跡出土土器**（第456図１～６）

１は，内湾の著しい波状口縁部片で，薄手で，微隆線による曲線的区画がなされている。２・３は，ナゾリを加えられた微隆線による区画が施された胴部片である。いずれも内面に剝落痕が認められる。４は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に縄文を施している。５は，直線的磨消帯を有する胴部の小片である。６は，縄文だけの胴部片である。

１～６は，いずれも本跡の覆土の上～中位から出土したものである。出土土器が少なく，本跡の時期決定はむずかしいが，土器片から判断すれば，加曽利ＥⅢ式期の新しい段階と考えられる。




**第456図　第22号住居跡出土遺物拓影図**

**第23号住居跡**（第457図）

本跡は，遺跡の東部E3f$_9$区を中心に確認されたもので，第16号住居跡の南側8.5mに位置している。北東側で第24号住居跡，南東側で第21号住居跡，南東側から西側にかけて第３号溝と重複している。また，床面では第353・354・356号土壙と重複している。溝や土壙との新旧関係は，切り合い関係から，本跡が最も古く，土壙・溝の順に新しいと考えられる。

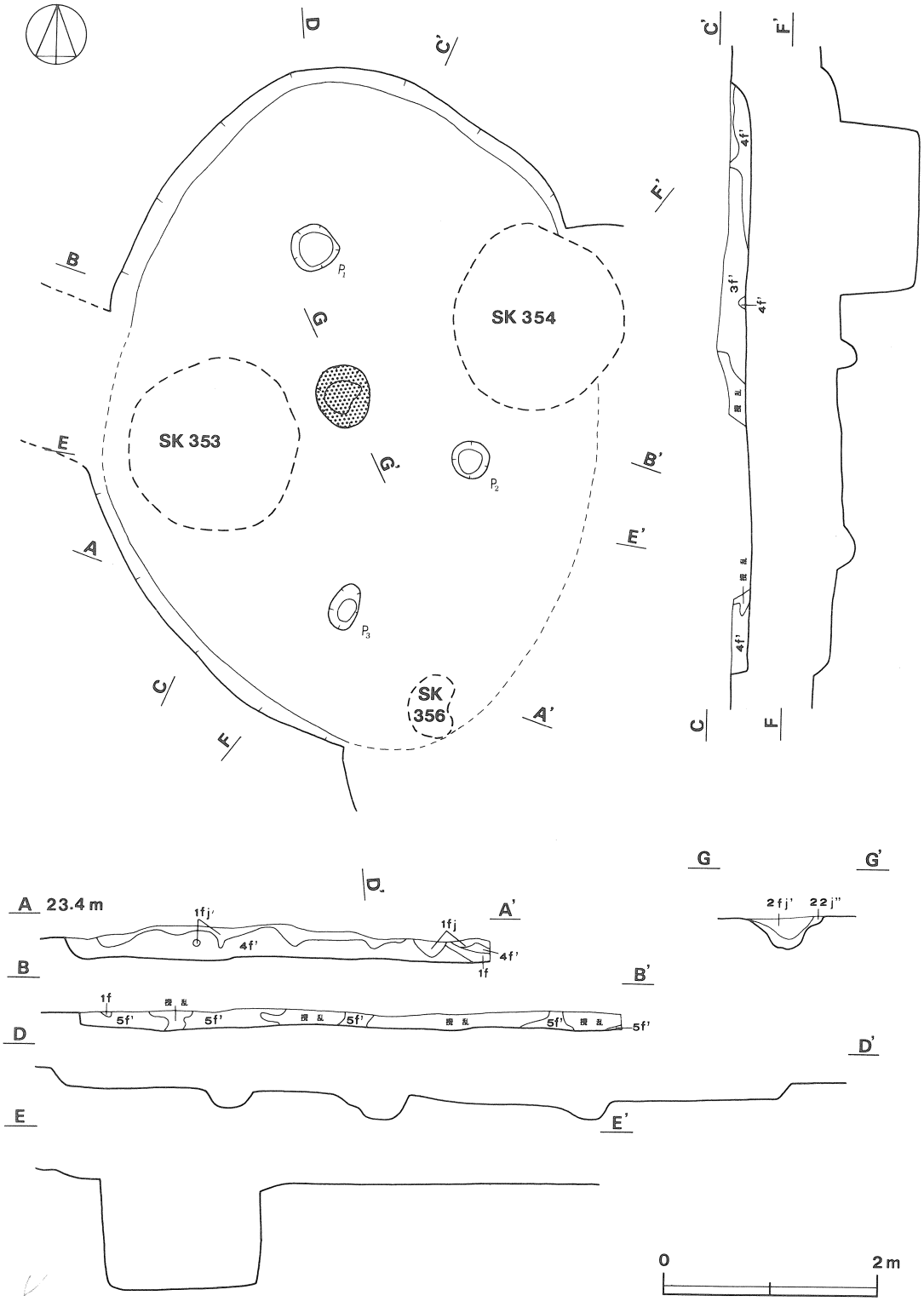
平面形は，長径6.2m（推定）・短径4.6m（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N－2°－Wを指している。壁は重複のため，北側と南西側の一部しか残っていないが，床面から外傾して立ち上がっており，硬く締まっている。残存している壁高は，15cmである。床面は第３号溝との重複のため中央がけずられ，４～６cm凹んでいるほかは，よく踏み固められている。ピットは３か所検出され，規模は径34～46cm・深さ16～23cmである。西側にもう１か所あったと思われるが，第353号土壙によって欠損したと考えられる。ピットを４か所と考えると，炉を囲んで対角線上に配列されているため，残存している３か所は主柱穴と考えられる。炉は本跡の中央に検出されており，第３号溝による撹乱は受けておらず，炉床と炉壁がよく残っている。規模は径60cm・深さ25cmで，炉床はよく焼けている。

覆土は５層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。

遺物は，縄文土器片が覆土から85点出土している。

**第23号住居跡出土土器**（第458～460図１～44）

１は，本跡の中央部やや北側の覆土から一括して出土した破片が接合したもので，内面が上を向いて出土している。口縁部の遺存が少なく，器形の復元がむずかしいが，平縁の鉢形土器と考えられる。幅の狭い口縁部無文帯を１条の断面三角形を呈する隆線で区画し，以下には全面に縄文を施している。縄文原体は単節ＲＬで，胴上半部は横位，下半部は縦位回転で施文している。




第457図　第23号住居跡実測図

底面近くは丁寧にナデられている。胎土には，石英,長石粒，雲母片などを含んでいる。焼成は良好で，色調は褐色を呈している。推定口径は25.8cm，推定器高は24.0cm，底径は5.8cmである。

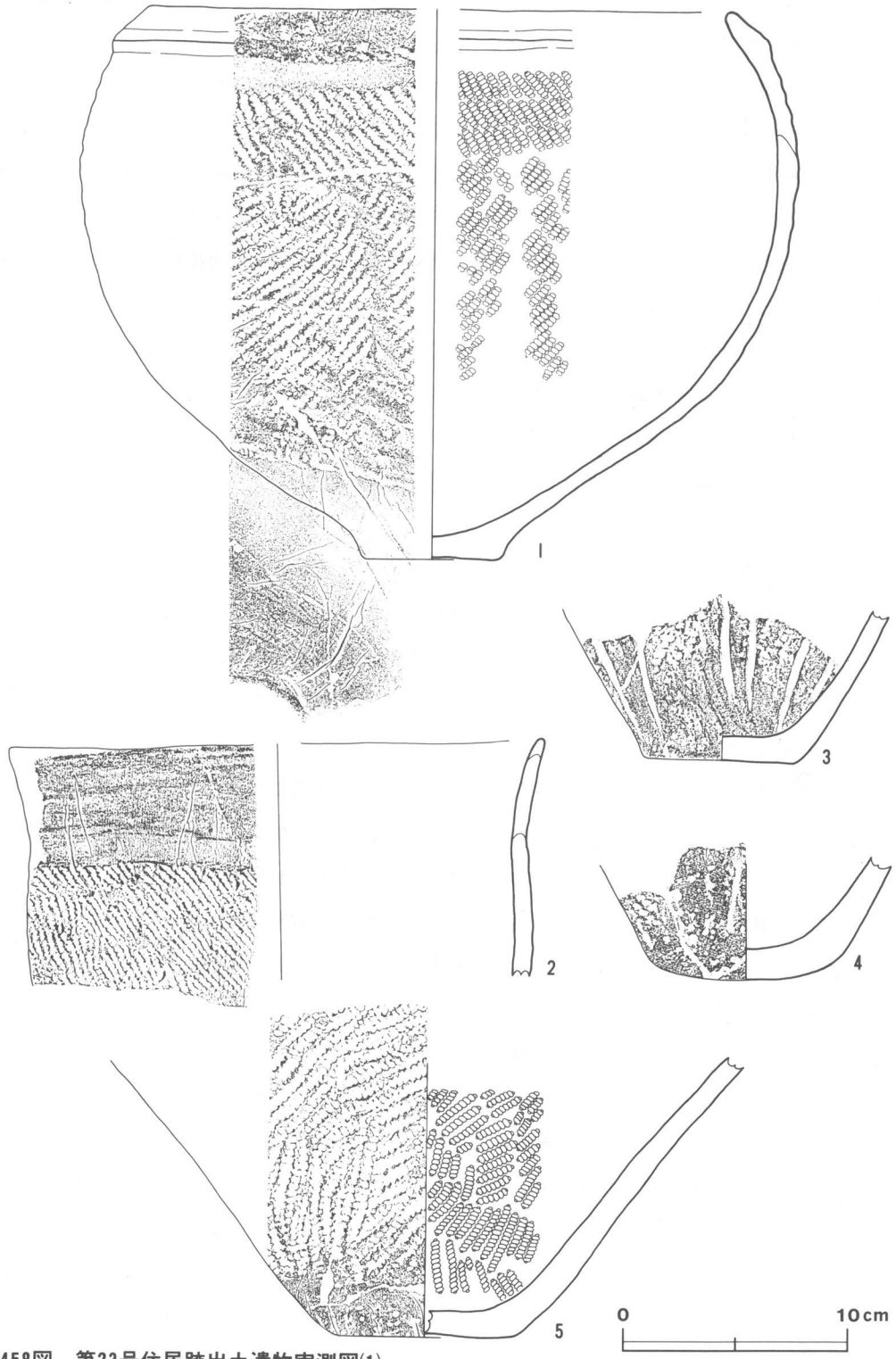
2は，本跡の覆土および確認面から出土した破片が接合して，上半部が実測可能となったものである。やや外反気味に立ちあがる口縁を有する深鉢形土器で，頸部に浅い凹線を巡らし，胴部には単節縄文ＲＬが全面に施文されている。口縁部は平縁を呈するが，緩い小波状をなす部分もある。本土器は，きわめて薄手のつくりで，口縁部無文帯は横ナデが顕著である。胎土には，微砂粒を含むが緻密で，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗灰褐色を呈している。推定口径は23.6cmで，現存高は10.6cmである。

3は，本跡の中央部やや北東側の覆土から逆位で出土した底部片である。外面には8単位の幅の狭い磨消帯が垂下し，区画間には単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。磨消帯は縦ナデ，底面の近くは横ナデが加えられている。内外面に若干剝落痕が認められる。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を主とし，内面上半部は暗灰色を呈している。底径は7.0cmで，現存高は6.6cmである。

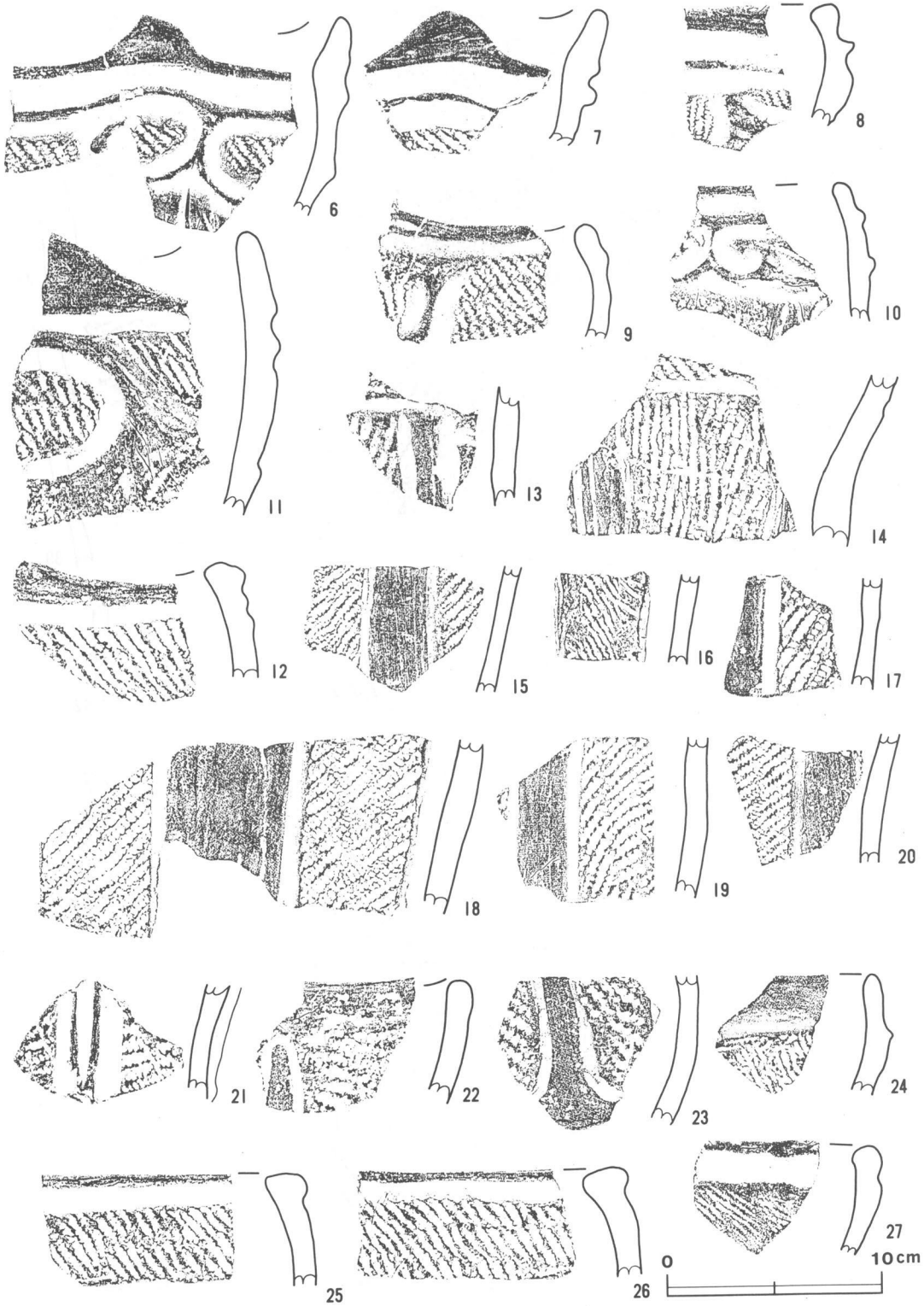
4は，本跡の中央部やや北西側の覆土から立位で出土した破片と，覆土から出土した小片が接合した厚手の底部片である。底部はやや丸底気味の平底を呈している。外面にはやや幅の広い磨消懸垂文を有し，区画間には縄文を施している。外面は剝落が激しいが，内面はナデにより調整されている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。底径は8.4cmで，現存高は5.1cmである。

5は，本跡の覆土から出土したものである。胴下半部から底部にかけて半分ほどを残し，大きく外方に開く器形から鉢形土器と推定される。胴部には，全面に粒の大きい単節縄文ＲＬが縦位回転を主として施されている。底部近くの約2cmほどは，横ナデが加えられている。内面は，横方向のヘラ整形痕が明瞭に残っている。胎土には，微砂を含み緻密で，焼成は良好である。色調は，褐色を主とするが，一部に黒色ないしは灰黒色を呈している部分も認められる。推定底径は8.0cmで，現存高は12.2cmである。

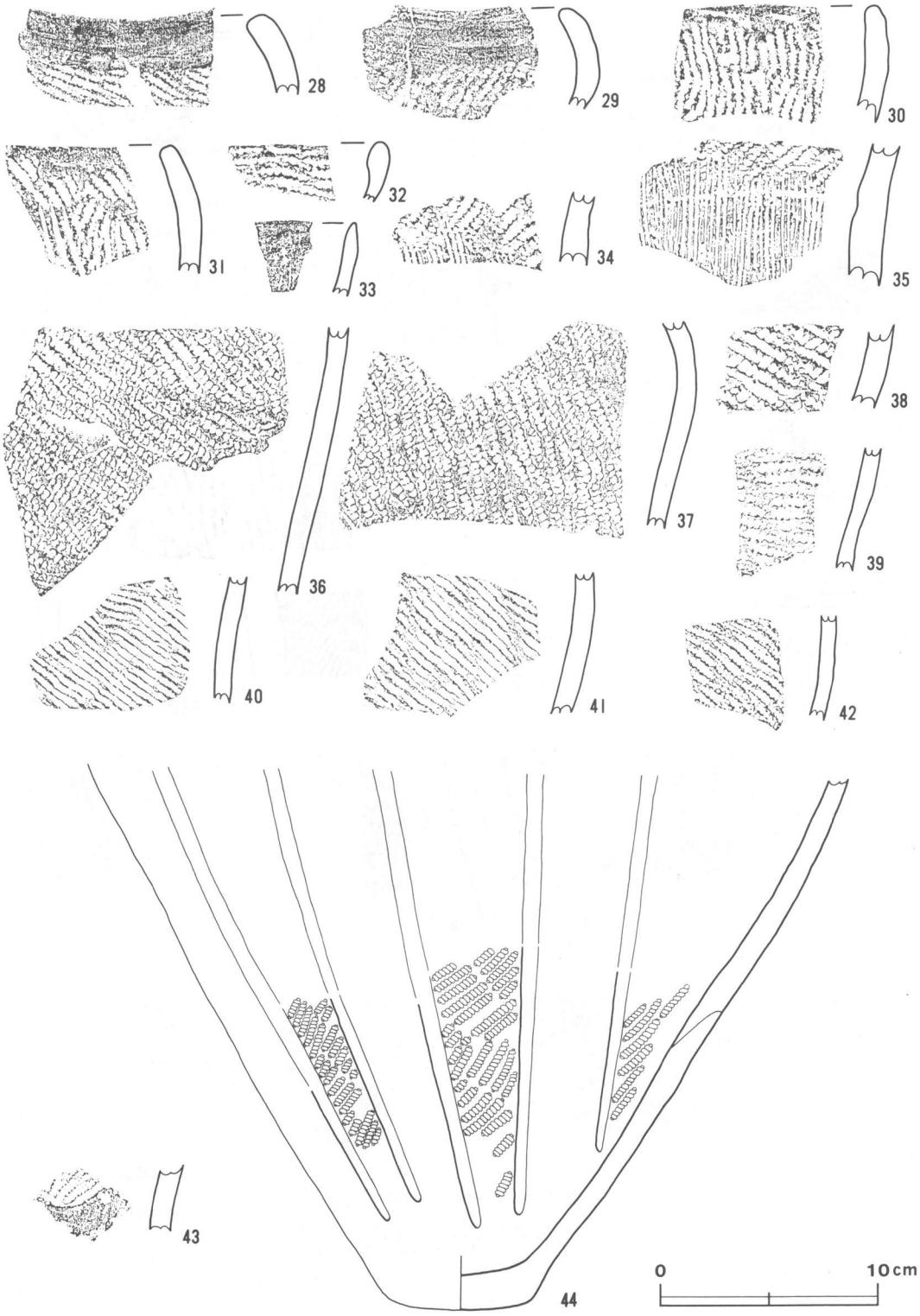
6～11は，隆線と沈線により口縁部文様帯が区画されるもので，区画内に縄文が充塡されている。6は，小さな山形の突起を有する口縁部片で，隆線で渦巻文と楕円区画文を施している。7も，波頂部片である。8は，隆線で区画をおこない，区画内に縄文と沈線文を付している。9は，波状縁を呈し，10は，渦巻文も加えられ，胴部に直線的磨消帯を有している。11は，大形の波頂部片で，低い隆線で楕円区画をおこない，以下に磨消帯を施している。12は，波状を呈する口縁部片で，口縁直下に1条の沈線を巡らし，以下に縄文を付している。13は，口辺部片で，沈線区画が破片上端に残り，胴部には直線的磨消帯を有しており，炭化物の付着が著しい。14も，13と同様の口辺部片で，厚手である。15～20は，直線的磨消帯を有する胴部片である。16は，区画間




第458図　第23号住居跡出土遺物実測図(1)




第459図　第23号住居跡出土遺物拓影図(2)




第460図　第23号住居跡出土遺物実測図・拓影図(3)

に無節縄文が付されている。18の磨消帯は幅が広く，内面は剝落が著しい。21は，沈線を加えられた太い隆線が施されている胴部片である。22は，幅の狭い逆U字状の磨消帯が施されている口縁部片で，器面の剝落が著しい。23は，U字状の沈線区画内に縄文が施されている胴部片である。24は，口縁部無文帯を1条の隆線で区画し，以下に縄文を施している。25～27は，口縁直下に1条の凹線を巡らし，以下に縄文が施されている。25・26は，口唇部が平坦で肥厚しており，同一個体と考えられる。28・29は，口縁部に無文帯を残し，以下に縄文を施している。30・32は，全面に縄文が施されている口縁部片で，いずれも斜位回転で縄文が施されており，30は条が縦走，32は条が横走している。31は，縄文地文上に沈線が数条加えられている口縁部片である。33は，小形の無文土器の口縁部片で，整形痕が認められる。34・35は，縦位の条線文と縄文が併用されている胴部片で，35の内面は剝落が著しい。36・37は，同一個体で粗い縄文がきれいに施文されている胴部片である。38～42は，縄文だけが施されている胴部片で，40・41は無節縄文で，他は単節縄文である。このうち，39・41・42は本跡のピット1から出土したものである。

43は，本跡の炉内から出土した胴部片で，U字状の区画内に縄文を施している。

44は，本跡の北西側の覆土から出土したもので，深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。文様は，垂下する沈線による磨消縄文であり，縄文帯と無文帯が交互に施されている。縄文原体は単節縄文RLで，縦位回転である。本土器は，全体に磨滅しているが，外面の底部近くと内面の片側は特に著しい。内面は縦ナデにより丁寧に調整されている。胎土には，石英，長石粒や砂粒などを多く含み，やや粗雑である。焼成は良好で，色調は褐色，黄褐色を呈している。底径は6.3cmで，現存高は24.8cmである。

本跡から出土した土器のほとんどが，加曽利EⅢ式期のものである。ピット1から出土した土器片はいずれも縄文だけの胴部片で，時期決定遺物とはなり得ないが，炉内から出土した土器片および覆土から出土した土器片から判断すれば，本跡の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。

**第24号住居跡**（第453図）

本跡は，遺跡の東部E3$f_0$区を中心に確認されたもので，第18号住居跡の南側10mに位置している。第21・23号住居跡，第354・356・357号土壙・第3号溝と重複している。新旧関係は，第21・23号住居跡及び第354・356・357号土壙とでは不明であるが，第3号溝とでは土層から本跡が古いと考えられる。

平面形は，長径5.5m(推定)・短径4.7m(推定)の楕円形状と思われる。長径方向は，N—28°—Wを指していると考えられる。壁は北側だけ残っていて軟らかく，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，13～17cmである。床面はよく踏み固められていて硬い。ピットは径36～44cm・深さ23～26cmのものが3か所検出されている。3か所とも位置・形状から主柱穴と考えられる。炉

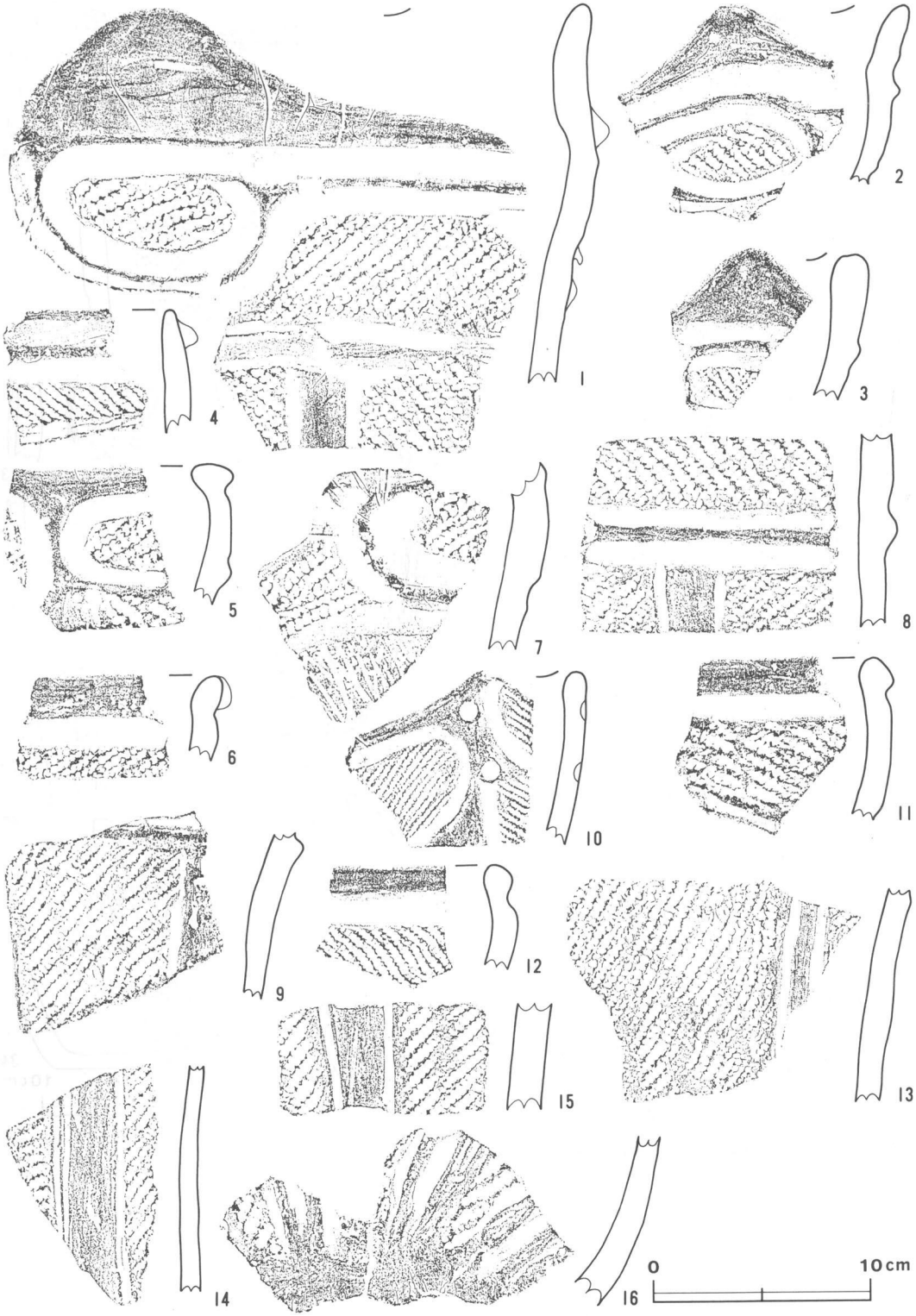
は，検出されていない。

覆土は５層からなり，第23号住居跡と同じく，主に暗褐色土・褐色土が自然堆積している。

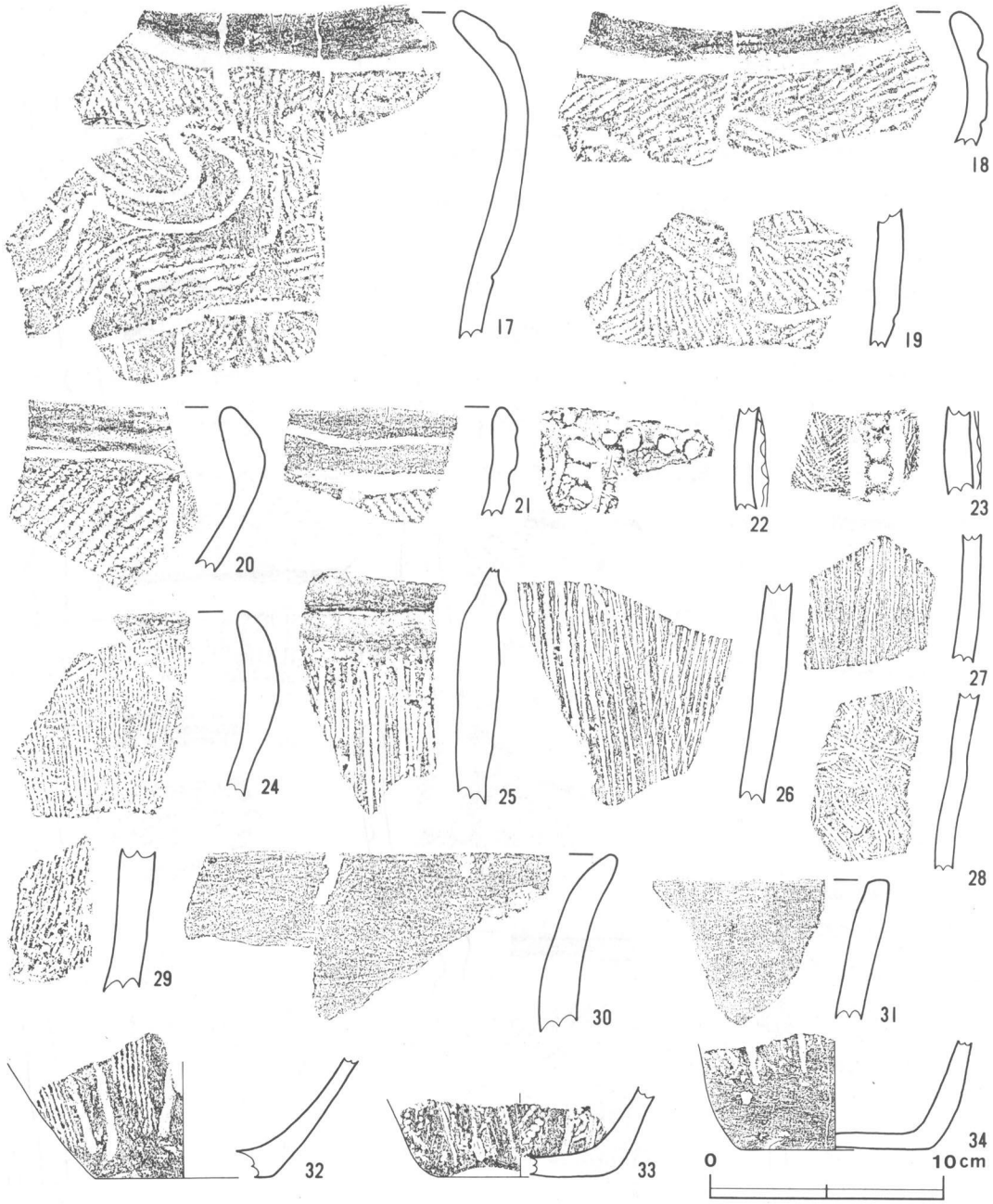
遺物は，縄文土器片が覆土から222点出土している。

**第24号住居跡出土土器**（第461～462図１～34）

１は，大形の深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての大破片である。山形の突起を有し，口縁部文様帯を隆線で楕円形に区画し，胴部には直線的磨消帯が垂下している。口縁部の区画内および胴部の区画間には単節縄文ＬＲが横位，縦位回転で施文されている。２～５は，口縁部文様帯を隆線で楕円形に区画するもので，区画内に縄文を充塡している。２・３は，山形の突起を有している。４・５は，平縁で５の胴部には磨消帯がみられる。６は，口縁直下に１条の太い凹線を巡らし，以下に縄文を施している。７は，口辺部片で，口縁部文様帯は太い隆線で渦巻状に区画され，区画内に縄文を充塡している。胴部には粗い沈線文が付されている。８も，口辺部片で，口縁部文様帯の下端を隆線を巡らして区画し，以下に直線的磨消帯が施されている。９は，口辺部下端から胴部にかけての破片で，口辺部下端を隆線で区画し，胴部に磨消帯が垂下している。10は，波状を呈する口縁部片で，沈線で楕円区画文を描き，区画内に縄文が施されている。区画間に円形刺突文が２個１対でアクセント的に付されている。11・12は，６と同様に口縁直下に１条の凹線を巡らし，以下に縄文が施されている。11の縄文地文上には沈線文が加えられている。13～15は，直線的磨消帯を有する胴部片である。13の磨消帯は幅が狭い。14は薄手で，15は厚手である。16は，本跡の覆土と第21号住居跡の確認面から出土した破片各１点が接合した底部近くの破片で，幅の狭い直線的磨消帯と縄文帯が交互に施文されている。17～19は，同一個体であるが接合はできなかった。内湾する口縁部片で，口縁部無文帯を１条の太い沈線で区切り，縄文地文上に曲線的モチーフを沈線で描き，内部を磨り消している。17からみれば，胴部のくびれ部に１条の沈線を巡らして胴上半部と下半部を区画し，下半部には縦位の区画文が施されたものと思われるが欠損している。口縁部近くの外面には炭化物の付着が認められる。全体に磨滅していて施文は不明瞭となっている。20は，口縁部無文帯が内湾し，以下に逆Ｕ字状の区画を施し，内部に縄文を充塡している。21は，口縁部無文帯に１条の沈線を施し，胴部には沈線区画内に縄文が充塡されている。22は，縄文地文上に押圧を加えた隆線が垂下し，上端で直交する隆線上には円形刺突文が付されている胴部片である。23も，胴部片で，細い綾杉状を呈する条線文上に押圧が加えられた隆線が垂下している。24・26～29は，条線文が付されている。24は，縦位の条線文が口縁直下から施された口縁部片である。26～29は胴部片で，26・29は縦位に施文されている。29は，条線文が24と類似しており，あるいは同一個体かと思われる。26は，粗い条線文が縦位に付されている。27は，鋭いヘラ状工具による沈線に類似している。28は，曲線的に施文されてい




第461図　第24号住居跡出土遺物拓影図(1)




**第462図　第24号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)**

る。25は，7と同一個体と思われ，横位の凹線下に縦位の粗い沈線文が施されている。30・31は，外反する無文の口縁部片で，共に内外面とも横ナデにより調整されている。

32は，本跡の中央部のやや西側の覆土から立位で出土したもので，深鉢形土器の底部片である。外面には直線的な幅の狭い磨消帯を有し，区画間には縦位の条線文が施文されている。底面の近くは横ナデが施され，底面は剝離している。内面はナデにより調整されている。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は内外面とも褐色を呈している。推定底径は7.7cmで，現存高は5.0cmである。

33は，本跡の中央部のやや東側から逆位で出土した深鉢形土器の底部片で，底面の近くまで磨消懸垂文が施され，区画間には粗く縄文が施されている。全体に整形が粗雑である。胎土には石英粒，砂粒を多量に含みやや粗雑である。焼成は良好で，色調は外面は褐色，内面は褐色および黒褐色を呈している。推定底径は8.4cmで，現存高は3.4cmである。

34は，本跡の中央部の覆土から出土した深鉢形土器の底部片で，外面には磨消懸垂文の末端が観察される。底部の直上および底面は丁寧なナデが加えられている。底面の中央部はやや凹んでいる。胎土には砂粒を含むが緻密で，焼成は良好である。色調は外面が赤褐色，内面が黄褐色を呈している。推定底径は8.3cmで，現存高は4.6cmである。

本跡から出土した土器片は，そのほとんどが加曽利E III式期のものである。いずれも覆土からの出土であるが，これをもって時期判定をすれば，本跡は加曽利E III式期のものと思われる。

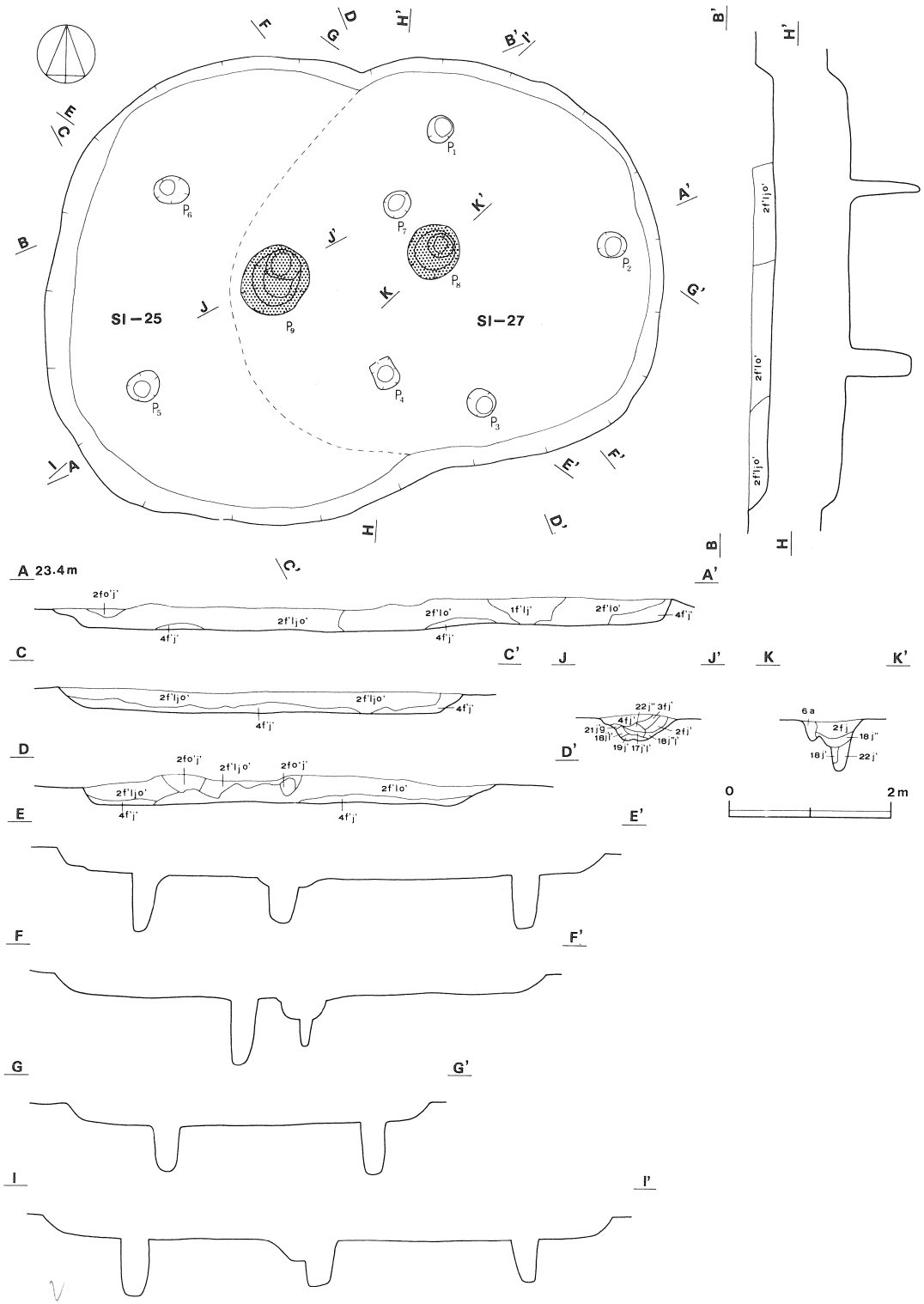
**第25号住居跡**（第463図）

本跡は，遺跡の東部E4$e_3$区を中心に確認されたもので，第18号住居跡の南側6mに位置している。東側で第27号住居跡と重複している。新旧関係は，土層から本跡が古いと考えられる。

平面形は，径5.9m（推定）の円形状と思われる。壁は硬く締まっており，床面から外傾して立ち上がっているが，西側と南側は傾斜がやや緩やかである。また，重複のため東側の壁は欠損している。壁高は，20～26cmである。床面はハードロームで全体的にみて平坦であるが，壁際から中央にかけては4～8cm低く傾斜している。また，東側は重複のため一段低くなっている。ピットは5か所（$P_4$～$P_8$）検出され，規模は径30～44cm・深さ56～87cmである。$P_4$～$P_7$は深さが一定しており，炉を囲んで対角線上に配列されていることから主柱穴と考えられる。第27号住居跡の炉内にもピット（$P_8$）が検出されている。$P_8$は，第27号住居跡の炉の構築で上部が少しけずられている。本跡の炉は中央に検出され，径100cm・深さ25cmの地床炉である。第27号住居跡のピットによって部分的に壊されている。炉床はよく焼け，焼土量も多いため長期間の使用がうかがえる。

覆土は5層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。5層ともよく締まっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から中量出土している。




第463図　第25・27号住居跡実測図

**第25号住居跡出土土器**（第464～465図１～33）

１は，本跡の東側の覆土下位から出土した破片数点が接合したもので，４単位の緩い山形の波頂部を有する深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての大破片である。口縁部には沈線による楕円区画文が施され，波頂部下には円形の区画文が付されている。胴部には直線的磨消帯が垂下している。口縁部の区画内および胴部の区画間に単節縄文ＬＲが縦位回転で施文されているが，縄文の節が細かいので，あるいは多条の縄文であるかもしれない。胎土には石英粒や砂粒を含み，焼成は良好である。色調は内外面とも褐色を呈している。推定口径は16.1cmで，現存高は20.6cmである。

２は，本跡の中央部の覆土からまとまって出土した破片の一部が接合したもので，波状縁を呈する厚手の深鉢形土器の口辺部片である。口縁部文様帯は隆線とこれに沿う沈線により幅の狭い楕円区画文と渦巻文が施されている。頸部は無文帯となり，上端に１条，下端に２条の太い沈線が巡っている。胴部は沈線により曲線的モチーフが描かれているが，以下を欠損している。口縁部および胴部の区画間には粗い単節縄文ＲＬが充塡されている。内外面とも剝落が激しいが，ともに横ナデにより整形されている。胎土にはやや大粒の小石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は外面が赤褐色，内面が黒褐色を呈している。推定最大胴径は約41.3cmで，現存高は16.6cmである。

３は，口縁部文様帯が隆線で区画され，区画内に縄文が施されている。４は，沈線で口縁部文様帯が区画され，内部に縄文が充塡されている。５は，沈線による楕円区画文が描かれている口縁部片で，区画内に縄文が施されている。６は，第24号住居跡の10および第409号土壙の５と同一個体である。波状口縁を呈しており，楕円区画間に円形刺突文を２個１対で施している。７～９は，直線的磨消帯を有する胴部片である。７は胴上半部片で，磨消帯の幅が狭く，８は胴下半部片である。９も胴下半部片であるが，磨消帯の幅が広い。10は，極薄手で，小形土器の口縁部片と思われ，口縁部に沈線を巡らしている。11～17は，隆線による曲線的モチーフが器面全体に展開され，区画間には縄文が充塡されている。11は，胴下半部だけが残存している大形の破片である。12の内面は剝落している。13･17の隆線は，断面三角形を呈してやや高く，14～16の隆線は，低平である。18は，波状を呈する口縁部片で，口縁直下に１条の凹線を施し，以下に逆Ｕ字状の磨消帯を加えている。器面全体が磨滅していて文様が不明瞭である。内面に若干炭化物が付着している。19は，強くくびれる胴部片で，沈線によるＵ字状，逆Ｕ字状の区画が施され，内部を縄文で塡（う）めている。20・21は，同一個体であるが接合はしなかった。細い沈線による曲線的磨消帯を有する胴部片で，破片の下端部はいずれも輪積み部で剝離している。22は，口縁部無文帯を１条の微隆線により区画し，以下に縄文を施している。23は，口縁直下に１条の浅い凹線を巡らし，以下に縄文を施しているが，内外面とも剝落が著しい。24・25は，全面に縄文だけが施文さ

**第464図　第25号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)**

**第465図　第25号住居跡出土遺物拓影図(2)**

れている口縁部片である。24は，内湾し，無節縄文が付されている。26・27は，縦位の条線文が施されており，26は口縁部片，27は胴部片である。27の内面は剝落している。28は，直線的磨消帯を有する胴部片で，区画外に縄文と条線文が併用されている。29は，縄文だけの胴部片で，条が横走するように施文されている。30は，強く外反する幅の広い無文帯をもち，下端には1条の沈線が巡っている。31・32は無文の口縁部片である。33は，後記する本跡と第27号住居跡が重複する部分の確認面から出土した47～49と同一個体である。

本跡から出土した土器片のうち，3・7・12・24・25・28～30の8点は，確認面からの出土で

あり，その他は覆土からの出土である。

本跡から出土した土器の多くは加曽利ＥⅢ式期のものであり，本跡の時期は，これらの土器から判断すれば加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

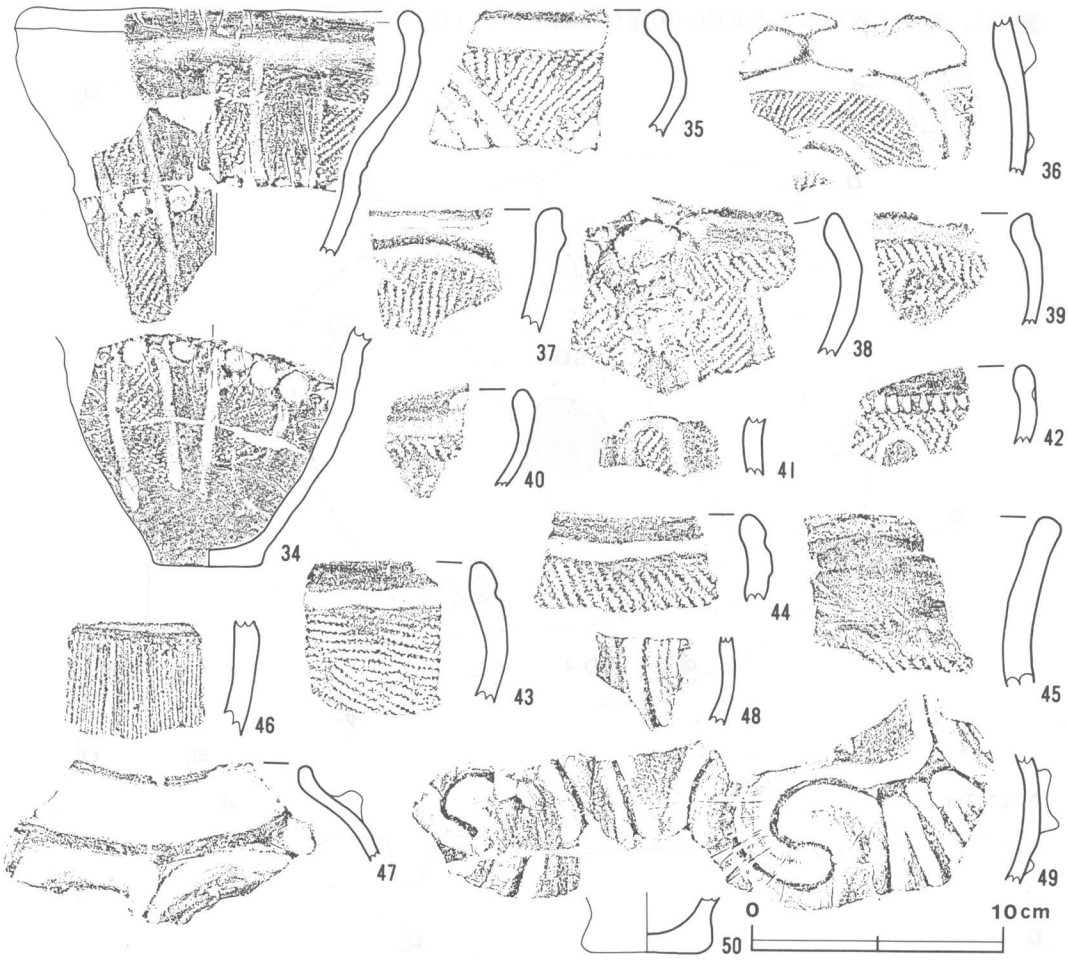
**第25・27号住居跡確認面出土土器**（第466図34～49）

本項で解説するものは，第25号住居跡と第27号住居跡を確認する前に，上面から出土した土器片で，いずれの住居跡に伴うか判明しなかったので，ここに記載した。

34は，第27号住居跡の中央部やや北側，北東側の覆土から出土した破片を中心に南西側の覆土から出土の破片など16点と，第25•27号住居跡確認面出土の破片２点の計18点が接合したもので，小形の深鉢形土器である。本来は，第27号住居跡出土土器の項で解説すべきものであるが，図版作成の都合上ここに入れた。口縁部から胴部にかけての破片と胴部から底部にかけての破片があり，両者は接合できないが，同一個体である。口縁直下に１条の凹線を施して，以下に縦位の磨消帯と縄文帯を交互に垂下させ，胴部のくびれ部に円形の刺突文を巡らしている。底面の近くは横ナデで調整され，無文となっている。縄文は単節ＲＬで縦位回転で施文されている。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデを施している。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は上半部が内外面とも暗褐色を呈し，下半部は内外面とも褐色を呈している。推定口径は15.0cm，推定底径は4.3cmで，器高は推定で15.2cmと思われる。

35は，薄手の口縁部片で，口縁直下に１条の沈線を施し，胴部には２本組の隆線により文様を構成している。36は，第27号住居跡の15・28・29・36・39・40と同一個体であるが，接合はできなかった。内湾する口辺部片で，高めの隆線で曲線的モチーフが描かれている。37は，隆線で区画を施している口縁部片である。38は，口縁部に無文帯を残し，胴部に逆Ｕ字状の磨消帯を付している。波状縁の頂部には把手が欠落した痕跡がみられる。39・40は，第25号住居跡の18と同一個体で，逆Ｕ字状の磨消帯がみられる。41は，第25号住居跡の19と同一個体の胴部片で，逆Ｕ字状の区画内に縄文を施している。42は，口縁直下に刺突文列を巡らし，胴部に逆Ｕ字状の磨消帯を施している。43・44は，口縁直下に１条の沈線を施し，以下に縄文を付している。45は，やや外反する幅の広い無文帯を有し，以下に縄文が施されている。46は，口辺部片で，上端に１条の沈線を施し，以下に縦位の条線文を付している。47～49は，第25号住居跡の33と同一個体である。49は，第25号住居跡の覆土から出土した破片と第25・27号住居跡の確認面から出土した破片が接合している。薄手で壺形を呈するものと思われる。47が口縁部で，比較的高く太めの隆線で区画を描き，以下やや細めの隆線で曲線的モチーフを器面に構成している。内面は横ナデが施されている。

50は，小形深鉢形土器の底部片と思われる。胎土には微砂を含み，緻密である。焼成は良好で，色調は褐色を呈している。底径は5.2cmで，現存高は2.2cmである。




**第466図　第25・27号住居跡出土遺物実測図・拓影図**

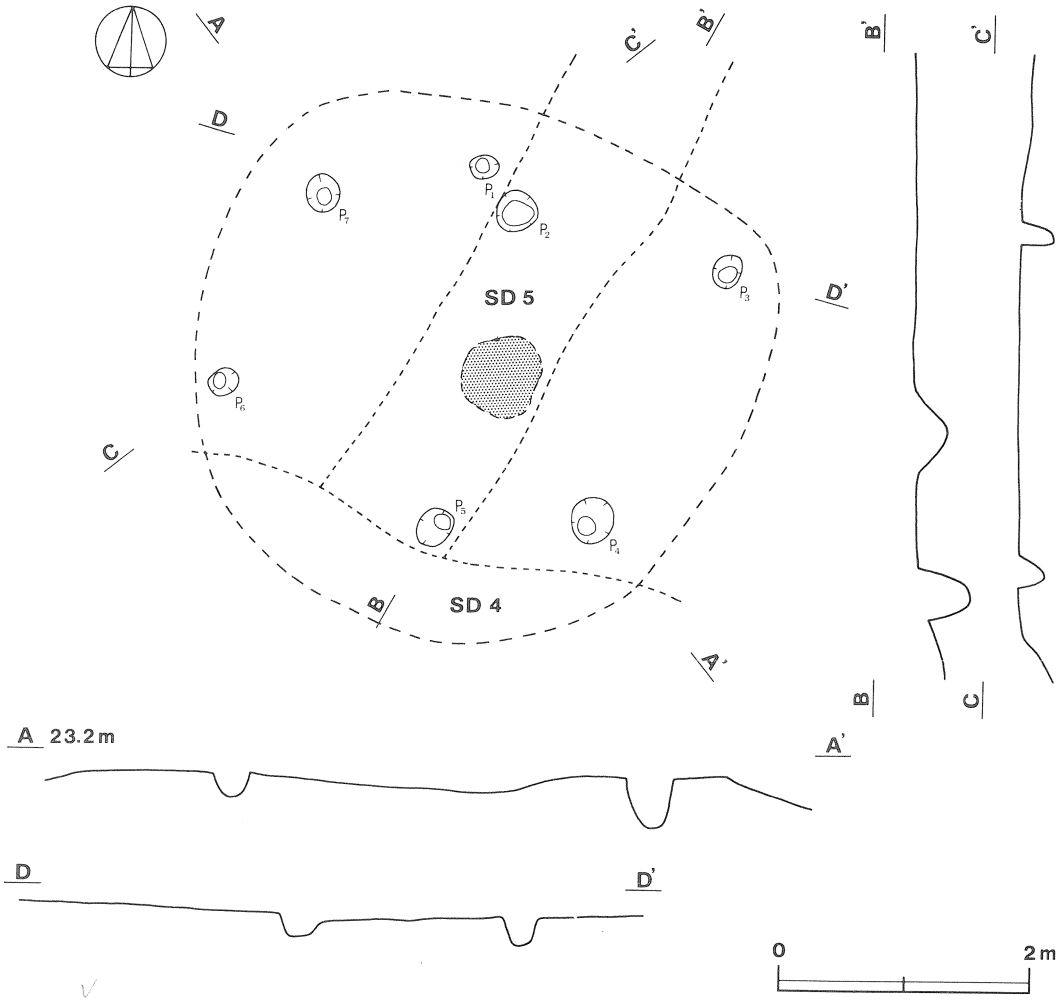
**第26号住居跡**（第467図）

本跡は，遺跡の西南部 F3a$_1$区を中心に確認されたもので，第21号住居跡の南西側35.5mに位置している。北側から南側にかけて第５号溝が走り，南側を第４号溝によって切られている。第４・５号溝との新旧関係は，土層から考えていずれの溝よりも本跡が古いと考えられる。

平面形は，検出された柱穴や炉の位置から，径4.6m前後の円形と推定される。壁は非常に浅かったため，確認時に削られ，欠損していて残っていない。床面はハードロームで踏み固められている。ピットは７か所検出され，規模は径22～38cm・深さ16～42cmで，炉を中心に円形状に配列されているため，７か所とも主柱穴と思われる。炉は本跡の中央に検出され，径70cmの円形で，10cmほど皿状に床面を掘り凹めた地床炉である。炉床と炉壁はよく焼けて赤化しているが，炉の覆土中には焼土の量が少ない。

覆土は上記のような理由でなかった。

遺物は，縄文土器片が3点北側の床面から出土している。




**第467図　第26号住居跡実測図**

**第27号住居跡**（第463図）

本跡は，遺跡の東部E4c$_3$区を中心に確認されたもので，第22号住居跡の南西側13mに位置している。西側で第25号住居跡と重複している。

平面形は，径5.4mの円形である。壁は全体として，硬くしっかりしており，床面から外傾して立ち上がっているが，西側は重複のため不明確である。壁高は，19～26cmである。床面はハードロームで炉の付近が5cm低くなっているほかは平坦であり，よく踏み固められている。ピットは4か所($P_1$～$P_3$・$P_9$)検出され，規模は径34～40cm・深さ56～67cmで，比較的深いピットである。$P_9$は，第25号住居跡の炉の一部を切って掘られている。4か所は深さがほぼ一定しており，炉を囲んで対角線上に配列されており，しかも，それぞれのピット間が等間隔なので主柱穴と考えら

れる。炉は本跡の中央に検出され，径72cm・深さ23cmの地床炉で，第25号住居跡の $P_8$ を埋めて築かれている。焼土の堆積の量が多い炉である。

覆土は5層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。5層ともよく締まっている。

遺物は，縄文土器片が796点と大量に覆土から出土している。

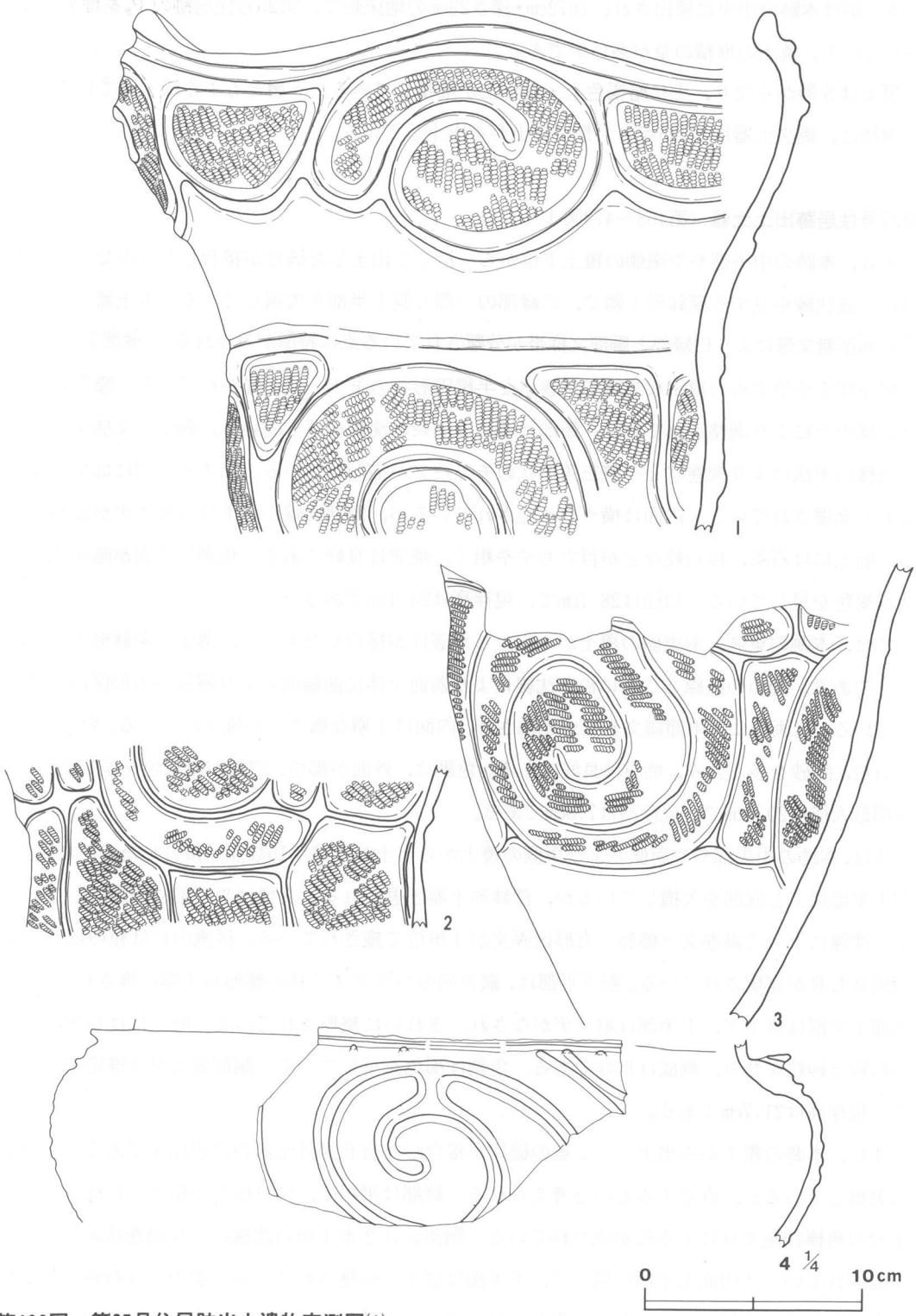
**第27号住居跡出土土器**（第468～473図1～121）

1は，本跡の中央部やや南側の覆土下位から一括して出土した破片が接合したもので，緩い4単位の波状縁を呈する深鉢形土器で，口縁部の一部と胴下半部を欠損している。本土器は，幅の広い頸部無文帯により口縁部と胴部文様帯が分離されている点に特徴がみられる。口縁部文様帯は，沈線を伴うやや太めの扁平な隆線で渦巻状と半楕円形状のモチーフが描かれている。頸部無文帯は，横ナデにより調整されており，頸部下端には1条の沈線が巡っている。胴部の文様も口縁部と同様の手法により渦巻状と不整三角形状のモチーフが描かれている。モチーフ間には単節縄文ＲＬが充塡されている。内面は横ナデが施されているが，頸部沈線から下位は縦ナデが認められる。胎土には石英，長石粒などが目立ちやや粗く，焼成は良好である。色調は外面が暗褐色，内面が褐色を呈している。口径は28.7cmで，現存高は24.1cmである。

2は，本跡の東側，南東側の覆土から出土した破片が接合したもので，薄手の深鉢形土器の胴部片である。細めの隆線とこれに沿う沈線により器面全体に曲線的および縦長の方形区画が描かれている。区画内には単節縄文ＬＲが充塡され，内面は丁寧な横ナデが施されている。胎土には，小石粒，微砂を多く含み，焼成は良好である。色調は，外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。胴部最大径は20.0cmで，現存高は7.5cmである。

3は，本跡の中央部やや南側および東側の覆土から出土した破片10数点が接合したものである。胴上半部以上と底部を欠損しているが，深鉢形土器と思われる。文様はやや細めの隆線とこれに沿う沈線によって渦巻文と縦長の方形区画文が4単位で施されている。区画内には粒の細かい単節縄文ＬＲが充塡されている。胴下半部は，縦方向のヘラケズリ状の整形が丁寧に施されている。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデがなされ，きれいに整形されている。胎土には石英などの小石粒と砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。胴部最大径は推定で22.4cmで，現存高は21.7cmである。

4は，本跡の覆土から出土した5点の破片が接合した有孔鍔付土器の口辺部片である。口唇部は欠損しているが，直立するものと考えられる。鍔部は平坦で，付け根から斜下方に向って2孔1対の角棒状施文具による孔が穿たれている。胴部には2本1組の沈線により渦巻状のモチーフが描かれている。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが施されている。胎土には石英，長石粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。破片から口径を推定すると約40cm前後で

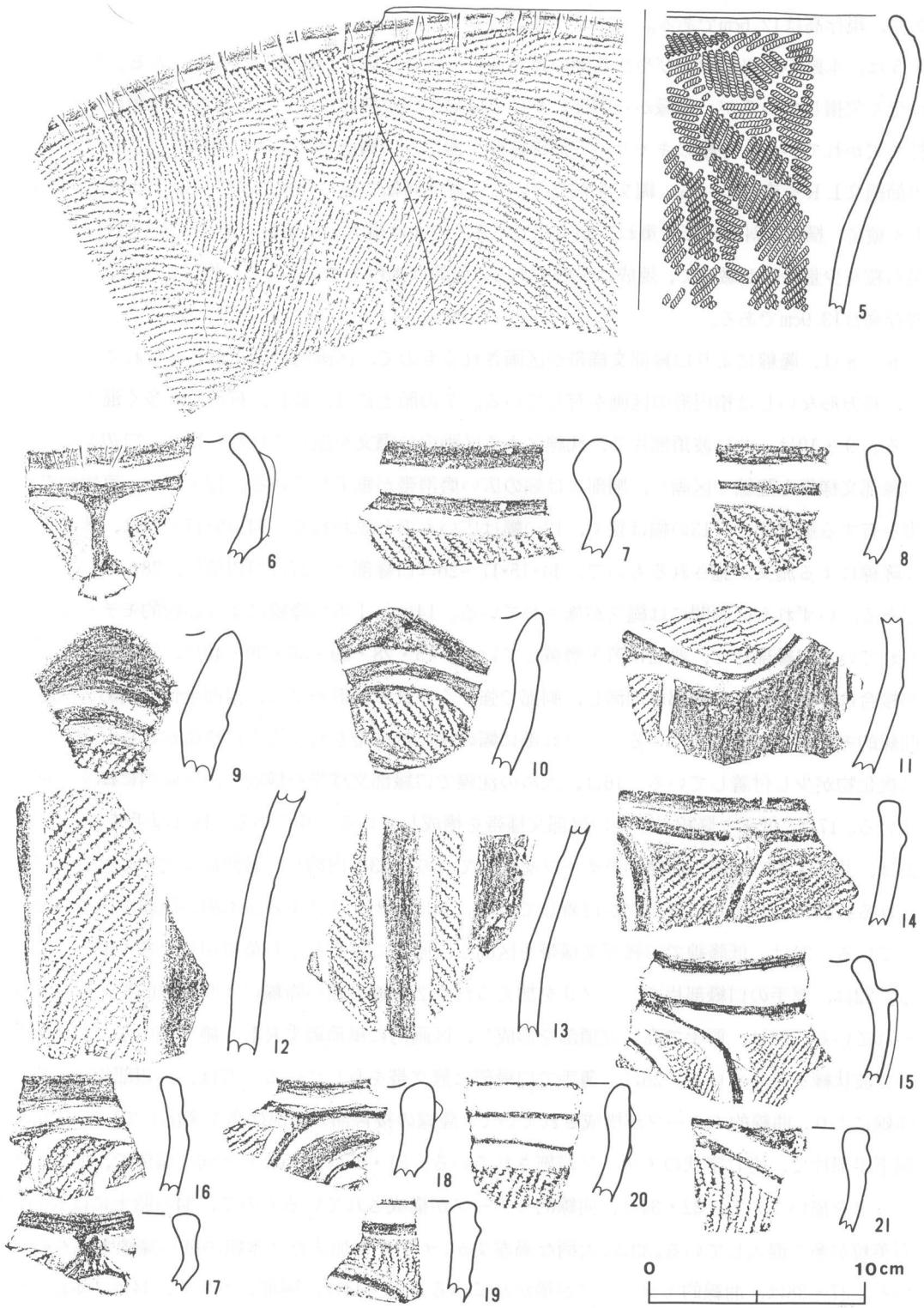



**第468図　第27号住居跡出土遺物実測図(1)**

あり，現存高は12.6cmである。

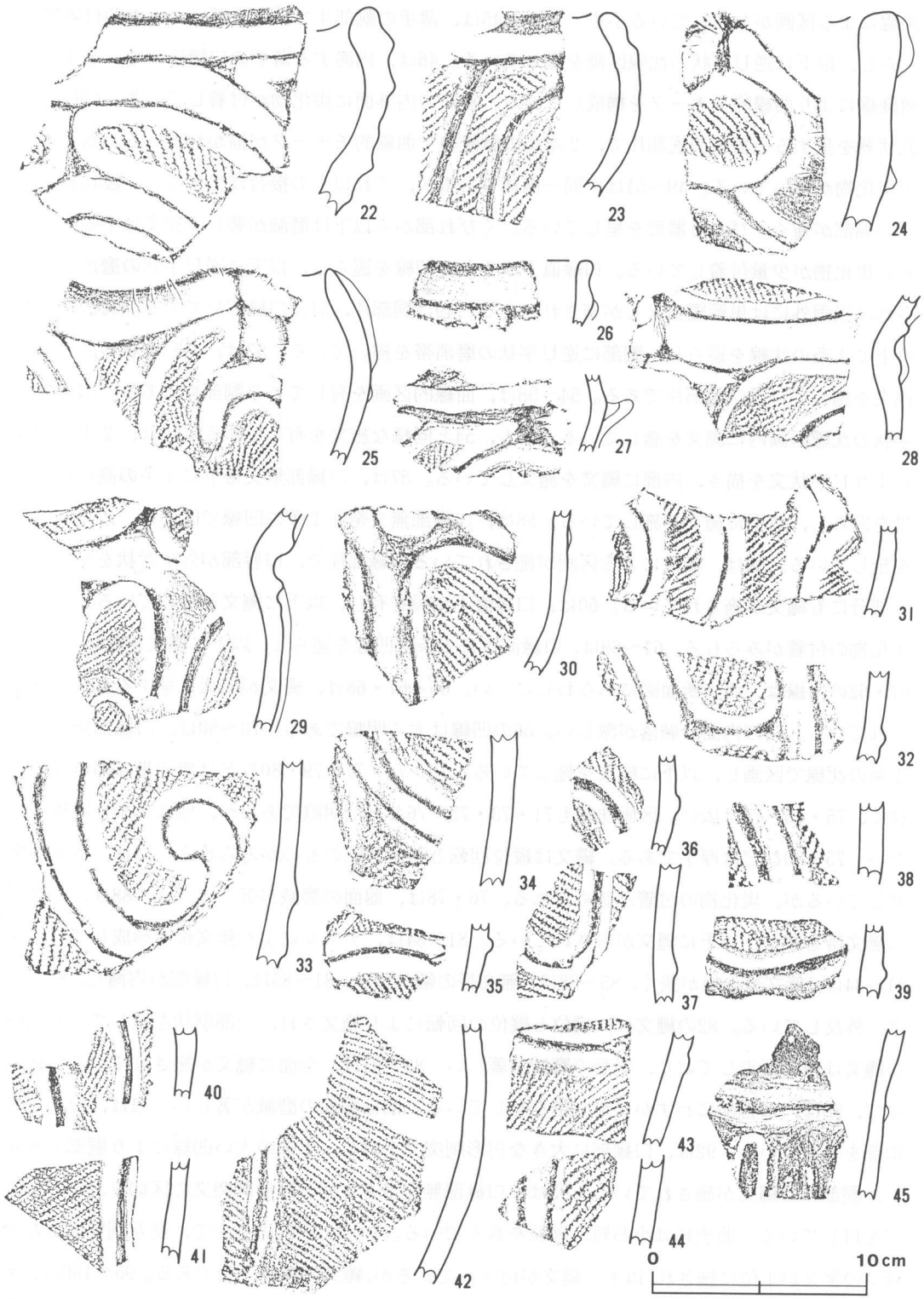
5は，本跡の中央部およびやや北側の覆土から出土した破片が接合したものである。胴下半部は全く欠損しているが，口縁から胴部にかけては約半周が残存している。下端の断面はきれいに打ち欠かれている。平縁のキャリパー形深鉢形土器で，口縁直下に1条の凹線を巡らし，以下に単節縄文ＬＲを施している。縄文を斜位ないしは縦位回転で施した後に，中央部では単節縄文ＲＬを縦位，横位，斜位回転で重ねて施文している。内面は横ナデが顕著である。胎土には，石英，長石粒を少量含むが緻密で，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は23.0cmで，現存高は13.9cmである。

6～8は，隆線により口縁部文様帯が区画されるもので，区画内に縄文が充塡されている。6は，長方形ないしは楕円形の区画を有している。7の胎土には，長石，石英粒が多く混入されている。9・10は，共に波頂部片で，沈線による区画内に縄文を施している。11は，口辺部片で，口縁部文様帯を隆線で区画し，胴部には幅の広い磨消帯が垂下している。12・13は，直線的磨消帯を有する胴部片で，13の幅は狭く，12の幅は広いものと思われる。14・15・17～44は，器面全体に隆線による施文が施されるもので，14・15・17～26は口縁部片，27は口辺部片，28～44は胴部片である。いずれも区画間には縄文が施されている。14は，1本の隆線により曲線的モチーフが描かれている口縁部片で，器面は若干磨滅している。15・28・29・36・39・40は，同一個体であるが接合はできない。口縁部が内湾し，胴部で強くくびれる器形を呈し，器面全体に高めの隆線で曲線的モチーフを構成している。くびれ部に幅の狭い無文帯を有する点に特徴がみられる。29には炭化物が少し付着している。16は，太めの沈線で口縁部文様帯を構成し，区画内に縄文を施している。17は，低平な隆線により口縁部文様帯を構成している小片である。18は厚手である。19・23は，共に1本の隆線で曲線的モチーフを描いており，23は内湾し，器面に炭化物の付着が認められる。19にもわずかに炭化物が付着している。20は，ナゾリによる2本組の隆線で区画がなされている。21は，低隆線で口縁部文様帯を区画し，胎土には長石，石英粒がやや多く混入している。22は，厚手の口縁部片で，ナゾリを加えられた2本組の細い隆線により曲線的モチーフが描かれている。24は，厚手で高い波頂部を形成し，区画内に単節縄文ＲＬを施している。25は，薄手で波状縁を呈している。26は，薄手で口縁部に無文帯を有している。27は，口辺部片で，高い隆線により，曲線的モチーフが構成されていて，隆線の接合部の一部は高く突出している。30は，胴下半部片で，逆Ｕ字状のモチーフが施されている。31・35は，15などと同一個体で，曲線的モチーフを描いている。32・34は，曲線的モチーフが構成されているもので，34の胎土には長石，石英粒が多く混入している。33は，大柄な渦巻文が，ナゾリを加えた2本組の細い隆線で描かれている。37・38は，曲線的モチーフフが描かれている。41・44は，胴部の小片で，44は2本組の隆線により施文されている。42は，低隆線による区画が垂下している胴下半部片である。43は，低




第469図　第27号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)

隆線による区画がなされている小片である。45は，薄手の胴部片で，中央部に１条の貼付隆線を巡らし，以下に逆Ｕ字状の沈線区画を施している。46は，内湾する薄手の口縁部片で，２本組の微隆線により曲線的モチーフを構成している。器面の内外面に炭化物が付着している。47･48は，波状縁を呈する土器の波底部片で，２本組の微隆線で曲線的モチーフが描かれている。器面に若干炭化物が付いている。49～51は，同一個体であるが，これ以上の接合はできない。波状縁を呈し，胴部が強くくびれる器形を呈している。くびれ部から以下は磨滅が著しく施文は不明瞭である。炭化物が少量付着している。口縁直下に１条の凹線を巡らし，以下に逆Ｕ字状の磨消帯が施され，区画外には単節縄文ＲＬが施されている。49は胴部片，51は口縁部片である。52は，口縁直下に１条の沈線を巡らし，胴部に逆Ｕ字状の磨消帯を描いている。53は，逆Ｕ字状の区画内に縄文を施している口縁部片である。54～56は，曲線的区画を有している胴部片である。54は，Ｕ字状の沈線区画内に縄文を施している。55も，54と同様な施文を有している。56は，２重の沈線によりＵ字状文を描き，内部に縄文を施文している。57は，口縁部無文帯下に１条の高い貼付突帯を巡らし，以下に縄文を施している。58は，口縁部無文帯を１条の凹線で区切り，以下に縄文を施している。59は，隆線による区画が施されている口縁部片で，口唇部が外削ぎ状を呈し，この部分にも縄文が施されている。60は，口縁直下に段を有し，以下に縄文を付している。器面に炭化物の付着がみられる。61～69は，口縁直下に１条の凹線を巡らし，以下に縄文を施している。61・62の凹線は，浅く断面図にあらわしにくい。65・67・68は，縄文が羽状を呈するように施文されている。62の内面は剝落が激しい。66の凹線は太く明瞭である。70～80は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に縄文を施している。70～74・77・79・80などは無文帯の幅が比較的狭く，75・76・78は広い。区画沈線も71・73・75・76などは明瞭であるが，他はあまり明瞭ではない。75・80などは厚手である。縄文は縦位回転と斜位回転のものがみられる。71は，器面が磨滅しているが，炭化物の付着が認められる。76・78は，器面の磨滅が著しい。81～88は，口縁部に無文帯を残し，以下に縄文が付されている。81・84は，ナゾリにより無文帯を形成している。81～84は，無文帯の幅が狭く，85～88は，無文帯の幅が広い。81～85は，口縁部が内湾し，86～88は，外反している。82の縄文は，横位と縦位の回転により施文され，一部羽状を呈している。86の縄文は条が縦走しており，器面の磨滅が著しい。89～91は，全面に縄文が施されている口縁部片で，89は，口唇部にわずかに無文帯を有している。90は器面の磨滅が著しい。91は，山形の波頂部を有している。92は，口縁部に大きな円形刺突文を付し，１条の太い凹線により胴部と区画し，胴部には縄文が施されている。93は，口縁部無文帯を１列の円形刺突文で区切り，以下に縄文を付している。胎土には小石粒，砂粒を含んでいる。94は，胴部の小片で，交互刺突による連続コの字文が上位に施され，以下に縄文が付されているが，縄文原体は不明である。95～100は，条線文が施されているもので，95は口縁部片で，他は胴部片である。95・97は，乱雑な格子目状に




第470図　第27号住居跡出土遺物拓影図(3)

施されている。97は薄手である。96・98は細い条線文が縦位に付されている。99・100は，曲線的に施されているもので，同一個体かと思われる。101・102は，縄文と縦位の条線文が施文されている胴部片で，101は，器面の磨滅が著しい。103～107は，縄文だけが施されている胴部片である。104・105は，同一個体と思われ，胴部にくびれをもち，胴下半部は丸くふくらんでいる。105の器面には炭化物が付着している。106・107は無節縄文が付されている。108～110は，ナゾリによる細隆線だけで曲線的モチーフが描かれている薄手の胴部片で，壺形を呈するものと思われる。108は，器面が磨滅しているが，赤彩痕が認められる。以上の出土土器片のうち，17・52は確認面から，その他は覆土から出土している。

111は，本跡の中央部やや南側寄りの覆土上位から立位で出土した底部片で，外方への開きがやや大きいが，深鉢形土器と考えられる。内外面および底面とも丁寧なナデが施されている。胎土に微砂を含むが緻密で，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定底径は7.0cmで，現存高は5.4cmである。

112は，本跡の中央部やや北東寄りの覆土から逆位で出土した深鉢形土器の底部片である。外面および底面は丁寧にナデられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が赤褐色，内面が黒褐色を呈している。底径は6.0cmで，現存高は3.1cmである。

113は，本跡のやや西側寄りの覆土上位から正位で出土したやや薄手の底部片で，深鉢形土器と思われる。底面の近くは横ナデが認められる。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色および黒褐色を呈している。 推定底径は6.4cmで，現存高は1.6cmである。

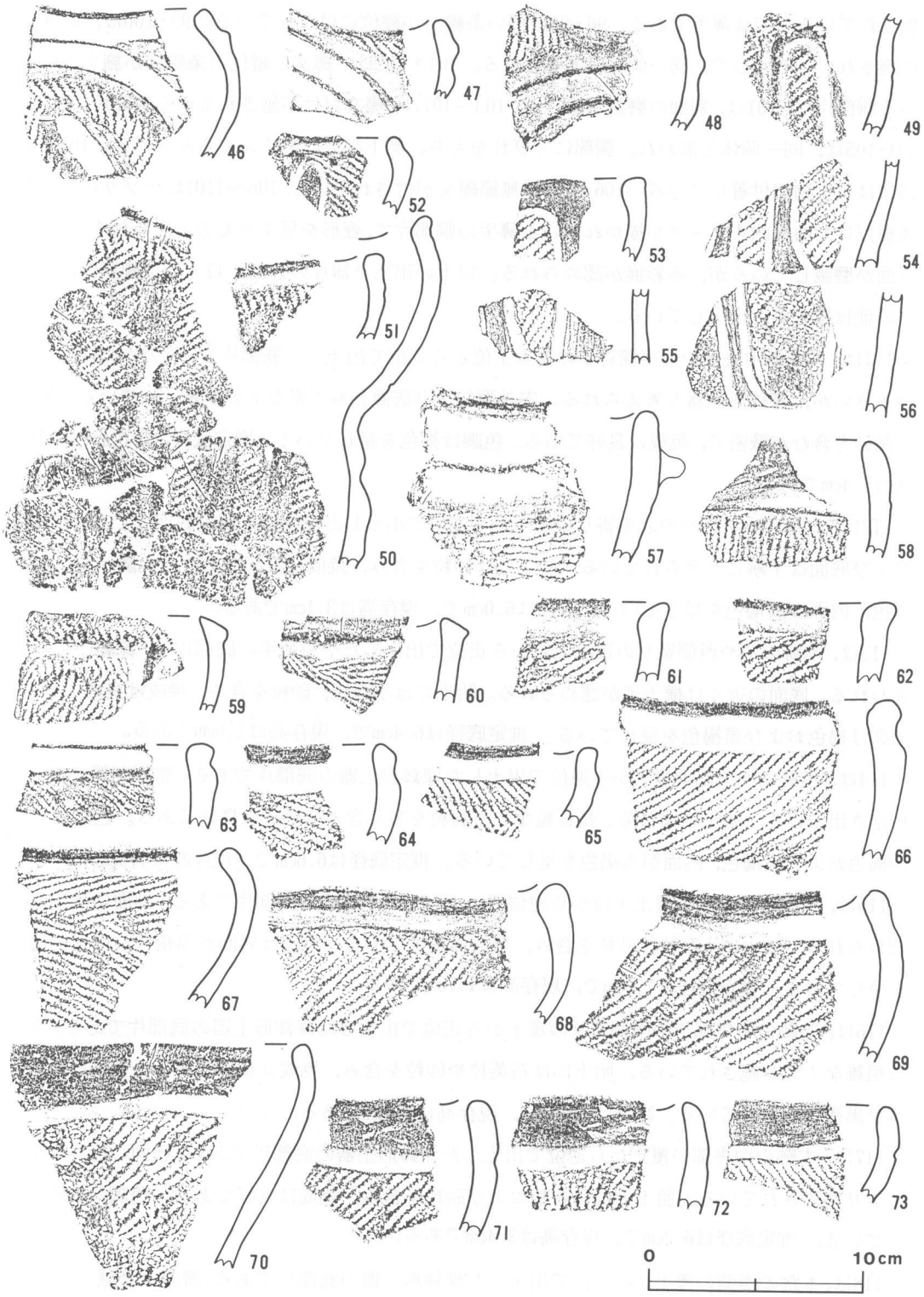
114は，本跡の中央部の覆土から逆位で出土した深鉢形土器の底部片である。整形が雑で，石粒が浮き出ている。胎土には石英，長石粒などの石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色および黒褐色，内面が赤褐色を呈している。推定底径は6.6cmで，現存高は4.8cmである。

115は，本跡の中央部の覆土上位から逆位で出土したやや薄手の底部片である。外面に縦ナデが認められる。胎土に小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が黒褐色，内面が褐色を呈している。推定底径は7.0cmで，現存高は1.7cmである。

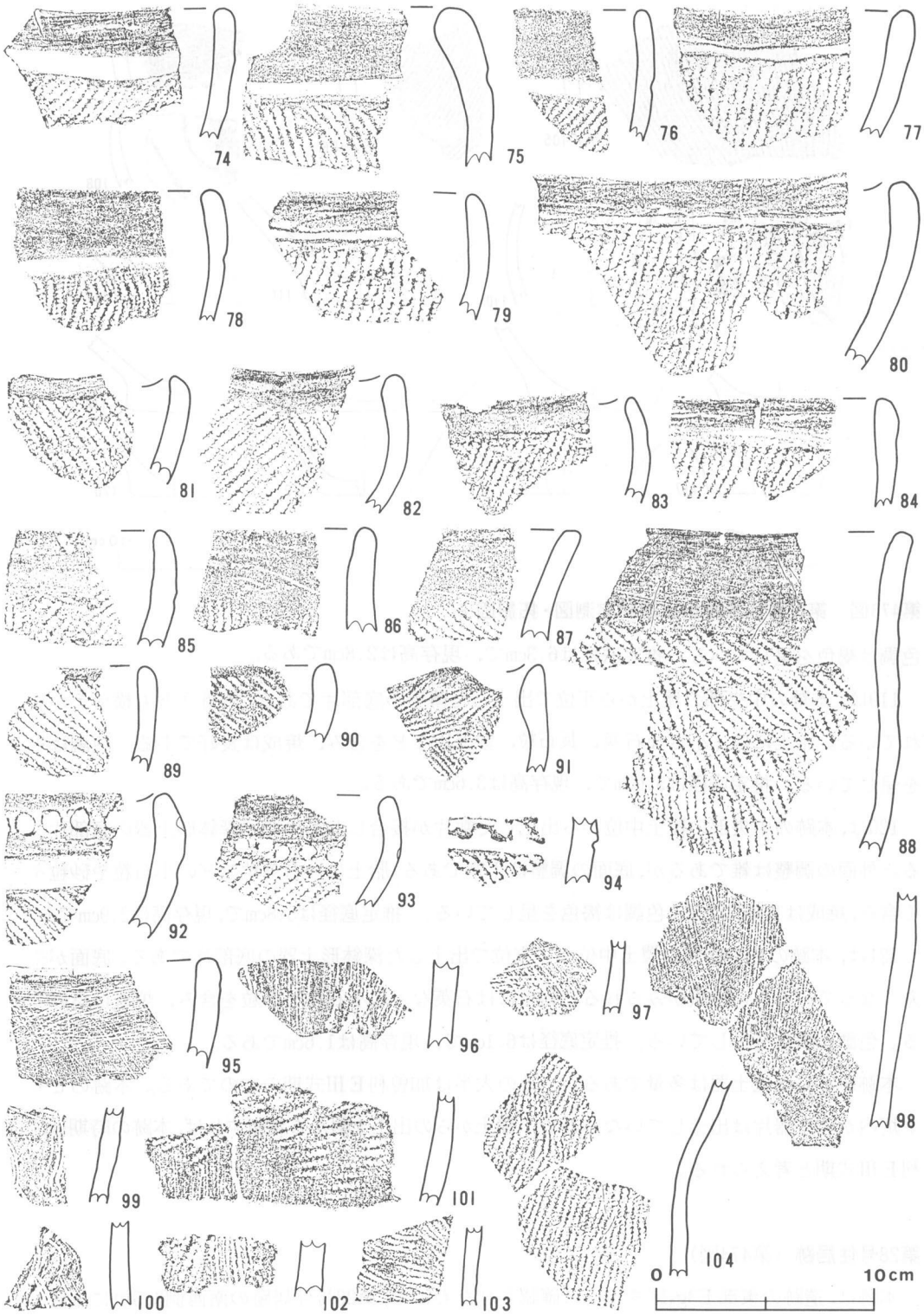
116は，本跡の中央部やや南側寄りの覆土から正位で出土した深鉢形土器の底部片である。外面に粗雑なナデが施されている。胎土には石英粒や砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色および黒褐色を呈している。底径は6.3cmで，現存高は3.8cmである。

117は，本跡の中央部の覆土から逆位で出土した深鉢形土器の底部片である。底面の近くはナデにより整形されている。胎土には長石粒および砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。 推定底径は6.2cmで，現存高は3.4cmである。

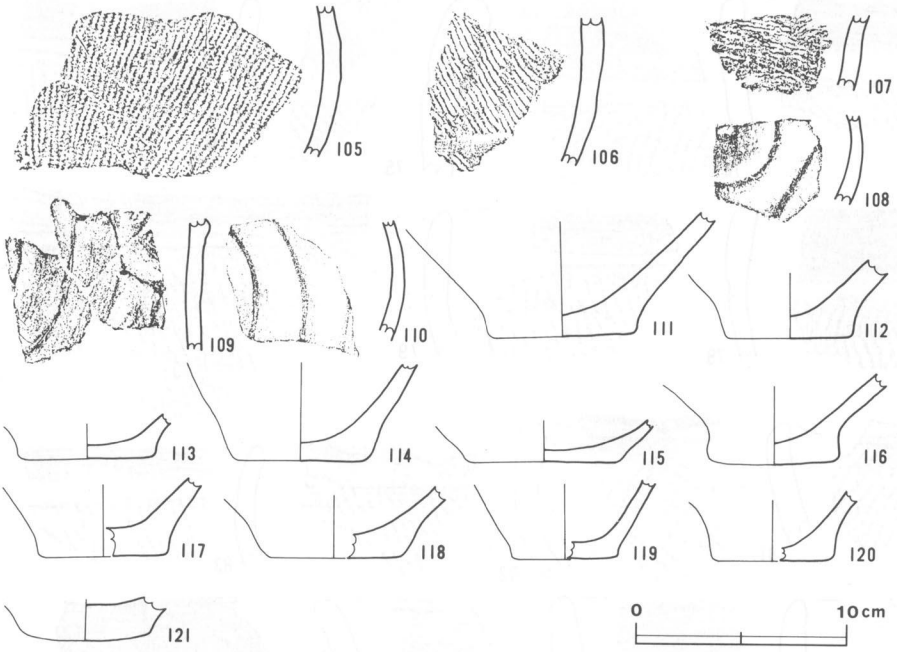
118は，本跡の西側の覆土から正位で出土した深鉢形土器の底部片である。器面は磨滅していて，ナデ整形が観察されるが方向は不明である。胎土には石英粒や砂粒を含み，焼成は良好である。




第471図　第27号住居跡出土遺物拓影図(4)




第472図　第27号住居跡出土遺物拓影図(5)




**第473図　第27号住居跡出土遺物実測図・拓影図(6)**

色調は褐色を呈している。推定底径は6.3cmで，現存高は2.8cmである。

119は，本跡の中央部の覆土から正位で出土した薄手の底部片である。内外面とも横ナデが施されている。胎土には，小さな石英，長石粒，雲母片などを含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定底径は5.0cmで，現存高は3.6cmである。

120は，本跡の中央部の覆土中位から出土した数片が接合したもので，深鉢形土器の底部片である。外面の調整は雑であるが，底面の調整は丁寧である。胎土には石英粒などの小石粒や砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。 推定底径は5.8cmで，現存高は2.9cmである。

121は，本跡のやや西側の覆土中位から立位で出土した深鉢形土器の底部片である。底面がやや丸くなっている点に特徴がみられる。胎土には石英などの小石粒と砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定底径は6.1cmで，現存高は1.6cmである。

本跡からの出土土器は多量であるが，その大半は加曽利ＥⅢ式期のものである。本跡のピットや炉内から土器片は出土していないので，覆土からの出土土器から判断すれば，本跡の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

**第28号住居跡**（第474図）

本跡は，遺跡の東部E3$g_8$区を中心に確認されたもので，第23号住居跡の南西側2.5mに位置している。

平面形は，長径5.8m・短径5.4mの楕円形で，長径方向は，N－39°－Wを指している。壁は床面から外傾して立ち上がっており，硬くしっかりしている。なお，西壁が耕作によって一部撹乱をうけている。壁高は，4～8cmである。床面はハードロームでよく踏み固められ，平坦である。ピットは8か所検出され，規模は径28～46cm・深さ31～44cmである。その中でも$P_1$・$P_4$・$P_6$・$P_8$は深さがほぼ同じで，しかも，炉を囲んで対角線上に位置していることから主柱穴と考えられる。炉は本跡の中央に検出され，径100cm・深さ26cmの大きさの地床炉である。炉壁と炉床はよく焼け，炉の覆土にも焼土が充満していることから長期間使用されたと考えられる。

覆土は3層で，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。3層とも締まっている。

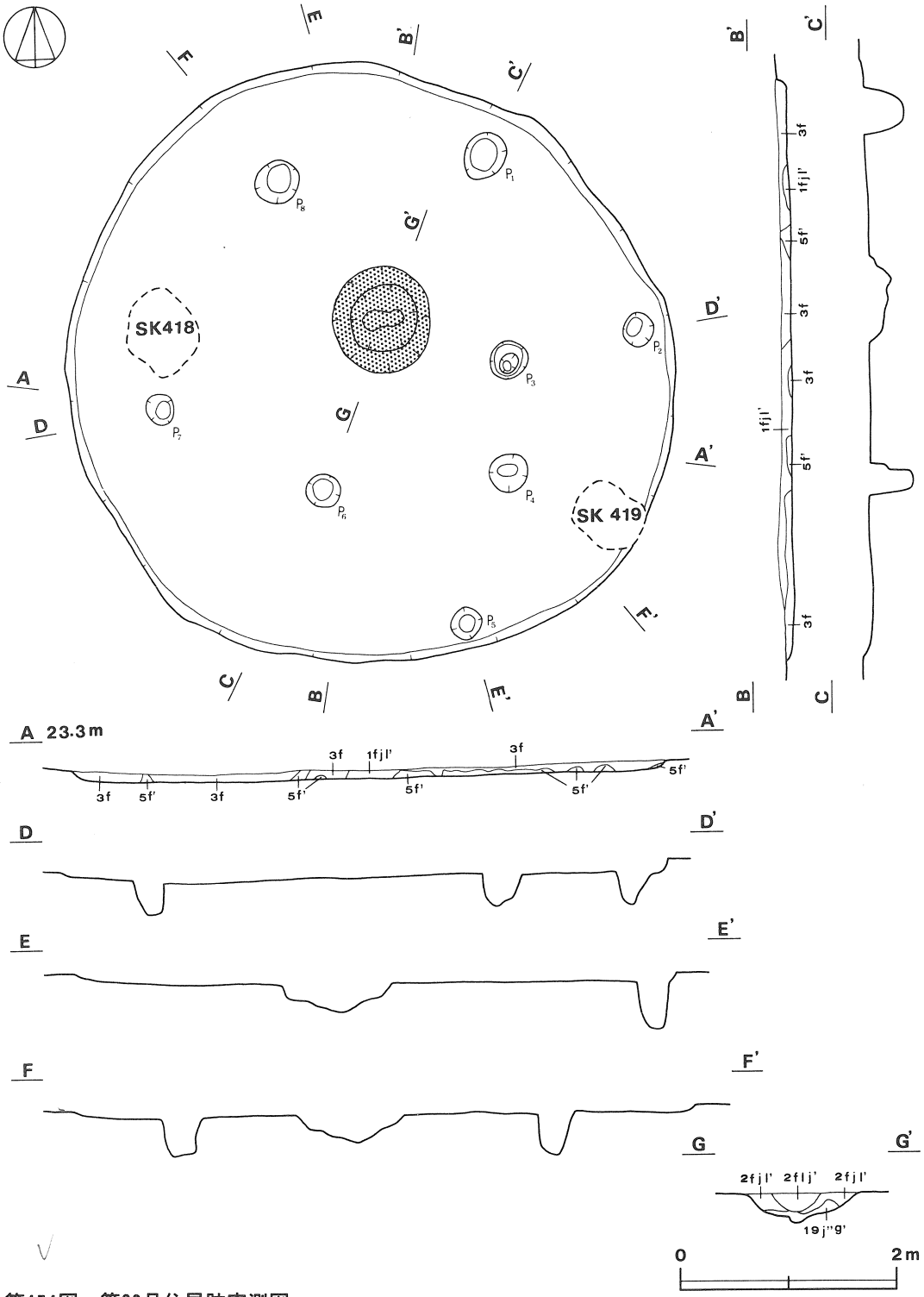
遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

**第28号住居跡出土土器**（第475～476図1～21）

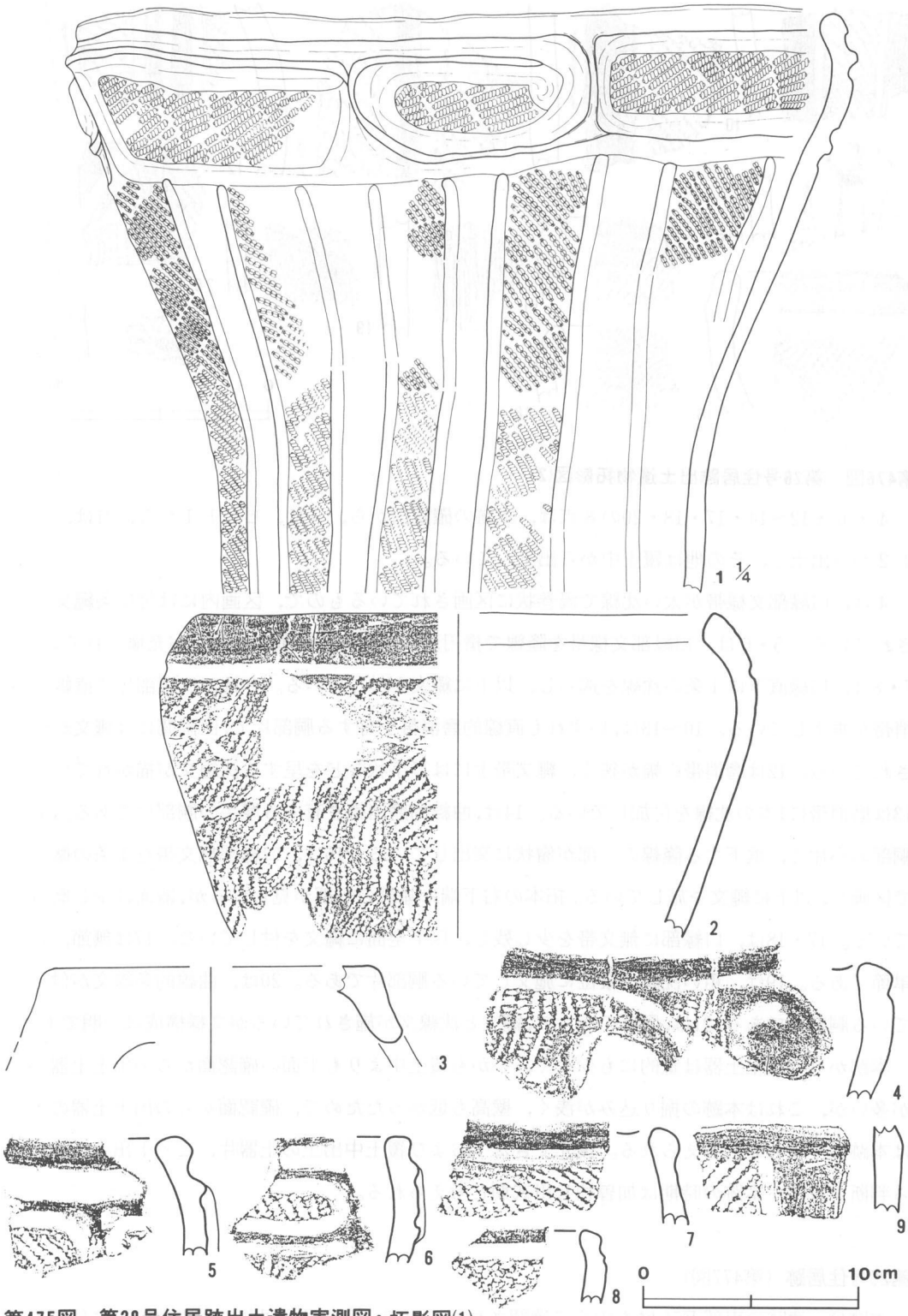
1は，本跡の南側と南東側の覆土からまとまって出土した土器片を中心に，第31号住居跡の西側と北西側の覆土から内面を上にして出土した破片と同跡のピット11の覆土から出土した破片が相互に接合したものである。胴下半部は欠損するが，口縁部から胴部にかけて約60％ほど復元しえた土器である。本跡出土の土器片は，外面を上にした出土状況の破片が多かったが，一部には内面を上にしたものもみられる。両方の住居跡とも掘り込みが浅く，覆土がわずかしか遺存していなかった。キャリパー形を呈する平縁の深鉢形土器で，胴下半部は意識的に打ち欠かれている。口縁部文様帯は，隆線とこれに沿う沈線により楕円形に区画されており，胴部は磨消懸垂文が太い沈線で施されている。口縁部文様帯の区画内と胴下半部の区画間には単節縄文ＬＲを施し，胴上半部の区画間には帯状に複節縄文ＬＲＬが付されている。口縁部は横位回転，胴部は縦位回転である。内面は，横ナデによって調整されている。口縁部の一部は磨滅している。胎土には，わずかの石粒を含むが，微砂を主として良好である。焼成は良好で，色調は褐色を呈している。口径は46.5cmで，現存高は36.5cmである。

2は，本跡の南東側の覆土から外面を上にして出土した破片が接合したものである。平縁の深鉢形土器で，口縁部無文帯を1条の沈線で区画し，以下に単節縄文ＲＬを縦位，斜位回転にて施文している。外面の上半部と内面の下半部は磨滅が激しく，器面の剝落や剝離がみられる。口縁部無文帯および内面は横ナデが加えられている。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。推定口径は23.9cmで，現存高は15.2cmである。

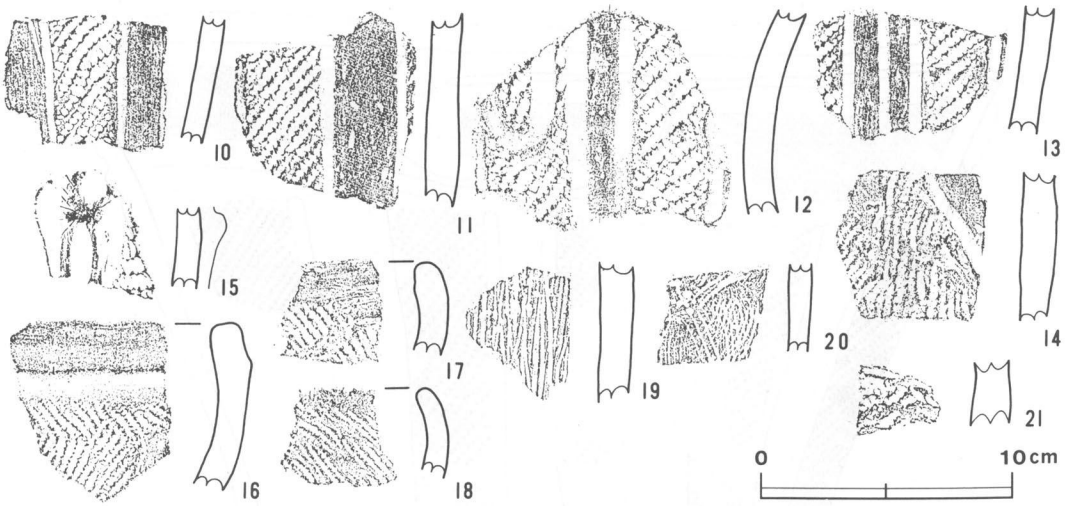
3は，本跡の確認面から出土した器台形土器の小片である。受け面は平坦で，光沢を有している。脚部の開きは大きく，円孔が穿たれている。内外面とも横ナデが加えられている。胎土には砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は外面が暗褐色，内面が暗赤褐色を呈している。推定受け面径は14.7cmで，現存高は4.7cmである。




第474図　第28号住居跡実測図




第475図　第28号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)




**第476図　第28号住居跡出土遺物拓影図(2)**

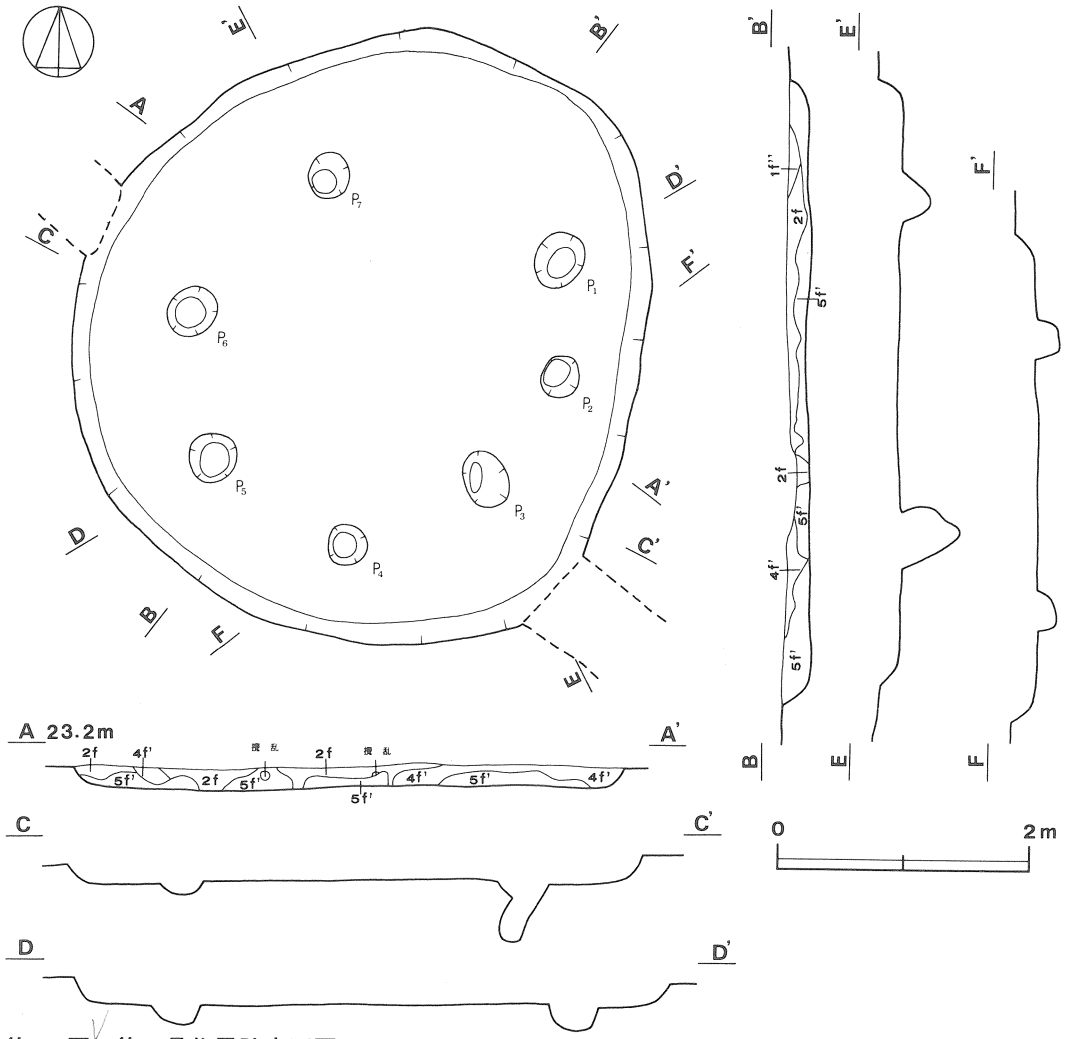
4・6・12～14・17・18・20の8点は，本跡の確認面から，9は，ピット1から，21は，ピット2から出土し，その他は覆土中から出土している。

4は，口縁部文様帯が太い沈線で渦巻状に区画されているもので，区画内には付加条縄文が施されている。5・6は，口縁部文様帯を隆線で楕円形に区画し，区画内に縄文が充塡されている。7・8は，口縁直下に1条の沈線を巡らし，以下に縄文を付している。9は，口辺部片で直線的磨消帯が垂下している。10～13は，いずれも直線的磨消帯を有する胴部片で，区画間には縄文が充塡されている。12は磨消帯の幅が狭く，縄文帯上にはU字状などを呈する沈線文が描かれている。13は磨消帯に1本の沈線を付加している。14は，曲線的磨消帯を有する厚手の胴部片である。15は，胴部の小片で，垂下する隆線の一部が瘤状に突出している。16は，口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し，以下に縄文を施している。拓本の右下端に隆線の一部が見られるが，器面は少し磨滅している。17・18は，口縁部に無文帯を少し残し，以下全面に縄文を付している。17は無節，18は単節である。19は，粗い沈線を縦位に施文している胴部片である。20は，曲線的条線文が付されている胴部片である。21は，胴部の小片で，縄文と沈線文が施されているが文様構成は不明である。

本跡からの出土土器は量的にも少なく，しかも覆土中よりも上面の確認面からの出土土器の方が多いが，これは本跡の掘り込みが浅く，壁高も低かったためで，確認面からの出土土器の大半は本跡に伴うものと考えられる。復元できた1および覆土中出土の土器片，ピット出土の破片から判断すれば，本跡の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。

**第29号住居跡**（第477図）

本跡は，遺跡の東部E5f$_1$区を中心に確認されたもので，第22号住居跡の南東側21mに位置して



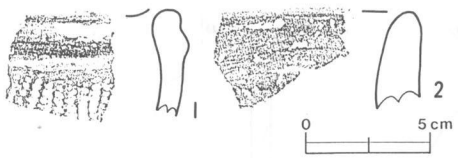

**第477図　第29号住居跡実測図**

いる。本跡の中央で東西方向へ走る第９号溝と重複している。新旧関係は，溝が本跡の壁や床を切っていることから本跡の方が古いと思われる。

平面形は，長径4.9m・短径4.3mの楕円形で，長径方向はN－3°－Eを指している。壁は北側だけが硬くしっかりしているほかは，比較的軟らかく床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，13～20cmである。床面はソフトロームで軟らかい。ピットは７か所検出され，規模は$P_3$を除いて径32～45cm・深さ11～22cmで，太さ・深さとも一定している。$P_3$は径44cm・深さ50cmと太く深い。$P_3$を含めた７か所とも壁にそって円形状に配列されているので主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は５層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。１～４層は締まっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から15点出土している。




**第478図**
**第29号住居跡出土遺物拓影図**

**第29号住居跡出土土器**（第478図１～２）

１は，口縁部文様帯を低隆線で区画し，区画内に条が縦走するように縄文を施文している。２は，無文の口縁部片である。

本跡から出土した土器は非常に少なく，しかも型式的特徴の乏しい破片であるため，本跡の時期決定はむずかしいが，あえて推定すれば加曽利ＥⅢ式期のものと考えられる。

**第30号住居跡**（第479図）

本跡は，遺跡の東部F4c$_7$区を中心に確認されたもので，第８号住居跡の南東側22ｍに位置している。

平面形は，径4.8ｍの円形である。壁は南西壁がやや軟らかであるほかは，しっかりした硬さで，床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，19～27cmである。床面はハードロームでよく踏み固められており，炉の付近が若干凹んでいるほかは平坦である。ピットは８か所検出され，規模は径24～36cm・深さ12～63cmである。$P_2$・$P_5$・$P_6$・$P_8$は深さが30cmで一定しており，炉を囲んで対角線上に配列されていることから主柱穴と考えられる。炉は本跡の，中央に検出され，径88cm・深さ47cmの円形に掘られた地床炉である。炉壁は赤く焼けているが，炉床はあまり焼けていない。

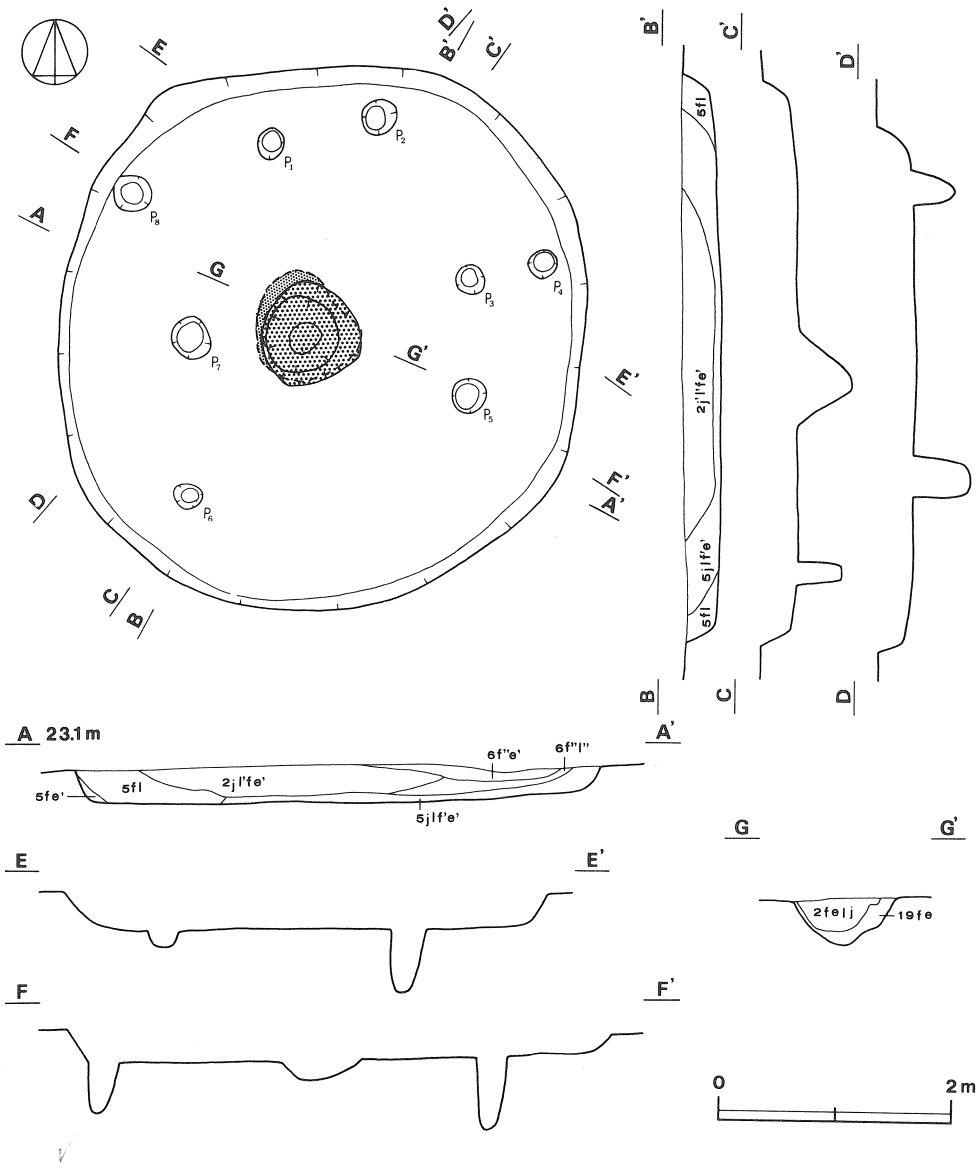
覆土は６層からなり，最上層の１層は耕作土である。２～５層はすべて締まっており，主に暗褐色土・褐色土が自然堆積をしている。

遺物は，縄文土器片が，覆土から多量に，床面から８点出土している。

**第30号住居跡出土土器**（第480～486図１～114）

１は，本跡の中央部と北東側の覆土から出土した数点の破片が接合したもので，深鉢形土器の口縁部片である。口縁部は内傾し，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に隆線と沈線による曲線的区画がなされ，区画間には単節縄文ＲＬが充塡されている。内面の口縁部上半部は横ナデ，以下は縦ナデが施されている。胎土にわずかの石英粒などの石粒を含むが良好である。また，焼成も良好で，色調は褐色を呈している。推定口径は40.8cmで，現存高は9.5cmである。

２は，本跡の中央部と南側の覆土から出土した破片が接合したもので，平縁の深鉢形土器の口縁部片である。口縁直下に１条の沈線を巡らし，沈線の中に下から上へ向けて突き上げるように棒状工具による刺突文を並べている。以下に単節縄文ＲＬを横位、斜位回転で施文している。口縁部内面は横ナデ，以下は斜位のナデが認められる。胎土には小石粒や微砂を含み，焼成は良好




**第479図　第30号住居跡実測図**

である。色調は暗赤褐色および黒褐色を呈している。推定口径は29.2cmで，現存高は10.2cmである。

3は，本跡の東側の覆土から出土した破片が接合したもので，平縁の深鉢形土器の口縁部片である。口縁部に幅約2cmの無文帯を有し，1条の沈線を巡らして区画し，以下に縄文を施している。縄文原体は単節ＲＬで横位回転である。内外面とも横ナデを加えている。胎土には微砂を含み良好である。また，焼成は良好で，色調は暗赤褐色を呈している。推定口径は23.8cmで，現存高は6.3cmである。

4は，本跡の中央部と南東側の覆土から出土した破片が接合したもので，平縁の小形深鉢形土器の口縁部片である。口縁部に幅の狭い無文帯を残し，以下に縄文を全面に施している。縄文原体は単節ＲＬで横位回転である。内面は横ナデにより調整されている。胴下半部はきれいに輪積み部分で剝がれ，欠損している。胎土には小石粒、砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。推定口径は17.8cmで，現存高は7.4cmである。

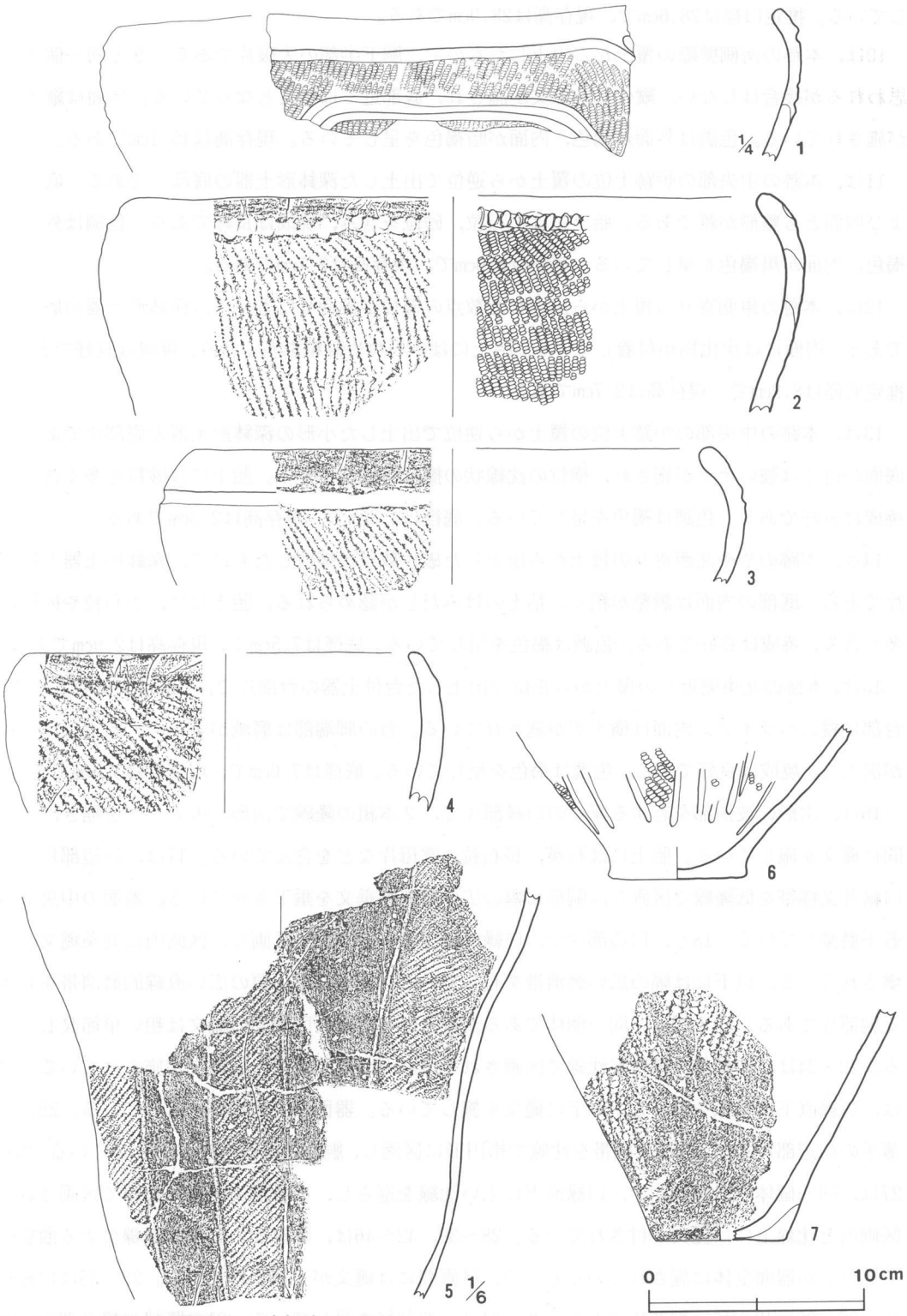
5は，本跡の南壁近くの覆土から一括して出土した大形の深鉢形土器の胴部片である。幅の広い直線的磨消懸垂文が施され，区画間には単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。なお，上端部に低平な隆線が認められ，口縁部文様帯を弧状に区画するものと考えられるが明確ではない。内面は横ナデにより調整されている。内面の下端には炭化物の付着がみられる。器面の一部は磨滅している。胎土には長石，石英粒および雲母片などを多く混入している。焼成は良好で，色調は褐色を呈している。胴部の推定最大径は47.7cmで，現存高は37.5cmである。

6は，本跡の中央部の床面から正位で出土した深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。大きさのわりには薄手である。胴下半部には磨消懸垂文の下端がみられ，区画間には単節縄文ＬＲが縦位回転で施文されている。胎土には石粒，砂粒をやや多く含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。底径は6.4cmで，現存高は7.0cmである。

7は，本跡の確認面から出土した深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片で，底面の中央部が少し薄くなっている。胴下半部には単節縄文ＲＬが縦位，斜位回転で施文されている。内外面とも縦方向のヘラナデが顕著に認められる。胎土には小石粒，微砂を多く含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定底径は6.2cmで，現存高は10.6cmである。

8は，本跡の南側やや西寄りの壁近くの覆土から一括出土した破片が接合したもので，口縁部が強く内湾する平縁の深鉢形土器の口縁部片である。全面に単節縄文ＲＬが縦位回転で施されている。内面は横ナデにより調整されている。全体に整形が雑で凹凸がみられ，破片の下端部は磨滅が著しい。胎土には小石粒，微砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は43.3cmで，現存高は13.5cmである。

9は，本跡の南側壁際の覆土の2か所からまとまって出土した破片群が接合して，ほぼ器形をうかがえる程度に復元されたものである。約25％ぐらいの残存状況である。口縁部が若干内傾し，胴部が少し張っている。全体に器壁は厚いが，胴下半部は薄くなっている。口縁部は，平縁と思われるが，整形が良くなく緩く盛り上っている所がみられる。残存部の右端は盛り上りが大きいので，波状縁になるかもしれないが，ここでは平縁として取り扱った。口縁部に沈線で大小の楕円区画文を配している。右端の沈線は極端に浅く，凹線状を呈している。胴部には縦位の条線文が施されている。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが加えられている。胎土には小石粒，砂粒を混入し，焼成は良好である。色調は外面上半部が褐色，下半部が灰黒色，内面は暗褐色を呈




**第480図　第30号住居跡出土遺物実測図(1)**

している。推定口径は28.6cmで，現存高は28.9cmである。

10は，本跡の南側壁際の覆土から出土したもので，胴下半部の大破片である。9と同一個体と思われるが接合はしない。縦位の条線文が施され，底部近くは無文となっている。内面は縦ナデが施されている。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。現存高は15.1cmである。

11は，本跡の中央部の炉跡上位の覆土から逆位で出土した深鉢形土器の底部片である。底面および内面とも整形が雑である。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が黒褐色を呈している。底径は5.0cmで，現存高は2.7cmである。

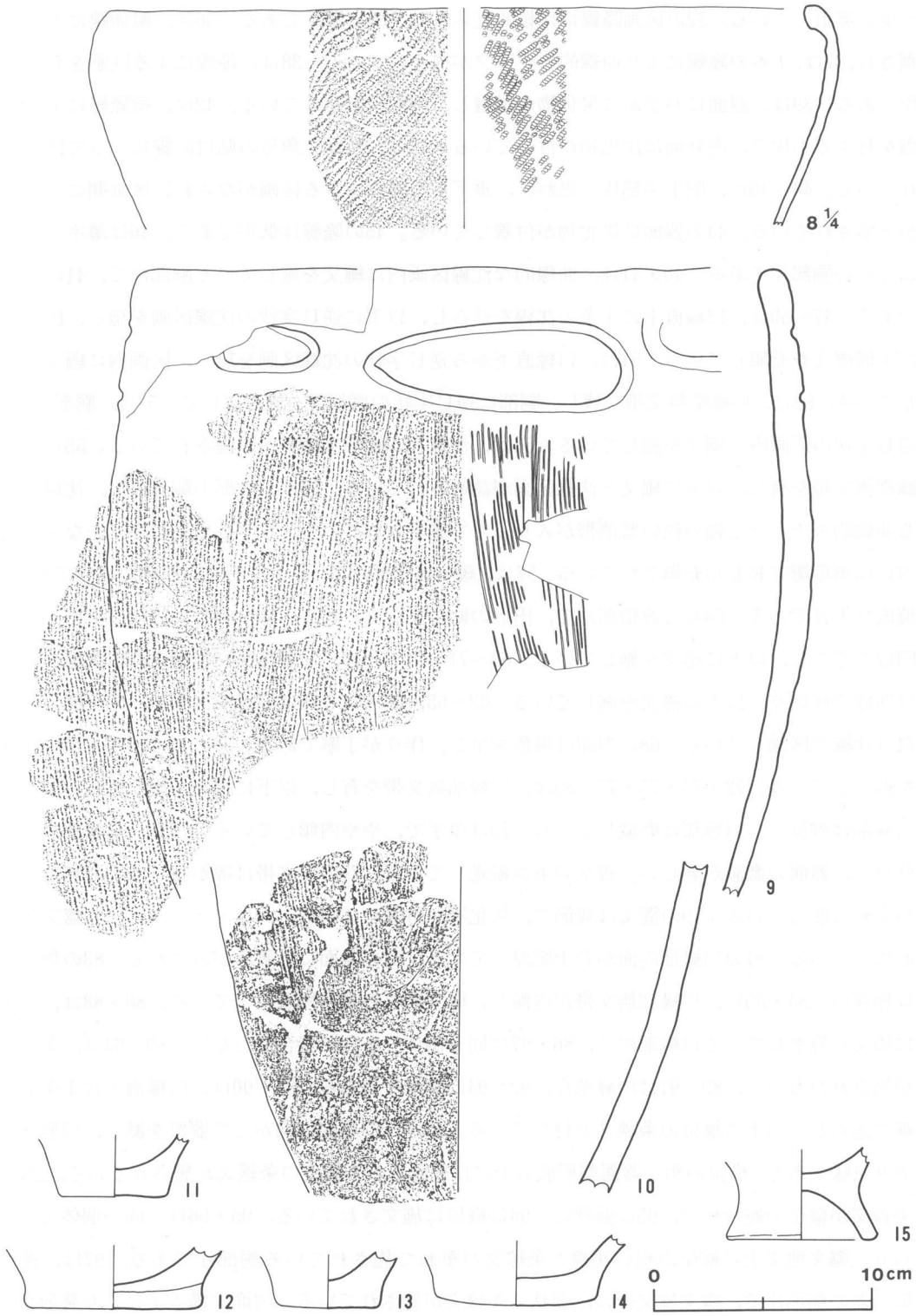
12は，本跡の東側寄りの覆土から出土した数点の破片が接合したもので，深鉢形土器の底部片である。内面には炭化物が付着している。胎土には小石粒や砂粒を多く含み，焼成は良好である。推定底径は8.2cmで，現存高は2.7cmである。

13は，本跡の中央部の炉跡上位の覆土から逆位で出土した小形の深鉢形土器の底部片である。底面の近くは強いナデが施され，横位の沈線状の擦痕が観察できる。胎土には砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。底径は4.8cmで，現存高は2.3cmである。

14は，本跡のやや北西寄りの覆土から出土した破片数点が接合したもので，深鉢形土器の底部片である。底部の内面は調整が粗く，粘土のはみだしが認められる。胎土には，小石粒や砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。底径は7.5cmで，現存高は2.9cmである。

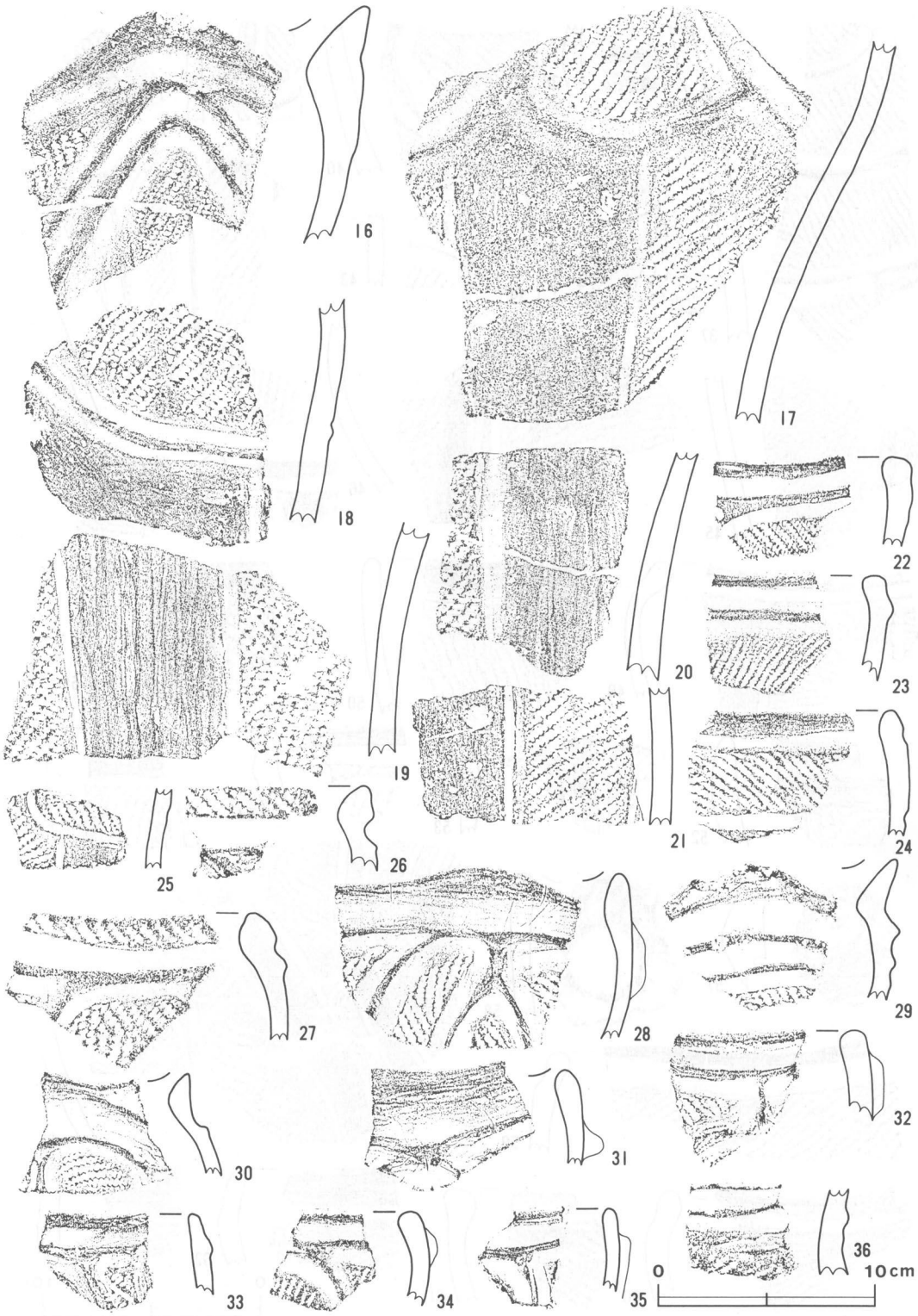
15は，本跡の北東壁近くの覆土から正位で出土した台付土器の台部片で，上部は欠損している。台部は縦のヘラナデ，内面は横ナデが施されている。台の脚端部は磨滅が著しい。胎土には砂粒が混入し，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。底径は7.0cmで，現存高は3.6cmである。

16は，山形の波頂部を有する厚手の口縁部片で，2本組の隆線で山形のモチーフを描き，区画間に縄文を施している。胎土には石英，長石粒，雲母片などを含んでいる。17は，口辺部片で，口縁部文様帯を低隆線で区画し，胴部に幅の広い磨消懸垂文を垂下させている。器面の中央部が若干磨滅している。18も，口辺部片で，口縁部文様帯を低隆線で区画し，区画内に異条縄文が充塡されている。以下には幅の広い磨消帯を有している。19～21は，幅の広い直線的磨消帯を有する胴部片である。19・20は，同一個体であるが接合はしない。区画間の縄文は粗い単節ＲＬである。22・24は，口縁部文様帯が沈線で区画されているもので，区画内に縄文が施されている。23は，口縁直下に隆線を巡らし，以下に縄文を施している。器面に炭化物が付着している。25は，薄手の口辺部片で，口縁部文様帯を沈線で楕円形に区画し，胴部に磨消帯を垂下させている。26・27は，同一個体の口縁部片で，口縁直下に太い沈線を巡らし，口縁部文様帯は隆線で区画され，区画内と沈線上には縄文が付されている。28～39，42～46は，隆線ないしは微隆線による曲線的モチーフが器面全体に施されているもので，区画間には縄文が充塡されている。28～35は口縁部片，36～39，42～46は胴部片である。28～31は，波状縁を呈している。31の隆線の接合部の一部

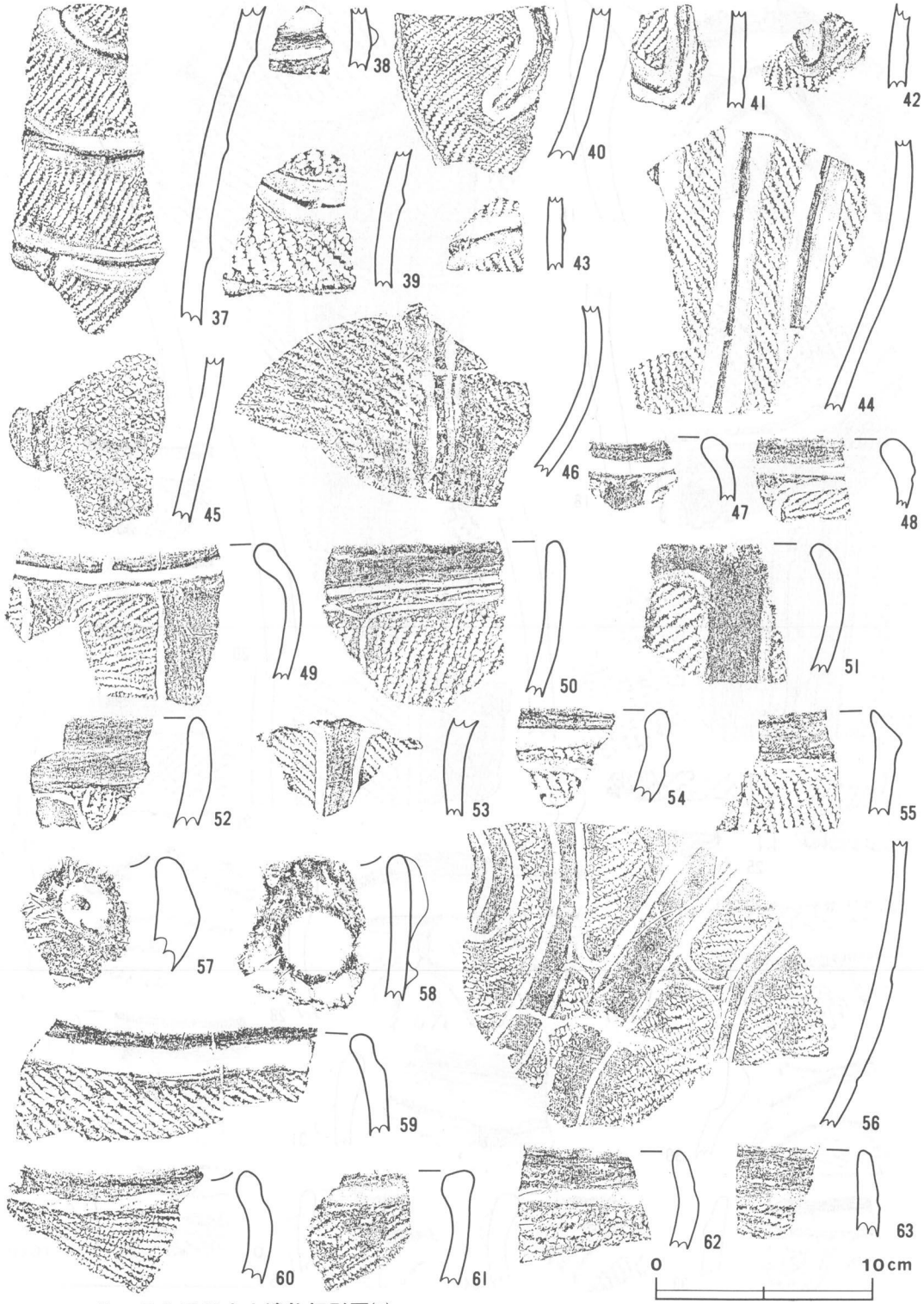



第481図　第30号住居跡出土遺物実測図(2)

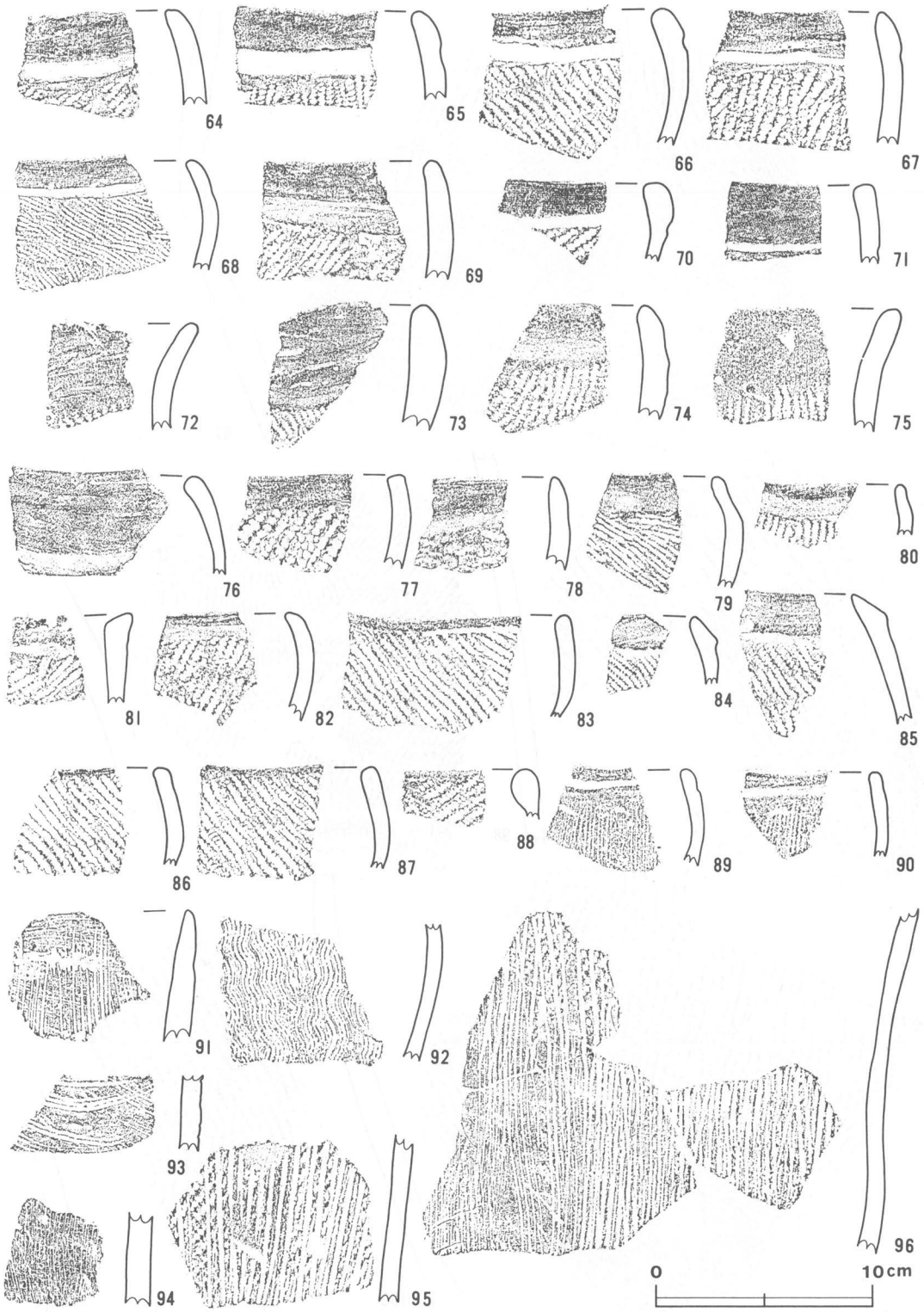
が少し突出している。32の区画隆線は比較的高い。33・35は薄手である。36は，微隆線により区画され，37は，1本の隆線により曲線的モチーフが描かれている。38は，隆線による区画をもつ小片である。39は，器面にわずかに炭化物が付着し，内面は剝落している。42は，微隆線による区画を有する小片で，内外面に炭化物が付いている。43は，断面三角形の貼付隆線によって区画されている。44～46は，胴下半部片と思われ，垂下する隆線による区画がなされ，区画間には縄文が充塡されている。44の器面に炭化物が付着している。45の隆線は低平である。46は薄手で丸くふくらむ胴部片である。40・41は，曲線的な沈線区画内に縄文を施している胴部片で，41は薄手である。47～50は，口縁直下に1条の沈線を巡らし，以下に逆U字状の沈線区画を施し，区画内に単節縄文を充塡している。51は，口縁直下から逆U字状の沈線区画を施し，区画内に縄文を施している。52は，口縁部無文帯を残し，胴部に逆U字状の磨消帯を施している。53は，胴部片で，逆U字状の区画内に縄文を施している。54は，沈線で口縁部文様帯が区画されている。55は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文と沈線区画が認められている。56は，大形の胴部片で，沈線による曲線的モチーフと幅の狭い磨消帯が入りくんで施文されている。U字状，逆U字状をなす区画内には単節縄文RLが充塡されている。57は，緩い波頂部片で，小さな円文を沈線で描いており，焼成は不良である。58も，波頂部片で，円形の貼付文がみられる。59～61は，口縁直下に1条の凹線を巡らし，以下に縄文を施している。62～71・74・76は，口縁部無文帯を1条の沈線ないしは凹線で区切り，以下に縄文を施している。62～65，69・74・76は凹線で区画し，66～68，70，71は沈線で区画している。68の内面は黒色を呈し，作りが丁寧である。69・74は，ごく浅い凹線を巡らしている。72・73・75・77～85は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文を施している。72の口縁部は外反し，口唇部は磨滅している。73は厚手で，やや内傾している。75も，口縁部がやや外反し，器面の磨滅が著しい。縄文の条が縦走している。77の無文帯は幅が狭く，78の無文帯はわずかに凹んでいる。79の縄文は無節で，炭化物が付着している。80は，ナゾリにより無文帯を形成している。81の口縁部内面が若干肥厚している。82の器面には剝落がみられる。83の無文帯は極狭い。84・85は，口縁部無文帯が内傾し，縄文部との境が段をなしている。86～88は，全面に縄文が施されている口縁部片で，86・87は同一個体であるが接合はしない。89～94は，条線文が施されたもので，89～91は口縁部片，92～94は胴部片である。89・90は，口縁直下に1条の沈線を巡らし，以下に縦位の条線文を付している。91は，口唇部に向かって器厚を減じ，口唇部は尖り気味である。横位の粗い器面整形痕の上に口縁直下から縦位の条線文が施されている。92は，条線文が縦位の蛇行状に，93は弧状に，94は縦位に施文されている。95・96は，同一個体と考えられ，縄文地文上に縦位の粗い沈線と条線文が重ねて施されている胴部片である。97は，深鉢形土器の胴部片で，縄文施文後に，弧状に条線文が施されている。内面は横ナデにより整形されている。98は，縄文だけの胴部片で，内面は縦ナデにより整形されている。99は，厚手の胴部片




第482図　第30号住居跡出土遺物拓影図(3)

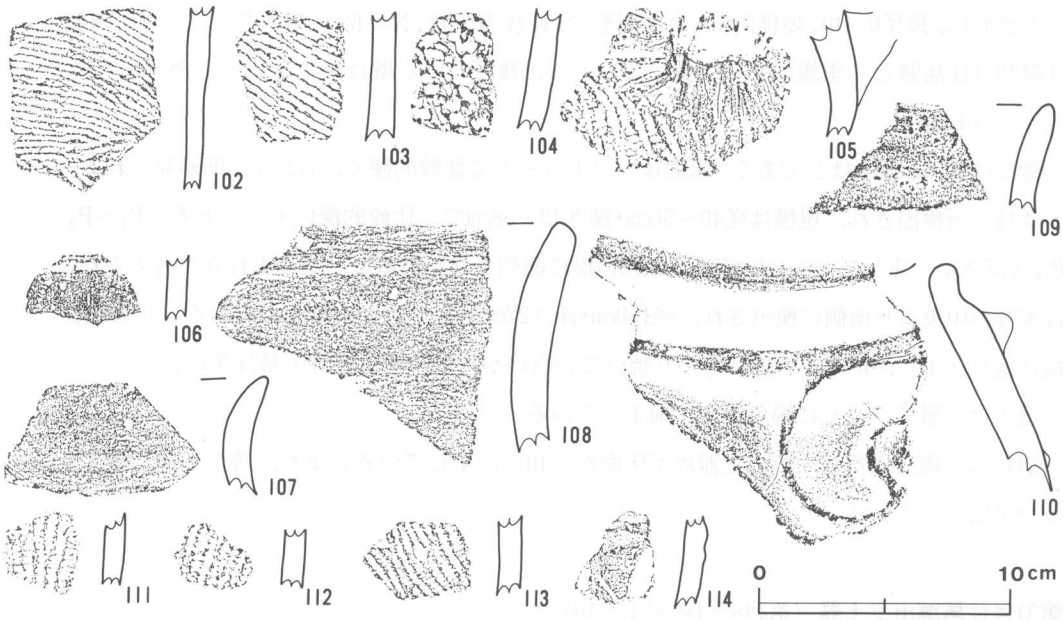



第483図　第30号住居跡出土遺物拓影図(4)




第484図　第30号住居跡出土遺物拓影図(5)

第485図　第30号住居跡出土遺物拓影図(6)




**第486図　第30号住居跡出土遺物拓影図(7)**

で，全面に細かい縄文が施されている。胎土には砂粒を多く含んでいる。100は，深鉢形土器の胴下半部片で，縄文が施され，底部の近くは斜方向のナデにより無文となっている。内面は縦ナデが加えられている。101～104は，縄文だけが施文されている胴部片である。101は単節，102・103は無節，104は大粒の複節縄文が付されている。105は，縄文が付されている口辺部片で，橋状把手が欠損した痕跡が残されている。107～109は，いずれも外反する無文の口縁部片である。107は，外反が強く，108は厚手である。110は，内傾の著しい厚手の口縁部片で，隆線だけで曲線的モチーフが描かれている。器面は磨滅が激しい。

70・106・111・112は，本跡の炉内から，38・113・114は，ピット7の覆土から出土したものである。106は，胴部の小片で，1条の沈線が巡り，以下を縦位のナデを加えて無文としている。111～113は，縄文だけの胴部片である。114は，沈線による区画を施している。

本跡からは多量の土器が出土しているが，その大半は覆土および確認面からの出土であり，床面から出土したのは6の底部片だけである。炉内から4点，ピット7から3点の土器片が出土しているが，いずれも小片で型式的特徴に乏しい。本跡の時期を，これらの出土土器および出土状況から考えると，加曽利E III式期と思われる。

**第31号住居跡**（第487図）

本跡は，遺跡の東部F4b$_1$区を中心に確認されたもので，第21号住居跡の南側16mに位置している。南側で第33号住居跡と重複している。新旧関係は，不明である。

平面形は，長径6.4m，短径5.6mの楕円形で，長径方向は，N－62°－Wを指している。南側の壁は第33号住居跡との重複のため欠損しているが，残っている壁は硬く床面から外傾して立ち上がっている。

壁高は低く，10cmほどである。床面はソフトロームで比較的硬く，小さな凸凹が見られる。ピットは11か所検出され，規模は径40～56cm・深さ43～58cmで，比較的深いものである。$P_1$～$P_3$・$P_6$・$P_{10}$は深さが一定しており，炉を囲んで五角形に配列されていることから主柱穴と考えられる。炉は本跡の中央より南側に検出され，径150cm・深さ27cmとやや大きめなものである。炉の西側は2段に掘り込まれ，炉床と炉壁はあまり焼けていないが，炉の覆土の焼土量は多い。

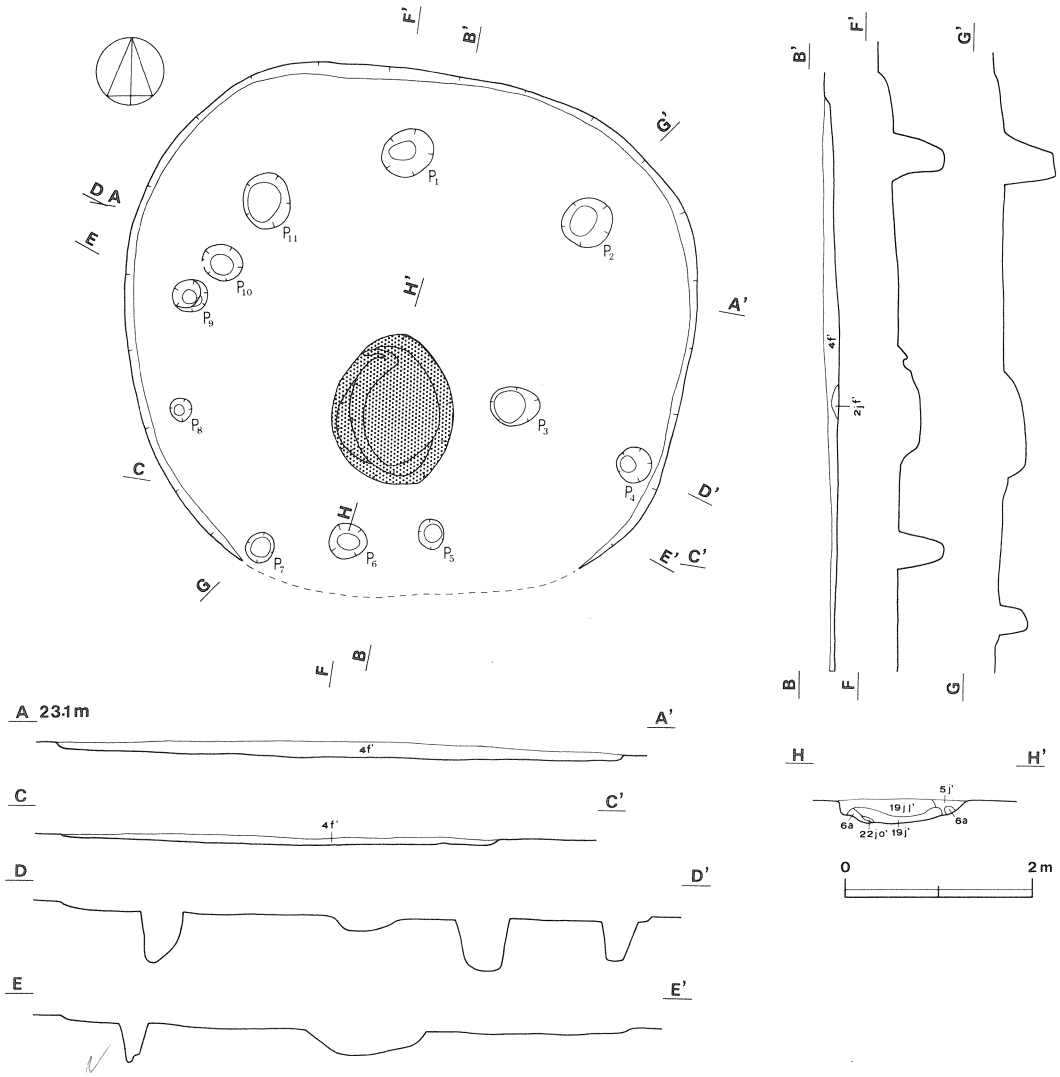
覆土は2層で，ともに褐色土で，締まっている。

遺物は，縄文土器の大形の土器片が床面から10点出土している。また，覆土からも縄文土器片が少量出土している。

**第31号住居跡出土土器**（第488～489図1～16）

1は，本跡の北東側の覆土から内面を上にして一括出土した破片が接合したものである。キャリパー形を呈する平縁の深鉢形土器で，全体の3分の1ほどを残している。胴下半部は，切断されたように打ち欠かれている。口縁部文様帯は，隆線と沈線による楕円区画文と沈線だけによる長楕円形区画文が1単位となって，恐らく4単位で文様構成されるものと思われる。胴部には直線的な幅の狭い磨消懸垂文が施されている。胴部区画は，2本の磨消帯を中に取り込んで大きく逆U字状の沈線で区画されている。このような例はきわめて少ないと思われる。口縁部文様帯内と胴部の区画間には単節縄文RLが，それぞれ横位，縦位回転により施文されている。口縁部および胴部の一部には磨滅の著しい部分がみられる。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデにより丁寧に調整されている。胎土には微砂を含み，緻密である。焼成は良好で，色調は褐色を呈している。推定口径は36.5cmで，現存高は28.7cmである。

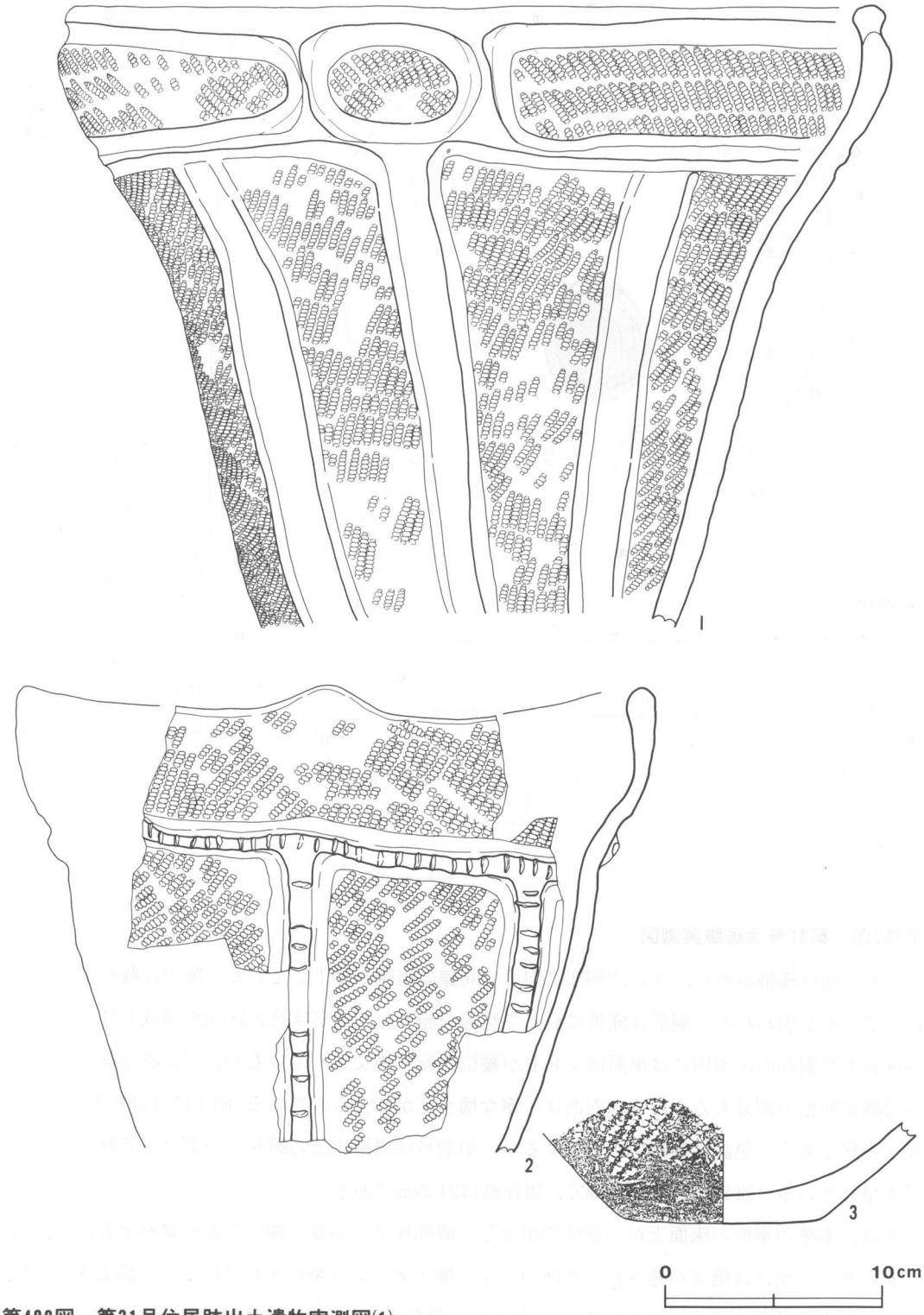
2は，本跡から出土した土器片を中心として，第32号住居跡出土の3点，第28号住居跡の1点，第461号土壙出土の1点が接合したものである。本跡出土の破片は，南西側の覆土から内面を上にして一括出土したものである。第28号住居跡の破片は，南東側の覆土から，第32号住居跡の破片は，北西側の覆土から出土している。本跡を中心においてみると，第28・32号住居跡までは約25～30mはなれ，第461号土壙までは約30mの距離がある。第461号土壙と第32号住居跡の間は直線にして約50mという距離である。本土器は，特徴的な文様を有する個体であったために，このような遠距離間の接合が可能となった。本土器片を共有する各遺構は，ほぼ同時期に存在したものと考えられないだろうか。本土器は，遺存部が少ないので器形の全容はつかめないが，4単位の波状縁を呈する深鉢形土器と考えられ，頸部でくびれ，以下直線的にすぼまる。頸部に1条のキザミ



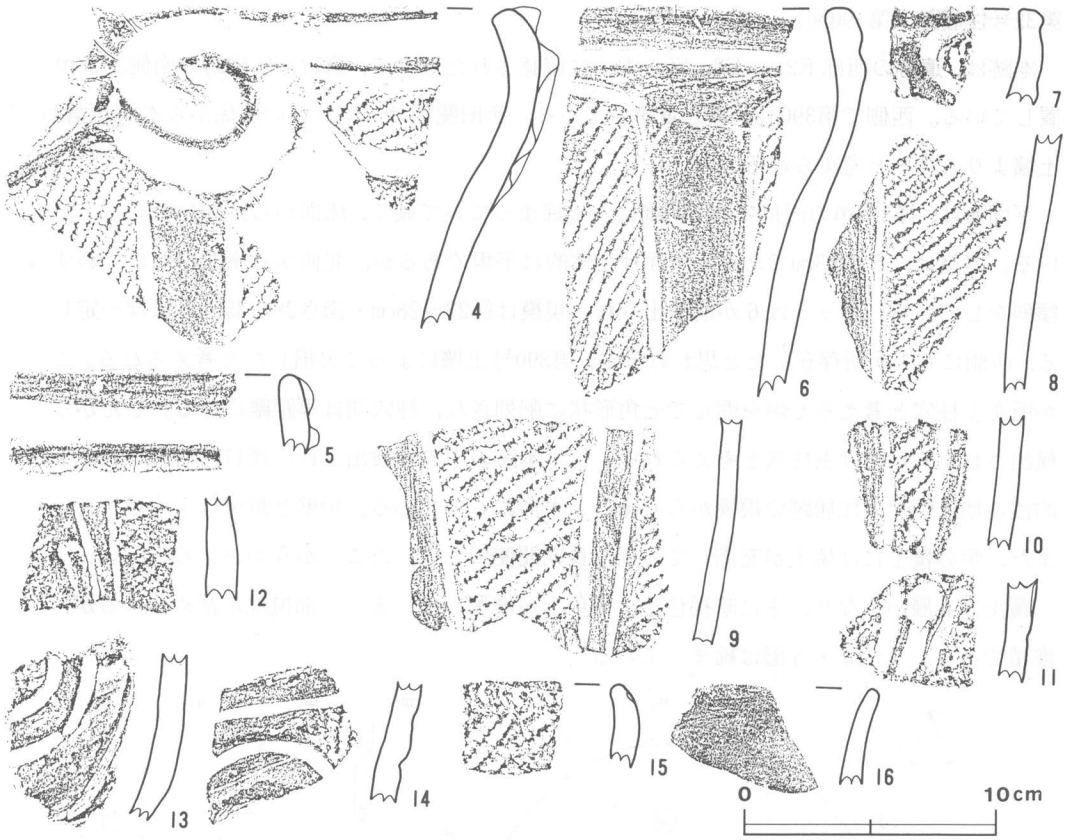

**第487図　第31号住居跡実測図**

目をもつ貼付隆帯が巡り，さらに胴部に向けて同様の隆帯が垂下している。隆帯は残存部から推定して８本と思われる。胴部は隆帯に沿って沈線が施され，逆Ｕ字状の区画を構成している。口縁部および胴部の区画内には単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されているが，口縁部上端にはわずかに横位回転の部分もみられる。内面は丁寧な横ナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は暗褐色を主とするが，第32号住居跡出土の破片の一部は，赤味のある褐色を呈している。推定口径は28.3cmで，現存高は21.5cmである。

３は，本跡の南側の床面上から逆位で出土した底部片で，かなり開いており鉢形土器の底部と思われる。外面には縄文が施され，底面の近くは横ナデにより整形されている。内面上半部は縦ナデ，下半部は横ナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は内外面




**第488図　第31号住居跡出土遺物実測図(1)**




**第489図　第31号住居跡出土遺物拓影図(2)**

とも褐色を呈している。底径は9.4cmで，現存高は4.1cmである。

4～6・8～9は，本跡の覆土から，7・10～16は，炉内から出土したものである。4は口縁部文様帯を隆線で渦巻状および長楕円形状に区画し，胴部には直線的磨消帯が垂下している。口縁部文様帯内および胴部の区画間には縄文が充塡されている。5は，4に類似する口縁部の断片である。6は，口縁直下に1条の沈線を巡らし，胴部の逆U字状の沈線区画内に縄文を充塡している。7は，隆線で口縁部文様帯を楕円形に区画し，区画内に縄文を施している。8～10は，直線的磨消帯を有する胴部片である。11は，隆線が垂下し，途中に大きな刺突文が付されている胴部片である。12～14は，沈線による曲線的モチーフが描かれている胴部片である。12は，沈線が細い。13・14は，渦巻状のモチーフを描いており，同一個体の可能性が高い。15は，口縁直下に爪形状の刺突文を付し，以下に縄文を施している。16は，薄手の無文の口縁部片で，外反している。

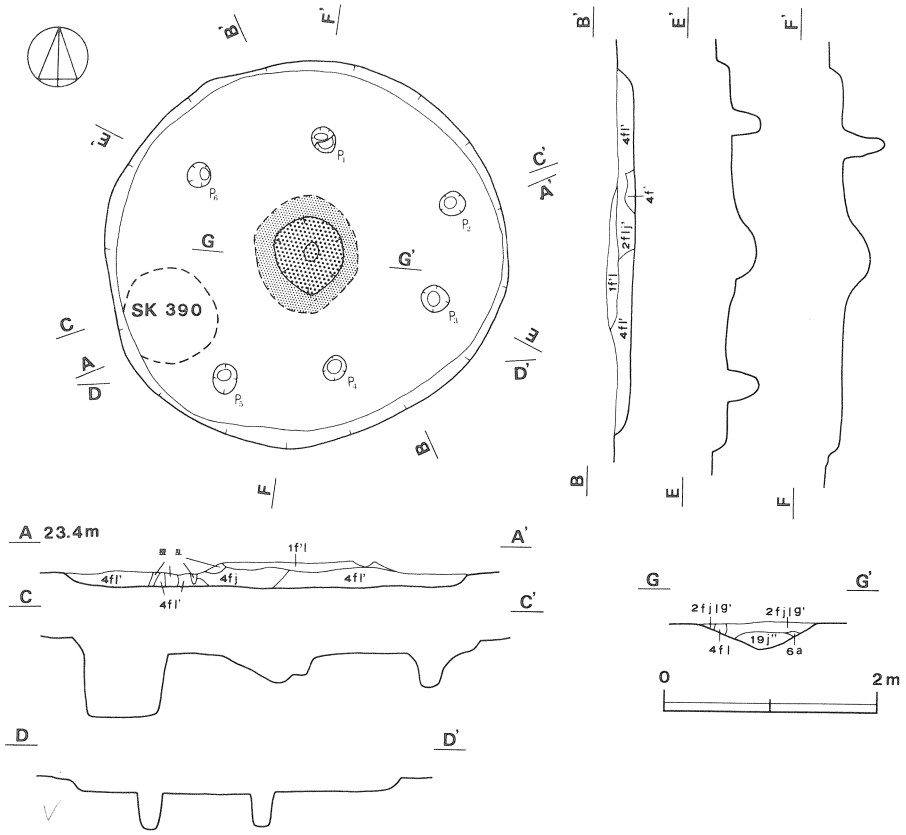
本跡から，出土した土器はそれほど多くはないが，器形復元できた1・2および炉内から出土した土器片から判断すれば，本跡の時期も加曽利EIII式期と考えられる。

**第32号住居跡**（第490図）

本跡は，遺跡の西部 $E2g_0$，$E3g_1$区を中心に確認されたもので，第12号住居跡の南側38.5mに位置している。西側で第390号土壙と重複している。新旧関係は，切り合い関係から本跡が第390号土壙よりも古いと考えられる。

平面形は，径3.7mの円形である。壁はよく締まっていて硬く，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，9～13cmである。床面は全体的に平坦であるが，北側から南側にかけてわずかに傾斜をしている。ピットは6か所検出され，規模は径22～28cm・深さ28～35cmとほぼ一定している。西側にも1か所存在したと思われるが，第390号土壙によって欠損したと考えられる。この7か所を主柱穴と考えると炉を囲んで七角形状に配列され，柱穴間は等距離になる。したがって，検出された6か所は主柱穴と考えられる。炉は本跡の中央に検出され，径110cm・深さ11cmと比較的浅い地床炉で，住居跡の規模から考えると大形のものである。炉壁と炉床はよく焼けている。また，炉の覆土には焼土が充満しており，長期間使用していたことがうかがえる。

覆土は6層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。一部撹乱が認められるが，自然堆積である。1～4・6層は締まっている。




**第490図　第32号住居跡実測図**

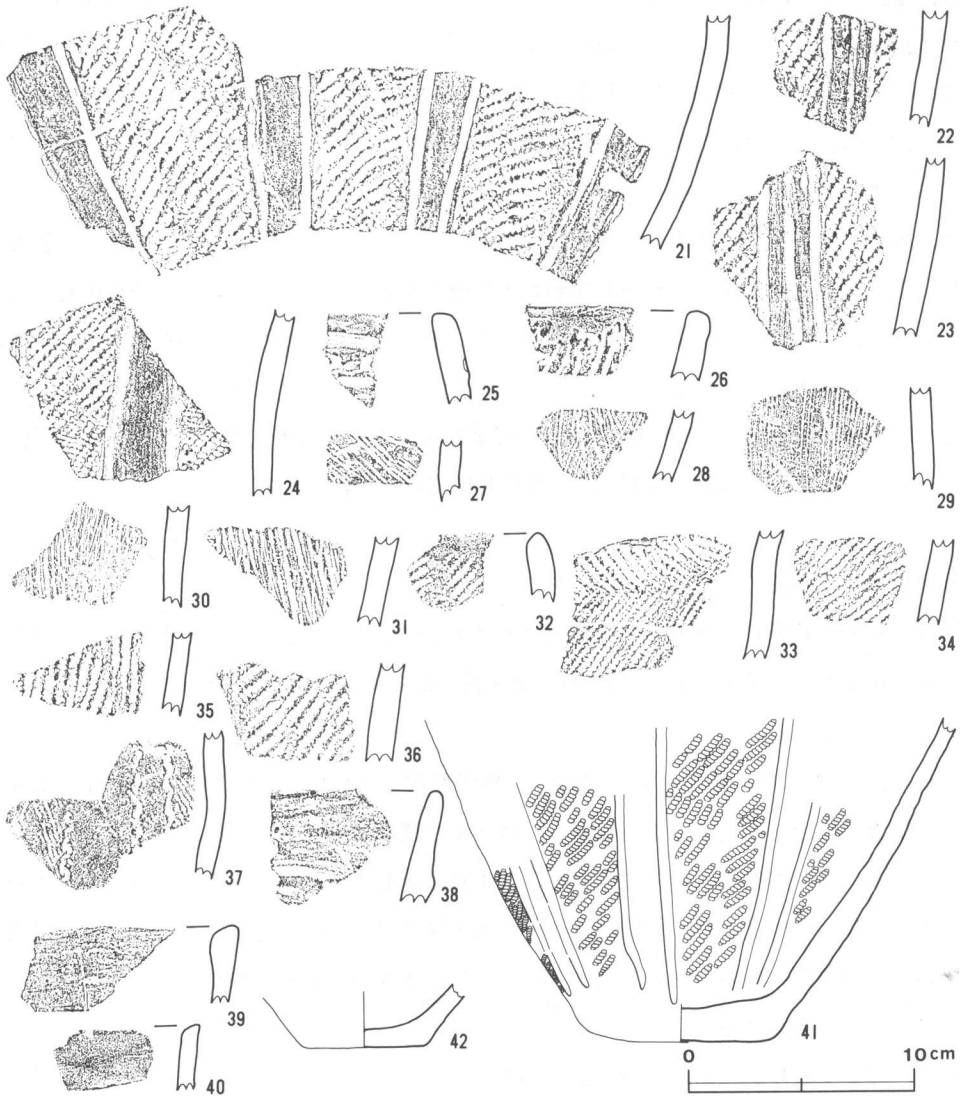
遺物は，縄文土器片が床面から１点，覆土から少量出土している。

**第32号住居跡出土土器**（第491～492図１～42）

１は，本跡の中央部やや東側の覆土下位から内面を上にして３か所に分れて出土した一括土器片と，他の覆土から出土した若干の小破片が接合したものである。平縁のキャリパー形深鉢形土器で，底部へ向けて急激にすぼまる器形を呈している。口縁部から胴部中位にかけては約４分の３程度残存しているが，胴下半部は欠損している。欠損個所の断面は打ち欠かれており，炉埋設土器ないしは埋甕などに再利用する意図がうかがわれる。口縁部文様帯は，隆線とこれに沿う沈線により，渦巻文と楕円区画文が１単位となり，４単位で構成されるものと考えられる。胴部には磨消懸垂文が施されているが，上端が連結して逆Ｕ字状を呈している。また，図には示せなかったが，区画の上端部に１か所沈線による小さな渦巻文が付されている所があり，本土器の正面を示すものとも考えられ，注目される。口縁部の楕円区画内と胴部の懸垂文内には，単節縄文ＲＬが，横位，縦位回転で充塡されている。内面上半部は横ナデにより調整されているが，下半部は磨滅が著しく調整方向は不明である。口縁部や胴部の一部も磨滅が激しい。胎土には，石英，長石粒がやや多く含まれているが，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。口径は28.9cmで，現存高は26.0cmである。

２・３は，口縁部文様帯を隆線で区画し，区画内に縄文を施している。２の器面には炭化物が付着している。４は，口縁部の小片で，沈線による施文がみられる。５は，三角形状の波頂部を有し，隆線で渦巻と楕円形状の区画がなされ，区画内には縄文が付されている。６は，山形の波頂部片で，隆線による楕円区画内に縄文を充塡している。７・８は，平縁で口縁部文様帯を隆線で区画している。８は薄手である。９は，波状縁を呈し，沈線による楕円区画内に縄文を施している。10は，口辺部片で，隆線による区画下に磨消帯が垂下している。11～16は，隆線による曲線的モチーフが器面全体に描かれる土器の胴部片である。11には渦巻状のモチーフが認められ，12は，垂下する隆線と渦巻状のモチーフを描いている。13･15は，同一個体だが接合はできない。14は，器面が磨滅している。16は，縦長の区画を有し，胎土に長石,石英粒を多く混入している。いずれもモチーフ間には縄文を施している。17は，口縁直下から逆Ｕ字状の区画を施し，区画内に縄文を付し，区画間に上端が屈曲する沈線文を描いている。あるいは蕨手文が退化したものとも考えられる。18は，口縁直下から直線的磨消帯が垂下している。19は，縄文地文上に逆Ｕ字状の区画文が施され，器面に炭化物が付着している。20～24は，直線的磨消帯を有する胴部片である。20・21は，胴下半部片と思われる。22・23は，磨消帯間に１本の沈線を付加している。24は，くびれ部片である。25は，口縁直下に２条の沈線を巡らし，沈線間に刺突文を付している。26・31は，粗い沈線文が施されている。 26は厚手の口縁部片で，31は胴部片である。27～30は，

第491図　第32号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)




**第492図　第32号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)**

条線文が付されている胴部片である。27は，短い刺突様に施されている。28は曲線的に，29・30は縦位に施文されている。32～35は，縄文だけが施されているもので，32は口縁部片で，他は胴部片である。33は，羽状に施文され，35は条が縦走するように施されている。36は，直線的磨消帯を有する胴部の小片である。37は，縦位の結節回転文が施された胴部片で，器面の磨滅が著しい。38～40は，無文の口縁部片であるが，38の下端には低隆線が巡り，40の下端には沈線が施されている。

22・34～36は，本跡の炉内から出土し，他は覆土からの出土である。

41は，本跡の東側の覆土から内面を上にして一括出土した破片群に，ほぼ同じ場所から出土した破片１点が接合したもので，やや器壁が厚くがっしりとした深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。外面には磨消懸垂文が施され，区画間には単節文ＲＬが縦位回転で施されている。内面は少し剝落がみられ，磨滅気味である。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は赤味の強い褐色を呈している。底径は8.2cmで，現存高は14.6cmである。

42は，本跡の中央部やや南東側の覆土から正位で出土した底部片である。外面は少し器面が磨滅しているが，垂下してきた沈線の末端部および縄文がわずかに認められる。底面の近くは横ナデが加えられ，内面はナデにより整形が施されている。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は内外面とも褐色を呈している。底径は5.4cmで，現存高は2.3cmである。

本跡からの出土土器は，あまり多くはないが，器形復元できた１や41および炉内から出土の22・36などから判断すれば，本跡の時期は，加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

**第33号住居跡**（第493図）

本跡は，遺跡の東部F4$c_1$区を中心に確認されたもので，第30号住居跡の西側22mに位置している。北側で第31号住居跡・中央で第394号土壙・南西側で第392号土壙とそれぞれ重複している。新旧関係は不明である。

平面形は，長径5.2m，短径4.0m（推定）の楕円形状と思われ，長径方向はN－81°－Eを指している。第31号住居跡と同様に壁高は低く，ほとんど壁はない状態である。床面はソフトロームで軟らかい。ただ，第31号住居跡に比べると，本跡の床面が若干高く，２～３cmの差をもっている。ピットは３か所検出され，規模は径40～50cm・深さ41～51cmである。ピットは全体に南側に寄っていて，不規則な配列のため，主柱穴の判別はできない。炉は，検出されていない。

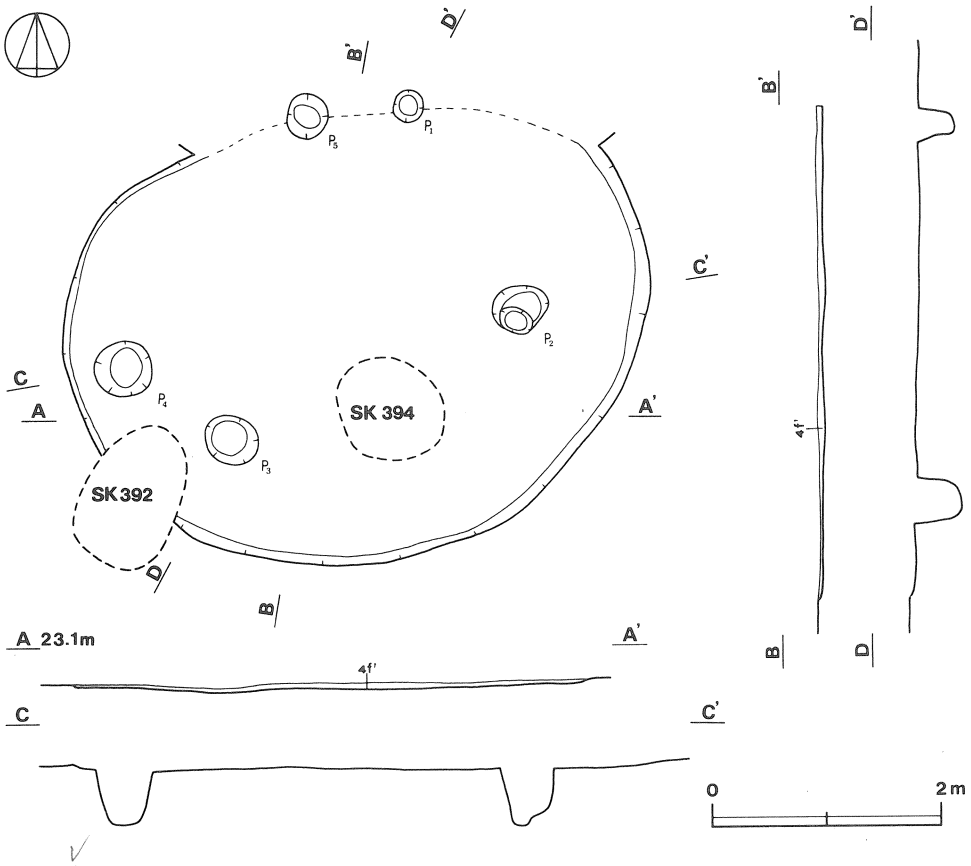
覆土は前記のような理由で，１層だけである。

遺物は，縄文土器片が床面から少量出土している。

**第33号住居跡出土土器**（第494～495図１～18）

１は，本跡の確認面から出土した破片２点が接合したもので，平縁の深鉢形土器の口縁部片である。口縁部文様帯は，隆線とこれに沿う沈線により楕円形および長楕円形に区画され，区画内には単節縄文ＲＬが斜位回転で充塡されている。内面は横ナデ整形と考えられるが，剝落が著しく不明瞭である。胎土には石英，長石粒などの小石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は30.0cmで，現存高は8.2cmである。

２は，本跡の南西側の覆土から内面を上に向けて，口縁部を南側にして出土したもので，平縁のキャリパー形を呈する深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は隆線とこ

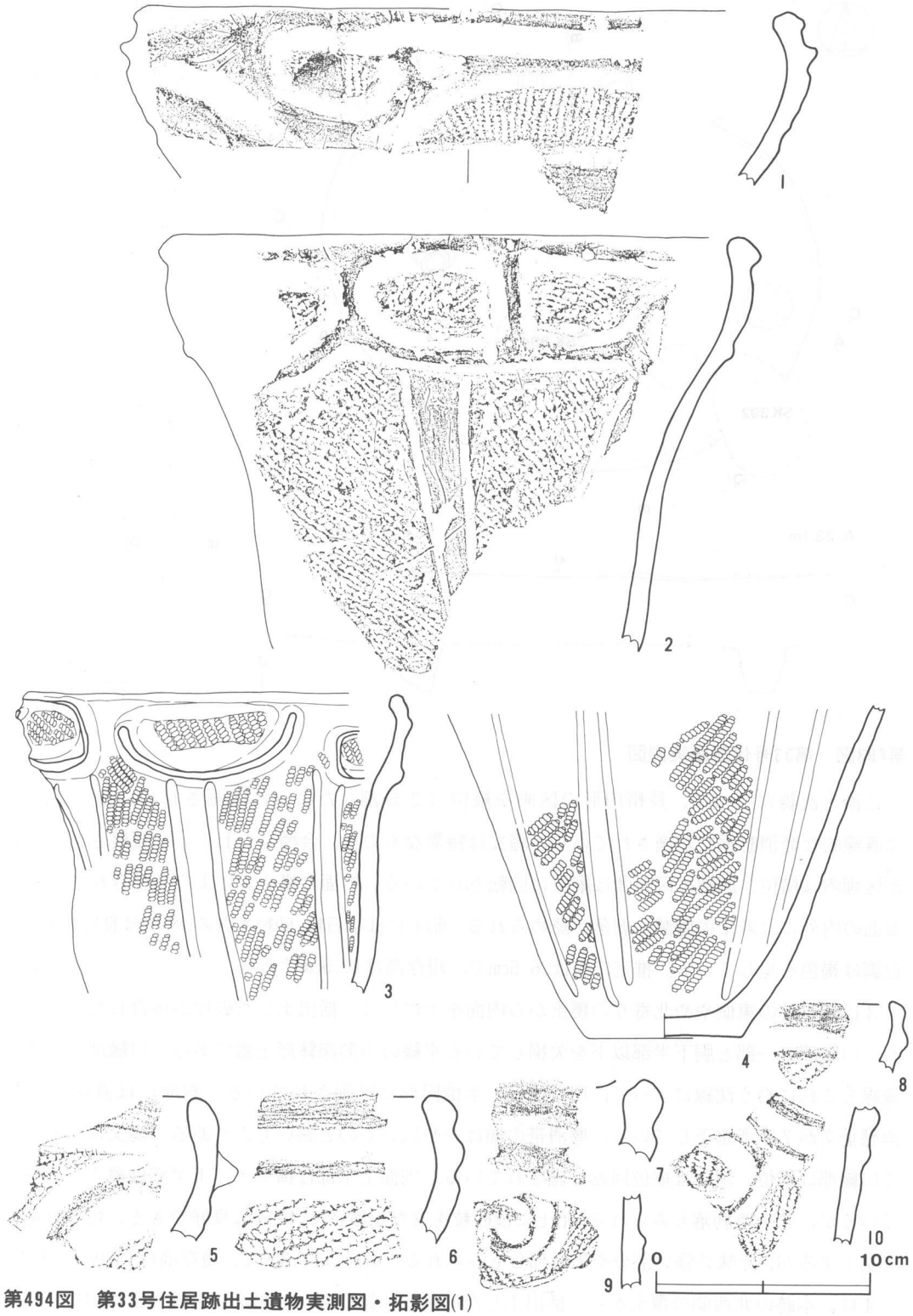



**第493図　第33号住居跡実測図**

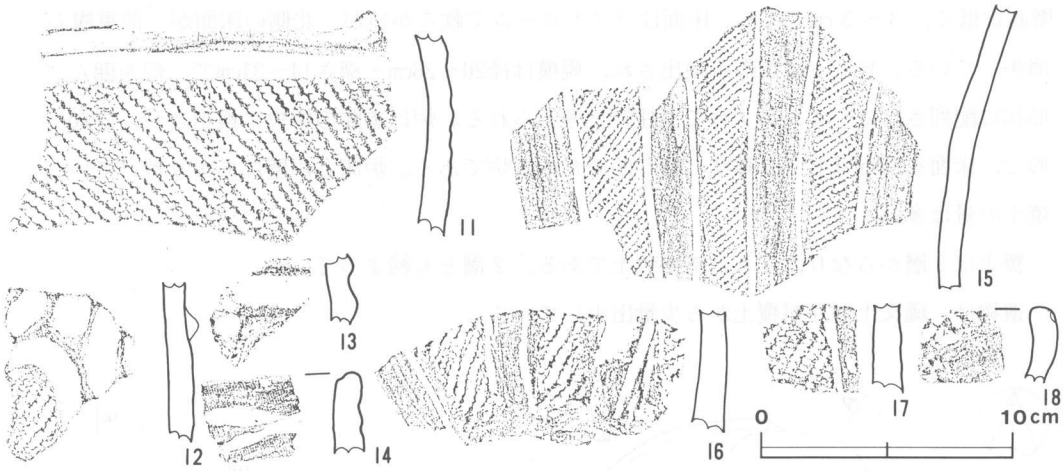
れに沿う沈線によって，長楕円形の区画を縦位に２分割したように区画されている。胴部には直線的な磨消懸垂文が施されている。縄文は特異なもので，合撚りのＬ｛$\frac{R}{L}$と観察され，口縁部区画内は横位、胴部の区画間は縦位に回転されている。内面は横ナデにより調整されている。器面の内外には若干の磨滅と剝落が認められる。胎土には小石粒,砂粒を含み,焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は26.6cmで，現存高は19.5cmである。

３は，本跡の東側やや北寄りの覆土から内面を上にして一括出土した破片が接合したものである。口縁部の一部と胴下半部以下を欠損している平縁の小形深鉢形土器である。口縁部文様帯は隆線とこれに沿う沈線によって，円，楕円，半楕円形に区画されている。胴部には直線的な磨消懸垂文が７か所垂下している。磨消帯の幅はやや広いものと狭いものがある。縄文は単節ＲＬで口縁部は横位，胴部は縦位回転で施されている。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデを施しているが，若干の剝落もみられる。胎土には砂粒を含むが緻密で,焼成は良好である。色調は褐色を主とするが，赤味の強い部分や黒い部分もみられる。口径は17.3cmで，現存高は13.9cmである。

４は，本跡の北西側の覆土から一括出土した破片と，確認面から出土した破片１点が接合した




第494図　第33号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)




**第495図　第33号住居跡出土遺物拓影図(2)**

もので，深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。胴下半部には磨消懸垂文が垂下し，区画間には単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。胴部の器壁の薄い点が特徴である。内面は横ナデにより調整されているが，炭化物の付着もみられる。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が赤味の強い褐色，内面が褐色および暗褐色を呈している。底径は7.2cmで，現存高は15.3cmである。

５・６は，口縁部文様帯が隆線により区画されているもので，第28号住居跡の１と同一個体である。７・８も，口縁部文様帯が隆線で区画される小片で，８は薄手である。９・10・12・13は，同一個体と考えられ，器面全体に隆線による曲線的モチーフが描かれている胴部片で，モチーフ間に縄文が付されている。内面の剝落が著しい。11は，口辺部片で，上端に隆線を巡らし，以下に縄文を施している。14は，口縁部文様帯を沈線で区画している小片である。15～17は，直線的磨消帯を有する胴部片である。15は，くびれ部片で，区画間に単節縄文ＲＬを縦位回転で施文している。16は，底部近くの破片で，下端部は横ナデが加えられている。18は，口縁直下に刺突文を巡らしている。５は，本跡の確認面から出土したもので，他は覆土から出土している。

本跡から出土した土器は，あまり多くはないが，器形復元ができた１～４および覆土出土の破片から判断すれば，本跡の時期は加曽利ＥIII式期と思われる。

**第34号住居跡**（第496図）

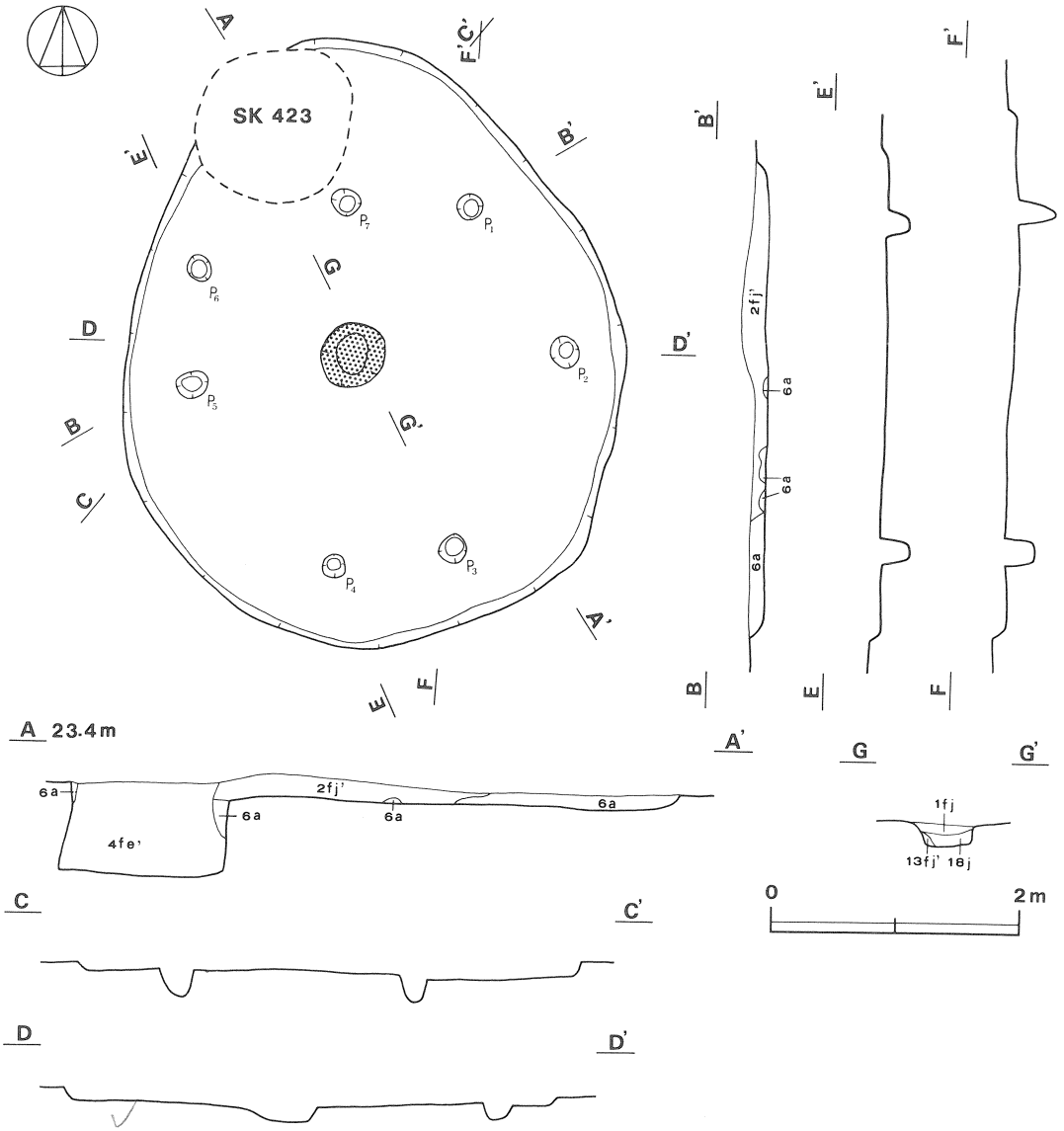
本跡は，遺跡の東部E2$j_0$区を中心に確認されたもので，第32号住居跡の南側５ｍに位置している。北側で第423号土壙と重複している。新旧関係は，不明である。

平面形は，長径4.9m・短径4.0mの楕円形で，長径方向はＮ－５°－Ｗを指している。北壁の一部は重複のため欠損しているが，残っている壁は硬く，床面からは外傾して立ち上がっている。

壁高は低く，３～５cmである。床面はソフトロームで軟らかいが，北側の床面が一部重複のため消失している。ピットは７か所検出され，規模は径20～26cm・深さ14～31cmで，炉を囲んで七角形状に配列されているためすべて主柱穴と考えられる。炉は本跡の中央に検出され，径60cmの円形で，床面を28cmほどすり鉢状に掘り凹めた地床炉である。炉床と炉壁はあまり焼けていないが焼土の量は多い。

覆土は２層からなり，ともに暗褐色土である。２層とも締まっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。




第496図　第34号住居跡実測図

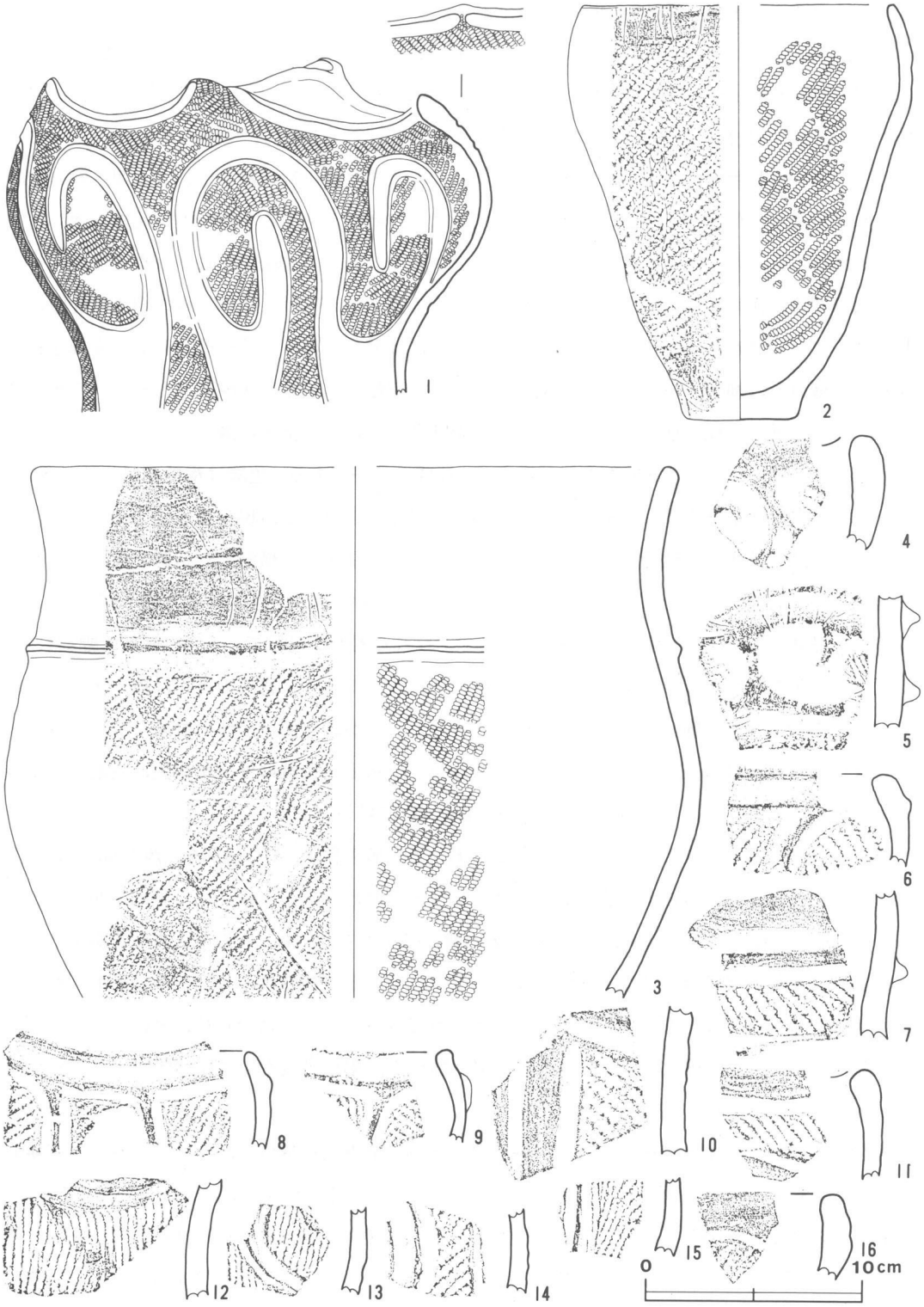
**第34号住居跡出土土器**（第497～498図１～38）

１は，本跡のほぼ中央から南東側にかけての覆土から外面を上に向けて出土した大破片を中心に，その他覆土から出土した小破片が接合したもので，胴上半部以上がほぼ完形になったもので，胴下半部は全く欠損している。胴下端の断面はきれいに打ち欠かれて，さらに磨かれたように磨滅しており，再利用するための加工と考えられる。口縁部は緩い波状縁を呈し，２個１対の突起が相対するように付されている。大きい方の突起は，口縁直下を巡る１条の太い沈線を囲い込むようにつけられ，互いに逆方向をむいている。小突起は，１条の沈線が左右から寄り合い，その中央部の沈線が途切れわずかに盛り上るだけである。胴上半部には，２本１組の細めの沈線により曲線的モチーフが連続して施文され，モチーフ間には撚りの整った単節縄文ＲＬが充塡されている。口縁直下は横位，胴上半部は縦位を基本として回転している。沈線間は丁寧にヘラナデされている。内面も同様な横ナデによりきれいに調整されている。全体に薄手で非常に丁寧な作りの土器といえる。胎土には微砂を含むが緻密で，焼成は良好である。色調は褐色を呈しているが，胴下端部は，２次加熱を受け赤褐色を呈している。口径は17.1cmで，現存高は15.0cmである。

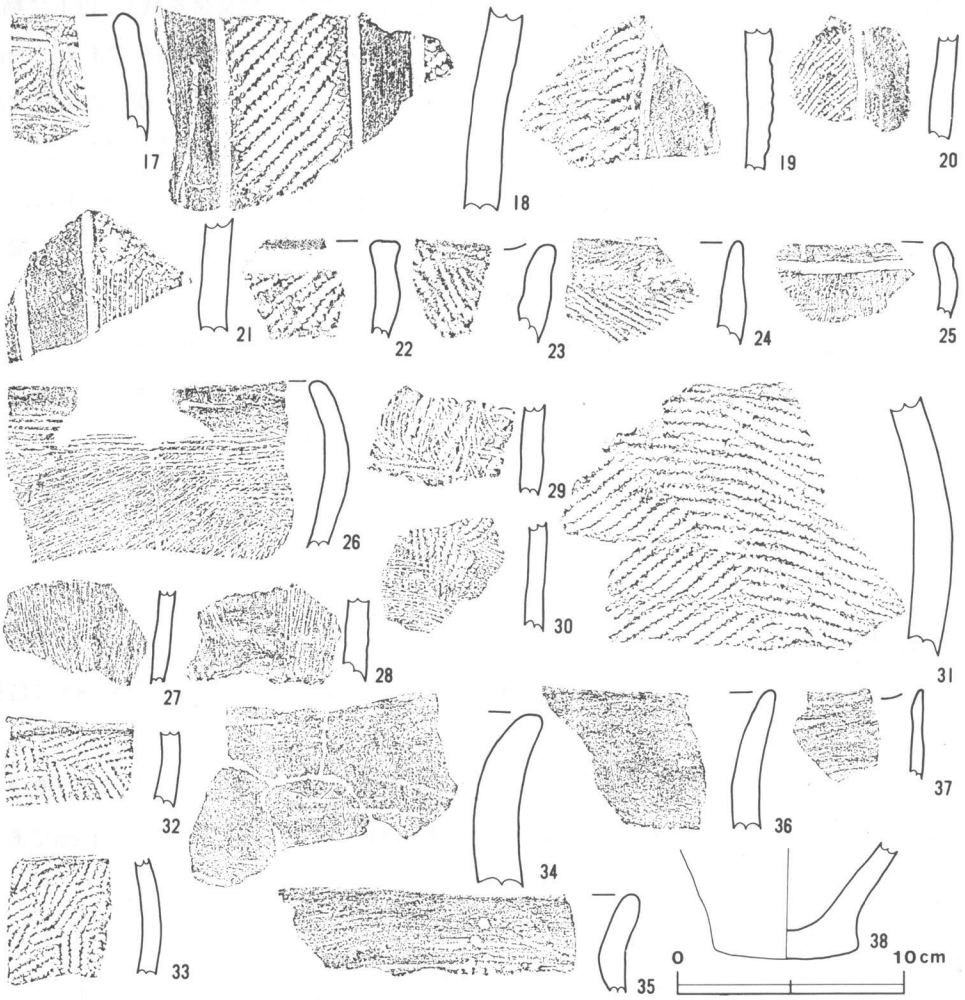
２は，本跡の南東側の壁近くの覆土から口縁を北西方向に向けて横転した状態で出土したものである。上位になっていた部分の口縁部を約半周ほど欠損するが，他はほぼ完存している。平縁の小形深鉢形土器で，口縁部が内湾し，頸部でくびれる器形を呈している。口縁部に幅約1.5cmほどの無文帯を残し，以下に単節縄文ＲＬが縦位回転されている。底部の近くは縦ナデがなされている。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデと思われるが，器面が全体に磨滅していて明らかではない。胎土には小石粒，微砂を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。推定口径は14.4cm，器高は19.3cm，底径は5.2cmである。

３は，本跡のほぼ中央部の，炉の少し北側にあたる位置の覆土から口縁部を北西方向に向けて出土した破片が接合したもので，甕に近い形状を呈する深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての大破片である。口縁部には約8.0cmほどの幅の広い無文帯をもち，１条の突帯を巡らして胴部と区画し，胴部は全面に単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。残存部には３か所の結節回転文が付されている。内外面とも丁寧な横ナデが加えられている。胎土には小石粒，微砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈しているが，胴下端部は黒褐色に変色している。推定口径は29.1cmで，現存高は24.6cmである。

４は，波状縁を呈する口縁部片で，隆線で楕円区画と渦巻文を構成し，区画内に縄文を充塡している。５も４と同様の手法で区画がなされている口辺部片で，区画内に無節縄文を施している。7･10は，口辺部片である。７は，上端に無文帯を有し，隆線で口縁部文様帯を楕円形に区画し，内部に縄文を施している。10は，沈線で口縁部文様帯を区画し，以下に磨消帯を垂下させている。６・８・９・13～15は，隆線による曲線的モチーフが全面に展開されているもので，６・８・９




第497図　第34号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)




**第498図　第34号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)**

は口縁部片で，13～15は胴部片である。8は，縦長の区画を有している。9は薄手である。いずれもモチーフ間に縄文が付されている。12は，沈線による施文と縄文がみられるくびれ部片である。11・16・17は，口縁部文様帯を沈線で区画されているものである。11は，波状縁を呈し，区画内に縄文を施している。16は，逆U字状の区画内に縄文を充塡している。17は，非常に浅い沈線区画である。18～21は，直線的磨消帯を有する胴部片である。18は厚手で，19・20はやや薄手である。20の区画間には異条縄文を施し，21には縄文と縦位の条線文が併用されている。22は，口縁直下に1条の沈線を巡らし，以下に縄文を付している。23は，波状縁を呈する口縁部片で，縄文だけが施されている。24は，口縁部無文帯を有し，以下に無節縄文を施している。25～29は，条線文が付されたものである。25は，口縁直下に1条の沈線を巡らし，以下に蛇行する縦位の条

線文が施されている。26は，内湾する口縁部片で，口縁部にわずかに無文帯を残し，以下に横位，斜位に付している。27・28は，縦位に付されており，28は底部近くの胴下半部片である。29は，乱雑な条線文と沈線文が施されている。27～29は胴部片である。30は，縄文と横位の条線文が併用されている胴部片である。31～33は，口辺部片で，拓本の上端に1条の沈線を巡らし，以下に縄文を施している。31は，厚手で大粒の縄文を回転方向を違えて施文している。32・33は，同一個体と思われる。34～37は，無文の口縁部片である。34は厚手で，35・36は，内外面とも横ナデが加えられている。37は，波状縁を呈する口縁部片で薄手で無文である。

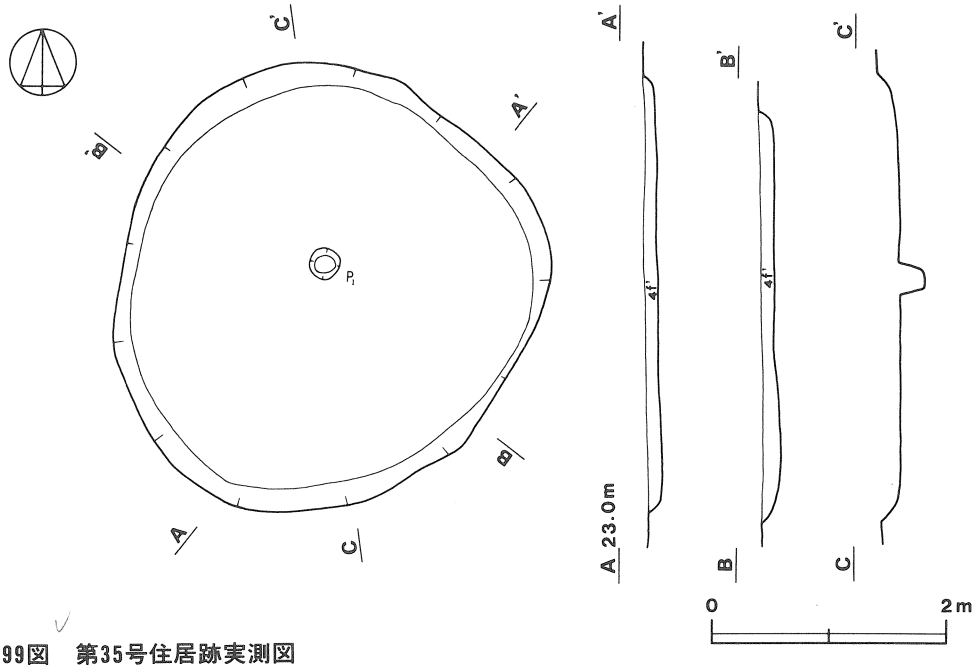
38は，本跡の確認面から出土した深鉢形土器の底部片で，底部は少し突出気味である。外面は縦ナデが施され，内面の剝落が著しい。胎土には砂粒を混入し，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗灰色を呈している。底径は6.3cmで，現存高は4.8cmである。

本跡から出土した土器片は，あまり多くはないが，器形復元できた1～3などから判断すれば，本跡の時期は加曽利E III式期と考えられる。

**第35号住居跡**（第499図）

本跡は，遺跡の東部F4$h_5$区を中心に確認されたもので，第30号住居跡の南西側8.5mに位置している。

平面形は，長径3.8m・短径3.4mの楕円形で，長径方向はN－19°－Eを指している。壁は東側がやや軟らかいが，ほかは硬く，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，12～17cmである。




**第499図　第35号住居跡実測図**

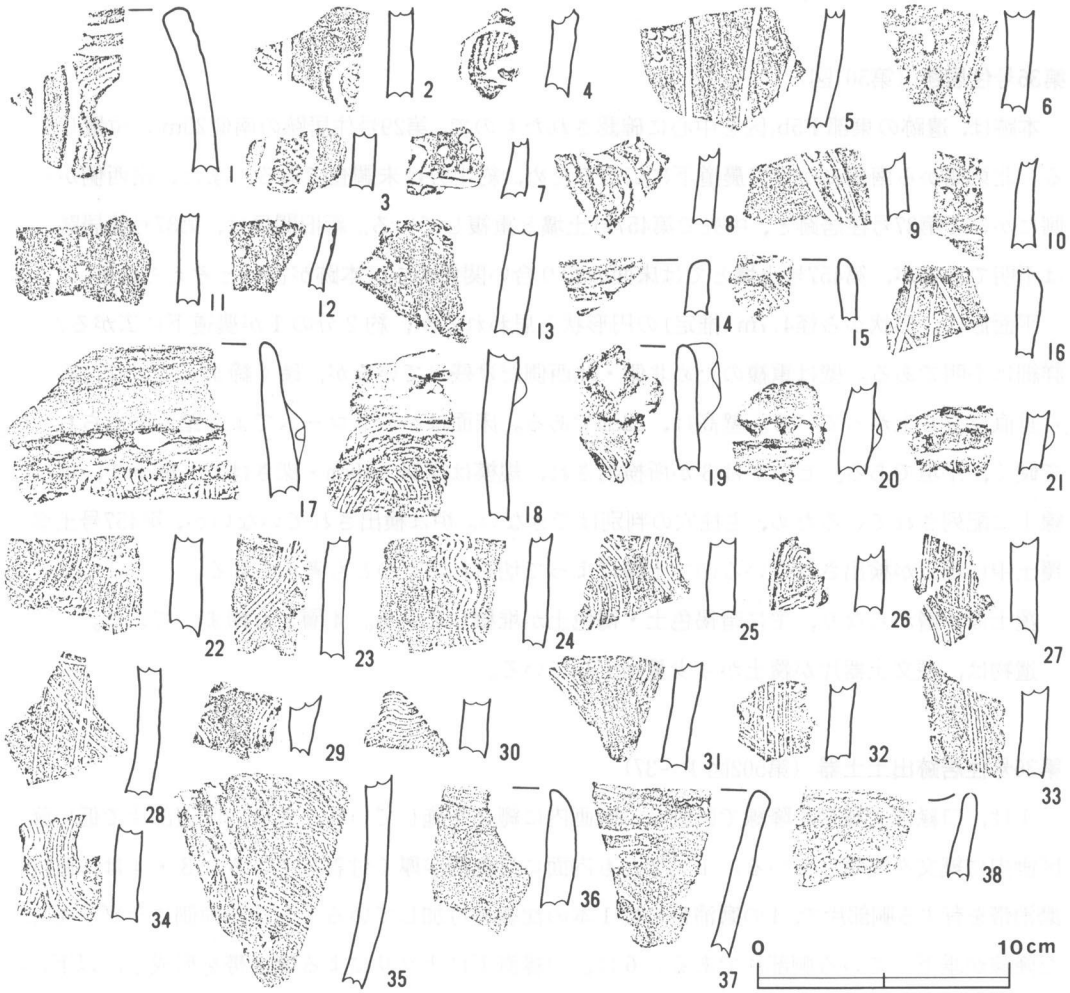
床面はハードロームでよく踏み固められていて硬いが，北西側から南東側にかけては８cm差の傾斜を示している。ピットは１か所だけ検出され，規模は径28cm・深さ23cmの楕円形で，中央に位置している。炉は，検出されていない。

覆土は１層で，褐色土が堆積している。ローム粒子を含み，締まっている層である。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

**第35号住居跡出土土器**（第500図１～38）

１～４は，曲線的な磨消縄文を有するものである。１は，内傾する口縁部片で，２～４は胴部の小片である。5～13は，沈線文と刺突文が組みあわされている胴部片である。５・６・９は，沈線区画間に刺突文を充塡している。刺突文には小さな円形刺突文，あるいは米粒状を呈するもの，爪形状を呈するものなどもみられる。11・12は，刺突文だけが付されている。14は，口縁直下に１




**第500図　第35号住居跡出土遺物拓影図**

条の沈線を巡らす小片である。15は，口縁直下に1条の凹線を付し，斜位の沈線を加えている。16は，乱雑な斜格子目状の沈線文を施している胴部片である。17～21は，口縁部無文帯を1条の貼付隆線で区切り，以下に条線文を施文している。隆線上に刺突や押圧を加えている。19には円形の貼付文を施している。17・19は口縁部片，18・20・21は口辺部片である。17の条線文は，櫛歯状の施文具により短かい刺突状を呈している。18・19は，曲線的に施文されている。22～35は胴部片で，22～27・29～31・34・35は，曲線的に施され，28・32・33は，直線的に付されている。28は，雑な斜格子目状を呈し，32・33は縦位に施されている。19・25・34は，暗褐色を呈しており，同一個体と考えられる。35は，2条の沈線文が加えられている。36～38は，無文の口縁部片である。36は口唇端部が薄くなっている。37・38は，外反しており，38は波状縁を呈している。

本跡から出土した土器は，いずれも小片で，しかも覆土から出土している。本跡の時期決定はむずかしいが，覆土の土器片から判断すれば，称名寺式期と考えられる。

**第36号住居跡**（第501図）

本跡は，遺跡の東部F5b$_1$区を中心に確認されたもので，第29号住居跡の南側20mに位置している。北東側から南側にかけて農道下に広がるため，約半分は未調査である。また，南西側から南側にかけて第37号住居跡と，中央で第457号土壙と重複している。新旧関係は，第37号住居跡とでは不明であるが，第457号土壙とでは床面の切り合い関係から，本跡が古いと考えられる。

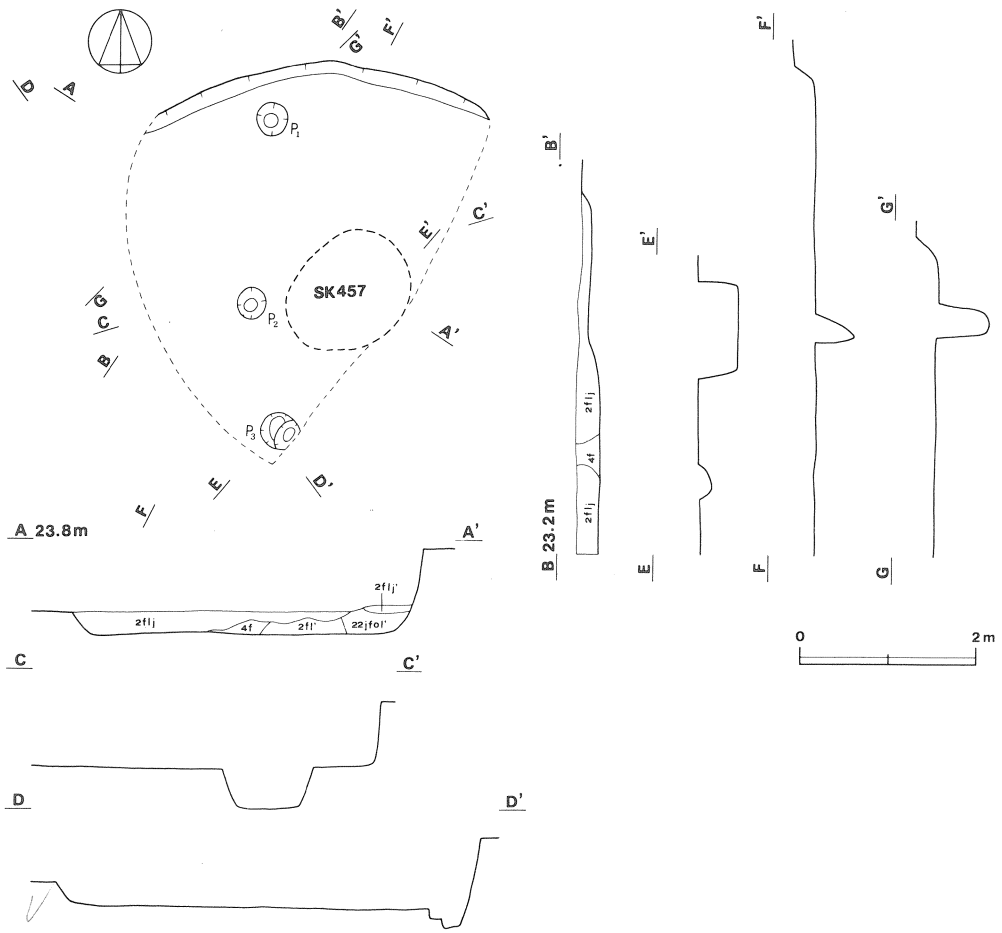
平面形は，形状から径4.7m(推定)の円形状と思われるが，約2分の1が農道下に広がるため，詳細は不明である。壁は重複のため北側・北西側だけ残っているが，硬く締まっており，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は，22cmである。床面はハードロームでよく踏み固められていて硬く，平坦である。ピットは3か所検出され，規模は径34～40cm・深さは22～60cmで，ほぼ直線上に配列されているため，主柱穴の判別はできない。炉は検出されていないが，第457号土壙の覆土中に焼土が検出されているので土壙によって切られたものとも考えられる。

覆土は4層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。4層とも締まっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

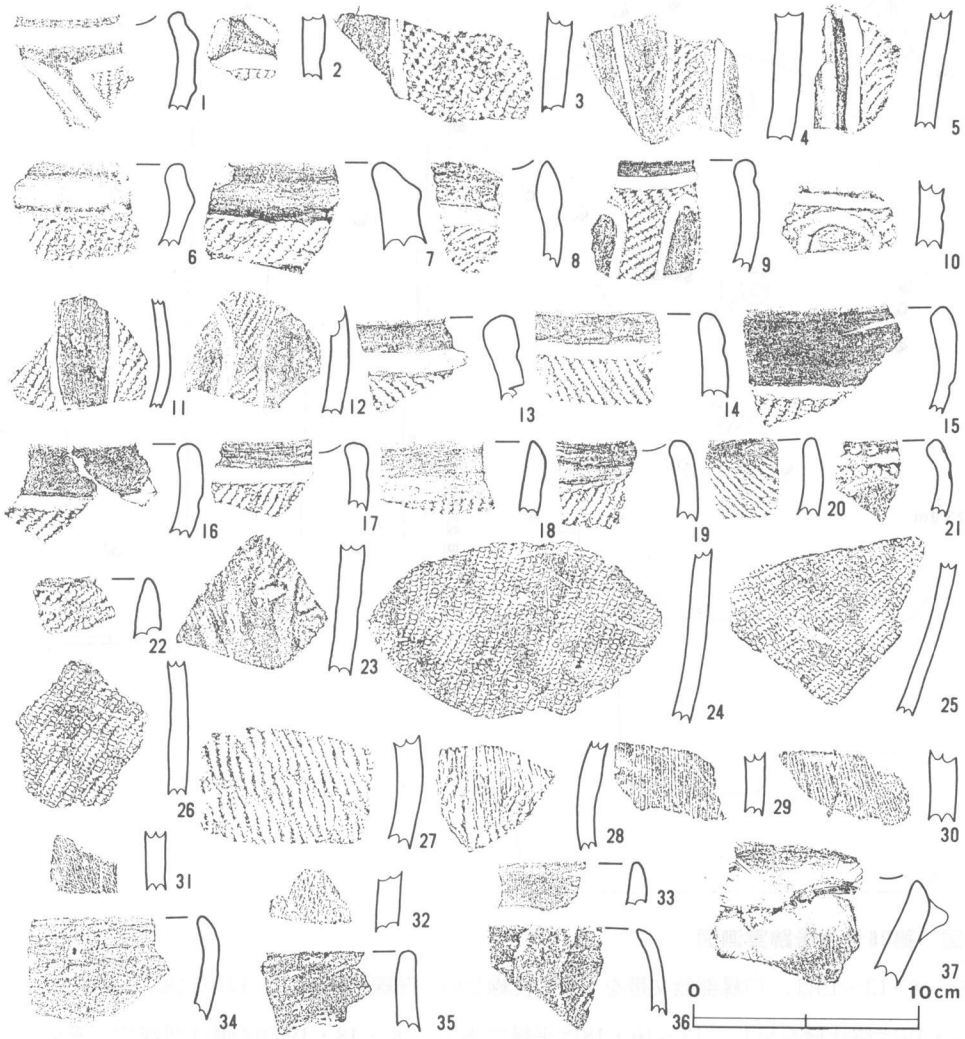
**第36号住居跡出土土器**（第502図1～37）

1は，口縁部文様帯を隆線で区画し，区画内に縄文を施している。2は，口辺部片で低い隆線区画内に縄文を充填している。1・2とも内面に炭化物が厚く付着している。3・4は，直線的磨消帯を有する胴部片で，4の磨消帯には1本の沈線を付加している。5は，両側にナゾリを加えた隆線が垂下している胴部片である。6は，口縁直下にナゾリによる無文帯を形成し，以下に縄文を施している。7は，厚手の口縁部片で，口縁部無文帯を段により区画し，以下に縄文を施し




**第501図　第36号住居跡実測図**

ている。8・13～19は，口縁部無文帯を1条の沈線ないし凹線で区画し，以下に縄文を付している。8・17・19は波状縁を呈し，13～16・18は平縁である。8・18・19の区画は凹線で，その他は沈線である。15は無文帯の幅が広いが，他は比較的狭い。9は，口縁直下に1条の沈線を巡らし，以下に逆U字状の磨消帯を施している。10～12は，曲線的磨消帯を有する胴部片で，区画外に縄文を施している。11は，薄手でU字状の磨消帯を有している。20は，口縁部に無文帯を残し，以下に縄文を施している。21は，小形土器の口縁部片で，口縁直下に1条の沈線を巡らし，その上下に円形刺突文を施し，胴部に曲線的磨消帯を有している。外面に炭化物が付着している。22は，口縁部の小片で全面に縄文が付されている。23～27は，縄文だけが施文されている胴部片である。23は，胴下半部片で縄文がわずかにみられる。24・25は同一個体と思われる。28は，くびれ部片で縄文と縦位の条線文が併用されている。29～32は，条線文が付されている胴部の小片である。29・30は縦位に，31・32は乱雑な斜格子目状に施文している。33～35は，無文の口縁部片で，34は口縁部が内湾し，外面に炭化物が付着している。36は，薄手で器面が剝落している。37は，波




**第502図　第36号住居跡出土遺物拓影図**

状縁を呈する口縁部片で，蛇行気味の隆線を口縁に沿って貼付している。

2・3・13・14・23・32は，本跡の炉内から，他は覆土から出土している。

本跡からの出土土器はあまり多くはないが，炉内から出土した土器などから判断すれば，本跡の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

**第36・37号住居跡出土土器**（第503～504図38～66）

40～64は，第36・37号住居跡の重複部分から出土したものである。

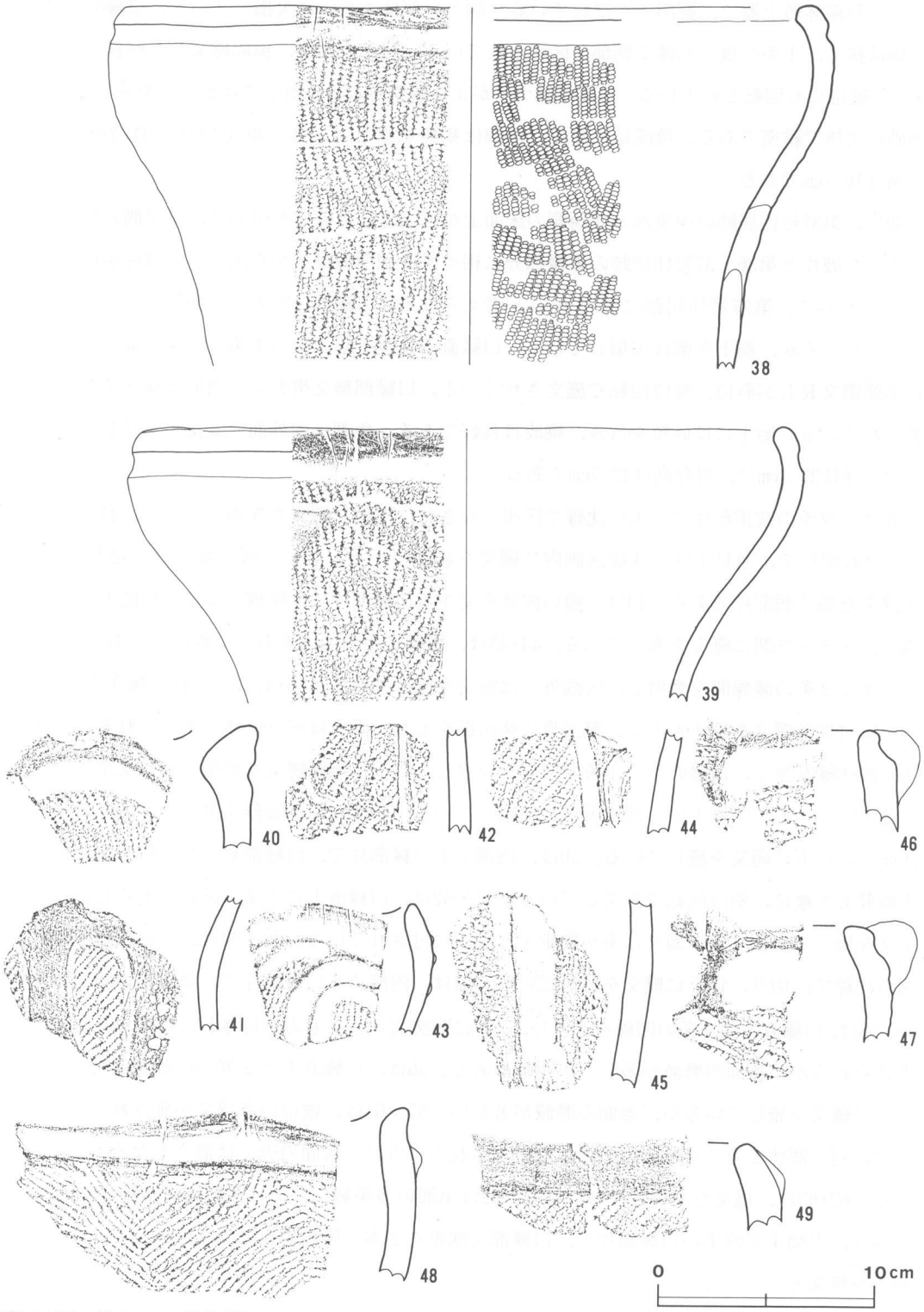
38は，第37号住居跡の南東側の床面上から出土した破片を中心に，第36・37号住居跡の重複部分の覆土から出土した破片が接合したもので，第37号住居跡に伴うものと考えられる。平縁のキャ

リパー形深鉢形土器で，胴部でくびれている。胴下半部はきれいに欠損している。口縁部無文帯の幅は狭く，１条の浅い凹線で胴部と区切られている。胴部全面に，単節縄文ＲＬが斜位回転を主に，縦位にも回転されている。内面は横ナデがよく観察される。胎土には小石粒を少し含むが，微砂が主体で緻密である。焼成は良好で，色調は褐色を呈している。推定口径は31.7cmで，現存高は16.7cmである。

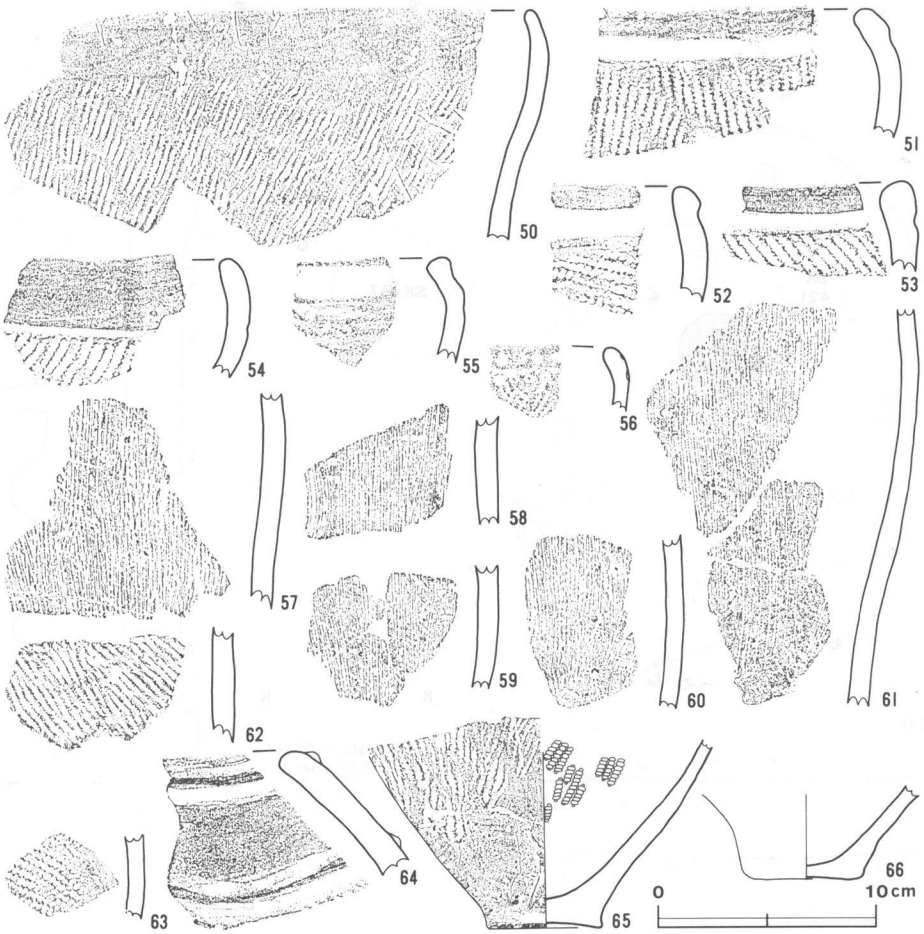
39は，第37号住居跡の中央部と北西側の床面上から出土した破片を中心に，南東側の覆土から出土した破片と第36・37号住居跡の重複部分に相当する個所の覆土から出土した破片が相互に接合したもので，第37号住居跡に伴うものと考えられる。口縁部が内湾し，胴部でくびれる器形を呈しているが，胴下半部は欠損している。口縁直下に浅く幅の広い１条の凹線を巡らし，以下に単節縄文ＲＬが斜位，縦位回転で施文されている。口縁部無文帯および内面は横ナデにより調整されている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は内外面とも褐色を呈している。推定口径は29.4cmで，現存高は12.7cmである。

40は，厚手の波頂部片で，太い沈線で区画がなされ，内部に縄文を充塡している。41は，胴部のくびれ部片で，逆Ｕ字状の沈線区画内に縄文を施している。42は，縄文地文上に逆Ｕ字状の沈線文を描く胴部片である。43は，緩い波状を呈する口縁部片で，隆線による曲線的モチーフを描き，モチーフ間に縄文を施している。44•45は，隆線による区画を有する胴部片である。45は，垂下する２条の隆線間を磨消し，区画外には縄文を施している。46•47は，口縁部無文帯を有し，以下に付加条縄文を施すもので，無文帯に突出部をもち，両者は同一個体と考えられる。48は，緩い波状縁を呈し，口縁直下に１条の凹線を巡らし，以下に無節縄文を縦位の羽状を呈するように施文している。凹線下の一部は舌状に突起している。49は，口縁部無文帯を１条の貼付隆線で区画し，以下に縄文を施している。50は，内湾する口縁部片で，口縁部無文帯を残し，以下に単節縄ＲＬを縦位，斜位回転で施文している。51・52は，口縁直下に１条の凹線を巡らし，以下に縄文を施している。51の縄文は条が縦走するように付されている。53・54は，口縁部無文帯を１条の沈線で区切り，以下に縄文を付している。54は，内湾する口縁部片で，無文帯の幅がやや広い。55は，口縁直下に１条の凹線を巡らし，以下に刺突文らしいものが付されている以外は無文と考えられるが，器面の磨滅が著しく不明瞭である。56は，口縁直下に２列の円形刺突文を付し，以下に縄文を施しているが，器面の磨滅が著しい。57～61は，縦位の条線文が施されている胴部片で，同一個体と考えられる。61の下端にみられるように，底面の近くは無文となるものと思われる。62•63は，縄文だけが付されている。62は単節の多条縄文，63は複節縄文が施されている。

64は，内傾する厚手の口縁部片で，口縁部文様帯を２本の隆線を巡らして区画しているが，区画内を無文としている。




第503図　第36・37号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)



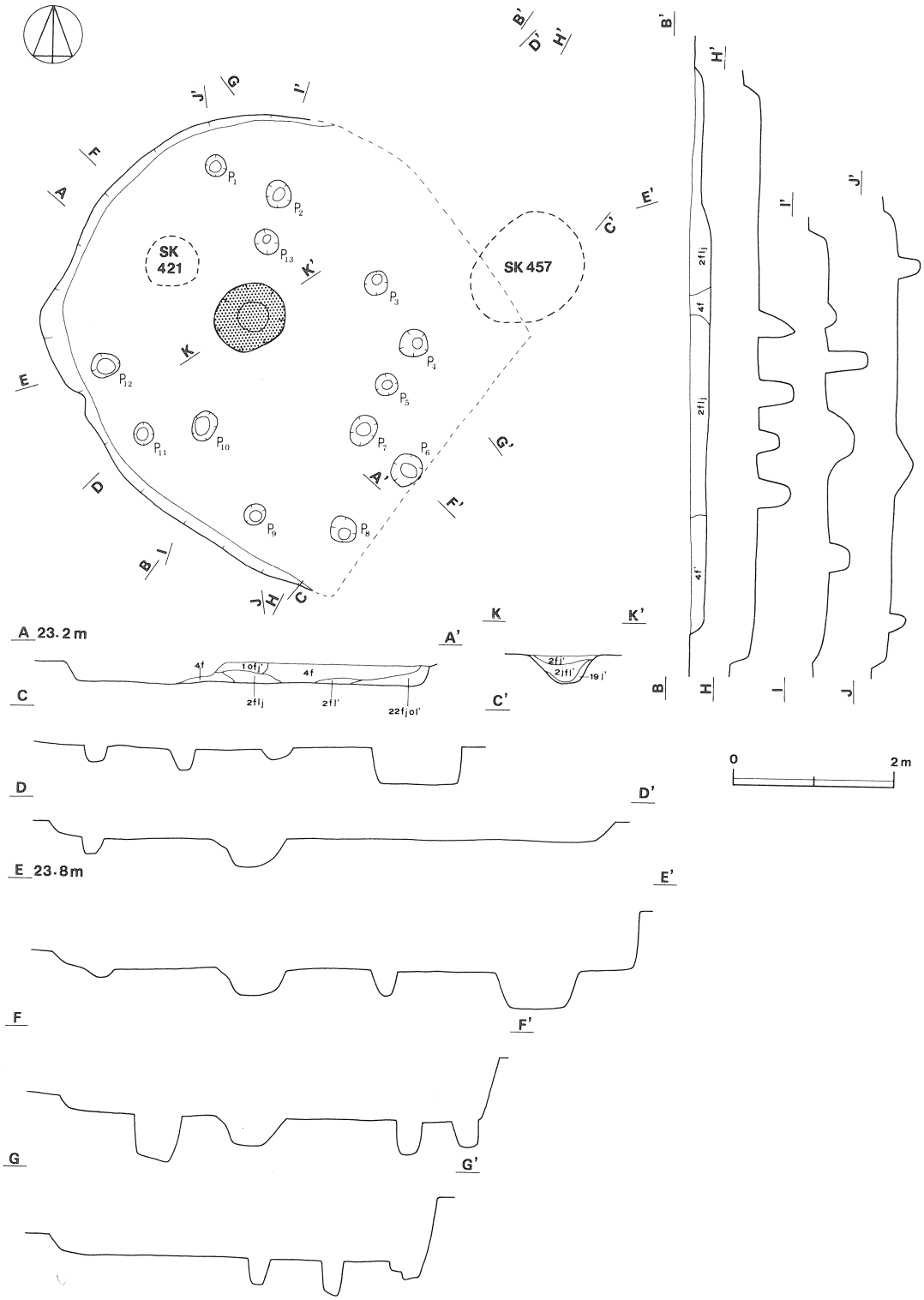

**第504図　第36・37号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)**

65は，第36・37号住居跡の重複部分の東側の覆土から伏せられた状態で出土した深鉢形土器の底部片である。底面の中央部が少し凹み，上げ底状を呈している。外面には単節縄文ＲＬが縦位，斜位回転で施文されている。底面の近くは横方向のヘラナデが著しい。内面は縦方向のヘラナデが施されている。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。底径は5.3cmで，現存高は7.1cmである。

66は，第36・37住居跡の重複部分の覆土から出土した深鉢形土器の底部片である。器面は横ナデにより整形されている。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。底径は5.6cmで，現存高は3.9cmである。

## 第37号住居跡（第505図）

本跡は，遺跡の南部 $F4b_0$・$F5b_1$区を中心に確認されたもので，第30号住居跡の北東側６ｍに位




第505図　第37号住居跡実測図

置している。東の農道下に遺構が広がっているので，約３分の１は未調査である。また，北東側・北側で第36号住居跡と，北西側で第421号土壙と重複している。土壙との新旧関係は，不明である。

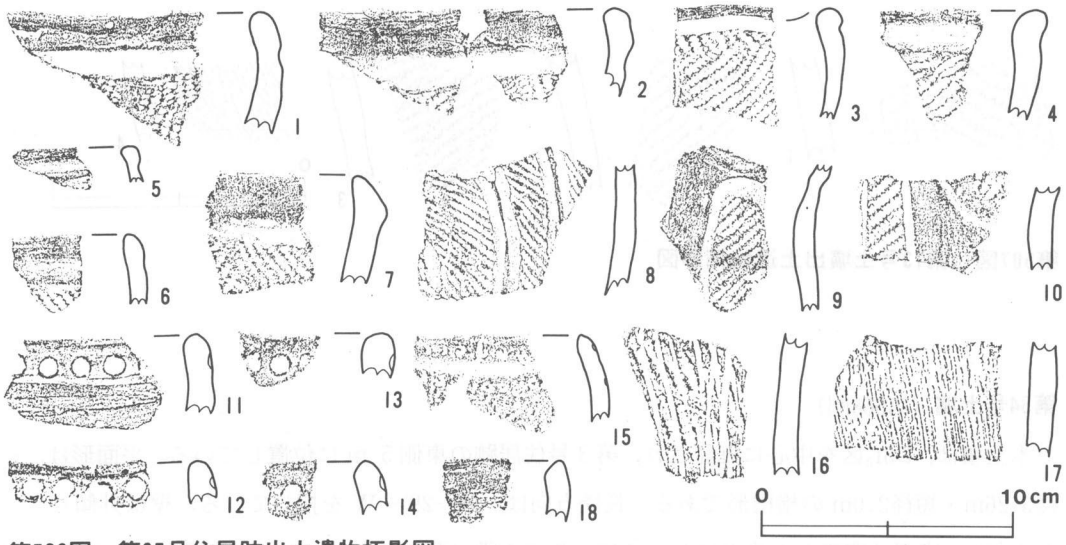
平面形は，長径6.2m(推定)・短径5.2m(推定)の楕円形状と思われる。長径方向は，N—49°—Wを指している。壁は南壁の一部に軟らかい部分が認められるが，欠損している北壁を除くほかの壁は，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は，12～21cmである。床面はハードロームでよく踏み固められていて硬く，平坦である。ピットは13か所検出され，規模は径30～40cm・深さ13～45cmである。配列が不規則で全体として南東側に片寄っているため，主柱穴は判別できない。炉は本跡の中央に検出され，径88cmの円形で，床面を36cmほどすり鉢状に掘り凹めた地床炉である。炉床と炉壁はあまり焼けておらず，炉の覆土の焼土量も少ないため使用期間は短かかったと考えられる。

覆土は６層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。全層とも締まっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

**第37号住居跡出土土器**（第506図１～18）

１・２は，口縁部に１条の沈線を巡らし，以下に縄文を施している。あるいは同一個体かもしれない。３は，緩い波状を呈する口縁部片で，口縁直下に１条の沈線を巡らし，胴部に縄文と沈線文を施している。４～６は，口縁直下に１条の凹線を施し，以下に縄文を付している。７は，口縁部に幅の狭い無文帯を残し，以下に縄文を施しているが，器面の磨滅が著しい。８は，細い隆線で曲線的モチーフが描かれている胴部片で，モチーフ間には縄文を付している。９・10は，胴部のくびれ部片で，U字状，逆U字状の沈線区画内に縄文を充塡しているが，共に磨滅や削落




**第506図　第37号住居跡出土遺物拓影図**

がみられる。11～14は，口縁部にやや大きめの円形刺突文を1列施している。15は，口縁直下の浅い沈線を挟んで小さな円形竹管文を施し，以下に縄文を付しているが，器面の磨滅が著しく，文様は不鮮明である。16は，縄文地文上に縦位の沈線文を乱雑に施文している胴部片である。17は，縄文と縦位の条線文が併用されている胴部片である。18は，無文の口縁部片である。

本跡から出土した土器はあまり多くはないが，本跡に伴うと考えられる第503図38・39や覆土から出土した土器片から判断すれば，本跡の時期は加曽利E III式期と考えられる。

## 第3節　土壙と出土土器

主な土壙を記述し，残りは一覧表にして掲載した。

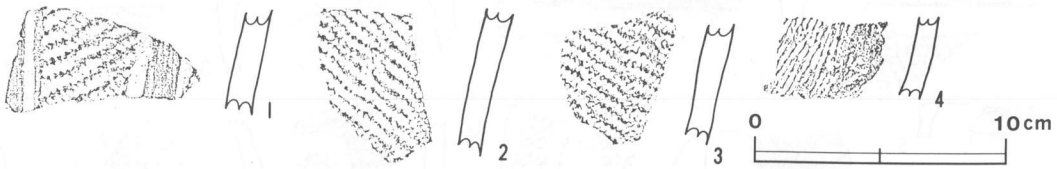
**第13号土壙**（第558図）

本土壙は，C2$j_9$区を中心に確認され，遺跡の北端に位置している。平面形は，径2.52mの円形である。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，18cmである。覆土は，2層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から10点出土している。

**第13号土壙出土土器**（第507図1～4）

1は，直線的磨消帯が垂下する胴部片で，区画間に縄文を施している。2～4は，縄文だけの胴部片である。2・3は単節，4は無節縄文が付されている。

本壙からは10点の土器片が出土しており，主体は加曽利E III式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利E III式期と考えられる。

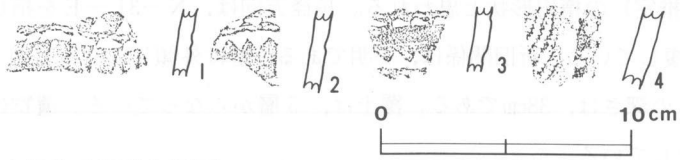



**第507図　第13号土壙出土遺物拓影図**

**第34号土壙**（第568図）

本土壙は，D3$f_2$区を中心に確認され，第3号住居跡の東側5mに位置している。平面形は，長径3.26m・短径2.0mの楕円形である。長径方向は，N—29°—Wを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は南西から北東にかけて40cm差で2段に掘りこまれている。確認面からの深さは，

最深部で91cmである。覆土は，２層からなっている。遺物は，縄文時代前期（浮島式）の土器片などが覆土から７点出土している。




**第508図　第34号土壙出土遺物拓影図**

**第34号土壙出土土器**（第508図１～４）

１～３は，いずれも薄手の胴部片で，いわゆる三角文が施され同一個体と思われる。前期の浮島Ⅲ式土器である。４は，中期のもので，低い隆線と縄文が施されている胴部の小片である。

本壙からは７点の土器片が出土しているが，前期のものと中期のものが混在しており，本壙の時期は不明である。

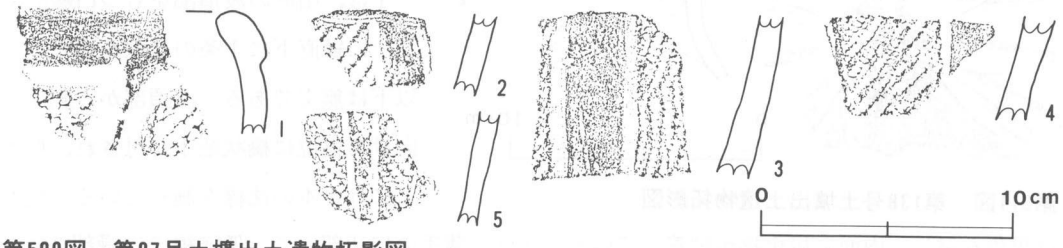
**第97号土壙**（第572図）

本土壙は，D3$j_2$区に確認され，第12号住居跡の南側８ｍに位置している。平面形は，長径1.03ｍ・短径0.82ｍの楕円形である。長径方向は，N―0°を指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，31cmである。覆土は，２層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から17点出土している。

**第97号土壙出土土器**（第509図１～５）

１は，口縁部文様帯を隆線で楕円形に区画し，区画内に複節縄文ＬＲＬを充塡している。２～４は，直線的磨消帯を有する胴部片で，区画間に縄文を施している。２の破片の上端には，横位に巡る沈線がみられ，口縁部文様帯の区画の一部と思われる。５は，縄文地文上に沈線を垂下させている胴部片である。２～４は単節，５は複節縄文である。

本壙からは17点の土器片が出土しており，主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。なお，本壙からは土器片錘１点が出土している。




**第509図　第97号土壙出土遺物拓影図**

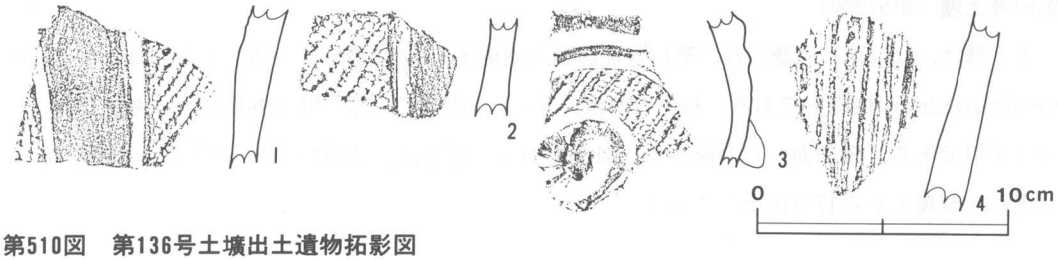
**第136号土壙**（第575図）

本土壙は，E3$a_1$区に確認され，第12号住居跡の南側12mに位置している。平面形は，長径1.38m・短径0.95m（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N－31°－Eを指している。東側で第135号土壙と重複している。新旧関係は，不明である。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，38cmである。覆土は，5層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から13点出土している。

**第136号土壙出土土器**（第510図1～4）

1・2は，直線的磨消帯を有する胴部片で，区画間に縄文を施している。3は，口辺部片で，隆線で渦巻状のモチーフを描き，モチーフ間に縄文を充填している。4は，厚手の胴部片で，半截竹管状施文具による太い沈線を縦位に施している。

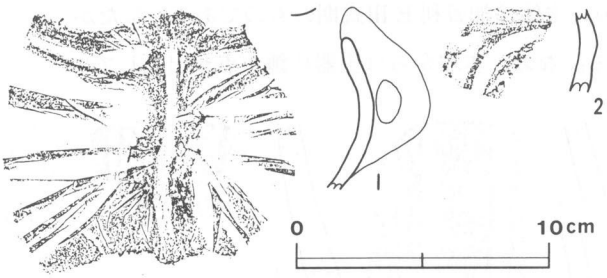
本壙からは13点の土器片が出土しており，主体は加曽利EⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。なお，本壙からは磨製石斧1点が出土している。




**第510図　第136号土壙出土遺物拓影図**

**第138号土壙**（第560図）

本土壙は，E3$j_0$区を中心に確認され，第31号住居跡の北西側7mに位置している。平面形は，径1.0mの円形である。壁は外傾して立ち上がり，底面はやや起伏をもっている。確認面からの深さは，58cmである。覆土は，6層からなっている。遺物は，縄文時代中期（加曽利E式）の把手付土器を中心に覆土の下層から12点出土している。




**第511図　第138号土壙出土遺物拓影図**

**第138号土壙出土土器**（第511図1～2）

1は，山形の波頂部をもつ口縁部片で，口縁直下に1条の沈線を巡らし，以下は無文である。波頂部から胴部に向けて縦位に橋状把手が付され，把手上には1本の沈線を施している。色調は黒色を呈し，内面に炭化物が付着している。2は，薄手の口辺部片で，低隆線で口縁部文様帯

を楕円形に区画し，区画内に縄文を施している。

本壙からは12点の土器片が出土しており，主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。須恵器片１点が混入している。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

**第141号土壙**（第594図）

本土壙は，D3j₁区を中心に確認され，第12号住居跡の南側８ｍに位置している。平面形は，長径1.72ｍ・短径1.53ｍの楕円形である。長径方向は，Ｎ－42°－Ｅを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，65cmである。覆土は，２層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から９点出土している。

**第512図　第141号土壙出土遺物拓影図**

**第141号土壙出土土器**（第512図１～３）

１は，波状を呈する口縁部片で，隆線による楕円区画内に縄文を充塡している。２は，直線的磨消帯を有する胴部片で，内面にわずかに炭化物が付着している。３は，口縁直下に１条の太い沈線を巡らし，口唇部と沈線の間には縄文を施している。

本壙からは９点の土器片が出土しており，主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。なお，本壙からは土器片錘１点が出土している。

**第143号土壙**（第594図）

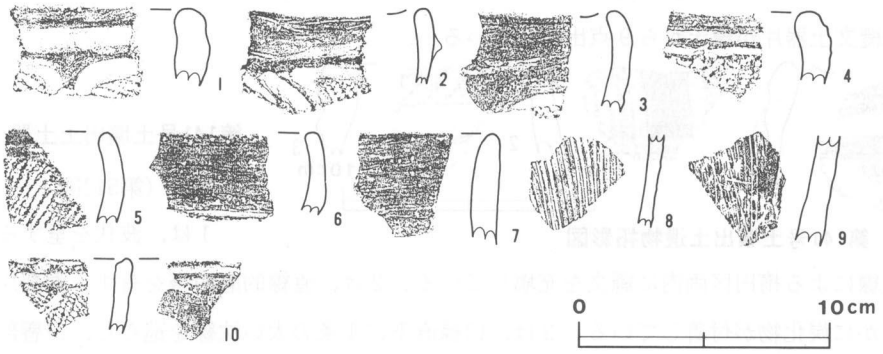
本土壙は，D3j₁区に確認され，第12号住居跡の南側８ｍに位置している。平面形は，長径0.75ｍ・短径0.6ｍ（推定）の楕円形と思われる。長径方向は，Ｎ－0°を指している。南側・南西側で，第140号土壙と重複している。新旧関係は，不明である。壁は外傾して立ち上がり，底面はやや起伏している。確認面からの深さは，34cmである。覆土は，１層だけである。遺物は，縄文土器片が覆土から33点出土している。

**第143号土壙出土土器**（第513図１～10）

１は，口縁部文様帯を低隆線で楕円形に区画し，区画内に縄文を充塡している。２は，薄手の口縁部片で，口縁部無文帯を１条の比較的高めの貼付隆線で区画し，胴部に隆線による施文を付している。３は，幅の広い口縁部無文帯を有し，以下に逆Ｕ字状の沈線区画を描き，縄文を充塡している。４は，口縁直下に２条の沈線を巡らし，以下は縄文を付している。５は，内湾する口縁部片で，口縁部にわずかに無文帯を残し，以下に縄文を施している。６は，幅の広い口縁部無

文帯を１条の沈線で区画している。７は，無文の口縁部片である。８は，薄手の胴部片で，粗い沈線文を縦位に施している。９は，やや厚手の胴部片で，垂下する沈線間に縦位の条線文を付している。10は，後期前半の粗製土器の口縁部片で，外面に縄文が付され，口唇部内面に１条の沈線を巡らしている。器面の磨滅が著しい。

本壙からは33点の土器片が出土しており，その主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。後期のものは10の１点にすぎず，混入と考えられる。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。なお，本壙からは土器片錘２点，礫器１点が出土している。



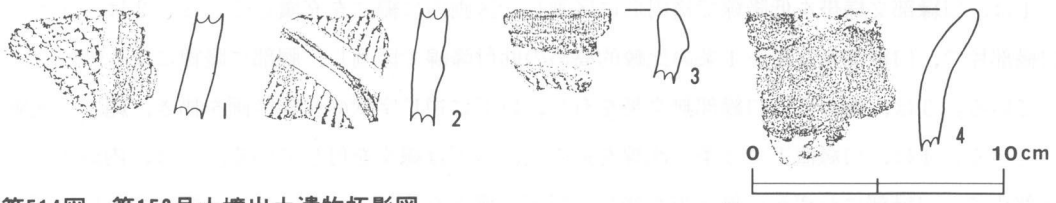

**第513図　第143号土壙出土遺物拓影図**

**第153号土壙**（第576図）

本土壙は，D3j$_4$区に確認され，第13号住居跡の北西側６ｍに位置している。平面形は，長径1.48ｍ・短径1.25ｍの楕円形である。長径方向は，Ｎ－17°－Ｗを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，25cmである。覆土は２層からなり，自然堆積である。遺物は，縄文土器片が覆土から19点出土している。

**第153号土壙出土土器**（第514図１～４）

１は，直線的磨消帯を有する胴部片で，区画間に複節縄文ＬＲＬを施している。２は，低隆線による曲線的区画が施されている胴部片である。３は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文を付している。無文帯と縄文部の境は段状を呈している。４は，強く外反する無文の口縁部片で，器面の磨滅が著しい。




**第514図　第153号土壙出土遺物拓影図**

本壙からは19点の土器片が出土しており，主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。この中に１点台付土器の破片が含まれている。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

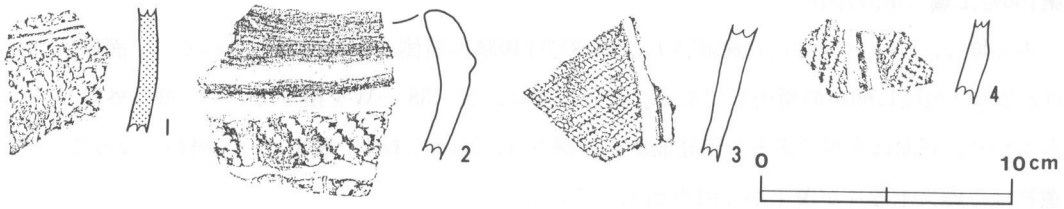
**第154号土壙**（第560図）

本土壙は，D3$j_5$区に確認され，第13号住居跡の北側４ｍに位置している。平面形は，径0.85ｍの円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，32cmである。覆土は２層からなり，各層がレンズ状に堆積する自然堆積である。遺物は，縄文土器片が覆土から14点出土している。

**第154号土壙出土土器**（第515図１～４）

１は，胎土に繊維を含む胴部片で，複節縄文の地文上に半截竹管状施文具による横位の沈線文を施している。前期の黒浜式土器である。２は，波状を呈する口縁部片で，隆線と沈線で口縁部文様帯を楕円形に区画し，区画内に縄文を施している。３・４は，低隆線による区画が施されている胴部片である。

本壙からは14点の土器片が出土しており，主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。




**第515図　第154号土壙出土遺物拓影図**

**第155号住居跡**（第576図）

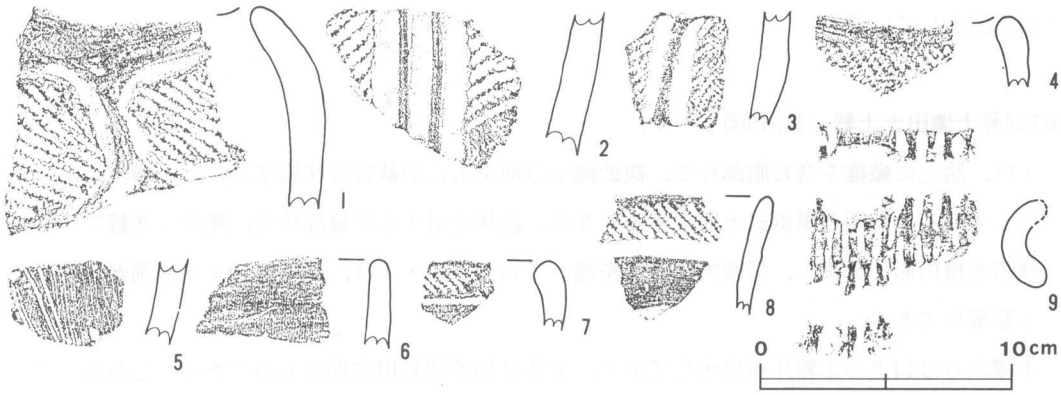
本土壙は，D3$j_5$区に確認され，第13号住居跡の北西側６ｍに位置している。平面形は，径2.1ｍ・短径1.02ｍの楕円形である。長径方向は，N－72°－Wを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，30cmである。覆土は，２層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から69点出土している。

**第155号土壙出土土器**（第516図１～９）

１は，波状を呈する口縁部片で，口縁部文様帯を低隆線で楕円形に区画し，区画内に縄文を施している。２・３は，隆線による区画を有する胴部片である。４は，口縁部にわずかに無文帯を残し，以下に縄文を施している。５は，縦位の条線文が付されている胴部片である。６は，無文

の口縁部片である。7・8は，口縁部に施された縄文を1条の沈線で区画し，以下に無文帯を設けている。7は，口唇部が若干内側に肥厚し，8は，薄手でやや外反している。9は，後期の安行II式期の釣手土器の釣手部片と思われ，小さな突起と沈線文が安行II式の特徴をよく表現している。7・8も薄手で，胎土・焼成からみて後期の土器片と思われる。

本壙からは69点の土器片が出土しており，主体は加曽利EIII式期のものである。後期と考えられるものは7～9の3点だけである。したがって，本壙の時期は加曽利EIII式期と考えられる。なお，本壙からは土器片錘3点が出土している。




**第516図　第155号土壙出土遺物拓影図**

**第160号土壙**（第577図）

本土壙は，E3a$_4$区を中心に確認され，第13号住居跡の西側4mに位置している。平面形は，長径2.28m・短径1.66mの楕円形である。長径方向は，N－38°－Wを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，36cmである。覆土は，3層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から61点出土している。

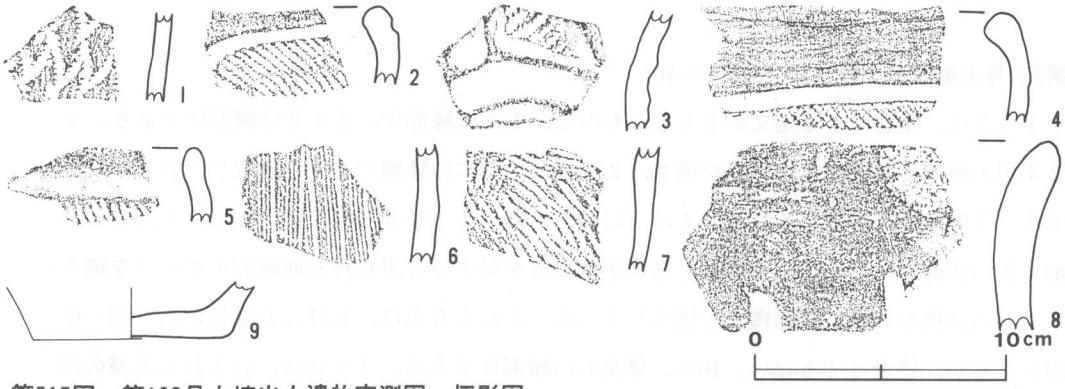
**第160号土壙出土土器**（第517図1～9）

1は，アナダラ属の貝殻腹縁による波状貝殻文を有している胴部片で，前期の浮島式土器である。2は，沈線で口縁部文様帯を楕円形に区画し，区画内に縄文を付している。3は，隆線による曲線的モチーフを描いている薄手の胴部片で，モチーフ間に縄文を施文している。4・5は，口縁部無文帯を1条の沈線ないし凹線で区画し，以下に縄文を施している。4の無文帯の幅が広く，5は幅が狭い。6は，条線文を縦位に施している胴部片である。7は，縄文だけの胴部片である。8は，厚手の口縁部片でやや外反しており，破片の下端に太い沈線による施文を有するが，全体の構成は判らない。

9は，本壙の覆土から出土した底部片で，外面は横ナデ，底面の近くは不定方向のナデにより調整されている。内面は未調整である。胎土に砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐

色，内面が灰褐色を呈している。底径は7.9cmで，現存高は2.1cmである。

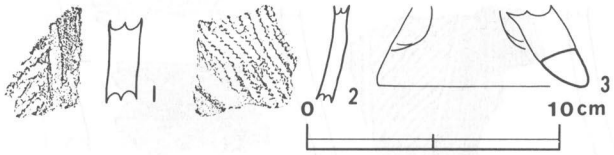
本壙からは61点の土器片が出土しており，主体は加曽利E III式期のものである。前期のものは1の1点だけである。以上から，本壙の時期は加曽利E III式期と考えられる。




**第517図　第160号土壙出土遺物実測図・拓影図**

**第199号土壙**（第579図）

本土壙は，E3a$_7$区に確認され，第15号住居跡の北側3mに位置している。平面形は，長径1.32m・短径1.10mの楕円形である。長径方向は，N—48°—Wを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，28cmである。覆土は3層からなり，各層がレンズ状に堆積する自然堆積である。遺物は，縄文土器片が覆土から8点出土している。




**第518図　第199号土壙出土遺物実測図・拓影図**

**第199号土壙出土土器**（第518図1～3）

1は，直線的磨消帯を有する胴部の小片である。2は，薄手の胴部片で，隆線による曲線的モチーフ内に縄文を充塡している。

3は，本壙の覆土から出土した台付土器の台部片である。外面は磨滅しており，調整方法は不明である。現存部で2か所の孔が見られ，孔は欠損しているので，形状は確かではないが，楕円形を呈するものと思われる。全体の数や配列も不明である。内面の孔の無い部分は縦ナデ，脚端部は横ナデが施されている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定底径は8.1cmで，現存高は3.1cmである。

本壙からは8点の土器片が出土しており，主体は加曽利E III式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利E III式期と考えられる。なお，本壙からは土器片錘1点が出土している。

**第201号土壙**（第596図）

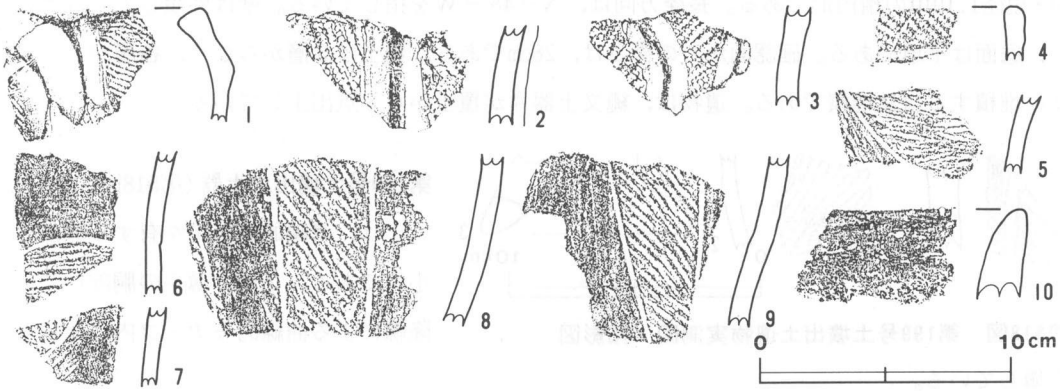
本土壙は，E3a$_8$区に確認され，第15号住居跡の北側3mに位置している。平面形は，長径2.25

m・短径1.35mの不整楕円形で，南側が内側にへこんでいる。長径方向は，N－90°－Eを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，24cmである。覆土は，2層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から87点出土している。

**第201号土壙出土土器**（第519図1～10）

1～3は，隆線による施文が主となるもので，1は口縁部片，2・3は胴部片である。1は，2本組の隆線で曲線的モチーフを描き，2・3は，1本の隆線で文様を構成しており，いずれもモチーフ間に縄文を施している。4は，口縁部の縄文を1条の沈線で区切っている。5～9は，細く鋭い沈線で，U字状，V字状，逆U字状などを呈すると思われる曲線的モチーフを描き，モチーフ内に撚りの緩い単節縄文を施文している。これら5点は，文様に共通性があり同一個体と思われるが，接合はできない。10は，無文の口縁部片である。1～10は，いずれも本壙の覆土上面から出土したものである。

本壙からは87点の土器片が出土しており，主体は加曽利EⅢ・Ⅳ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利EⅢ・Ⅳ式期と考えられ，特定はできない。




**第519図　第201号土壙出土遺物拓影図**

**第215号土壙**（第580図）

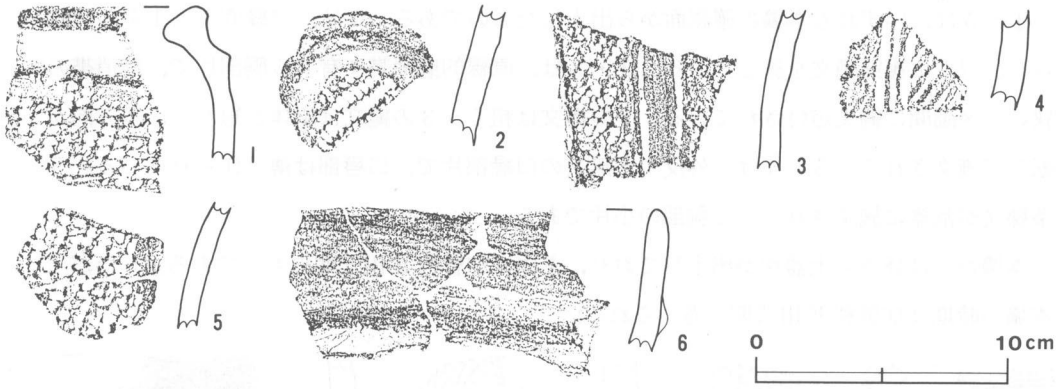
本土壙は，D3f$_0$区を中心に確認され，第11号住居跡の南側3mに位置している。平面形は，長径1.62m・短径1.02mの楕円形である。長径方向は，N－79°－Wを指している。遺構の確認面が南から北にかけて緩やかな傾斜を示している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，24cmである。覆土は3層からなり，各層がレンズ状に堆積する自然堆積である。遺物は，縄文土器片が覆土から32点出土している。

**第215号土壙出土土器**（第520図1～6）

1は，口縁直下に1条の深い凹線を巡らし，以下に縄文を付している。2は，太い沈線で逆U

字状の区画を描き，区画内に縄文を充塡している。3は，幅の狭い直線的磨消帯を有する胴部片で，区画間に粗い縄文を付している。4は，縄文地文上に3本組の沈線を垂下させている胴部の小片である。5は，大粒の縄文が付されている胴部片で，拓本の右端にナゾリの痕跡が認められる。縄文が1と類似しており，両者は同一個体と考えられる。6は，幅の広い口縁部無文帯を1条の貼付隆線で区画している。

本壙からは32点の土器片が出土しており，主体は加曽利E III式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利E III式期と考えられる。




**第520図　第215号土壙出土遺物拓影図**

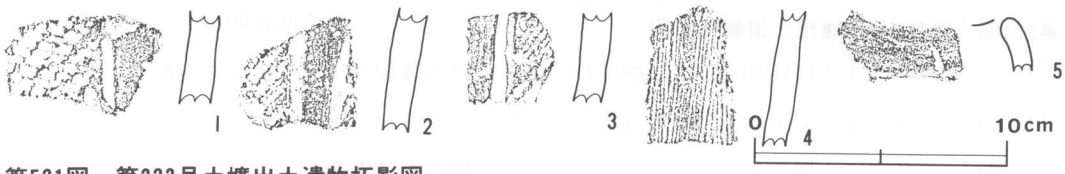
**第223号土壙**（第580図）

本土壙は，D3h$_1$区に確認され，第12号住居跡内に位置している。平面形は，長径0.91m・短径0.78mの楕円形である。長径方向は，N－14°－Wを指している。壁は垂直して立ち上がり，底面は平坦であるが，中央には1か所のピットが掘られている。確認面からの深さは，最深部で43cmである。覆土は，2層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から22点出土している。

**第223号土壙出土土器**（第521図1～5）

1～5は，いずれも本壙の確認面から出土したものである。1～3は，直線的磨消帯を有する胴部片で，区画間の縄文は1が複節，2・3は単節である。4は，縦位の条線文を施している胴部片である。5は，波状を呈する口縁部片で，内湾する無文帯を1条の沈線で区切っている。

本壙からは22点の土器片が出土しており，主体は加曽利E III式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利E III式期と考えられる。




**第521図　第223号土壙出土遺物拓影図**

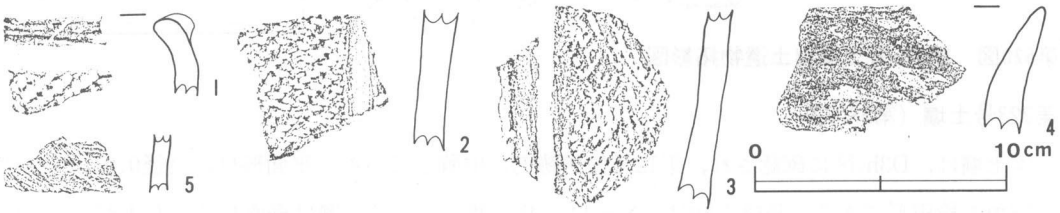
**第255号土壙**（第582図）

本土壙は，E4a$_2$区を中心に確認され，第19号住居跡の東側２ｍに位置している。平面形は，長径2.0m・短径1.75mの楕円形である。長径方向は，N－3°－Wを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦であるが，南東側にピット１か所が掘られている。確認面からの深さは，25cmである。覆土は，４層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から18点出土している。

**第255号土壙出土土器**（第522図１～５）

１～５は，いずれも本壙の確認面から出土したものである。１は，口縁直下に１条の凹線を巡らし，以下に複節縄文を施している。２・３は，直線的磨消帯を有する胴部片で，磨消帯の幅は狭い。区画間に縄文が付されている。２の縄文は粗く，３の縄文は原体が短かく，多方向から回転して施文されている。４は，外反する無文の口縁部片で，口唇部は薄く作られている。５は，条線文が乱雑に施文されている胴部の小片である。

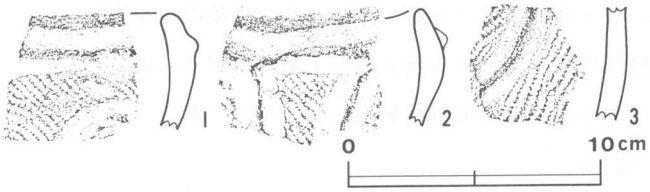
本壙からは18点の土器片が出土しており，主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。




**第522図　第255号土壙出土遺物拓影図**

**第279号土壙**（第562図）

本土壙は，E4b$_7$区に確認され，第22号住居跡の南側1.5mに位置している。平面形は，径1.07mの円形である。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，17cmである。覆土は，２層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から15点出土している。




**第523図　第279号土壙出土遺物拓影図**

**第279号土壙出土土器**（第523図１～３）

１～３は，器面全体に隆線による曲線的モチーフを描くもので，１・２は内湾する口縁部片，３は胴部片である。２の隆線はナゾリにより，断面三角形状を呈しており，１～３ともモチーフ間には縄文を充塡している。

本壙からは15点の土器片が出土しており，主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，

本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

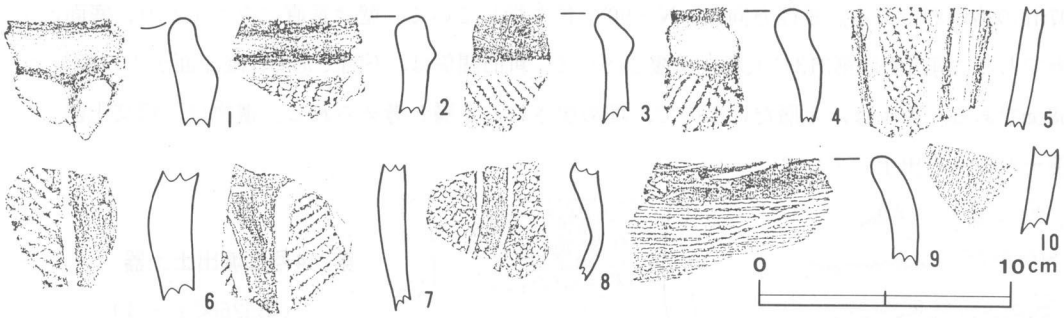
**第282号土壙**（第562図）

本土壙は，E4$b_8$区を中心に確認され，第22号住居跡の南東側５ｍに位置している。平面形は，径1.5mの円形である。壁は外傾して立ち上がり，底面は起伏している。確認面からの深さは，73cmである。覆土は，４層からなり，各層がレンズ状に堆積する自然堆積である。遺物は，縄文土器片が覆土から38点出土している。

**第282号土壙出土土器**（第524図１～10）

１・３～５・７・８・10は，本壙の覆土から，２・６・９は，確認面から出土したものである。１・２は，隆線で口縁部文様帯を区画しており，２の区画内には縄文を施している。３は，口縁部無文帯を残し，以下に縄文を施している。無文帯と縄文部の境は段を有している。４は，口縁直下に１条の凹線を巡らし，以下に縄文を施している。５は，垂下する隆線による区画を有する胴下半部片で，区画間に縄文を施し，内面には炭化物の付着が著しい。６は，厚手の胴部片で，直線的磨消帯を有し，区画間の縄文は無節である。７は，逆Ｕ字状の沈線区画内に縄文を充填している胴部片で，内面は剝落が著しく，整形方向は分らない。８は，幅の狭い曲線的磨消帯を有する胴部片で，内面に整形時の段差が明瞭に残されている。器面の内外面に炭化物が付着している。９は，口縁部無文帯を有し，以下に横位に条線文を付している。10は，縄文と条線文が併用されている胴部の小片である。

本壙からは38点の土器片が出土しており，主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。




**第524図　第282号土壙出土遺物拓影図**

**第283号土壙**（第584図）

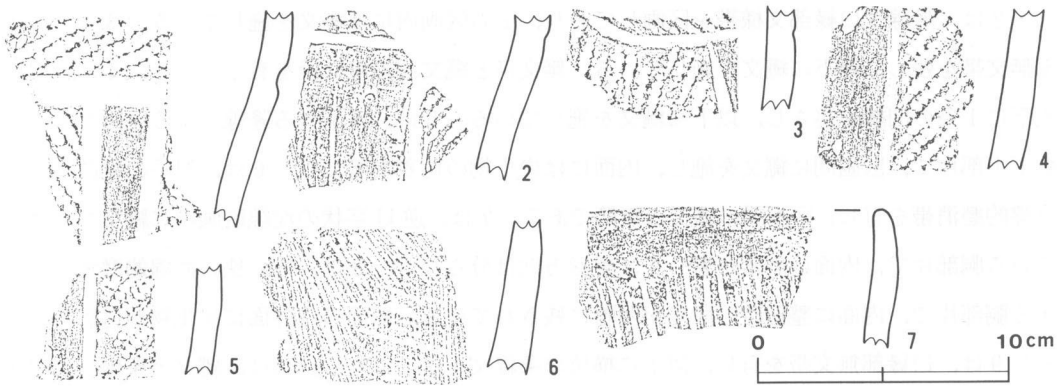
本土壙は，D2$f_9$区を中心に確認され，第３号住居跡内に位置している。平面形は，長径1.55m・短径1.39mの楕円形である。長径方向は，N－71°－Wを指している。壁は外傾して立ち上がり，

底面は皿状に中央が凹んでいる。確認面からの深さは，61cmである。覆土は，１層だけなので，埋め戻された土層と考えられる。遺物は，縄文土器片が覆土から30点出土している。

**第283号土壙出土土器**（第525図１～７）

１～３は，口辺部片で，沈線で口縁部文様帯を区画し，以下に直線的磨消帯を施している。１の磨消帯の幅は狭く，２の幅は広い。４・５は，直線的磨消帯を有する胴部片である。６は，条線文を縦位，斜位に施文している胴部片である。７は，口縁部に無文帯を残し，以下に粗い沈線文を縦位に付している。器面に炭化物の付着が認められる。

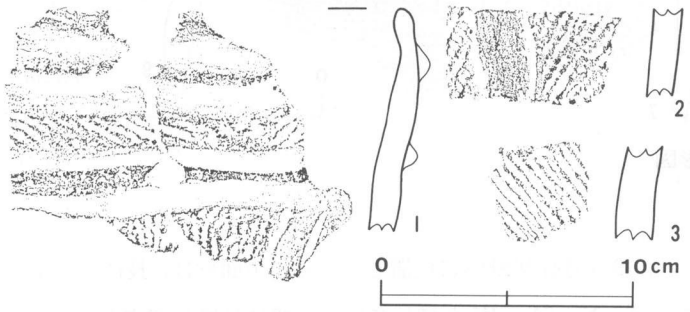
本壙からは30点の土器片が出土しており，主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。なお，本壙からは軽石製品１点が出土している。




**第525図　第283号土壙出土遺物拓影図**

**第284号土壙**（第584図）

本土壙は，D4$e_0$区に確認され，第３号住居跡内に位置している。平面形は，長径1.1m・短径0.97mの楕円形である。長径方向は，N―90°―Eを指している。壁は垂直に立ち上がり，底面は平坦である。南西側は第313号土壙と重複している。新旧関係は，不明である。確認面からの深さは，58cmである。覆土は，１層だけなので，埋め戻された土層と考えられる。遺物は，縄文土器片が覆土から９点出土している。




**第526図　第284号土壙出土遺物拓影図**

**第284号土壙出土土器**

（第526図１～３）

１は，口縁部文様帯を隆線で楕円形に区画し，区画内に縄文を充填し，胴部に幅の狭い磨消帯を施している。２は，曲線的

磨消帯を有する胴部片である。3は，縄文だけの胴部の小片である。

本壙からは9点の土器片が出土しており，その主体は加曽利E III式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利E III式期と考えられる。

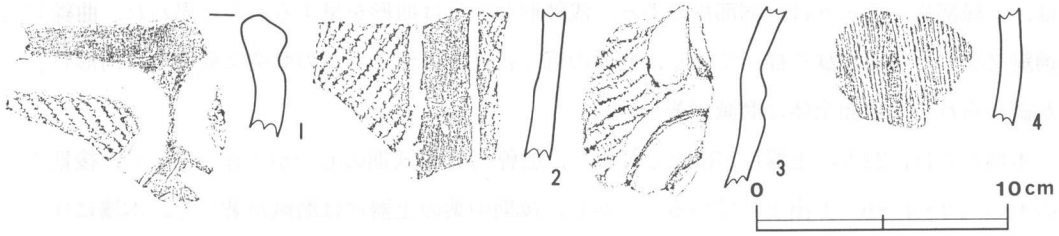
**第289号土壙**（第563図）

本土壙は，E3b$_8$区を中心に確認され，第15号住居跡内に位置している。新旧関係は，不明である。平面形は，長径1.45m・短径1.37mの円形に近い楕円形である。長径方向は，N—0°を指している。壁は垂直に立ち上がり，底面は平坦で，円筒形の掘りこみである。確認面からの深さは，126cmと深い。覆土は，1層だけなので，埋め戻された土層と考えられる。遺物は，縄文土器片が覆土から12点出土している。

**第289号土壙出土土器**（第527図1～4）

1は，口縁部文様帯を隆線で楕円形に区画し，区画内に縄文を充塡している。2は，曲線的磨消帯を有する胴部片で，区画外に縄文が付されている。3は，隆線による曲線的モチーフが描かれている胴部片で，モチーフ外には縄文が施されている。4は，縦位の条線文が施文されている胴部片である。

本壙からは12点の土器片が出土しており，主体は加曽利E III式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利E III式期と考えられる。



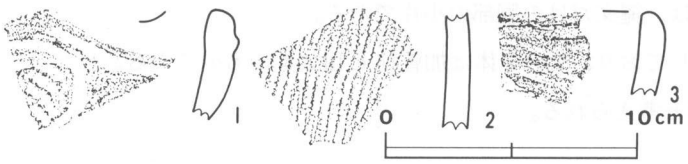

**第527図　第289号土壙出土遺物拓影図**

**第295号土壙**（第585図）

本土壙は，E4d$_7$区を中心に確認され，第27号住居跡の東側12mに位置している。平面形は，長径1.64m・短径1.22mの楕円形である。長径方向は，N—43°—Eを指している。壁は垂直に立ち上がり，底面はやや凹凸がある。確認面からの深さは，75cmである。覆土は，5層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から14点出土している。

**第295号土壙出土土器**（第528図1～3）

1は，波状を呈する口縁部片で，沈線で口縁部文様帯を楕円形に区画し，区画内に縄文を充塡




**第528図　第295号土壙出土遺物拓影図**

している。2は，縄文だけの胴部片で，3は，無文の口縁部片である。

本壙からは14点の土器片が出土しており，主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

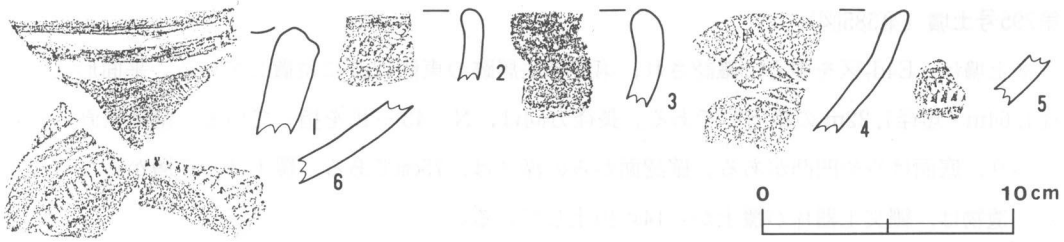
**第304号土壙**（第585図）

本土壙は，E4$h_0$区を中心に確認され，第29号住居跡の南西側7ｍに位置している。平面形は，長径2.79m・短径2.37mの楕円形である。長径方向は，N—15°—Wを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は凹凸が著しい。確認面からの深さは，84cmである。覆土は，10層からなり，すべての層が締まっている。また，各層が交互に入りくんで，堆積のしかたがやや複雑である。遺物は，縄文土器片が覆土から21点出土している。

**第304号土壙出土土器**（第529図１～６）

１は，口唇部上面および口縁直下に沈線を巡らし，以下を無文としている厚手の口縁部片である。２は，縄文だけが施されている口縁部の小片で，薄手である。３は，内湾する無文の口縁部片である。４～６は，胎土・焼成・色調および施文に共通性がみられ，同一個体と思われる。４は，口縁部片，５・６は，胴部片である。浅鉢形ないしは皿形を呈するものと思われ，曲線的磨消縄文を主とする文様を描いており，底面の近くには，キザミ目状の刺突文列および円形竹管文が認められる。器面全体に磨滅が著しい。

本壙からは，21点の土器片が出土しており，加曽利ＥⅢ式期のものが主体であるが，後期中葉のもの（２・４～６）も出土している。しかし，後期中葉の土器片は磨滅が著しく，本壙に伴うものとは考えられない。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。




**第529図　第304号土壙出土遺物拓影図**

**第313号土壙**（第595図）

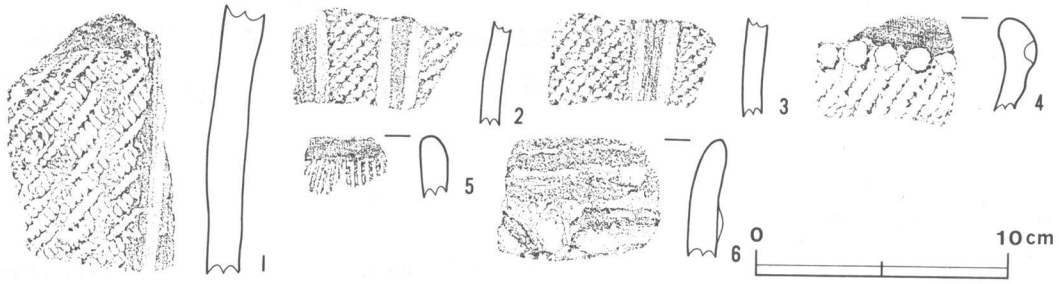
本土壙は，D2$f_0$区を中心に確認され，第３号住居跡内に位置している。新旧関係は，第３号住

居跡の炉が本壙の覆土上位に構築されていることから，本土壙が古いと考えられる。平面形は，長径1.64m・短径1.34mの楕円形である。長径方向は，N—90°—Wを指している。北東側で第284号土壙と重複している。壁は外傾して立ち上がり，底面はやや起伏している。確認面からの深さは，72cmである。覆土は，13層からなり，1～3層は軟らかいが，4～13層は締まっている。遺物は，縄文土器片が覆土の下層から31点出土している。

**第313号土壙出土土器**（第530図1～6）

1～3は，直線的磨消帯を有する胴部片である。1は，厚手で区画間に異条の単節縄文RLを縦位回転で施文している。2・3は，幅の狭い磨消帯と縄文が共通し，同一個体と思われるが接合はできない。4は，口縁直下に1列の円形刺突文を並べ，以下に縄文を付している。5は，口縁部の小片で，無文帯をわずかに残し，以下に縦位の条線文を施している。6は，口縁部無文帯を有し，以下に隆線で区画を施している。

本壙からは31点の土器片が出土しており，主体は加曽利E III式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利E III式期と考えられる。なお，本壙からは土器片錘2点が出土している。




**第530図　第313号土壙出土遺物拓影図**

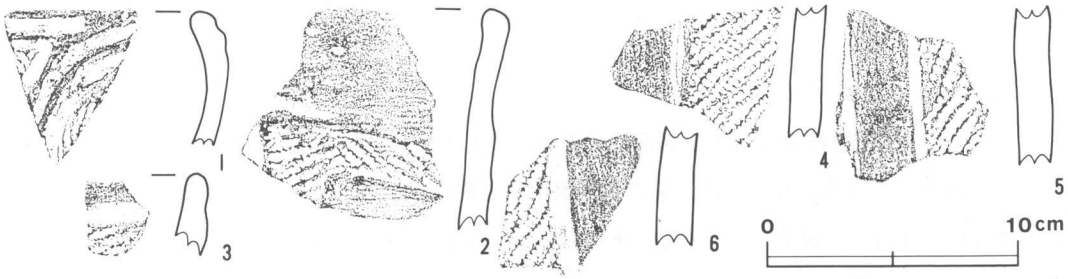
**第316号土壙**（第586図）

本土壙は，E4f$_1$区を中心に確認され，第24号住居跡の北側0.5mに位置している。平面形は，長径1.87m・短径1.65mの楕円形である。長径方向は，N—86°—Wを指している。壁は垂直に立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，87cmである。覆土は，5層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から56点出土している。

**第316号土壙出土土器**（第531図1～6）

1・2は，細めの低い隆線による施文を主とする口縁部片である。1は，内湾する口縁部片で，2本組の隆線で曲線的モチーフを描き，モチーフ間に縄文を施している。2は，幅の広い無文帯を有し，以下にクランク状の区画を施し，区画内に縄文を充塡している。3は，口縁直下に1条の凹線を巡らし，以下は縄文を施している小片である。4～6は，直線的磨消帯を有する胴部片で，区画間に縄文を施している。

本壙からは56点の土器片が出土しており，主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。また，本壙からは大形の深鉢形土器（第632図）が正位で出土しており，これも加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。なお，本壙からは土器片錘１点が出土している。




**第531図　第316号土壙出土遺物拓影図**

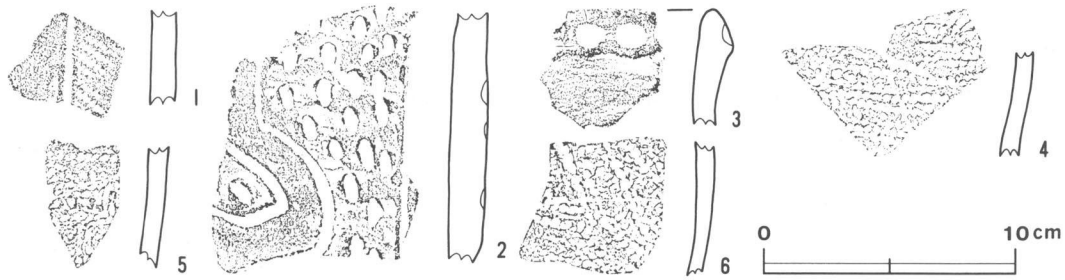
**第320号土壙**（第587図）

本土壙は，E4$j_0$区を中心に確認され，第36号住居跡の北側４ｍに位置している。平面形は，長径2.0m・短径1.22mの楕円形である。長径方向は，N－65°－Eを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。南壁際に径22cm・深さ11cmの円形のピット１か所が掘られている。確認面からの深さは，20cmである。覆土は，２層からなっている。遺物は，縄文時代後期（称名寺式）の土器片を中心に覆土から9点出土している。

**第320号土壙出土土器**（第532図１～６）

１は，細い沈線による直線的磨消帯を有する胴部片で，器面が少し磨滅している。２は，沈線による曲線的磨消帯が垂下し，区画外に雨垂れ状の刺突文が充塡されている胴部片である。３は，口縁直下に円形刺突文を付し，以下を無文としている。４～６は，薄手の胴部片で粗い縄文が施されており，縄文が類似しているので同一個体と考えられる。１～６は，いずれも本壙の覆土上位から出土したものである。

本壙からは９点の土器片が出土しており，後期の土器が主体を占めている。称名寺Ⅱ式(2)，堀之内Ⅰ式(3)，加曽利Ｂ式（４～６）などである。上記したようにこれらは本壙の上位から出土し

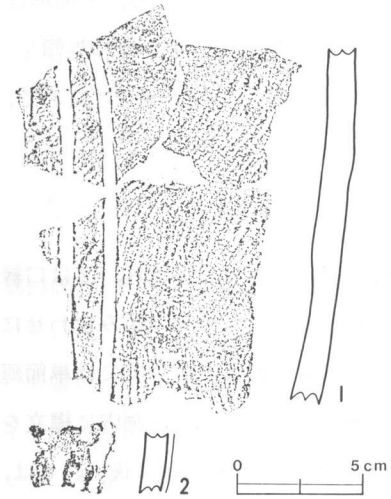



**第532図　第320号土壙出土遺物拓影図**

ているので，詳しい時期は不明だが，本壙の時期は後期前葉から中葉の時期と考えられる。

**第321号土壙**（第587図）

本土壙は，E5$j_1$区に確認され，第36号住居跡の北側3.5mに位置している。平面形は，長径1.2m・短径0.95mの楕円形である。長径方向は，N－0°を指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，18cmである。覆土は，2層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から3点出土している。




**第533図　第321号土壙出土遺物拓影図**

**第321号土壙出土土器**（第533図1～2）

1は，縄文地文上に太めの沈線が3条垂下している胴部片である。2は，胴部の小片で，垂下する隆線上に刺突文を加えている。

本壙からは3点の土器片しか出土していないが，いずれも堀之内Ⅰ式期のものである。したがって，本壙の時期は堀之内Ⅰ式期と考えられる。

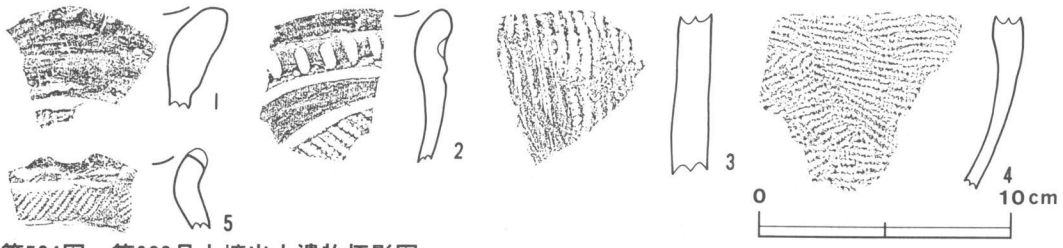
**第323号土壙**（第587図）

本土壙は，F4$a_0$区に確認され，第36号住居跡の北西側1mに位置している。平面形は，長径1.68m・短径1.1mの楕円形である。長径方向は，N－5°－Wを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，24cmである。覆土は，3層からなっている。遺物は，縄文土器片が確認面から22点出土している。

**第323号土壙出土土器**（第534図1～5）

1～5は，いずれも本壙の確認面から出土したものである。1は，緩い波状を呈する厚手の口縁部片で，口縁直下に1条の沈線を巡らし，以下に縄文を施している。2も，波状口縁部片で，口縁直下に下から突き上げるような刺突文を付し，胴部に曲線的磨消帯を施している。3は，厚手の胴部片で，縄文地文上に縦位の条線文を重ねている。4は，縄文だけの胴部片で，破片の上端部が厚く，下半部は極端に薄くなっている。5は，晩期前半のものである。口唇部上にいわゆるB突起を付し，口縁部に細かい縄文を施して，1条の沈線で区切っている。

本壙からは22点の土器片が出土しており，その主体は加曽利EⅢ式期のものであるが，上記のようにいずれも確認面から出土したものである。したがって，本壙の時期は不明である。



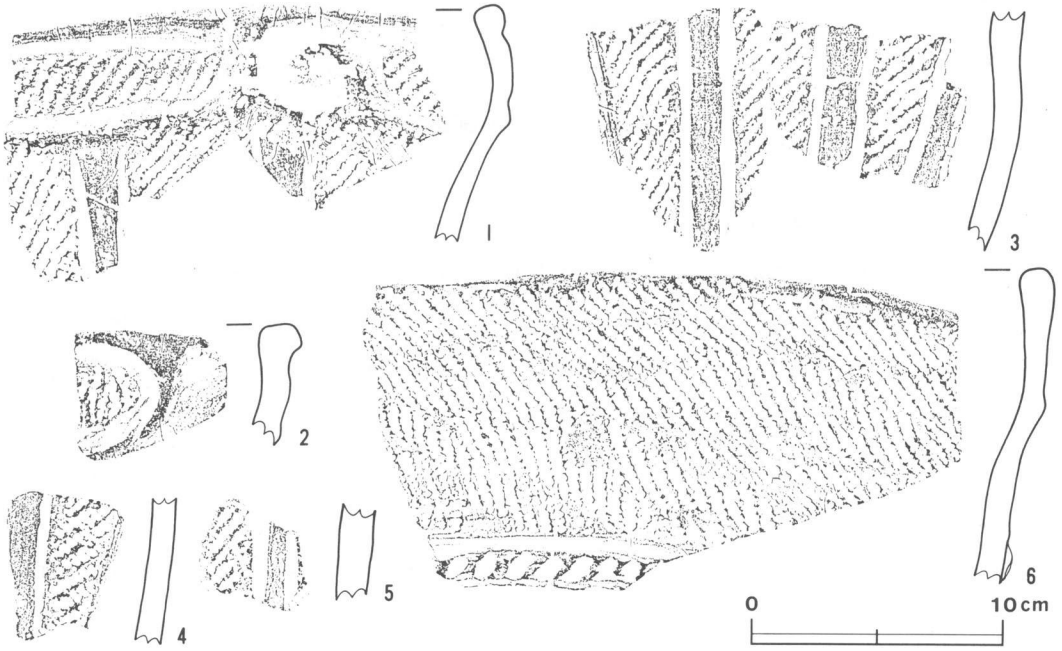

**第534図　第323号土壙出土遺物拓影図**

**第342号土壙**（第588図）

本土壙は，F4b$_5$区を中心に確認され，第30号住居跡の北西側８ｍに位置している。平面形は，長径1.45m・短径1.31mの楕円形である。長径方向は，N—90°—Eを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，41cmである。覆土は，１層だけなので，埋め戻された土層と考えられる。遺物は，縄文土器片が覆土から10点出土している。

**第342号土壙出土土器**（第535図１～６）

１～５は，キャリパー形の深鉢形土器である。１は口縁部から胴部にかけての破片，２は口縁部片，３～５は胴部片である。１は，口縁部文様帯を隆線で，渦巻文，長楕円形文の組み合わせにより区画し，胴部には直線的磨消帯を施している。口縁部区画内および胴部の区画間には単節縄文RLを縦位回転で施文している。２は，隆線で口縁部文様帯を楕円形に区画し，区画内に縄文を充塡している。３～５は，直線的磨消帯を有している。１・３～５とも磨消帯の幅は狭い。６は，大形の深鉢形土器の口縁部片で，口縁部に単節縄文RLを横位回転を主に施文し，頸部に１条の貼



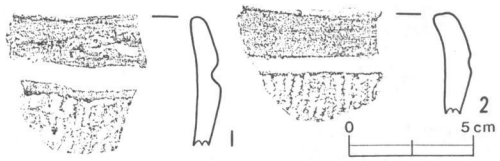

**第535図　第342号土壙出土遺物拓影図**

付隆線を巡らしている。隆線の両側にはナゾリを加え，隆線上には斜位の押圧を加えている。

本壙からは10点の土器片が出土しており，その主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

**第346号土壙**（第564図）

本土壙は，E4$j_2$区に確認され，第31号住居跡の北東側3.5mに位置している。平面形は，長径1.78m・短径1.45mの楕円形である。長径方向は，N－46°－Wを指している。壁は垂直に立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，90cmである。覆土は2層からなっている。遺物は，石鏃が2点，縄文土器片が覆土から34点出土している。




**第536図　第346号土壙出土遺物拓影図**

**第346号土壙出土土器**（第536図1～2）

1・2とも，口縁部無文帯を1条の沈線で区画し，以下に縄文を条が縦走するように施している。1の沈線は深く明瞭に付されている。

本壙からは34点の土器片が出土しており，加曽利ＥⅢ式期のものが主体を占めているが，小片などが多く図示できたものは少ない。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。なお，本壙からは土製円板1点，有孔円板2点，チャートの石鏃片2点，チャートの剝片1点が出土している。

**第353号土壙**（第564図）

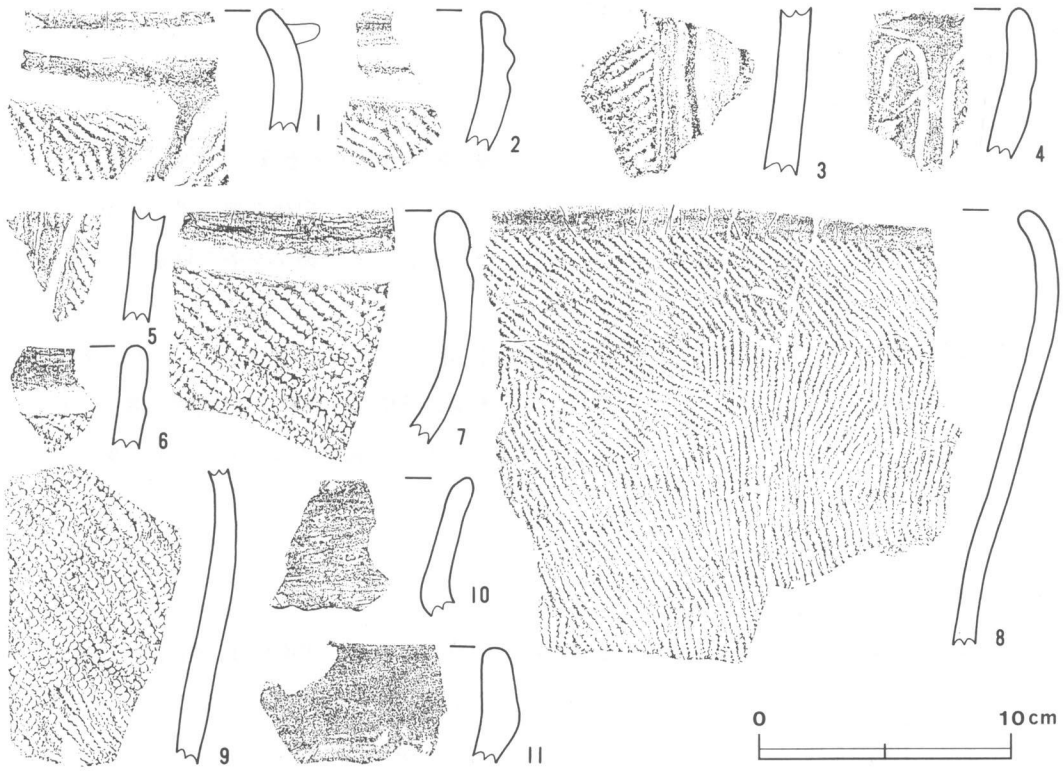
本土壙は，E3$f_9$区に確認され，第24号住居跡内に位置している。平面形は，径1.75mの円形である。壁はフラスコ状に立ち上がり，袋状の掘りこみである。底面は皿状に凹んでいる。確認面からの深さは，102cmと深い。覆土は，5層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から93点出土している。

**第353号土壙出土土器**（第537図1～11）

1は，高く突出する隆線により口縁部文様帯を楕円形に区画し，区画内に縄文を充塡している。口唇部に1条の凹線を巡らしている。2は，口縁直下に1条の隆線を施し，以下に無節縄文を付している。3は，細く低い隆線を垂下させ，区画外に縄文を施している胴部片である。4は，口縁直下から逆U字状の沈線区画を施し，区画内に縄文を充塡し，区画間に上端が屈曲する沈線文を加えている。5は，曲線的な沈線区画内に縄文を施している胴部の小片である。6・7は，口縁直下に1条の凹線を巡らし，以下に縄文を施文している。8は，大形破片で，口縁部無文帯を

わずかに残し，以下全面に単節縄文 RL を横位，斜位回転で施文している。器面上半部には炭化物が付着している。9は，縄文だけの胴部片で，太さの異なる2種類の単節縄文を使用して施文している。10・11は，無文の口縁部片で，10は，外反している。11の右下端には焼成後の穿孔が認められる。

本壙からは93点の土器片が出土しており，そのほとんどが加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。なお，本壙からはチャートの石鏃1点，砂質の粘土塊1点が出土している。




**第537図　第353号土壙出土遺物拓影図**

**第354号土壙**（第589図）

本土壙は，E3f$_0$区に確認され，第24号住居跡内に位置している。新旧関係は，不明である。平面形は，長径1.69m・短径1.48mの楕円形である。長径方向は，N—26°—Eを指している。壁は垂直に立ち上がり，底面は平坦で，円筒形状に掘りこまれている。確認面からの深さは，76cmである。覆土は，1層だけなので，埋め戻された土層と考えられる。遺物は，縄文土器片が覆土から22点出土している。

**第538図　第354号土壙出土遺物拓影図**

**第354号土壙出土土器**（第538図１～２）

１は，口縁部無文帯を１条の沈線を巡らして区画し，以下に付加条縄文を施文している。２は，幅の狭い直線的磨消帯を有する厚手の胴下半部片である。

本壙からは22点の土器片が出土しており，主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。なお，本壙からは土器片錘１点が出土している。

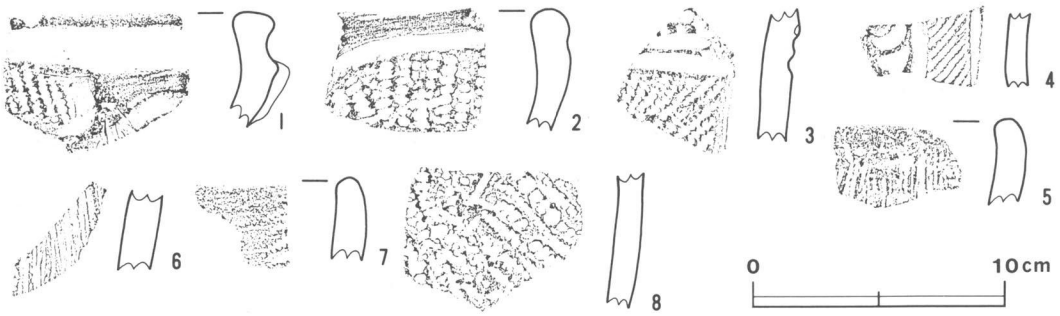
**第355号土壙**（第604図）

本土壙は，E3$g_0$区に確認され，第24号住居跡内に位置している。平面形は，長径1.38m・短径1.21mの不整楕円形である。長径方向は，N－28°－Eを指している。壁はなだらかに立ち上がり，底面はやや起伏している。確認面からの深さは，33cmである。覆土は，２層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から29点出土している。

**第355号土壙出土土器**（第539図１～８）

１は，口縁直下に１条の凹線を巡らし，隆線で口縁部文様帯を楕円形に区画し，区画内に縄文を充填している。２は，太い沈線で口縁部文様帯を楕円形に区画し，区画内に縄文を施している。３は，胴部片で，横位の太い沈線間に小さな刺突を付し，以下に縄文を施している。４は，細めの弧状の隆線と沈線による区画間に縄文を施している薄手の胴部片である。５は，口縁直下から粗い条線文を縦位に付している。６は，縦位の雑な沈線を密に施文している胴部の小片である。７は，口縁部片で，縄文を間隔をあけて施している。８は，大粒の粗雑な縄文だけの胴部片である。

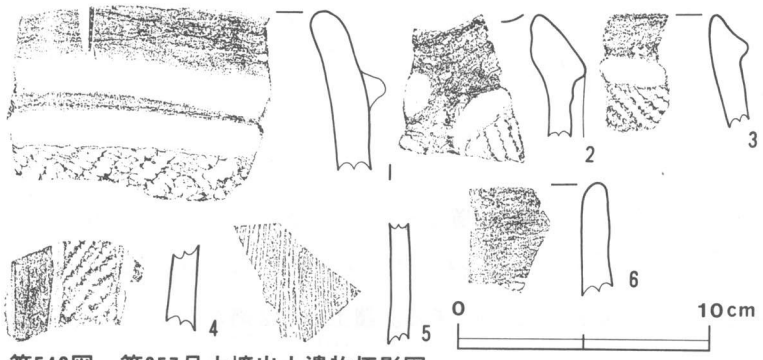
本壙からは29点の土器片が出土しており，主体は加曽利ＥⅢ式期のものが占めている。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。




**第539図　第355号土壙出土遺物拓影図**

**第357号土壙**（第564図）

本土壙は，E3$f_0$区に確認され，第24号住居跡内に位置している。平面形は長径1.11m・短径0.61mのまん中がくびれたひょうたん形をしている。長径方向は，N－67°－Eを指している。壁は西側で垂直，東側で外傾して立ち上がっている。底面は，平坦である。確認面からの深さは，67cmである。覆土は，2層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から21点出土している。




**第540図　第357号土壙出土遺物拓影図**

**第357号土壙出土土器**（第540図1～6）

1は，口縁部無文帯を1条の太い貼付隆線で区画し，以下に大粒の縄文を施している。2は，波状を呈する口縁部片で，低隆線で口縁部文様帯を楕円形に区画し，区画内に縄文を施している。3は，口縁部無文帯を残し，以下に縄文を施している。その境には段差を有している。4は，直線的磨消帯を有する胴部片である。5は，縦位の条線文をやや間隔をあけて施文している胴部片である。6は，無文の口縁部片である。

本壙からは21点の土器片が出土しており，主体は加曽利E III式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利E III式期と考えられる。なお，本壙からは土器片錘1点が出土している。

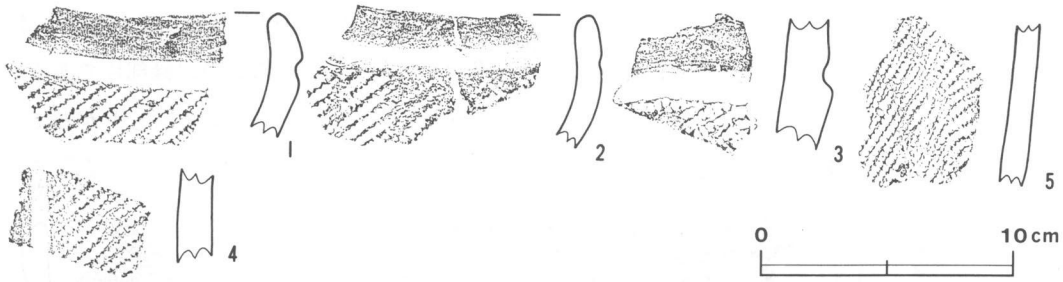
**第358号土壙**（第564図）

本土壙はE3$i_2$区に確認され，第34号住居跡の東側5mに位置している。平面形は，径1.5mの円形である。東側で第446号土壙と重複している。新旧関係は，不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面は平坦で，円筒形状に掘りこまれている。確認面からの深さは，90cmである。覆土は，4層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から29点出土している。

**第358号土壙出土土器**（第541図1～5）

1～3は，口縁部無文帯を1条の凹線で区画し，以下に縄文を施している。3は，口唇部を欠く口辺部片で，厚手である。4は，直線的磨消帯を有する胴部片である。5は，縄文だけの胴部片である。

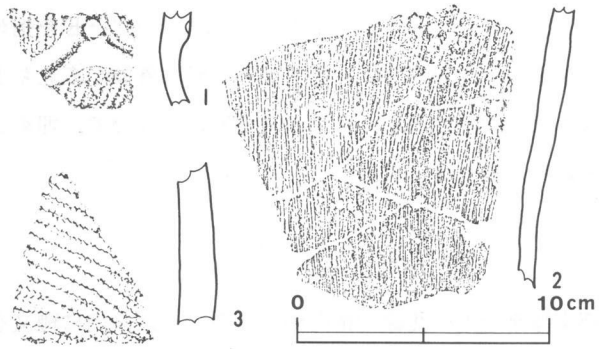
本壙からは29点の土器片が出土しており，主体は加曽利E III式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利E III式期と考えられる。




**第541図　第358号土壙出土遺物拓影図**

**第384号土壙**（第563図）

本土壙は，E2$i_9$区を中心に確認され，第34号住居跡の西側２ｍに位置している。平面形は，径1.28mの円形である。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，38cmである。覆土は，３層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から18点出土している。




**第542図　第384号土壙出土遺物拓影図**

**第384号土壙出土土器**（第542図１～３）

１は，隆線による曲線的モチーフを描き，モチーフ間に縄文を施している胴部片で，隆線の接点上に円形刺突文を付加している。２は，縦位の条線文が付されている胴部片で，内外面とも剝落しており，特に内面が著しい。３は，厚手の胴部片で，縄文だけが施されている。

本壙からは18点の土器片が出土しており，主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

**第386号土壙**（第564図）

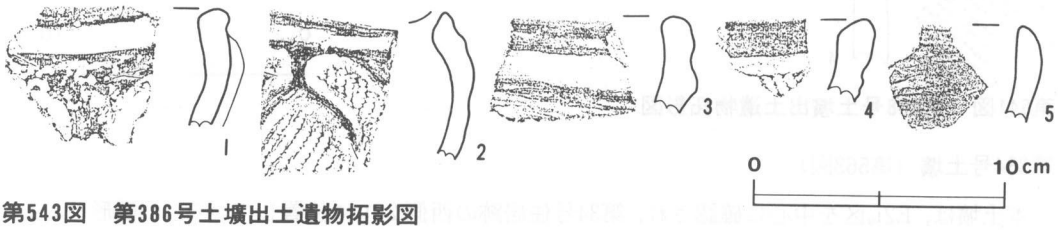
本土壙は，E3$d_3$区に確認され，第13号住居跡の南西側14mに位置している。平面形は，長径1.4m・短径1.23mの楕円形である。長径方向は，N－53°－Wを指している。壁は垂直に立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，46cmである。覆土は，５層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から18点出土している。

**第386号土壙出土土器**（第543図１～５）

１は，口縁部文様帯を低隆線で楕円形に区画しており，内外面とも剝落が著しい。２は，内湾する波状口縁部片で，隆線による曲線的モチーフを器面に構成するもので，モチーフ間に縄文を

充塡している。内面に炭化物が付着している。3は，口縁直下に太い凹線を巡らしている。4は，口縁部無文帯を1条の沈線で区画し，以下に縄文を施している。5は，無文の口縁部片である。

本壙からは18点の土器片が出土しており，主体は加曽利E III式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利E III式期と考えられる。




**第543図　第386号土壙出土遺物拓影図**

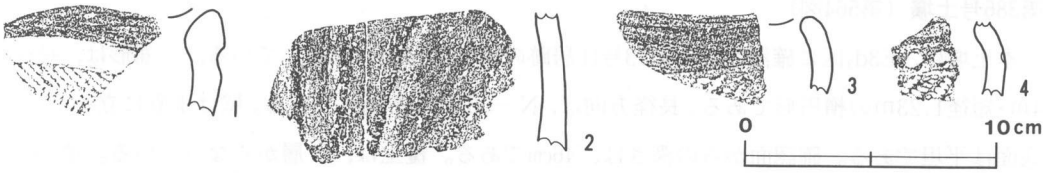
**第387号土壙**（第597図）

本土壙は，E3i$_4$区に確認され，第34号住居跡の東側13mに位置している。平面形は，長径1.02m・短径0.85mの不定形で，北西側が外に突き出した形をしている。長径方向は，N－90°－Eを指している。北東側で，第391号土壙と重複している。新旧関係は，不明である。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，42cmである。覆土は，1層だけなので，埋め戻された土層と考えられる。遺物は，縄文土器片が覆土から17点出土している。

**第387号土壙出土土器**（第544図1～4）

1は，波状を呈する口縁部片で，口縁部文様帯を太い沈線で楕円形に区画し，区画内に縄文を充塡している。2は，無文地に細い隆線が垂下している胴部片で，わずかに赤彩痕が残存している。3は，緩い波状縁を呈し，口縁部にわずかに無文帯を有し，以下に縄文を施している。4は，薄手の口辺部片で，口縁部無文帯下に円形刺突文列を施し，以下に縄文を付している。

本壙からは17点の土器片が出土しており，その大半は加曽利E III式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利E III式期と考えられる。

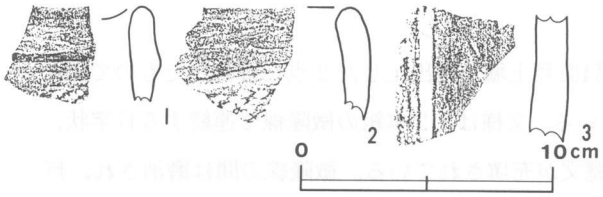



**第544図　第387号土壙出土遺物拓影図**

**第388号土壙**（第591図）

本土壙は，E3i$_4$区に確認され，第34号住居跡の東側11mに位置している。平面形は，長径1.25m・短径1.03mの楕円形である。長径方向は，N－90°－Wを指している。壁は垂直に立ち上がり，底面は44cm差で2段に掘りこまれ，北西側から南東側にかけて傾斜している。確認面からの深さは，

最深部で80cmである。覆土は，２層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から15点出土している。




**第545図　第388号土壙出土遺物拓影図**

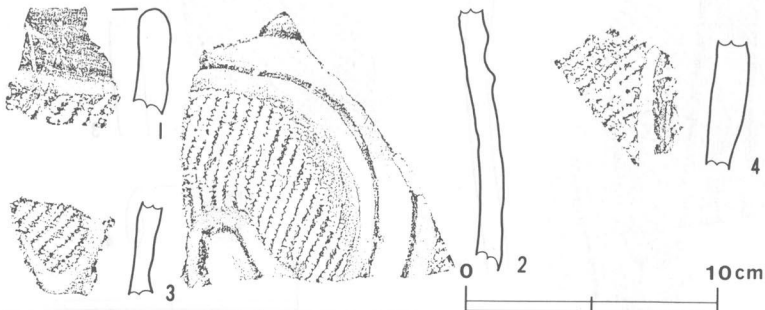
**第388号土壙出土土器**（第545図１～３）

１は，口縁部無文帯を１条の細い隆線で区切り，以下に縄文を施している。２は，口縁部無文帯を１条の浅い凹線で区画し，以下に縄文を付している。３は，幅の広い直線的磨消帯を有する胴部片である。

本壙からは15点の土器片が出土しており，その主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。なお，本壙からは土製円板１点が出土している。

**第393号土壙**（第591図）

本土壙は，E3$h_4$区に確認され，第28号住居跡の南西側18mに位置している。平面形は，長径1.83m・短径1.02mの楕円形である。長径方向は，N－32°－Eを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，35cmである。覆土は，１層だけである。遺物は，縄文土器片が覆土から10点出土している。




**第546図　第393号土壙出土遺物拓影図**

**第393号土壙出土土器**（第546図１～４）

１は，口縁部無文帯を１条の凹線で区画し，以下に縄文を施している。２・３は，隆線による曲線的モチーフが描かれている胴部片で，モチーフ間に縄文が施されている。２には，大柄な渦巻状のモチーフが構成されている。３の内面には炭化物の付着が著しい。４は，曲線的な磨消帯を有する胴部片である。

本壙からは10点の土器片が出土しており，そのほとんどは加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。なお，本壙からは土製円板１点が出土している。

**第395号土壙**（第565図）

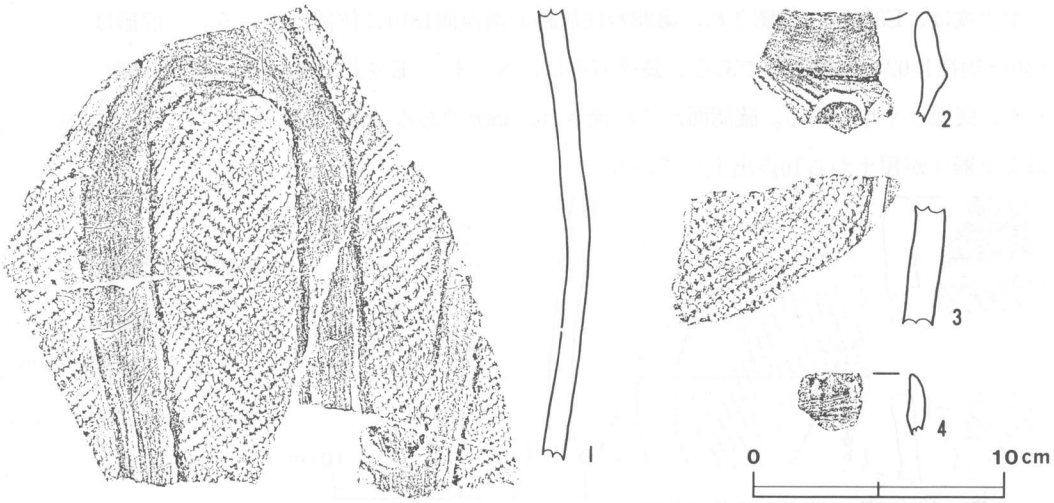
本土壙は，E3$j_5$区に確認され，第28号住居跡の南西側20mに位置している。平面形は，径1.27mの円形である。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，36cmである。

覆土は，２層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から41点出土している。

**第395号土壙出土土器**（第547図１～４）

１は，本壙から出土した破片２点と，第401号土壙から出土した２点が接合したもので，大形の胴部片である。両壙は約1.5mほど離れている。文様は，２本組の微隆線で連続するU字状，逆U字状のモチーフが描かれ，モチーフ内に縄文が充塡されている。微隆線の間は磨消され，無文となっている。２は，波状を呈する口縁部片で，口縁部無文帯を１条の断面三角形を呈する微隆線で区画し，胴部に沈線による逆U字状の磨消帯を施している。３は，曲線的沈線区画内に縄文を施している胴部片である。４は，小形の手づくね土器の口縁部片で，無文である。

本壙からは41点の土器片が出土しており，主体は加曽利EⅣ式期の古い段階のものである。したがって，本壙の時期は加曽利EⅣ式期と考えられる。




**第547図　第395号土壙出土遺物拓影図**

**第401号土壙**（第565図）

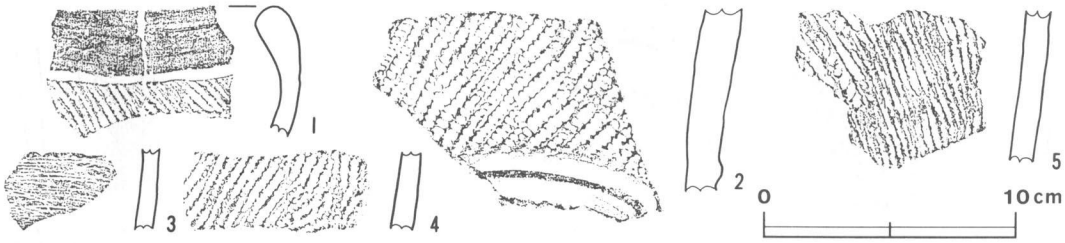
本土壙は，E3$j_5$区に確認され，第28号住居跡の南西側11mに位置している。平面形は，径1.13m（推定）の円形状と思われる。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，35cmである。覆土は，１層だけなので埋め戻された土層と考えられる。遺物は，縄文土器片が覆土から34点出土している。

**第401号土壙出土土器**（第548図１～５）

１は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に縄文を施している。２は，隆線による曲線

的モチーフ間に縄文を充塡している厚手の胴部片である。3は，薄手の胴部片で，条線文が横位に施されている。4・5は，縄文だけの胴部片で，5は，付加条縄文と単節縄文が併用されている。

本壙からは34点の土器片が出土しており，その主体は加曽利EⅢ式期のものである。出土土器から判断すると，本壙の時期は加曽利EⅢ式期の新しい段階と考えられる。




**第548図　第401号土壙出土遺物拓影図**

**第407号土壙**（第566図）

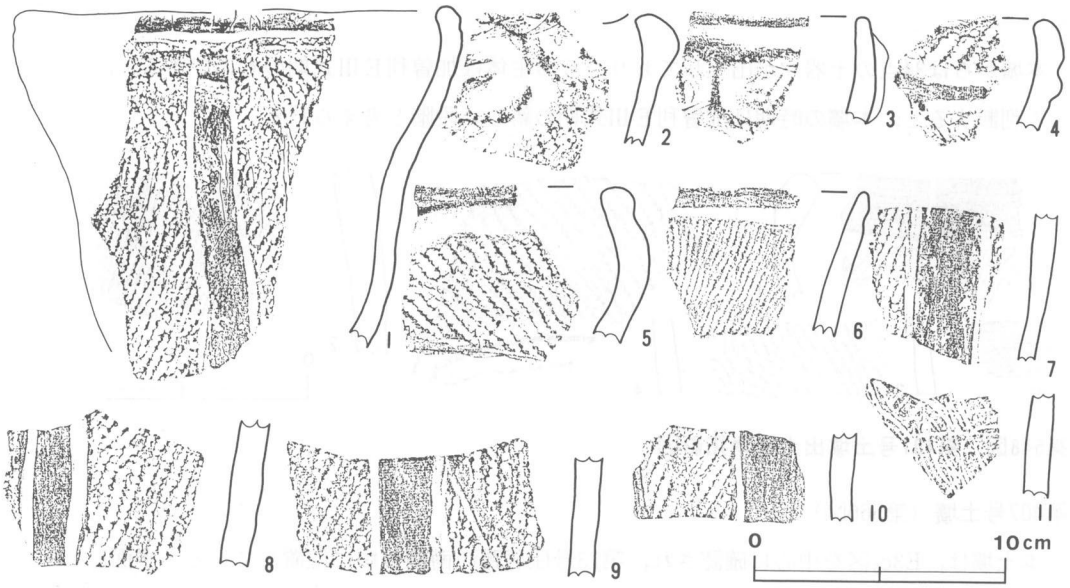
本土壙は，E3c$_5$区を中心に確認され，第13号住居跡の南側14mに位置している。平面形は，推定で径1.18mの円形で，北側で第422号土壙と重複している。新旧関係は，土層の切り合いから本土壙が新しいと考えられる。壁は外傾して立ち上がり，底面は40cm差で2段に掘りこまれ，凹凸がある。確認面からの深さは，最深部で76cmである。覆土は，3層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から42点出土している。

**第407号土壙出土土器**（第549図1～11）

1は，本壙の覆土から出土した破片2点が接合したもので，小形の深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部が内湾し，胴部が緩くくびれる器形を呈している。口縁直下に1条の沈線を巡らし，以下に縦位の直線的磨消帯を垂下させている。区画間の縄文は単節RLで，縦位回転である。器面には炭化物が付着している。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが加えられている。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は内外面とも褐色を呈している。推定口径は16.5cmで，現存高は13.6cmである。

2～4は，口縁部文様帯を隆線で，渦巻状，楕円形状に区画し，区画内に縄文が充塡されている。3の器面には炭化物が付着している。5は，太めの沈線で口縁部文様帯を楕円形に区画し，区画内に縄文を施している。6は，直線的に外傾する小形の深鉢形土器の口縁部片で，口縁直下に1条の沈線を巡らし，以下に縄文を施している。拓本の左端には沈線文も認められる。7～10は，直線的磨消帯を有する胴部片である。8は厚手で，他は比較的薄手である。11は，乱雑な条線文が施されている胴部片である。

本壙からは42点の土器片が出土し，その主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。なお，本壙からは土器片錘３点が出土している。



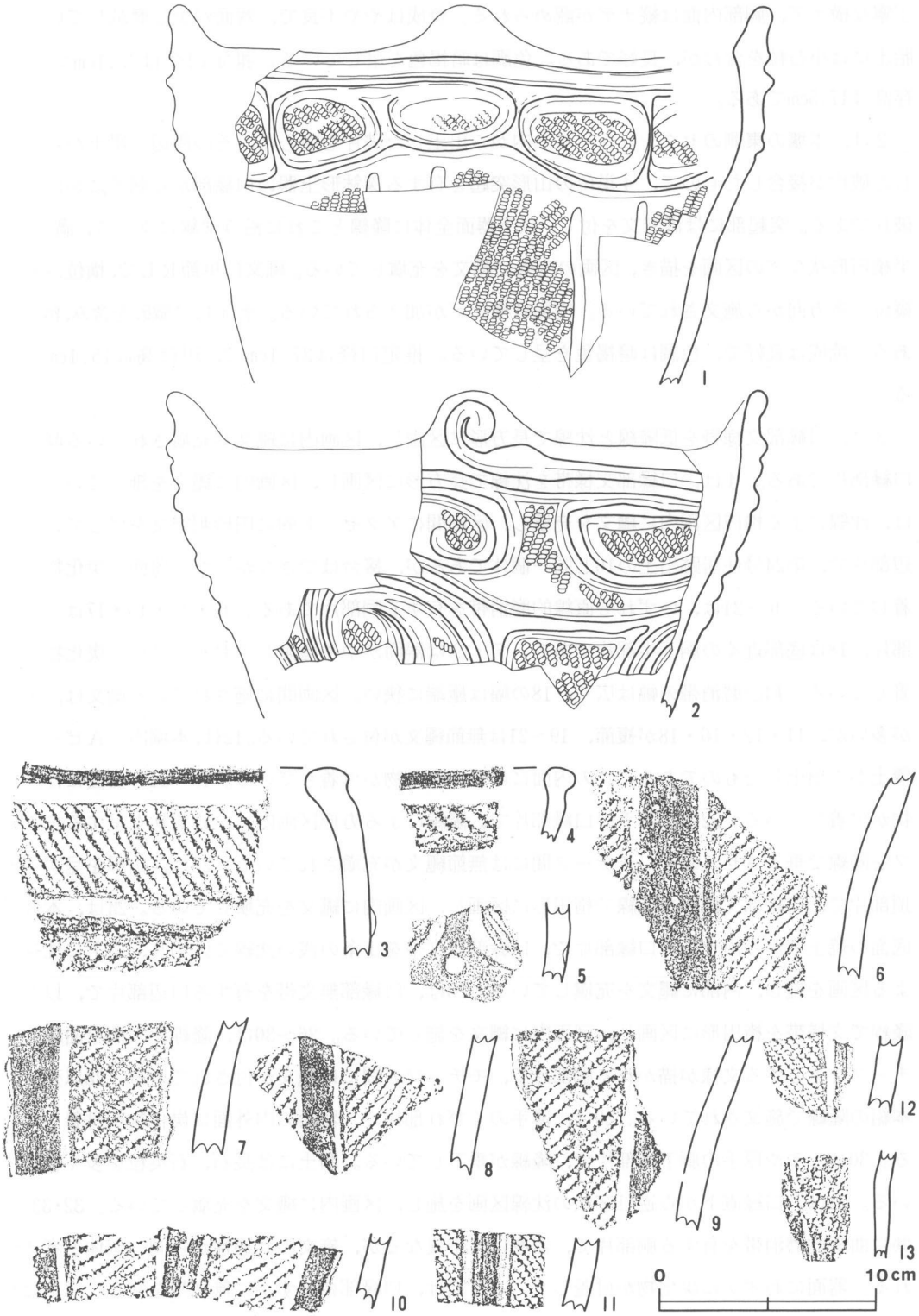

**第549図　第407号土壙出土遺物実測図・拓影図**

**第409号土壙**（第566図）

本土壙は，E2e$_6$区を中心に確認された。平面形は，径2.85mの円形である。壁は開口部から垂直に92cm掘りこまれ，底面は平坦である。さらに，底面には３か所のピット（南から左まわりにＡ・Ｂ・Ｃと呼称）があり，このピットも垂直に掘りこまれ，土壙の底面から52～89cmの深さを有している。また，中央にはロームを掘り残した長径0.84m，短径0.36mの楕円形の盛り上がり部分があり，その中央には径30cm・深さ74cmの垂直に掘りこまれたピットがある。Ｃピットの東側には焼土が認められ，平面形は長径0.6m・短径0.5m・深さ24cmの範囲で広がっている。焼土は，４層に分かれて堆積している。覆土は，７層からなり，ほぼ自然堆積である。遺物は，縄文土器片が覆土から600点出土している。大部分は覆土の上層からであるが，約150点は底面の中央にかたまって出土している。

**第409号土壙出土土器**（第550～554図１～50，53～64）

１は，本壙の中央部の覆土上位から内面を上にして出土した口縁部片を中心に，他の若干の破片が接合したもので，４単位の山形突起を有する深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。突起部の内面に稜を有する点が特徴的である。口縁直下に１条の沈線を巡らし，口縁部文様帯を隆線で主に楕円文を連続させて区画し，胴部には直線的磨消帯を垂下させている。口縁部文様帯内には横位，胴部の区画間には縦位回転で，単節縄文ＲＬを施文している。口縁部内面は，




**第550図　第409号土壙出土遺物実測図・拓影図(1)**

丁寧な横ナデ，胴部内面は縦ナデが認められる。焼成はやや不良で，器面が少し磨滅している。胎土には小石粒を含むが，良好である。色調は暗褐色を呈している。推定口径は27.1cmで，現存高は17.5cmである。

2は，本壙の東側のセクションベルト内から出土した破片を中心に，その周辺の覆土から出土した破片が接合したもので，4単位の山形突起を有する深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。突起部には渦巻文を付し，以下器面全体に隆線とこれに沿う沈線によって，渦巻状，半楕円形状などの区画を描き，区画の内外に縄文を充塡している。縄文は単節ＲＬで，横位，斜位，縦位と多方向から施文されている。内面は横ナデが加えられている。胎土には微砂を含み，緻密である。焼成は良好で，色調は暗褐色を呈している。推定口径は27.1cmで，現存高は15.1cmである。

3は，口縁部文様帯を低隆線と沈線で長方形に区画し，区画内に縄文が充塡されている厚手の口縁部片である。4は，口縁部文様帯を沈線で長方形に区画し，区画内に縄文を施している。5は，沈線による楕円区画内に縄文を充塡し，区画間にアクセント的に円形刺突文を付している口辺部片で，第24号住居跡出土の10と同一個体であるが，接合はできなかった。器面に炭化物が付着している。6～21は，いずれも直線的磨消帯を有する胴部片である。6・9・13・17はくびれ部片，18は底部近くの胴下半部片である。7・9は器面がやや磨滅しており，7には炭化物が付着している。14の磨消帯の幅は広く，18の幅は極端に狭い。区画間に施されている縄文は，単節が多いが，11・12・16・18が複節，19～21は無節縄文が付されている。12は，本壙内のＡピットの覆土から出土したものである。13の内面には厚く炭化物が付着している。19・21の器面には炭化物が付着している。22は，薄手の口縁部片で，隆線による方形区画内に，釣鈎状を呈するモチーフを隆線で垂下させており，モチーフ間には無節縄文が充塡されている。23は，山形を呈する波頂部片で，口縁部文様帯を隆線で楕円形に区画し，区画内に縄文を充塡している。24は，本壙の底面の焼土中から出土した口縁部片で，口縁部無文帯を1条の浅い沈線で区切り，以下に沈線による区画を施し，内部に縄文を充塡している。25は，口縁部無文帯を有する口辺部片で，以下に隆線で文様帯を楕円形に区画し，区画内に縄文を施している。26～30は，隆線で大柄な曲線的モチーフを主とする文様が描かれる胴部片で，モチーフの間には縄文が付されている。28以外は2本組の隆線で施文されている。29は，薄手のくびれ部片で，器面の内外面に炭化物が付着している。30は，やや厚手の胴下半部片で，隆線が垂下している。胎土には長石，石英粒を多く含んでいる。31は，口縁直下から逆Ｕ字状の沈線区画を施し，区画内に縄文を充塡している。32・33は，共に曲線的磨消帯を有する胴部片で，器厚は若干異なるが，施文の共通性から同一個体と考えられる。器面にわずかに炭化物が付着している。34は，口縁部にわずかに無文帯を残し，以下に粗い沈線文を縦位に施文しており，いわゆる曽利系の土器と思われる。35～38は，縦位の条線文が

第551図　第409号土壙出土遺物拓影図(2)

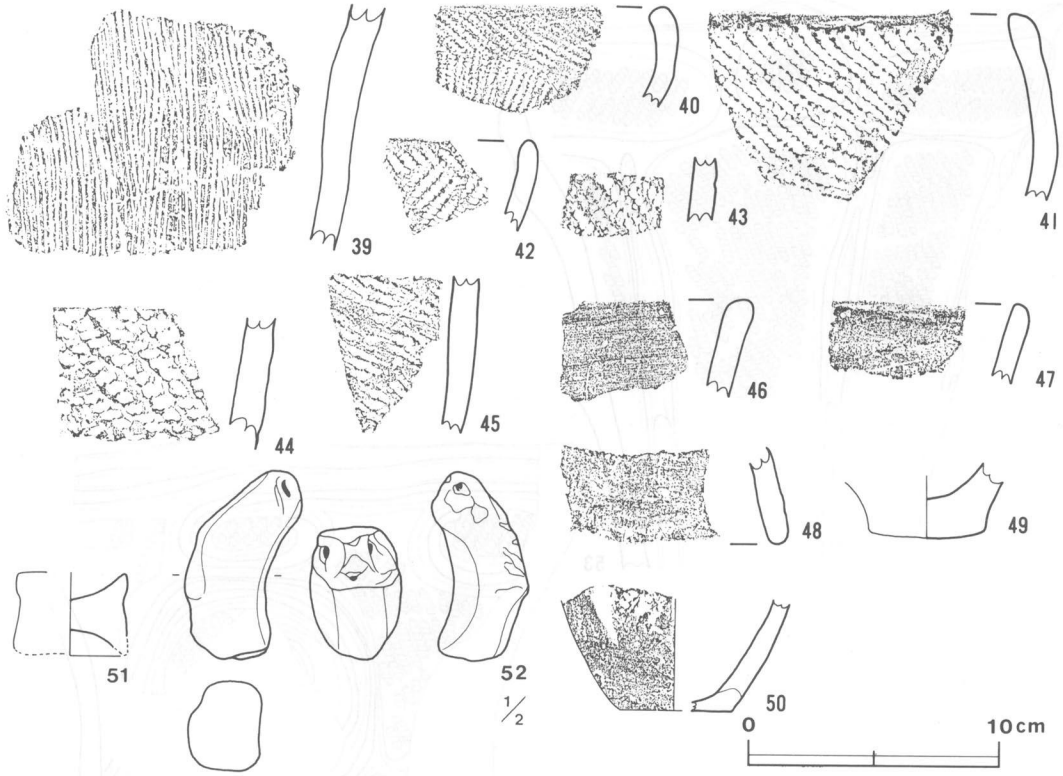
施された胴部片である。35は，条線がやや太く，間隔も粗い。38は，胴下半部片で，底面近くは無文となっている。39は，縦位の条線文と縄文が併用されている胴部片で，拓本の右上部に縄文が条線文の上に施文されているのが観察される。40～45は，縄文だけが施されているもので，40～42が口縁部片，43～45が胴部片である。40・42は，口縁直下は横位，以下は縦位（42），斜位（40）回転で施文されている。41は，横位回転だけで施文されている。40は，器面が磨滅している。41の器面には炭化物が付着している。43は複節，45は無節縄文が付されている。44は，本壙内のＣピットの覆土から出土したもので，粒の大きい単節縄文が施されている。46・47は，無文の口縁部片である。48は，無文の台部片である。

49は，本壙の北東側の覆土から出土した底部片で，底面が少し突出気味で，不安定である。底面の近くは横ナデが加えられている。胎土には小石粒，微砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。底径は4.8cmで，現存高は2.2cmである。

50は，本壙の北東側の覆土から出土した底部片で，底面の中央部は薄くなっている。外面には磨消懸垂文が認められ，区画間の縄文は単節ＲＬで，縦位回転である。底面の近くは，横ナデ調整が加えられている。胎土に微砂を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が黒褐色を呈している。推定底径は4.5cmで，現存高は4.3cmである。

53は，本壙と第23号住居跡の覆土から出土した破片が接合したものである。緩い山形の小突起が４か所つけられた小形の深鉢形土器で，口縁部から胴部にかけてがほぼ完存し，胴下半部以下を欠損している。口縁部文様帯は，隆線と沈線により長楕円形と円形の区画文が４単位で構成されている。胴部には，７本の隆線と沈線による懸垂文が施されている。この懸垂文は，やや太めの隆線を貼付し，その中央部を１本の沈線で割り，２本のように見せかけている。さらに，この懸垂文上に，口縁部文様帯の直下と胴部中位の２か所に突起部を設けている。但し，このうちの１本は上位の突起部が省略されている。胴部懸垂文に沿って１本の沈線が施されており，上端が連結し，逆Ｕ字状のモチーフを表現している。口縁部文様帯内および胴部の区画間には単節縄文ＲＬが，口縁部は横位，胴部は縦位回転で施文されているが，口縁部文様帯の円形区画文のうちの１か所だけが縦位回転で付されている。あるいは本土器の正面を示すものかもかれない。胎土にはわずかな石粒と砂粒を含むが良好である。焼成も良好で，色調は褐色を呈している。口径は23.1cmで，現存高は22.8cmである。

54は，本壙の中央部から南側にかけての覆土から出土した破片20数点を中心に，第23号住居跡の北側の覆土から出土した破片７点が接合したものである。胴下半部以下を欠損するが，胴上半部以上はほぼ完存する深鉢形土器である。胴下半部の断面はまさに擦り切ったように観察され，意図的な切断と思われる。口縁部文様帯は沈線により円形と楕円形に４単位に区画され，胴部は磨消懸垂文が垂下し，８単位である。単節縄文ＲＬが，口縁部区画内および胴部の区画間に施さ

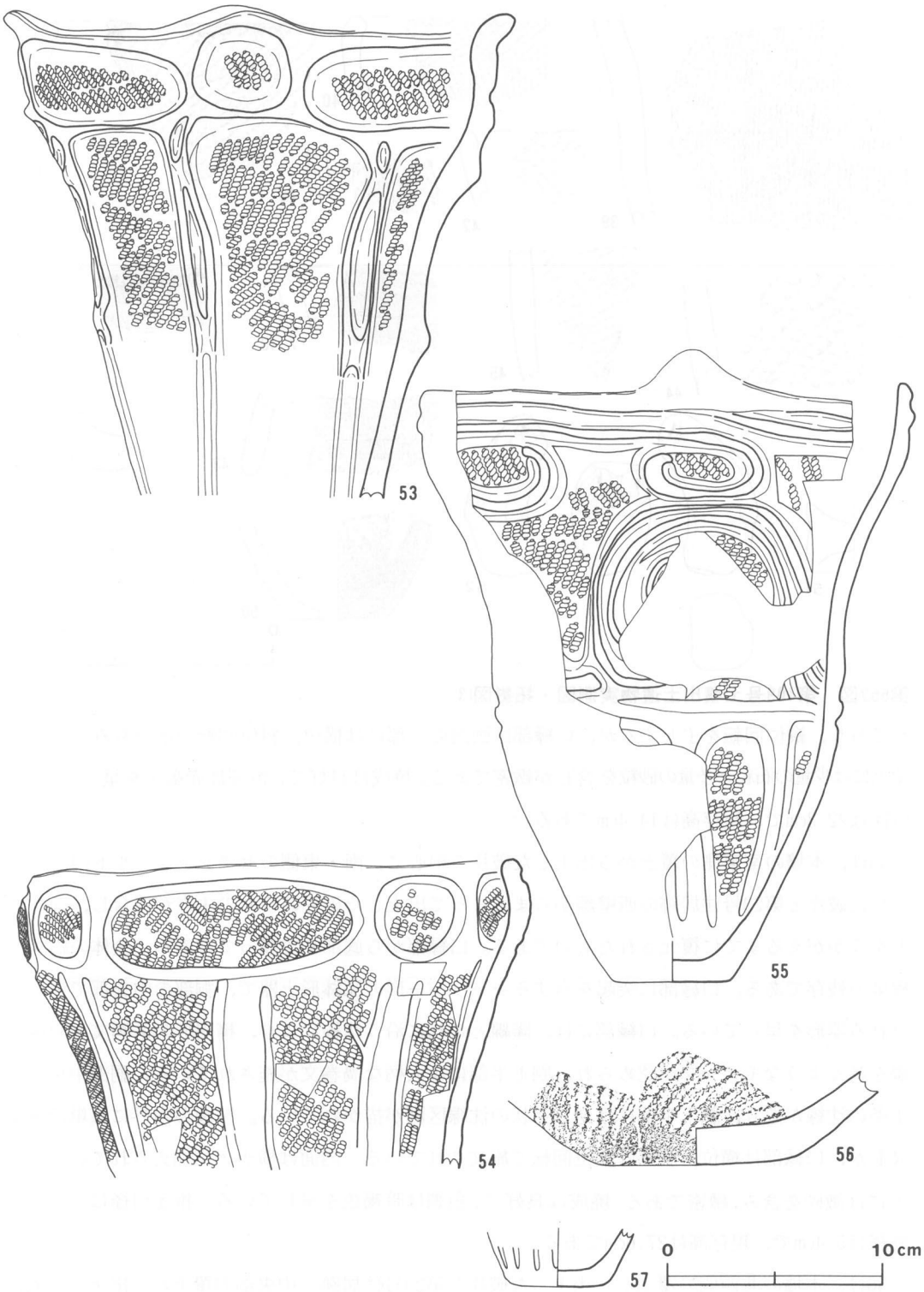



**第552図　第409号土壙出土遺物実測図・拓影図(3)**

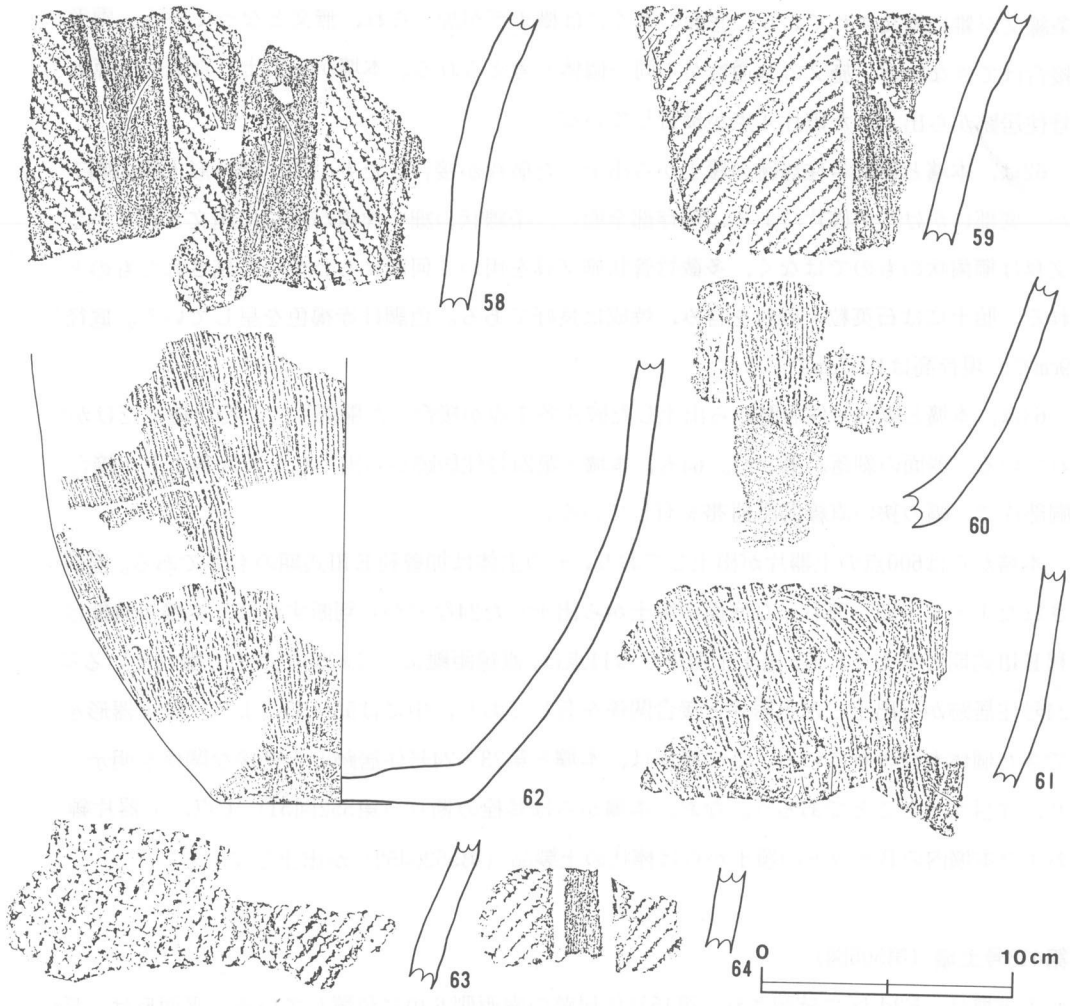
れており，縦位回転を主とするが，口縁部区画内の一部には横位，斜位回転の部分もみられる。胎土には少量の石粒と多量の砂粒を含むが緻密である。焼成は良好で，色調は赤褐色を呈している。口径は22.3cmで，現存高は14.4cmである。

55は，本壙の南東側の覆土から出土した破片を中心に，南・東側のセクションベルト内から出土した破片と第23号住居跡の西壁際からまとまって出土した破片のうちの１点が接合し，ほぼ器形をうかがえるまでに復元されたものである。口縁部から底部まで残っているが，全体の約30％程度の残存である。口縁部に突起を有するキャリパー形の深鉢形土器で，胴部の中央部で少しくびれる器形を呈している。口縁部には，隆線とこれに沿う沈線により，楕円形の区画文と両端が渦を巻くようなモチーフが認められ，胴上半部には大柄な渦巻文が施されている。胴部中央には１条の沈線が巡り，胴下半部には逆Ｕ字状の沈線区画が描かれている。区画の内外には単節縄文ＲＬが，口縁部は横位，胴部は縦位回転で施文されている。内面は横ナデが加えられている。胎土には微砂を含み，緻密である。焼成は良好で，色調は暗褐色を呈している。推定口径は23.4cm，底径は5.4cmで，現存高は27.6cmである。

56は，本壙の北西側の覆土から出土した破片と第23号住居跡の中央部の覆土から出土した底部片が接合したもので，器厚1.5cmと厚手の鉢形土器の底部片である。外面は単節縄文ＲＬが縦位回




第553図　第409号土壙出土遺物実測図(4)




**第554図　第409号土壙出土遺物実測図・拓影図(5)**

転で施文され，底面の近くは横ナデが加えられている。内面も横ナデが施されている。胎土にはわずかの小石粒と多量の砂粒を含んでいる。焼成は良好で，色調は外面が褐色，内面が薄い暗褐色を呈している。底径は9.3cmで，現存高は4.2cmである。

57は，本壙のセクションベルトから出土した破片３点と第23号住居跡の覆土から出土した破片２点が接合した小形深鉢形土器の底部片である。外面には磨消懸垂文が施されている。胎土には石英粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色で，内面が灰黒色を呈している。底径は4.2cmで，現存高は2.8cmである。

58・59は，直線的磨消帯を有する胴部片で，58の器面には炭化物が付着している。58は，本壙と第23号住居跡出土の破片各１点ずつが接合し，59は，本壙と第23号住居跡出土の破片各２点ずつが接合したものである。60・61は，深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片で，縦位の

条線文が雑に施文されており，底面の近くには横ナデが加えられ，無文となっている。両者は，接合はできないが，施文の共通性から同一個体と考えられる。本壙から出土した破片７点と第23号住居跡から出土した破片４点が接合している。

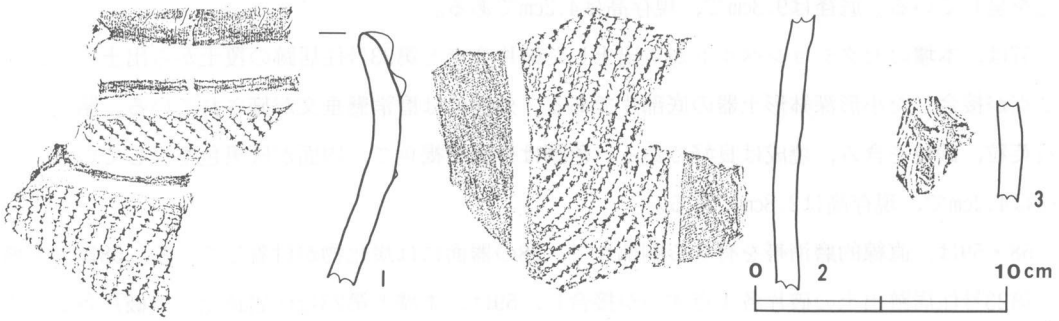
62は，本壙と第23号住居跡の覆土から出土した破片が接合したもので，深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。残存部全面に，条線状の細い沈線が縦位に施文されている。施文具は櫛歯状のものではなく，多截竹管状施文具を用いて何回にもわたって施されたものと思われる。胎土には石英粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は赤褐色を呈している。底径は9.9cmで，現存高は17.7cmである。

63は，本壙と第24号住居跡から出土した破片各１点が接合した胴部片で，粗い縄文だけが付されている。器面の剝落が著しい。64も，本壙と第24号住居跡から出土した破片各１点が接合した胴部片で，幅の狭い直線的磨消帯を有している。

本壙からは600点の土器片が出土しており，その主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。器形復元された１・２・53～55および底面の焼土から出土した24などから判断すれば，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。出土土器のうち11点は，直線距離にして約50m以上も離れている第23・24号住居跡から出土した土器片と接合関係を有しており，中には53～55のようにほぼ器形を復元できた個体も含まれている。この事実は，本壙と第23・24号住居跡との密接な関係を明示しており，注目すべきことであろう。なお，本壙からは耳栓の断片（第552図51）１点，土器片錘19点および本壙内のＢピットの覆土からは棒状の土製品（第552図52）が出土している。

**第413号土壙**（第506図）

本土壙は，E3$d_6$区に確認され，第15号住居跡の南西側６ｍに位置している。平面形は，長径1.87m・短径1.59mの不定形である。長径方向は，Ｎ－０°を指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は24cm差で２段に掘りこまれている。確認面からの深さは，最深部で43cmである。覆土は，３層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から15点出土している。




**第555図　第413号土壙出土遺物拓影図**

**第413号土壙出土土器**（第555図１～３）

１は，口縁部文様帯を隆線で長楕円形に区画し，区画内に縄文が充塡されている。２は，幅の広い直線的磨消帯を有する胴部片である。３は，条線文が曲線的に付されている胴部片である。

本壙からは15点の土器片が出土しており，主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

**第415号土壙**（第592図）

本土壙は，E3$c_6$区に確認され，第15号住居跡の南西側４ｍに位置している。平面形は，長径1.28ｍ・短径1.14ｍの楕円形である。長径方向は，Ｎ－14°－Ｅを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，40cmである。覆土は，１層だけなので，埋め戻された土層と考えられる。遺物は，縄文土器片が覆土から30点出土している。

**第415号土壙出土土器**（第556図１～10）

１は，本壙の覆土から出土した破片７点が接合したもので，平縁の深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部に無文帯を残し，低平な隆線で口縁部文様帯を楕円形に区画し，胴部には直線的磨消帯を垂下させている。口縁部文様帯内および胴部の区画間に単節縄文ＲＬを縦位回転で施文している。内面上半部は，器面の剝落が目立ち，下半部は縦ナデが加えられている。器面には炭化物の付着が認められる。胎土には粗砂を含み，焼成は良好である。色調は内外面とも褐色を呈している。推定口径は29.6cmで，現存高は18.0cmである。

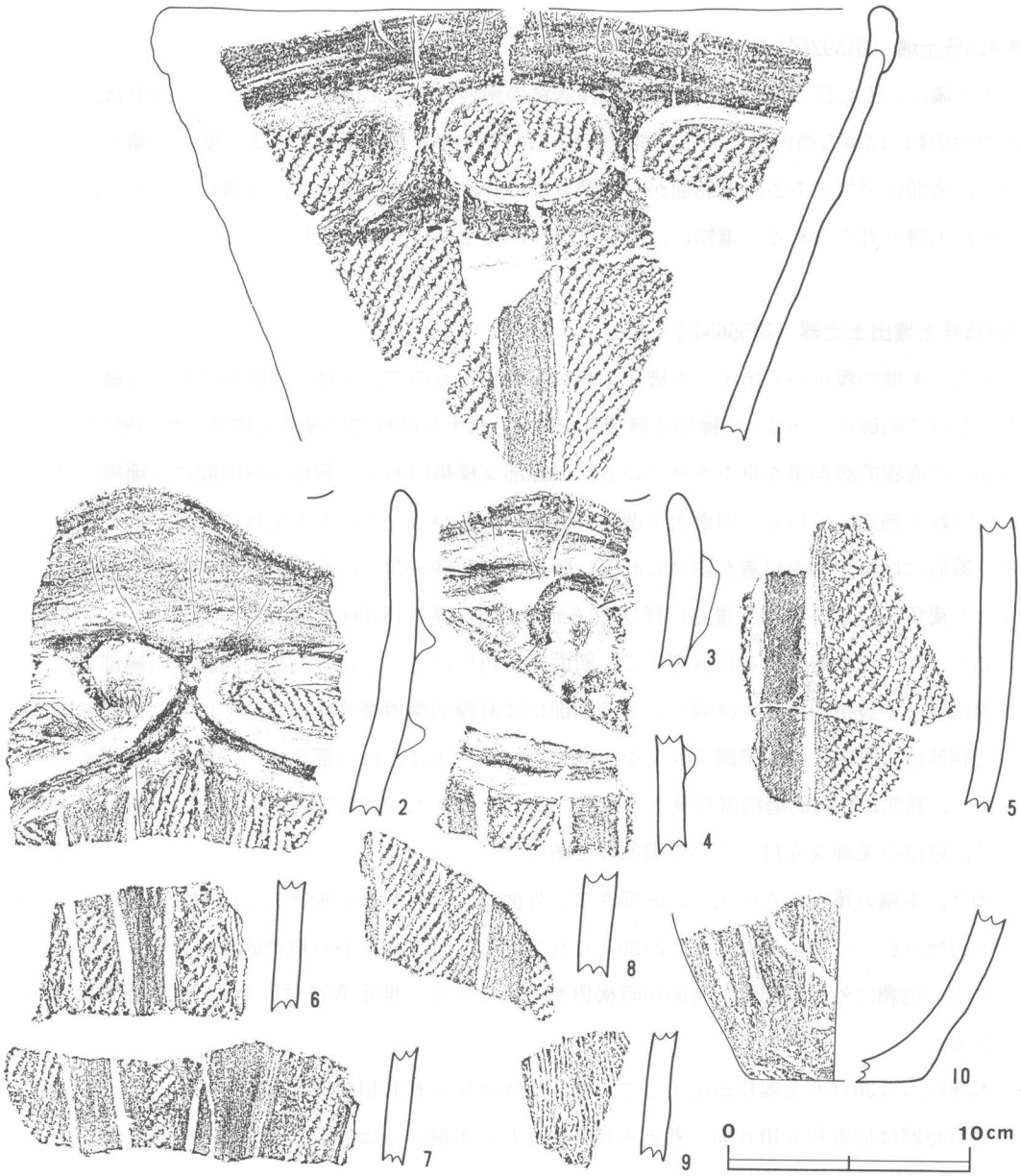
２・３は，波状を呈する口縁部片で，断面が三角形に近く，比較的高い隆線で口縁部文様帯を渦巻状および長楕円形状に区画し，２の胴部には直線的磨消帯を垂下させている。口縁部文様帯内と胴部の区画間には単節縄文ＲＬを充塡している。４は，口辺部片で，口縁部文様帯を隆線で区画し，胴部に直線的磨消帯を垂下させている。５～８は，直線的磨消帯を有する胴部片である。９は，縦位の条線文を付している胴部片である。

10は，本壙の覆土から出土した底部片で，外面に２本の沈線が垂下している。底面の近くは横ナデが施されている。内面もナデが加えられている。胎土には小石粒や砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。推定底径は7.1cmで，現存高は6.6cmである。

本壙からは30点の土器片が出土しており，主体は加曽利ＥⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。なお，本壙からは土器片錘１点が出土している。

**第422号土壙**（第592図）

本土壙は，E3c$_5$区を中心に確認され，第13号住居跡の南西側４ｍに位置している。平面形は，長径0.95m・短径0.75mの楕円形である。長径方向は，N－15°－Wを指している。南側で第407号土壙と重複している。壁は外傾して立ち上がり，底面は皿状に中央が凹んでいる。断面からみる



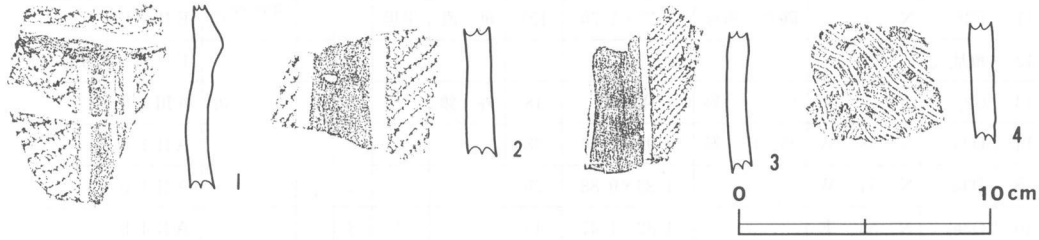

**第556図　第415号土壙出土遺物実測図・拓影図**

とすり鉢状の掘りこみである。確認面からの深さは，28cmである。覆土は，3層からなっている。遺物は，縄文土器片が確認面から7点出土している。

**第422号土壙出土土器**（第557図1～4）

1～4とも本壙の確認面から出土したもので，覆土からは出土しなかった。1～3は，口辺部から胴部にかけての破片で，口縁部文様帯を低隆線で区画し，胴部に直線的磨消帯を施し，区画間に縄文を充填している。4は，曲線的な条線文を付している胴部片である。

本壙からは7点の土器片が出土しており，主体は加曽利EⅢ式期のものであるが，いずれも上記のように本壙の確認面から出土したもので，本壙に伴うものとは考えられない。したがって，本壙の時期は不明である。




**第557図　第422号土壙出土遺物拓影図**

## 表10　土壙一覧表（7区）

(1)

| 番号 | 位置 | 長径方向 | 平面形 | 規模 長径×短径(m) | 規模 深さ(cm) | 壁面 | 底面 | 覆土 | ピット数 | 出土遺物 縄文土器片(点) | 形態分類 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | E4g$_4$ | N－75°－E | 楕円形 | 0.72×0.58 | 15 | 外傾 | 起伏 | 1 | — | | AI1b | SI－8内 |
| 2 | 撹乱穴 | | | | | | | | | | F | SD－3内 |
| 3 | 〃 | | | | | | | | | | F | SD－3内 |
| 4 | 〃 | | | | | | | | | | F | SD－9内 |
| 5 | 〃 | | | | | | | | | | F | SD－5内 |
| 6 | 〃 | | | | | | | | | | F | SD－5内 |
| 7 | 〃 | | | | | | | | | | F | SD－5内 |
| 8 | 〃 | | | | | | | | | | F | SD－5内 |
| 9 | 〃 | | | | | | | | | | F | SD－5内 |
| 10 | 〃 | | | | | | | | | | F | SD－4内 |
| 11 | F3f$_8$ | N－0° | 隅丸三角形 | 1.77×1.70 | 123 | 垂直 | 平坦 | — | — | 第608図1～2 (7) | EII3b | |
| 12 | 撹乱穴 | | | | | | | — | — | | F | SD－8内 |
| 13 | C2j$_9$ | | 円形 | 径2.52 | 18 | 外傾 | 〃 | 2 | — | (10) | AIII1b | |
| 14 | D2a$_0$ | N－58°－W | 楕円形 | 1.95×1.40 | 38 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII1b | |
| 15 | D3a$_1$ | N－54°－W | 〃 | 1.33×0.88 | 20 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII1b | |
| 16 | D3a$_3$ | N－56°－E | 〃 | 1.82×1.47 | 13 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII1b | |
| 17 | D3b$_1$ | N－41°－E | 〃 | 2.18×1.80 | 34 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AIII1b | |
| 18 | D2b$_9$ | | 円形 | 径0.80 | 46 | 〃 | 〃 | 1 | — | | AI1b | |
| 19 | D2c$_9$ | N－64°－W | 楕円形 | 1.02×0.86 | 46 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BII1b | |
| 20 | D2d$_9$ | N－52°－E | 〃 | 1.52×1.25 | 40 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AII1b | |
| 21 | D2d$_0$ | N－66°－W | 〃 | 1.68×0.86 | 38 | 外傾 | 平坦 | 2 | — | | AII1b | |
| 22 | D2d$_0$ | | 円形 | 径1.34 | 40 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BII1b | |
| 23 | D3e$_1$ | N－22°－E | 楕円形 | 1.46×1.00 | 25 | 外傾 | 〃 | 3 | — | | AII1b | |
| 24 | D3d$_1$ | N－2°－W | 〃 | 2.98×2.21 | 41 | 垂直 | 〃 | 4 | — | | BIII1b | |
| 25 | D2c$_0$ | N－58°－W | ひょうたん形 | 2.34×1.80 | 35 | 外傾 | 〃 | 3 | — | (4) | EIII1b | |
| 26 | D2b$_0$ | N－28－E | 楕円形 | 1.38×1.12 | 30 | 〃 | 〃 | 2 | — | (4) | AII1b | SK－27と重複 |
| 27 | D2b$_0$ | N－37°－E | 〃 | 0.99×0.88 | 32 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI1b | SK－26と重複 |
| 28 | D3d$_2$ | N－4°－E | 〃 | 0.84×0.66 | 35 | 〃 | 〃 | 2 | 2 | | AI1a | |
| 29 | D3d$_2$ | N-19.5°-E | 楕円形 | 1.50×1.22 | 37 | 垂直 | 〃 | 2 | 1 | | BII1a | |
| 30 | D3d$_2$ | N－64°－W | 〃 | 1.06×0.93 | 45 | 外傾 | 〃 | 1 | — | | AII1b | |
| 31 | D3d$_3$ | N－85°－W | 〃 | 1.30×1.10 | 45 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BII1b | |
| 32 | D3c$_3$ | | 円形 | 径0.98 | 36 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AI1b | |
| 33 | D3c$_3$ | N－66°－W | 楕円形 | 0.96×0.80 | 35 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI1b | |
| 34 | D3f$_2$ | N－29°－W | 〃 | 3.26×2.00 | 91 | 〃 | 〃 | 2 | — | (7) | AIII2b | |
| 35 | D3e$_2$ | N－48°－E | 〃 | 1.55×1.22 | 25 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII1b | |

| 番号 | 位置 | 長径方向 | 平面形 | 規模 長径×短径(m) | 規模 深さ(cm) | 壁面 | 底面 | 覆土 | ピット数 | 出土遺物 縄文土器片(点) | 形態分類 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 36 | D3e$_3$ | N－9°－W | 楕円形 | 1.08×0.94 | 37 | 外傾 | 平坦 | 3 | — | 第608図 3～6 (11) | AⅡ1b | |
| 37 | D3e$_3$ | | 円形 | 径0.55 | 46 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BⅠ1b | |
| 38 | D3e$_3$ | | 〃 | 径0.54 | 46 | 〃 | 〃 | 2 | — | | BⅠ1b | |
| 39 | D3e$_3$ | N－35°－E | 楕円形 | 0.83×0.68 | 51 | 外傾 | 平坦 | 2 | — | | AⅠ2b | |
| 40 | D3e$_4$ | N－67°－W | 〃 | 1.97×1.23 | 42 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 41 | D3d$_4$ | N－24°－W | 〃 | 1.84×0.83 | 35 | 〃 | 〃 | 3 | — | 第608図 7 (2) | AⅡ1b | |
| 42 | D3c$_4$ | | 円形 | 径1.07 | 36 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 43 | D3c$_5$ | N－26°－E | 楕円形 | 0.90×0.78 | 32 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅠ1b | |
| 44 | D3c$_5$ | | 円形 | 径0.93 | 32 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅠ1b | |
| 45 | D3d$_4$ | N－53°－E | 楕円形 | 1.34×1.14 | 36 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 46 | D3f$_4$ | N－50°－E | 〃 | 1.28×1.05 | 35 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第608図 8 (7) | AⅡ1b | |
| 47 | D3f$_4$ | N－75°－W | 〃 | 1.95×1.40 | 40 | 〃 | 〃 | 3 | — | (1) | AⅡ1b | |
| 48 | D3g$_4$ | N－74°－W | 〃 | 2.22×1.35 | 34 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BⅢ1b | |
| 49 | D3f$_3$ | N－16°－E | 〃 | 1.85×1.20 | 37 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 50 | D3f$_3$ | N－30°－W | 〃 | 1.16×0.83 | 35 | 垂直 | 〃 | 2 | — | (3) | BⅡ1b | |
| 51 | D3g$_3$ | N－82°－E | 〃 | 0.92×0.8 | 31 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AⅠ1b | |
| 52 | D3g$_2$ | N－51°－W | 〃 | 1.10×0.94 | 24 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AⅡ1b | |
| 53 | D3h$_3$ | | 円形 | 径1.00 | 45 | 〃 | 〃 | 1 | 1 | | AⅡ1a | |
| 54 | D3h$_3$ | N-26.5°-E | 楕円形 | 1.90×1.32 | 29 | 〃 | 〃 | 1 | — | | AⅡ1b | |
| 55 | D3h$_3$ | | 円形 | 径0.72 | 32 | 垂直 | 〃 | 1 | — | | BⅠ1b | |
| 56 | D3i$_3$ | N－38°－E | 楕円形 | 1.03×0.75 | 38 | 〃 | 〃 | 2 | — | | BⅡ1b | |
| 57 | D3i$_3$ | N－67°－E | 〃 | 1.20×1.00 | 35 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 58 | D3i$_2$ | N－58°－E | 〃 | 0.80×0.65 | 30 | 垂直 | 〃 | 3 | — | | BⅠ1b | |
| 59 | D3i$_2$ | | 円形 | 径0.95 | 25 | 外傾 | 〃 | 3 | — | | AⅠ1b | |
| 60 | D3i$_2$ | N－48°－W | 楕円形 | 0.85×0.75 | 33 | 垂直 | 〃 | 3 | — | (1) | BⅠ1b | |
| 61 | D2g$_6$ | N－46°－W | 〃 | 1.74×1.60 | 44 | 外傾 | 起伏 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 62 | D2g$_6$ | N－0° | 〃 | 1.68×0.96 | 26 | 〃 | 平坦 | 3 | — | | AⅡ1b | |
| 63 | D2g$_5$ | N－34°－W | 〃 | 2.48×1.67 | 25 | 〃 | 〃 | 2 | — | (1) | AⅢ1b | |
| 64 | D2g$_5$ | N－51°－E | 〃 | 1.13×0.98 | 30 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 65 | D2h$_5$ | N－77°－E | 〃 | 1.48×1.17 | 37 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 66 | D2h$_5$ | | 円形 | 0.86×0.8 | 32 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅠ1b | |
| 67 | D2h$_5$ | | 〃 | 径0.85 | 27 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BⅠ1b | |
| 68 | D2i$_5$ | N－90°－E | 楕円形 | 2.82×2.52 | 66 | 外傾 | 凹凸 | 5 | 1 | 第608図 9 (1) | AⅢ2a | |
| 69 | D2j$_4$ | N－37°－E | 〃 | 1.12×0.98 | 24 | 〃 | 平坦 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 70 | D2j$_4$ | N－37°－E | 〃 | 1.66×0.92 | 17 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BⅡ1b | |

| 番号 | 位置 | 長径方向 | 平面形 | 規模 長径×短径(m) | 規模 深さ(cm) | 壁面 | 底面 | 覆土 | ピット数 | 出土遺物 縄文土器片(点) | 形態分類 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 71 | D2j5 | N－29°－W | 楕円形 | 1.30×0.68 | 15 | 外傾 | 平坦 | 1 | — | | AⅡ1b | |
| 72 | D2j5 | | 円形 | 径0.82 | 15 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BⅠ1b | |
| 73 | D2i5 | N－58°－W | 楕円形 | 1.20×0.98 | 26 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 74 | D2i6 | N－55°－W | 〃 | 1.42×1.26 | 32 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AⅡ1b | |
| 75 | D2i6 | N－26°－W | 〃 | 2.00×0.8 | 25 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第608図10 (1) | AⅢ1b | |
| 76 | D2i6 | N－75°－E | 〃 | 1.28×1.00 | 18 | 〃 | 〃 | 4 | — | | AⅡ1b | |
| 77 | D2i6 | N－44°－W | 〃 | 1.07×0.75 | 25 | 〃 | 〃 | 4 | — | | AⅡ1b | |
| 78 | D2i7 | N－40°－W | 〃 | 0.98×0.81 | 30 | 〃 | 起伏 | 2 | — | | AⅠ1b | |
| 79 | E2a6 | N－53°－W | 〃 | 1.18×0.85 | 40 | 〃 | 平坦 | 3 | — | (1) | AⅡ1b | |
| 80 | E2a6 | N－45°－W | 〃 | 1.25×0.89 | 36 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 81 | E2a6 | N－72°－E | 〃 | 1.47×1.12 | 30 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AⅡ1b | |
| 82 | E2a6 | | 円形 | 径0.98 | 29 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BⅠ1b | |
| 83 | D2j6 | N－46°－E | 楕円形 | 1.43×1.15 | 22 | 外傾 | 〃 | 2 | — | 第608図11～12 (7) | AⅡ1b | |
| 84 | D2j6 | | 円形 | 径0.82 | 26 | 垂直 | 〃 | 3 | — | | BⅠ1b | |
| 85 | D2j7 | N－90°－W | 楕円形 | 1.04×0.90 | 34 | 外傾 | 〃 | 3 | — | | AⅡ1b | |
| 86 | D2i7 | N－90°－W | 〃 | 0.85×0.72 | 32 | 垂直 | 〃 | 2 | — | 第608図13 (3) | BⅠ1b | |
| 87 | D2i7 | N－56°－E | 〃 | 0.8×0.67 | 18 | 外傾 | 〃 | 3 | — | 第608図14 (2) | AⅠ1b | |
| 88 | D2j7 | N－41°－E | 〃 | 1.07×0.85 | 30 | 垂直 | 〃 | 3 | — | 第608図15 (1) | BⅡ1b | |
| 89 | D2h8 | N－26°－W | 〃 | 1.05×0.98 | 55 | 外傾 | 凹凸 | 2 | — | | AⅡ2b | |
| 90 | D2h8 | | 円形 | 径0.98 | 59 | 〃 | 平坦 | 2 | — | | AⅠ2b | |
| 91 | D2h8 | N－90°－E | 楕円形 | 1.24×1.10 | 30 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 92 | D2j0 | N－0° | 〃 | 1.5×1.06 | 32 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AⅡ1b | |
| 93 | D2j0 | N－0° | 〃 | 1.03×0.82 | 34 | 垂直 | 〃 | 2 | — | 第608図16～18 (15) | BⅡ1b | |
| 94 | D2j0 | N－37°－E | 〃 | 0.7×0.55 | 37 | 外傾 | 〃 | 3 | — | | AⅠ1b | |
| 95 | D2j0 | N－0° | 〃 | 1.48×1.36 | 31 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AⅡ1b | |
| 96 | D3j2 | N－57°－E | 〃 | 1.32×0.94 | 25 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 97 | D3j2 | N－0° | 〃 | 1.03×0.82 | 31 | 〃 | 〃 | 2 | — | (17) | AⅡ1b | |
| 98 | D3j2 | | 円形 | 径0.77 | 30 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第608図19 (1) | AⅠ1b | |
| 99 | D3j2 | N－78°－E | 楕円形 | 1.15×0.91 | 26 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AⅡ1b | |
| 100 | D3j2 | N－0° | 〃 | 1.00×0.87 | 28 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 101 | D3g4 | N－28°－W | 〃 | 1.10×0.8 | 22 | 垂直 | 〃 | 1 | — | | BⅡ1b | |
| 102 | D3g5 | N－47°－W | 〃 | 0.80×0.63 | 35 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AⅠ1b | |
| 103 | D3g5 | N－0° | 〃 | 3.10×2.8 | 35 | 〃 | 〃 | 2 | 1 | | AⅢ1a | |
| 104 | D3f5 | | 円形 | 径0.68 | 34 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BⅠ1b | |
| 105 | D3f5 | | 〃 | 径0.75 | 53 | 〃 | 〃 | 2 | — | | BⅠ2b | |

| 番号 | 位置 | 長径方向 | 平面形 | 規模 長径×短径(m) | 規模 深さ(cm) | 壁面 | 底面 | 覆土 | ピット数 | 出土遺物 縄文土器片(点) | 形態分類 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 106 | D3f$_5$ | N－21°－W | 楕円形 | 0.72×0.62 | 32 | 垂直 | 平坦 | 2 | — | | BI1b | |
| 107 | D3g$_6$ | N－45°－E | 〃 | 0.90×0.62 | 32 | 外傾 | 〃 | 2 | — | (1) | AI1b | |
| 108 | D3g$_6$ | | 円形 | 径1.12 | 31 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII1b | |
| 109 | D3f$_6$ | N－13°－W | 楕円形 | 1.08×0.85 | 30 | 〃 | 〃 | 3 | — | (1) | AII1b | |
| 110 | D3f$_6$ | N－90°－W | 〃 | 1.17×0.70 | 38 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第608図 20～21 (4) | AII1b | |
| 111 | D3f$_6$ | N－0° | 〃 | 1.30×0.84 | 38 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII1b | |
| 112 | D3e$_6$ | N－90°－W | 〃 | 1.28×1.00 | 38 | 〃 | 〃 | 3 | — | 第608図 22～23 (7) | AII1b | |
| 113 | D3d$_6$ | N－19°－W | 〃 | 1.35×0.98 | 37 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII1b | |
| 114 | D3e$_7$ | N－65°－W | 〃 | 1.05×0.77 | 35 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII1b | |
| 115 | D3e$_6$ | N－27°－W | 〃 | 1.20×1.08 | 39 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII1b | |
| 116 | D3d$_6$ | N－42°－E | 〃 | 1.20×1.02 | 34 | 〃 | 〃 | 3 | — | 第608図 24 (1) | AII1b | |
| 117 | D3d$_7$ | N－0° | 〃 | 0.88×0.67 | 28 | 垂直 | 〃 | 3 | — | | BI1b | |
| 118 | D3d$_7$ | N－0° | 〃 | 0.85×0.73 | 34 | 外傾 | 〃 | 3 | — | | AI1b | |
| 119 | D3d$_7$ | N－90°－W | 〃 | 1.03×0.82 | 25 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII1b | |
| 120 | D3e$_7$ | N－42°－E | 〃 | 2.17×1.10 | 31 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AIII1b | |
| 121 | D3e$_7$ | N－0° | 〃 | 0.8×0.55 | 30 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BI1b | |
| 122 | D3e$_8$ | N－90°－E | 〃 | 0.60×0.53 | 26 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AI1b | |
| 123 | D3d$_8$ | N－44°－W | 〃 | 0.7×0.55 | 27 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI1b | |
| 124 | D3d$_8$ | N－37°－E | 〃 | 0.88×0.67 | 36 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI1b | |
| 125 | D3d$_8$ | | 円形 | 径0.74 | 30 | 〃 | 凹凸 | 2 | 2 | | AI1a | |
| 126 | D3d$_8$ | | 〃 | 径0.68 | 22 | 〃 | 平坦 | 2 | 1 | | AI1a | |
| 127 | D3d$_8$ | | 〃 | 径0.53 | 38 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BI1b | |
| 128 | D3d$_8$ | N－0° | 楕円形 | 1.10×0.76 | 38 | 〃 | 〃 | 2 | — | | BII1b | |
| 129 | D3e$_8$ | N－77°－E | 〃 | 0.74×0.64 | 31 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AI1b | |
| 130 | D3e$_8$ | N－60°－W | 〃 | 0.85×0.63 | 34 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BI1b | |
| 131 | E2b$_5$ | N－0° | 不整楕円形 | 2.50×1.02 | 34 | 外傾 | 〃 | 3 | — | (1) | AIII1b | |
| 132 | E2b$_7$ | N－57°－W | 楕円形 | 1.07×0.85 | 34 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII1b | |
| 133 | E2a$_0$ | N－15°－W | 〃 | 1.45×0.87 | 35 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII1b | |
| 134 | E2a$_0$ | N－76°－W | 〃 | 1.25×0.71 | 35 | 〃 | 〃 | 3 | — | 第608図 25～26 (3) | AII1b | |
| 135 | E3a$_0$・a$_1$ | N－30°－E | 不整楕円形 | 3.05×1.60 | 74 | 〃 | 凹凸 | 7 | — | 第608図 27～29 (7) | AIII2b | SK136と重複 |
| 136 | E3a$_1$ | N－31°－E | (楕円形) | 1.38×(0.95) | 38 | 〃 | 平坦 | 5 | — | (13) | AII1b | SK135と重複 |
| 137 | E3a$_1$ | N－42°－W | 〃 | 1.01×0.83 | 34 | 垂直 | 〃 | 2 | 1 | | BII1a | |
| 138 | E3j$_0$ | | 円形 | 径1.00 | 58 | 外傾 | 起伏 | 6 | — | (12) | AII2b | |
| 139 | E3a$_1$ | | 〃 | 径0.65 | 41 | 垂直 | 平坦 | 2 | — | | BI1b | |
| 140 | D3j$_1$ | N－45°－W | 楕円形 | 3.18×1.82 | 35 | 〃 | 〃 | 3 | — | | BIII1b | SK143と重複 |

| 番号 | 位置 | 長径方向 | 平面形 | 規模 長径×短径(m) | 規模 深さ(cm) | 壁面 | 底面 | 覆土 | ピット数 | 出土遺物 縄文土器片(点) | 形態分類 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 141 | D3$j_1$ | N－42°－E | 楕円形 | 1.72×1.53 | 65 | 外傾 | 平坦 | 2 | — | (9) | AII 2 b | |
| 142 | D3$j_1$ | N－60°－W | 〃 | 1.30×0.80 | 30 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第608図30 (3) | AII 1 b | |
| 143 | D3$j_1$ | N－0° | (〃) | 0.75×(0.6) | 34 | 〃 | 〃 | 1 | — | (33) | AI 1 b | SK140と重複 |
| 144 | E3$a_2$ | N－80°－E | 〃 | 0.90×0.77 | 35 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BI 1 b | |
| 145 | E3$a_2$ | N－41°－W | 〃 | 0.85×0.75 | 35 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AI 1 b | |
| 146 | E3$a_2$ | | 円形 | 径0.72 | 33 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI 1 b | |
| 147 | D3$j_3$ | N－44°－E | 楕円形 | 1.37×0.9 | 33 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII 1 b | |
| 148 | D3$i_4$ | N－56°－E | 〃 | 2.24×1.35 | 35 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第608図31～32 (7) | AIII 1 b | |
| 149 | D3$i_4$ | N－50°－W | 〃 | 2.43×1.03 | 37 | 〃 | 起伏 | 2 | 2 | | AIII 1 a | |
| 150 | D3$h_4$ | N－24°－E | 〃 | 3.15×1.6 | 80 | 〃 | 凹凸 | 3 | — | 第608図33～34 (4) | AIII 1 b | |
| 151 | D3$h_3$ | N－64°－W | 〃 | 1.26×0.85 | 26 | 〃 | 平坦 | 3 | — | | AII 1 b | |
| 152 | E3$a_3$ | | 円形 | 径1.15 | 34 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第608図35 (1) | AII 1 b | |
| 153 | D3$j_4$ | N－17°－W | 楕円形 | 1.48×1.25 | 25 | 〃 | 〃 | 2 | — | (19) | AII 1 b | |
| 154 | D3$j_5$ | | 円形 | 径0.85 | 32 | 垂直 | 〃 | 2 | — | (14) | BI 1 b | |
| 155 | D3$j_5$ | N－72°－W | 楕円形 | 2.10×1.22 | 30 | 外傾 | 〃 | 2 | — | (69) | AII 1 b | |
| 156 | D3$j_5$ | N－30°－E | 〃 | 2.10×0.86 | 35 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII 1 b | |
| 157 | E3$b_5$ | | 円形 | 径1.12 | 40 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII 1 b | |
| 158 | E3$b_5$ | N－11°－W | 楕円形 | 1.65×1.25 | 38 | 〃 | 〃 | 2 | — | (1) | AII 1 b | |
| 159 | E3$b_5$ | | 円形 | 径1.10 | 26 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII 1 b | |
| 160 | E3$a_4$ | N－38°－W | 楕円形 | 2.28×1.66 | 36 | 〃 | 〃 | 3 | — | (61) | AIII 1 b | |
| 161 | E3$a_5$ | N－60°E | 〃 | 2.57×1.95 | 30 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AIII 1 b | |
| 162 | E3$a_6$ | N－30°－E | 不整楕円形 | 1.80×1.40 | 27 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第608図36 (2) | AII 1 b | |
| 163 | E3$a_6$ | N－42°－E | 楕円形 | 1.15×1.06 | 35 | 〃 | 〃 | 2 | 1 | | AII 1 a | |
| 164 | E3$a_4$ | N－85°－W | 〃 | 2.52×1.81 | 40 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第608図37～38 (17) | AIII 1 b | |
| 165 | D3$i_6$ | N－57°－E | 〃 | 3.15×2.20 | 35 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AIII 1 b | |
| 166 | D3$i_6$ | N－84°－E | 〃 | 1.65×1.10 | 28 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII 1 b | |
| 167 | D3$g_7$ | N－61°－W | 〃 | 1.13×0.85 | 38 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第608図39 (1) | AII 1 b | |
| 168 | D3$g_7$ | N－61°－W | 〃 | 1.30×1.00 | 30 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII 1 b | |
| 169 | D3$e_8$ | | 円形 | 径0.88 | 28 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI 1 b | |
| 170 | D3$e_8$ | N－32°－E | (楕円形) | 0.65×(0.55) | 17 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AI 1 b | |
| 171 | D3$e_8$ | N－32°－W | 〃 | 1.45×0.92 | 33 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII 1 b | |
| 172 | D3$e_8$ | | 円形 | 径0.80 | 30 | 垂直 | 〃 | 2 | 2 | | BI 1 a | |
| 173 | D3$e_9$ | N－12°－W | 楕円形 | 0.92×0.81 | 27 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AI 1 b | |
| 174 | D3$f_8$ | | 円形 | 径1.72 | 25 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII 1 b | |
| 175 | D3$f_8$ | N－67°－W | 楕円形 | 1.42×1.20 | 30 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第608図40～41 (2) | AII 1 b | |

| 番号 | 位置 | 長径方向 | 平面形 | 規模 長径×短径(m) | 規模 深さ(cm) | 壁面 | 底面 | 覆土 | ピット数 | 出土遺物 縄文土器片(点) | 形態分類 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 176 | D3f8 | | 円形 | 径1.75 | 84 | 外傾 | 平坦 | 1 | — | 第608図 42～43 | AII 2 b | |
| 177 | D3f9 | N—66°—W | 隅丸長方形 | 3.87×2.60 | 30 | 〃 | 〃 | 3 | — | | DIII 1 b | SK178と重複 |
| 178 | D3f9 | | 円形 | 径2.60 | 35 | 〃 | 〃 | 3 | — | (1) | AIII 1 b | SK177と重複 |
| 179 | D3f0 | N—19°—E | 楕円形 | 0.9×0.68 | 28 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI 1 b | |
| 180 | D3d9 | N—38°—W | 〃 | 0.60×0.45 | 27 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI 1 b | |
| 181 | D3e0 | N—66°—W | 〃 | 0.62×0.53 | 26 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AI 1 b | |
| 182 | D3f0 | N—57°—E | 〃 | 0.97×0.85 | 33 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI 1 b | |
| 183 | 撹乱穴 | | | | — | | | — | — | | F | |
| 184 | D3i7 | N—34°—E | 楕円形 | 1.25×1.12 | 25 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII 1 b | |
| 185 | D3i7 | | 円形 | 1.32×1.26 | 22 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII 1 b | |
| 186 | D3h7 | N—75°—W | 楕円形 | 2.07×1.33 | 27 | なだらか | 〃 | 2 | — | | AIII 1 b | |
| 187 | D3h8 | N—46°—E | 〃 | 1.04×0.90 | 27 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AI 1 b | |
| 188 | D3h8 | | 円形 | 径0.70 | 26 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI 1 b | |
| 189 | D3h9 | N—26°—W | 隅丸長方形 | 2.90×1.08 | 22 | 〃 | 〃 | 2 | 1 | | DIII 1 a | |
| 190 | D3h8 | N—55°—E | ひょうたん形 | 2.00×0.84 | 28 | 〃 | 〃 | 4 | 2 | | EIII 1 a | |
| 191 | D3i8 | N—40°—E | 楕円形 | 1.16×0.85 | 34 | 〃 | 起伏 | 2 | — | | AII 1 b | |
| 192 | D3h8 | N—0° | 〃 | 1.42×0.92 | 27 | 〃 | 平坦 | 2 | — | | AII 1 b | |
| 193 | D3j7 | | 円形 | 径0.66 | 30 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BI 1 b | |
| 194 | D3j8 | N—65°—E | 楕円形 | 1.42×1.30 | 30 | 〃 | 〃 | 2 | — | | BII 1 b | |
| 195 | D3j7 | | 円形 | 径0.70 | 25 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AI 1 b | |
| 196 | E3a7 | N—45°—E | 楕円形 | 1.10×0.98 | 34 | 〃 | 〃 | 2 | 1 | 第608図 44 (1) | AII 1 b | |
| 197 | D3i8 | | 円形 | 径0.65 | 38 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI 1 b | |
| 198 | E3a7 | | 〃 | 径1.55 | 20 | 〃 | 〃 | 2 | — | (3) | AII 1 b | |
| 199 | E3a7 | N—48°—W | 楕円形 | 1.32×1.10 | 28 | 〃 | 〃 | 3 | — | (8) | AII 1 b | |
| 200 | 撹乱穴 | | | | — | | | — | — | | F | |
| 201 | E3a8 | N—90°—E | 不整楕円形 | 2.25×1.30 | 24 | 〃 | 〃 | 2 | — | (87) | AIII 1 b | |
| 202 | 撹乱穴 | | | | — | | | — | — | | F | |
| 203 | E3a8 | N—45°—E | 楕円形 | 1.04×0.9 | 27 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII 1 b | |
| 204 | E3a8 | N—59°—E | 楕円形 | 1.08×0.86 | 28 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII 1 b | |
| 205 | E3a8 | N—60°—E | 〃 | 1.61×0.95 | 32 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII 1 b | |
| 206 | D3j8 | N—32°—E | 〃 | 0.74×0.62 | 30 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI 1 b | |
| 207 | D3j8 | N—0° | 〃 | 1.12×0.99 | 30 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII 1 b | |
| 208 | D3i9 | N—38°—W | 〃 | 0.90×0.73 | 32 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI 1 b | |
| 209 | D3i9 | N—33°—E | (楕円形) | (0.92)×0.66 | 29 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI 1 b | SK210と重複 |
| 210 | D3i9 | N—21°—E | ( 〃 ) | (0.9)×0.76 | 28 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第608図 45 (1) | AI 1 b | SK209と重複 |

| 番号 | 位置 | 長径方向 | 平面形 | 規模 長径×短径(m) | 規模 深さ(cm) | 壁面 | 底面 | 覆土 | ピット数 | 出土遺物 縄文土器片(点) | 形態分類 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 211 | D3h$_9$ | N−57°−E | 楕円形 | 2.03×1.28 | 34 | 外傾 | 平坦 | 4 | — | | AⅢ1b | |
| 212 | D3h$_9$ | N−57°−W | 〃 | 1.15×0.76 | 15 | 〃 | 〃 | 2 | 1 | | AⅡ1a | |
| 213 | D3h$_0$ | N−90°−E | 〃 | 1.02×0.83 | 14 | なだらか | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 214 | D3g$_0$ | N−90°−E | 〃 | 1.01×0.92 | 22 | 外傾 | 〃 | 2 | — | 第608図46 (2) | AⅡ1b | |
| 215 | D3f$_0$ | N−79°−W | 〃 | 1.60×1.02 | 24 | 〃 | 〃 | 3 | — | (32) | AⅡ1b | |
| 216 | D3h$_0$ | N−90°−E | 〃 | 0.50×0.42 | 18 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BⅠ1b | |
| 217 | D3h$_0$ | N−68°−W | 不整楕円形 | 1.90×0.77 | 28 | 外傾 | 〃 | 4 | — | | AⅡ1b | |
| 218 | D3h$_0$ | N−90°−W | (楕円形) | (1.63)×1.10 | 23 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AⅡ1b | SK236と重複 |
| 219 | 攪乱穴 | | | | — | | | — | | | F | |
| 220 | D3j$_9$ | N−68°−E | 不整楕円形 | 2.07×1.24 | 26 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BⅢ1b | |
| 221 | D3d$_4$ | | (円形) | (1.60)×1.56 | 26 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | SK41と重複 |
| 222 | D3h$_5$ | N−37°−E | 楕円形 | 1.08×0.80 | 29 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BⅡ1b | |
| 223 | D3h$_1$ | N−14°−W | 〃 | 0.91×0.78 | 32 | 〃 | 〃 | 2 | 1 | (22) | BⅠ1a | |
| 224 | D3j$_9$ | N−46°−E | 〃 | 0.95×0.76 | 33 | なだらか | 凹凸 | 2 | — | | AⅠ1b | |
| 225 | E3a$_9$ | | 円形 | 径0.70 | 27 | 垂直 | 平坦 | 2 | — | | BⅠ1b | |
| 226 | E3a$_9$ | N−0° | 楕円形 | 1.43×1.09 | 30 | 外傾 | 傾斜 | 3 | — | | AⅡ1b | |
| 227 | E3a$_9$ | N−50°−W | 〃 | 3.40×1.50 | 80 | 垂直 | 平坦 | 4 | — | | BⅢ1b | |
| 228 | E3a$_9$ | | 円形 | 径0.80 | 24 | 〃 | 〃 | 2 | — | | BⅠ1b | |
| 229 | E3a$_9$ | N−83°−W | 隅丸長方形 | 2.00×1.02 | 28 | 〃 | 〃 | 3 | — | | DⅢ1b | |
| 230 | E3a$_0$ | N−90°−E | 不整楕円形 | 1.60×1.10 | 80 | 〃 | 〃 | 3 | — | 第608図47〜48 (6) | BⅡ1b | |
| 231 | D3j$_9$ | N−25°−E | 楕円形 | 1.53×1.01 | 25 | 外傾 | 〃 | 5 | 1 | 第608図49〜50 (3) | AⅡ1a | |
| 232 | D3j$_0$ | N−5°−W | 〃 | 1.88×0.83 | 26 | 〃 | 〃 | 3 | — | (3) | AⅡ1b | |
| 233 | D3j$_0$ | N−82°−E | 不整楕円形 | 1.77×1.06 | 26 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 234 | D3j$_0$ | N−62°−W | 楕円形 | 1.60×1.00 | 26 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 235 | D3i$_0$ | N−81°−W | 〃 | 1.17×0.93 | 32 | 垂直 | 〃 | 4 | — | | BⅡ1b | |
| 236 | D3i$_0$ | | (円形) | 径(1.58) | 31 | 外傾 | 〃 | 4 | — | | AⅡ1b | SK218・237と重複 |
| 237 | D3h$_0$ | N−50°−W | (楕円形) | 1.77×(1.45) | 95 | 垂直 | 〃 | 4 | — | 第608図51・第609図1(13) | AⅡ1b | SK236, 238と重複 |
| 238 | D3h$_0$ | N−51°−W | (〃) | 1.00×(0.83) | 32 | 〃 | 〃 | 4 | — | | BⅡ1b | SK236・237と重複 |
| 239 | D4g$_1$ | N−3°−E | 〃 | 1.30×0.90 | 38 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 240 | D4g$_1$ | | 円形 | 径0.85 | 26 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅠ1b | |
| 241 | D4f$_1$ | N−5°−E | 楕円形 | 1.25×1.12 | 30 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 242 | D4g$_2$ | | 円形 | 径0.80 | 40 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅠ1b | |
| 243 | D4g$_2$ | N−52°−W | 楕円形 | 1.22×0.90 | 45 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 244 | D4d$_1$ | | 円形 | 径0.85 | 22 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅠ1b | |
| 245 | D4d$_1$ | | 〃 | 径0.80 | 22 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AⅠ1b | |

| 番号 | 位置 | 長径方向 | 平面形 | 規模 長径×短径(m) | 規模 深さ(cm) | 壁面 | 底面 | 覆土 | ピット数 | 出土遺物 縄文土器片(点) | 形態分類 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 246 | D4i$_2$ | N－35°－E | 楕円形 | 2.53×1.56 | 28 | 外傾 | 平坦 | 2 | — | | AⅢ1b | |
| 247 | D4j$_1$ | N－70°－W | 〃 | 2.01×1.30 | 32 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AⅢ1b | |
| 248 | D4j$_1$ | N－45°－E | 〃 | 1.35×1.18 | 30 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 249 | D4g$_3$ | N－80°－W | 〃 | 1.72×0.92 | 30 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 250 | 攪乱穴 | | | | — | | | — | — | | F | |
| 251 | E3a$_0$ | N－12°－W | 〃 | 1.13×0.93 | 23 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 252 | B4j$_2$ | N－32°－W | 〃 | 1.17×0.93 | 23 | 〃 | 〃 | 1 | — | | AⅡ1b | |
| 253 | D4j$_2$ | N－5°－W | 〃 | 0.82×0.72 | 20 | 垂直 | 〃 | 3 | — | | BⅠ1b | |
| 254 | D4j$_2$ | N－53°－W | 〃 | 1.68×1.26 | 26 | 外傾 | 〃 | 1 | — | | AⅡ1b | |
| 255 | E4a$_2$ | N－3°－W | 〃 | 2.00×1.75 | 25 | 〃 | 〃 | 4 | 2 | (18) | AⅢ1a | |
| 256 | D4j$_3$ | N－45°－E | (ひょうたん形) | 2.52×(1.02) | 24 | 〃 | 〃 | 2 | — | | EⅢ1b | SK257と重複 |
| 257 | D4j$_3$ | N－45°－E | (〃) | 2.52×(1.04) | 23 | 〃 | 〃 | 2 | — | | EⅢ1b | SK256と重複 |
| 258 | D4j$_3$ | N－12°－W | 楕円形 | 1.25×0.79 | 30 | 〃 | 〃 | 2 | 1 | | AⅡ1b | |
| 259 | D4i$_3$ | N－42°－W | 〃 | 1.37×1.07 | 29 | 〃 | 〃 | 1 | — | | AⅡ1b | |
| 260 | E4a$_3$ | N－36°－E | 〃 | 1.55×1.15 | 25 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 261 | E4a$_3$ | N－15°－E | 〃 | 1.52×0.93 | 29 | 垂直 | 〃 | 2 | — | 第609図2 (9) | BⅡ1b | |
| 262 | E4b$_2$ E4b$_3$ | N－60°－W | 隅丸方形 | 2.45×2.10 | 29 | 外傾 | 〃 | 2 | — | 第609図3～4 (6) | EⅢ1b | |
| 263 | E4b$_3$ | N－0° | 楕円形 | 1.50×1.17 | 22 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BⅡ1b | |
| 264 | E4a$_3$ | N－37°－E | 〃 | 0.91×0.7 | 14 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AⅠ1b | |
| 265 | E4a$_4$ | N－36°－W | 〃 | 1.28×0.97 | 27 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 266 | B4j$_4$ | N－14°－E | 〃 | 2.17×1.39 | 29 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AⅢ1b | |
| 267 | B4j$_4$ | N－32°－E | 〃 | 1.06×0.78 | 21 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AⅡ1b | |
| 268 | B4j$_4$ | N－32°－W | 〃 | 1.63×1.23 | 28 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第609図5 (1) | AⅡ1b | |
| 269 | B4j$_4$ | N－78°－E | 〃 | 2.05×1.83 | 95 | 垂直 | 〃 | 7 | — | | BⅢ1b | |
| 270 | D4j$_5$ | N－28°－W | 〃 | 0.91×0.65 | 40 | 外傾 | 皿状 | 2 | — | | AⅠ1b | |
| 271 | B4i$_4$ | N－90°－W | 〃 | 2.00×1.55 | 23 | 〃 | 平坦 | 2 | — | (2) | AⅢ1b | |
| 272 | B4i$_5$ | N－90°－E | 〃 | 0.91×0.80 | 41 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅠ1b | |
| 273 | D4i$_5$ | N－18°－E | 〃 | 1.96×1.05 | 34 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 274 | B4i$_5$ | N－80°－W | 〃 | 1.15×0.70 | 25 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BⅡ1b | |
| 275 | D4j$_6$ | N－56°－W | 〃 | 1.90×1.47 | 24 | 外傾 | 〃 | 2 | 1 | | AⅡ1b | |
| 276 | D4j$_6$ E4a$_6$ | N－90°－W | 〃 | 2.41×1.60 | 28 | 〃 | 〃 | 2 | — | (3) | AⅢ1b | |
| 277 | 攪乱穴 | | | | | | | | | | F | |
| 278 | E4b$_6$ | N－0° | 〃 | 0.95×0.85 | 25 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BⅠ1b | |
| 279 | E4b$_7$ | | 円形 | 径1.07 | 17 | 外傾 | 傾斜 | 2 | — | (15) | AⅡ1b | |
| 280 | E4b$_7$ | N－77°－W | 楕円形 | 1.15×0.88 | 27 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AⅡ1b | |

| 番号 | 位置 | 長径方向 | 平面形 | 規模 長径×短径(m) | 規模 深さ(cm) | 壁面 | 底面 | 覆土 | ピット数 | 出土遺物 縄文土器片(点) | 形態分類 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 281 | E4a$_8$ | | 円形 | 径1.14 | 26 | 外傾 | 平坦 | 2 | — | (2) | AII1b | |
| 282 | E4d$_8$ | | 〃 | 径1.50 | 73 | 垂直 | 起伏 | 4 | — | (38) | BII2b | |
| 283 | D2f$_9$ | N—71°—W | 楕円形 | 1.55×1.39 | 61 | 外傾 | 皿状 | 1 | — | (30) | AII2b | |
| 284 | D2e$_0$ | N—90°—E | 〃 | 1.10×0.97 | 58 | 垂直 | 平坦 | 1 | — | (9) | BII2b | SK313と重複 |
| 285 | D2f$_9$ | N—62°—E | 〃 | 1.04×0.95 | 43 | フラスコ状 | 〃 | — | 1 | | CII1a | |
| 286 | D3i$_9$ | N—55°—E | 不定形 | 1.50×1.03 | 41 | 外傾 | 凹凸 | 5 | — | | EII1b | SI17が隣接 |
| 287 | E3b$_6$ | N—33°—W | 楕円形 | 1.60×1.25 | 76 | 〃 | 平坦 | 1 | — | | AII2b | 上端段差あり |
| 288 | E4a$_3$ | | 円形 | 径1.60 | 65 | 垂直 | 〃 | 2 | — | 第609図6 (3) | BII2b | |
| 289 | E3b$_8$ | N—0° | 楕円形 | 1.45×1.37 | 126 | 〃 | 〃 | 1 | — | (12) | BII3b | SI15とSI16の間 |
| 290 | E4g$_7$ | N—76°—E | 〃 | 0.94×0.84 | 26 | 外傾 | 傾斜 | 3 | — | | AI1b | |
| 291 | E4f$_8$ | N—50°—W | 〃 | 1.45×1.15 | 21 | 〃 | 平坦 | 3 | — | | AII1b | |
| 292 | E4d$_8$<br>E4e$_8$ | N—45°—W | 〃 | 1.33×1.07 | 25 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII1b | |
| 293 | E4d$_8$ | N—25°—E | 〃 | 2.60×1.90 | 23 | 垂直 | 〃 | 4 | — | | BIII1b | |
| 294 | E4d$_7$<br>E4d$_8$ | N—68°—W | 〃 | 0.94×0.75 | 34 | 外傾 | 凹凸 | 3 | — | | AI1b | |
| 295 | E4d$_7$ | N—43°—E | 〃 | 1.64×1.22 | 75 | 垂直 | 〃 | 6 | — | (14) | BII2b | |
| 296 | E4d$_8$ | N—27°—E | 〃 | 1.22×0.96 | 27 | 外傾 | 平坦 | 2 | — | | AII1b | |
| 297 | E4e$_9$ | N—67°—E | 不定形 | 2.7×1.73 | 92 | 〃 | 皿状 | 7 | — | | EIII2b | |
| 298 | E4f$_9$ | N—68°—W | (楕円形) | 2.64×(1.36) | 22 | 〃 | 平坦 | 5 | — | | AIII1b | SK299と重複,焼土あり |
| 299 | E4f$_9$<br>E4f$_9$ | N—65°—W<br>N—30°—E | (〃)<br>(〃) | 2.27×(1.36)<br>2.35×(1.80) | 28<br>109 | 〃<br>〃 | 傾斜<br>皿状 | 3<br>4 | —<br>— | | AIII1b<br>AIII3b | SK298と重複<br>〃 |
| 300 | E4g$_8$ | N—68°—E | 楕円形 | 1.18×1.00 | 23 | 〃 | 傾斜 | | — | | AII1b | |
| 301 | E4h$_9$ | N—7°—W | 不整楕円形 | 3.40×1.23 | 26 | 〃 | 平坦 | 3 | 1 | (2) | AIII1a | |
| 302 | E4i$_9$ | | 円形 | 径0.81 | 25 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI1b | |
| 303 | E4i$_9$ | N—49°—W | 楕円形 | 1.23×0.90 | 20 | 〃 | 〃 | 4 | — | | AII1b | |
| 304 | E4h$_0$ | N—15°—W | 〃 | 2.79×2.37 | 84 | 〃 | 凹凸 | 10 | — | (21) | AIII2b | 焼土あり |
| 305 | E4g$_0$ | N—54°—E | 〃 | 1.61×0.97 | 28 | 〃 | 平坦 | 2 | — | | AII1b | |
| 306 | E4g$_0$ | N—18°—W | 〃 | 1.07×0.98 | 28 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII1b | |
| 307 | E4g$_0$ | N—39°—W | 〃 | 0.98×0.76 | 29 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI1b | |
| 308 | E4g$_0$ | N—47°—W | 〃 | 1.67×1.15 | 25 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII1b | |
| 309 | E5e$_1$ | N—53°—E | 〃 | 0.94×0.82 | 32 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI1b | |
| 310 | E5e$_2$ | N—16°—W | 不整楕円形 | 3.39×2.22 | 100 | 〃 | 凹凸 | 7 | — | (3) | AIII3b | |
| 311 | E4h$_2$ | | 円形 | 径0.93 | 34 | 〃 | 平坦 | 3 | — | | AII1b | |
| 312 | E4h$_3$ | N—0° | 楕円形 | 0.93×0.82 | 33 | 〃 | 〃 | 2 | — | (2) | AI1b | |
| 313 | D2f$_0$ | N—90°—W | 〃 | 1.64×1.34 | 72 | 〃 | 起伏 | 13 | — | (31) | AII2b | SK284と重複 |
| 314 | 撹乱穴 | | | | | | | | | | F | |
| 315 | E3d$_0$ | N—46°—W | 〃 | 0.98×0.67 | 20 | 〃 | 凹凸 | 1 | 1 | | AI1a | |

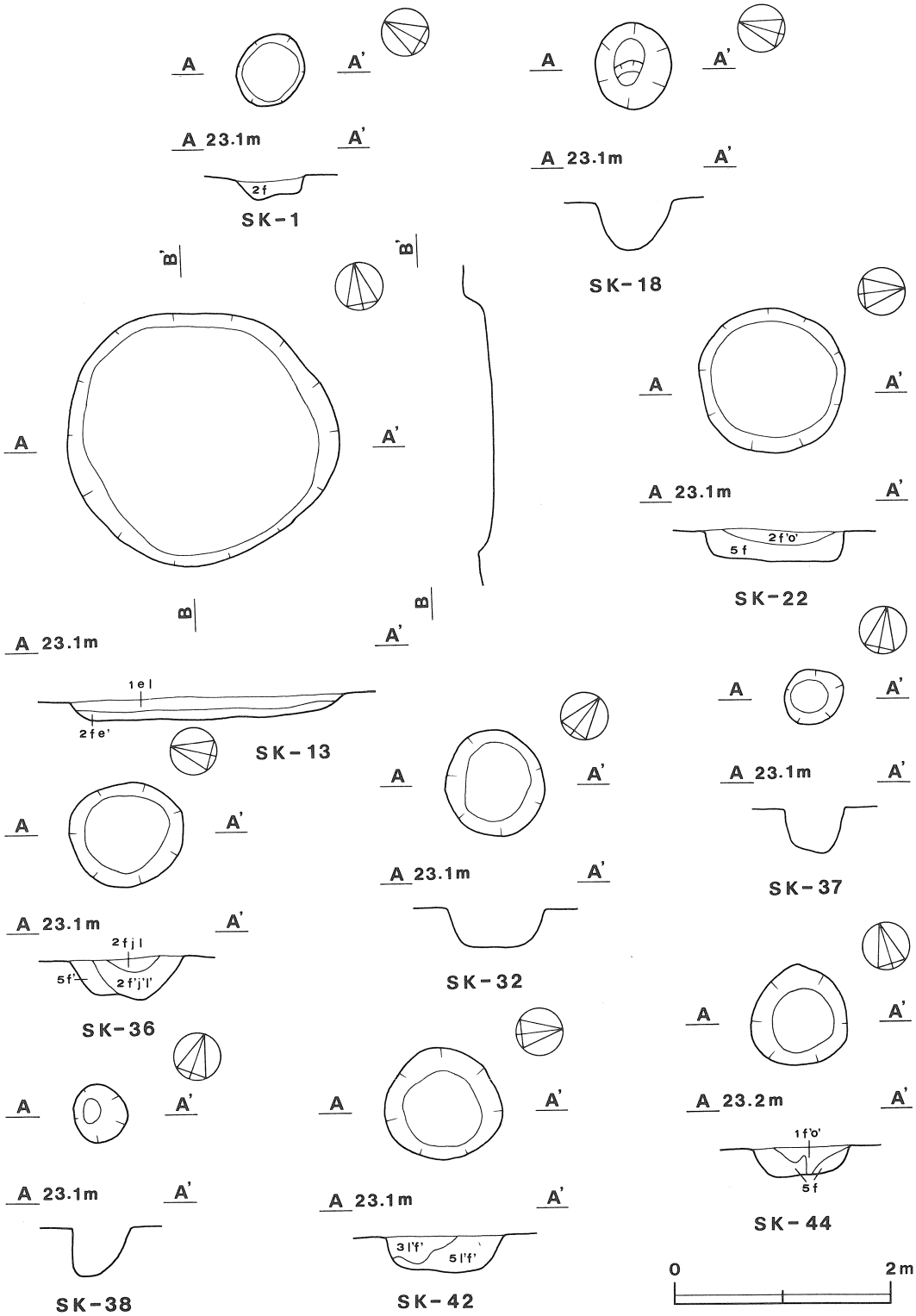
| 番号 | 位置 | 長径方向 | 平面形 | 規模 長径×短径(m) | 規模 深さ(cm) | 壁面 | 底面 | 覆土 | ピット数 | 出土遺物 縄文土器片(点) | 形態分類 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 316 | E4f$_1$ | N−86°−W | 楕円形 | 1.87×1.65 | 87 | 垂直 | 平坦 | 5 | — | (56) | BII2b | |
| 317 | E3a$_0$ E3b$_0$ | N−60°−E | 〃 | 1.62×1.45 | 25 | 外傾 | 凹凸 | 4 | 3 | 第609図 7〜8 (2) | AII1a | |
| 318 | E4j$_9$ | N−15°−E | 〃 | 2.7×2.27 | 25 | 〃 | 平坦 | 4 | — | 第609図 9〜10 (4) | AIII1b | |
| 319 | E4j$_0$ | N−90°−E | 〃 | 1.67×1.20 | 20 | 〃 | 〃 | 2 | — | (2) | AII1b | |
| 320 | E4j$_0$ | N−65°−E | 〃 | 2.00×1.22 | 20 | 〃 | 〃 | 2 | 1 | (9) | AIII1a | |
| 321 | E5j$_1$ | N−0° | 〃 | 1.20×0.95 | 18 | 〃 | 〃 | 2 | — | (3) | AII1b | |
| 322 | E5j$_1$ | N−20°−W | 〃 | 2.19×1.32 | 25 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第609図 11〜12 (2) | AIII1b | |
| 323 | F4a$_0$ | N−5°−W | 〃 | 1.68×1.10 | 24 | 〃 | 〃 | 3 | — | (22) | AII1b | |
| 324 | 欠番 | | | | | | | | | | | |
| 325 | 撹乱穴 | | | | | | | | | | F | |
| 326 | F4b$_5$ | | 円形 | 径1.00 | 45 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII1b | |
| 327 | F4b$_4$ | | 〃 | 径1.10 | 20 | 〃 | 凹凸 | 2 | 1 | | AII1a | |
| 328 | 撹乱穴 | | | | | | | | | | F | |
| 329 | E4e$_4$ | | 〃 | 径0.99 | 21 | 〃 | 平坦 | 2 | — | | AI1b | |
| 330 | 撹乱穴 | | | | | | | | | | F | |
| 331 | 〃 | | | | | | | | | | F | |
| 332 | F4a$_7$ F4a$_8$ | N−90°−E | 楕円形 | 1.47×1.34 | 21 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII1b | |
| 333 | F4f$_7$ | N−59°−E | 〃 | 1.80×1.35 | 31 | 〃 | 〃 | 3 | — | 第609図 13〜14 (15) | AII1b | |
| 334 | E4c$_4$ | N−48°−E | 〃 | 1.72×1.42 | 83 | 垂直 | 〃 | 2 | — | 第609図 15 (1) | BII2b | |
| 335 | E4a$_4$ E4b$_4$ | | 円形 | 径1.67 | 59 | 〃 | 〃 | 1 | — | 第609図 16〜17 (2) | BII2b | |
| 336 | E4c$_4$ | N−25°−E | 楕円形 | 0.99×0.86 | 31 | 外傾 | 〃 | 2 | — | 第609図 18〜19 (3) | AI1b | |
| 337 | E4c$_3$ | N−63°−E | 〃 | 1.38×1.02 | 25 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII1b | |
| 338 | E4c$_3$ | N−30°−E | 〃 | 1.39×0.92 | 32 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII1b | |
| 339 | E4c$_5$ | N−0° | 〃 | 0.90×0.74 | 33 | 〃 | 凹凸 | 2 | — | | AI1b | |
| 340 | F4b$_4$ | N−54°−W | 〃 | 0.61×0.47 | 45 | 〃 | 平坦 | 2 | — | | AI1b | |
| 341 | F4b$_5$ | | 円形 | 径0.89 | 46 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BI1b | |
| 342 | F4b$_5$ | N−90°−E | 楕円形 | 1.45×1.31 | 41 | 外傾 | 〃 | 1 | — | (10) | AII1b | SK345が隣接 |
| 343 | F4b$_5$ | N−44°−W | 〃 | 1.20×1.08 | 40 | 垂直 | 〃 | 1 | — | 第609図 20〜21 (2) | BII1b | SK345が重複 |
| 344 | F4b$_5$ | N−56°−E | (楕円形) | 1.48×(1.28) | 26 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AII1b | 焼土あり SK345が重複 |
| 345 | F4b$_5$ | N−0° | (〃) | (0.88)×0.72 | 46 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AI1b | SK343・344が重複 SK342が隣接 |
| 346 | E4j$_2$ | N−46°−W | 楕円形 | 1.78×1.45 | 90 | 垂直 | 〃 | 2 | — | 石鏃2点 (34) | BII2b | |
| 347 | F3c$_0$ | N−73°−W | 〃 | 1.04×0.87 | 75 | 〃 | 〃 | 2 | — | | BII2b | |
| 348 | F3b$_0$ | N−42°−W | 〃 | 0.71×0.67 | 39 | 外傾 | 〃 | 1 | — | 第609図 22〜23 (2) | AI1b | |
| 349 | F4f$_5$ | N−0° | 〃 | 1.30×1.06 | 27 | 〃 | 〃 | 2 | — | (1) | AII1b | |
| 350 | F4g$_6$ | N−48°−W | 〃 | 2.48×2.25 | 44 | 〃 | 〃 | 4 | — | | AIII1b | 段差あり |

| 番号 | 位置 | 長径方向 | 平面形 | 規模 長径×短径(m) | 規模 深さ(cm) | 壁面 | 底面 | 覆土 | ピット数 | 出土遺物 縄文土器片(点) | 形態分類 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 351 | 攪乱穴 | | | | | | | | | 第609図 24 | F | |
| 352 | 〃 | | | | | | | | | 第609図 25 | F | |
| 353 | E3f$_9$ | | 円形 | 径1.75 | 102 | フラスコ状 | 皿状 | 5 | — | (93) | CII3b | SI24内 |
| 354 | E3f$_0$ | N—26°—E | 楕円形 | 1.69×1.48 | 76 | 垂直 | 平坦 | 1 | — | (22) | BII2b | SI24内 |
| 355 | E3g$_0$ | N—28°—E | 不整楕円形 | 1.38×1.21 | 33 | なだらか | 起伏 | 2 | — | (29) | EII1b | SI24内 |
| 356 | E3g$_0$ | N—47°—E | 楕円形 | 1.01×0.72 | 10 | 外傾 | 凹凸 | 3 | — | | AII1b | SI24内 |
| 357 | E3f$_0$ | N—67°—E | ひょうたん形 | 1.11×0.61 | 67 | 垂直 | 平坦 | 2 | — | (21) | EII2b | SI24内 段差あり |
| 358 | E3i$_2$ | | 円形 | 径1.50 | 90 | 〃 | 〃 | 4 | — | (29) | BII2b | SK446と重複 |
| 359 | E4c$_8$ | N—74°—W | 楕円形 | 1.56×1.15 | 16 | 〃 | 〃 | 2 | — | | BII1b | |
| 360 | 攪乱穴 | | | | | | | | | | F | |
| 361 | E2e$_0$ | N—18°—E | 〃 | 1.95×0.98 | 25 | 外傾 | 〃 | 3 | — | 第609図 26～27 (6) | AII1b | |
| 362 | E2g$_9$ | N—36°—E | 〃 | 1.43×0.90 | 30 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AII1b | |
| 363 | E2d$_7$ | N—69°—W | 不整楕円形 | 2.64×1.21 | 24 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第609図 28～29 (10) | AIII1b | |
| 364 | E2d$_5$ | N—90°—W | 楕円形 | 1.90×1.52 | 25 | 〃 | 〃 | 3 | — | 第609図 30 (1) | AII1b | |
| 365 | 攪乱穴 | | | | | | | | | 第609図 31～32 | F | |
| 366 | E2f$_5$ | N—43°—E | 〃 | 1.34×1.07 | 24 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII1b | |
| 367 | E2g$_4$ | N—28°—E | 〃 | 1.02×0.84 | 22 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII1b | |
| 368 | E2f$_5$ E2g$_5$ | N—43°—E | 〃 | 1.27×0.84 | 22 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第609図 33～37 (6) | AII1b | |
| 369 | E2h$_2$ | N—40°—E | (長方形) | (1.54)×0.35 | 75 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | DII2b | |
| 370 | E2g$_7$ | N—37°—E | 楕円形 | 0.71×0.62 | 23 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AI1b | |
| 371 | E2g$_7$ | N—30°—E | 〃 | 1.64×1.25 | 21 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第609図 38 (3) | AII1b | |
| 372 | E2h$_7$ | N—37°—E | 〃 | 1.30×0.98 | 20 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII1b | |
| 373 | E2i$_7$ | N—55°—E | 〃 | 1.36×1.17 | 30 | 〃 | 〃 | 3 | — | 第609図 39～41 (3) | AII1b | |
| 374 | E3i$_8$ | N—35°—W | 〃 | 1.60×1.07 | 12 | なだらか | 〃 | 2 | — | | AII1b | |
| 375 | E2g$_8$ | N—11°—E | 〃 | 1.96×1.26 | 13 | 〃 | 〃 | 1 | — | 第609図 42 (1) | AII1b | |
| 376 | E2i$_8$ | N—90°—E | 〃 | 1.22×0.93 | 14 | 外傾 | 〃 | 2 | — | | AII1b | |
| 377 | E2i$_8$ | N—68°—E | 〃 | 1.28×1.14 | 54 | 垂直 | 〃 | 2 | — | | BII2b | |
| 378 | E2i$_8$ | N—60°—E | 〃 | 1.48×1.21 | 15 | 〃 | 〃 | 2 | 1 | | BII1a | |
| 379 | E2i$_8$ E2i$_9$ | | 円形 | 径0.92 | 20 | 〃 | 凹凸 | 2 | 1 | | BI1a | |
| 380 | E2h$_9$ | N—58°—W | 楕円形 | 1.5×1.16 | 40 | 外傾 | 平坦 | 2 | — | 第609図 43 (2) | AII1b | |
| 381 | E2h$_9$ | N—27°—W | 〃 | 1.38×1.01 | 13 | 〃 | 〃 | 1 | — | | AII1b | |
| 382 | 攪乱穴 | | | | | | | | | | F | |
| 383 | E2h$_9$ | | 円形 | 径1.20 | 5～11 | なだらか | 〃 | 1 | — | | AII1b | |
| 384 | E2i$_9$ | | 〃 | 径1.28 | 38 | 外傾 | 〃 | 3 | — | (18) | AII1b | |
| 385 | E3j$_1$ | N—32°—W | 楕円形 | 1.95×1.2 | 16 | 〃 | 〃 | 2 | 1 | 第609図 44 (2) | AII1b | |

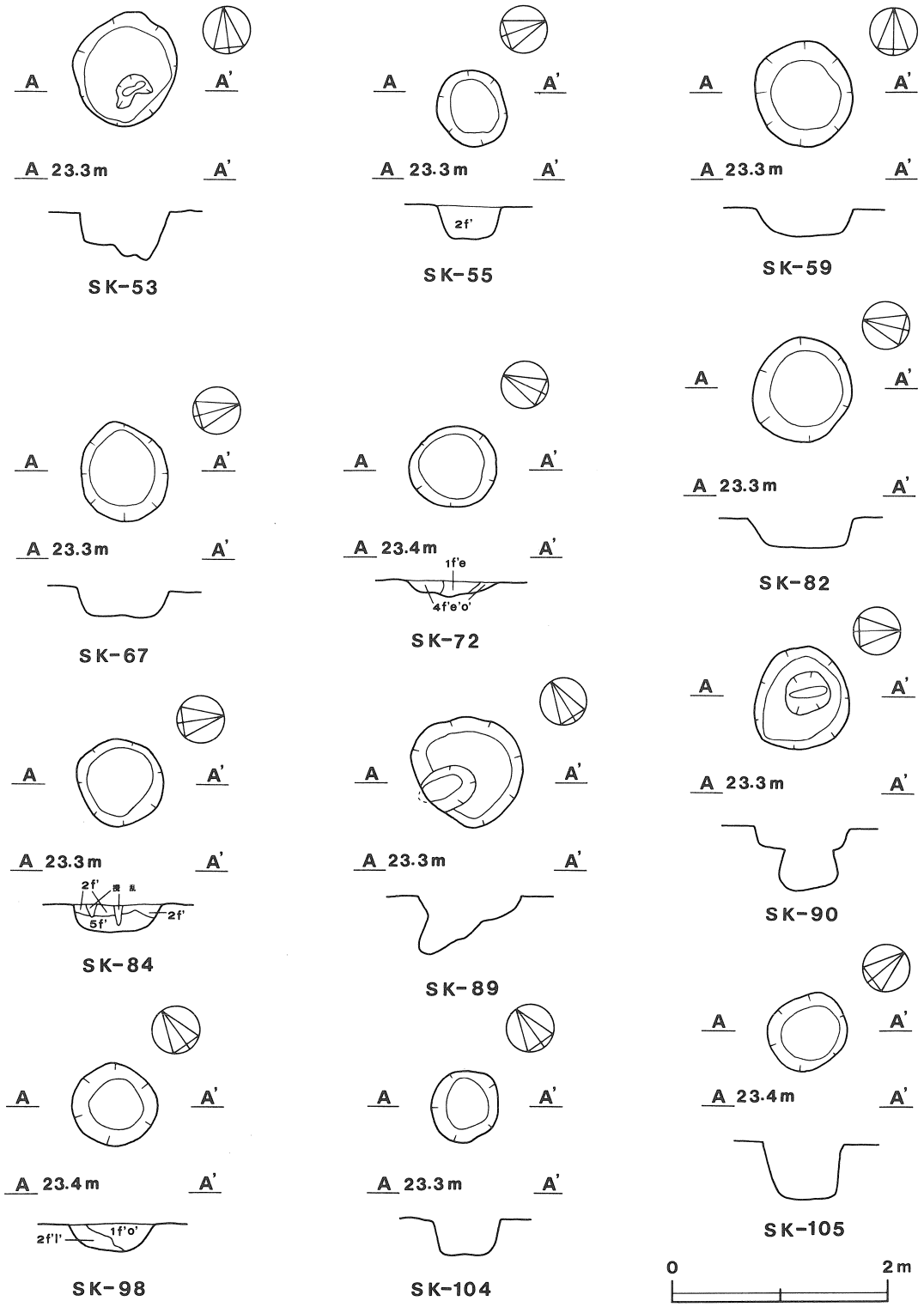
| 番号 | 位置 | 長径方向 | 平面形 | 規模 長径×短径(m) | 規模 深さ(cm) | 壁面 | 底面 | 覆土 | ピット数 | 出土遺物 縄文土器片(点) | 形態分類 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 386 | E3d$_3$ | N－53°－W | 楕円形 | 1.40×1.23 | 46 | 垂直 | 平坦 | 5 | — | (18) | BII1b | |
| 387 | E3i$_4$ | N－90°－E | 〃 | 1.02×0.85 | 42 | 外傾 | 〃 | 1 | — | (17) | AII1b | SK391と重複 |
| 388 | E3i$_4$ | N－90°－W | 〃 | 1.25×1.03 | 80 | 垂直 | 〃 | 2 | — | (15) | BII2b | |
| 389 | 撹乱穴 | | | | | | | | | | F | |
| 390 | E2g$_0$ | N－23°－W | 〃 | 7.95×0.84 | 62 | 〃 | 〃 | 1 | — | | BI2b | SI32内 |
| 391 | E3i$_4$ | N－0° | 不定形 | 1.12×0.86 | 29 | 外傾 | 〃 | 2 | — | 第609図45 (19) | EII1b | SK387と重複 |
| 392 | F3c$_0$ | N－22°－E | 楕円形 | 1.47×0.77 | 12 | 〃 | 凹凸 | 1 | — | 第609図46～47 (2) | AII1b | |
| 393 | E3h$_4$ | N－32°－E | 〃 | 1.83×1.02 | 35 | 〃 | 平坦 | 1 | — | (10) | AII1b | |
| 394 | F4c$_1$ | N－40°－W | 〃 | 1.00×0.9 | 80 | 垂直 | 〃 | 3 | — | 第609図48～49 (4) | BII2b | SI33内 |
| 395 | E3j$_5$ | | 円形 | 径1.27 | 36 | 外傾 | 〃 | 2 | — | (40) | AII1b | |
| 396 | 撹乱穴 | | | | | | | | | 第609図50 | F | |
| 397 | E3h$_4$ | N－74°－E | 楕円形 | 2.02×0.74 | 17 | 〃 | 〃 | 1 | — | | AII1b | |
| 398 | E3a$_8$ | N－84°－W | 〃 | 0.99×0.74 | 20 | 〃 | 起伏 | 3 | — | | AI1b | |
| 399 | E3i$_7$ | N－90°－E | 〃 | 0.91×0.81 | 10 | なだらか | 平坦 | 1 | — | | AI1b | |
| 400 | E3j$_6$ | N－51°－E | 〃 | 1.19×1.01 | 24 | 外傾 | 起伏 | 1 | — | 第610図1～2 (11) | AII1b | |
| 401 | E3j$_5$ | | 円形 | 径1.13 | 35 | 〃 | 平坦 | 1 | — | (34) | AII1b | |
| 402 | F3a$_3$ | N－70°－E | 楕円形 | 1.57×0.97 | 20 | 〃 | 〃 | 4 | — | | AII1b | |
| 403 | F3b$_6$ | N－31°－E | 〃 | 1.34×1.01 | 13 | 〃 | 〃 | 2 | — | (17) | AII1b | |
| 404 | E3c$_3$ | | 円形 | 径0.78 | 44 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AI1b | 段差あり |
| 405 | E3c$_1$ E3c$_2$ | N－90°－W | 楕円形 | 1.59×1.46 | 49 | 〃 | 〃 | 3 | 1 | | AII1a | |
| 406 | E3c$_4$ | N－40°－E | 〃 | 1.30×1.10 | 24 | 〃 | 〃 | 1 | — | | AII1b | |
| 407 | E3c$_5$ | | (円形) | 径(1.18) | 76 | 〃 | 凹凸 | 3 | 1 | (42) | AII2a | SK422と重複 |
| 408 | E3g$_1$ | N－22°－W | 楕円形 | 1.26×1.15 | 18 | 〃 | 〃 | 3 | 1 | | AII1a | |
| 409 | E2e$_6$ | | 円形 | 径2.85 | 174 | 垂直 | 平坦 | 7 | 4 | (600) | BIII3a | 焼土あり |
| 410 | E3b$_2$ | N－0° | 楕円形 | 2.35×1.9 | 28 | 外傾 | 凹凸 | 2 | 2 | (7) | AIII1a | SK11と重複 |
| 411 | E3b$_2$ | N－90°－W | 〃 | 1.50×1.33 | 25 | 〃 | 平坦 | 3 | — | 第610図3～4 (10) | AII1b | SK410と重複 |
| 412 | 撹乱穴 | | | | | | | | | | F | |
| 413 | E3d$_6$ | N－0° | 不定形 | 1.87×1.59 | 43 | 〃 | 〃 | 3 | — | (15) | EII1b | |
| 414 | E3c$_6$ | | 円形 | 径1.04 | 18 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII1b | |
| 415 | E3c$_6$ | N－14°－E | 楕円形 | 1.28×1.14 | 40 | 〃 | 〃 | 1 | — | (30) | AII1b | |
| 416 | E3c$_5$ | N－31°－E | (〃) | 1.75×(1.48) | 28 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII1b | SK417と重複 |
| 417 | E3c$_5$ | N－42°－W | (〃) | (2.05)×1.95 | 71 | 〃 | 〃 | 3 | — | | AIII2b | SK416と重複 |
| 418 | E3g$_7$ | N－8°－W | 〃 | 0.87×0.70 | 30 | 〃 | 〃 | 1 | — | | AI1b | SI28内 |
| 419 | E3h$_8$ | N－59°－W | 隅丸長方形 | 0.70×0.57 | 28 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第610図5～6 (21) | DI1b | SI28内 |
| 420 | 撹乱穴 | | | | | | | | | | F | |

| 番号 | 位置 | 長径方向 | 平面形 | 規模 長径×短径(m) | 規模 深さ(cm) | 壁面 | 底面 | 覆土 | ピット数 | 出土遺物 縄文土器片(点) | 形態分類 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 421 | F4b$_0$ | | 円形 | 径0.68 | 60 | 外傾 | 平坦 | 3 | — | | AI2b | |
| 422 | E3c$_5$ | N−15°−W | 楕円形 | 0.95×0.75 | 28 | 〃 | 皿状 | 3 | 1 | (7) | AI1a | SK407と重複 |
| 423 | E2i$_0$ | | 円形 | 径1.34 | 76 | フラスコ状 | 平坦 | 3 | — | 第610図7 (12) | CII2b | |
| 424 | E3a$_2$ | | 〃 | 径1.00 | 30 | 外傾 | 傾斜 | 2 | — | | AII1b | |
| 425 | F3i$_3$ | N−23°−E | 楕円形 | 1.24×0.97 | 32 | 〃 | 平坦 | 3 | — | (2) | AII1b | |
| 426 | F3h$_3$ | N−21°−E | 〃 | 1.32×0.85 | 52 | 〃 | 凹凸 | 3 | — | | AII2b | |
| 427 | F3h$_3$ | N−19°−E | 〃 | 1.10×0.68 | 32 | 〃 | 傾斜 | 4 | — | | AII1b | |
| 428 | F3h$_3$ | N−14°−W | 〃 | 0.60×0.50 | 16 | 〃 | 平坦 | 3 | — | (1) | AI1b | |
| 429 | | | | | | | | | | | | |
| 430 | | | | | | | | | | | | |
| 431 | F3c$_1$ | N−39°−W | 不整長方形 | 2.78×1.53 | 28 | なだらか | 〃 | 2 | — | | DIII1b | |
| 432 | | | | | | | | | | | | |
| 433 | F3e$_4$ F3e$_5$ | N−60°−W | 長方形 | 4.10×2.78 | 52 | 外傾 | 〃 | 6 | 2 | 第610図8〜11 (21) | EIII2a | |
| 434 | 撹乱穴 | | | | | | | | | 第610図12 | F | |
| 435 | F3a$_2$ | N−33°−E | 〃 | 2.25×1.88 | 30 | 〃 | 〃 | 1 | 2 | 第610図13〜14 (8) | DIII1a | |
| 436 | F3f$_6$ | N−40°−E | 〃 | 2.9×2.22 | 20 | なだらか | 〃 | 2 | 2 | | DIII1a | |
| 437 | F3f$_4$ | N−54°−W | 〃 | 2.25×1.85 | 34 | 外傾 | 〃 | 4 | — | 第610図15 (2) | DIII1b | |
| 438 | F3e$_5$ | N−0° | 楕円形 | 0.80×0.66 | 10 | 〃 | 凹凸 | 2 | 1 | | AI1a | |
| 439 | F3f$_5$ | N−50°−W | 長方形 | 3.15×2.35 | 26 | 〃 | 平坦 | 2 | — | 第610図16〜17 (26) | DIII1b | |
| 440 | F3f$_8$ | N−28°−E | 楕円形 | 1.11×0.91 | 21 | 〃 | 〃 | 2 | — | | AII1b | |
| 441 | F3h$_7$ h$_8$ | N−55°−W | 不整楕円形 | 0.88×0.66 | 22 | 〃 | 皿状 | 1 | — | | AI1b | 炭化物多 |
| 442 | | | | | | | | | | | | |
| 443 | 撹乱穴 | | | | | | | | | | F | |
| 444 | 〃 | | | | | | | | | 第610図18 | F | |
| 445 | E3h$_2$ | N−38°−E | 楕円形 | 1.20×0.81 | 17 | 〃 | 凹凸 | 3 | 1 | (2) | AII1a | |
| 446 | E3i$_2$ E3i$_3$ | N−42°−E | 〃 | 2.18×2.00 | 45 | 〃 | 〃 | 2 | — | (28) | AIII1b | SK358と重複 |
| 447 | 撹乱穴 | | | | | | | | | | F | |
| 448 | E3h$_0$ | | 円形 | 径1.30 | 60 | 〃 | 平坦 | 2 | — | 第610図19〜22 (12) | AII2b | |
| 449 | E3h$_9$ | | 〃 | 径0.65 | 30 | 垂直 | 〃 | 2 | — | 第610図25 (6) | BI1b | |
| 450 | E3j$_9$ | N−38°−E | 楕円形 | 0.65×0.55 | 40 | 〃 | 〃 | 1 | — | (3) | BI1b | |
| 451 | E4h$_1$ | | 円形 | 径0.68 | 37 | 外傾 | 〃 | 2 | — | (4) | AI1b | |
| 452 | E3i$_0$ | | 〃 | 径0.70 | 30 | 〃 | 凹凸 | 1 | — | (5) | AI1b | |
| 453 | F3j$_5$ | N−33°−E | 楕円形 | 1.64×1.10 | 44 | 〃 | 平坦 | 2 | — | 第610図26 (4) | AII1b | |
| 454 | F3i$_7$ | N−33°−E | 不整方形 | 2.47×2.37 | 70 | 垂直 | 〃 | 4 | 2 | 第610図27 (1) | BIII2a | |
| 455 | E3c$_6$ | N−53°−W | 不定形 | 1.96×1.45 | 31 | 外傾 | 凹凸 | 4 | 1 | (4) | EII1a | |

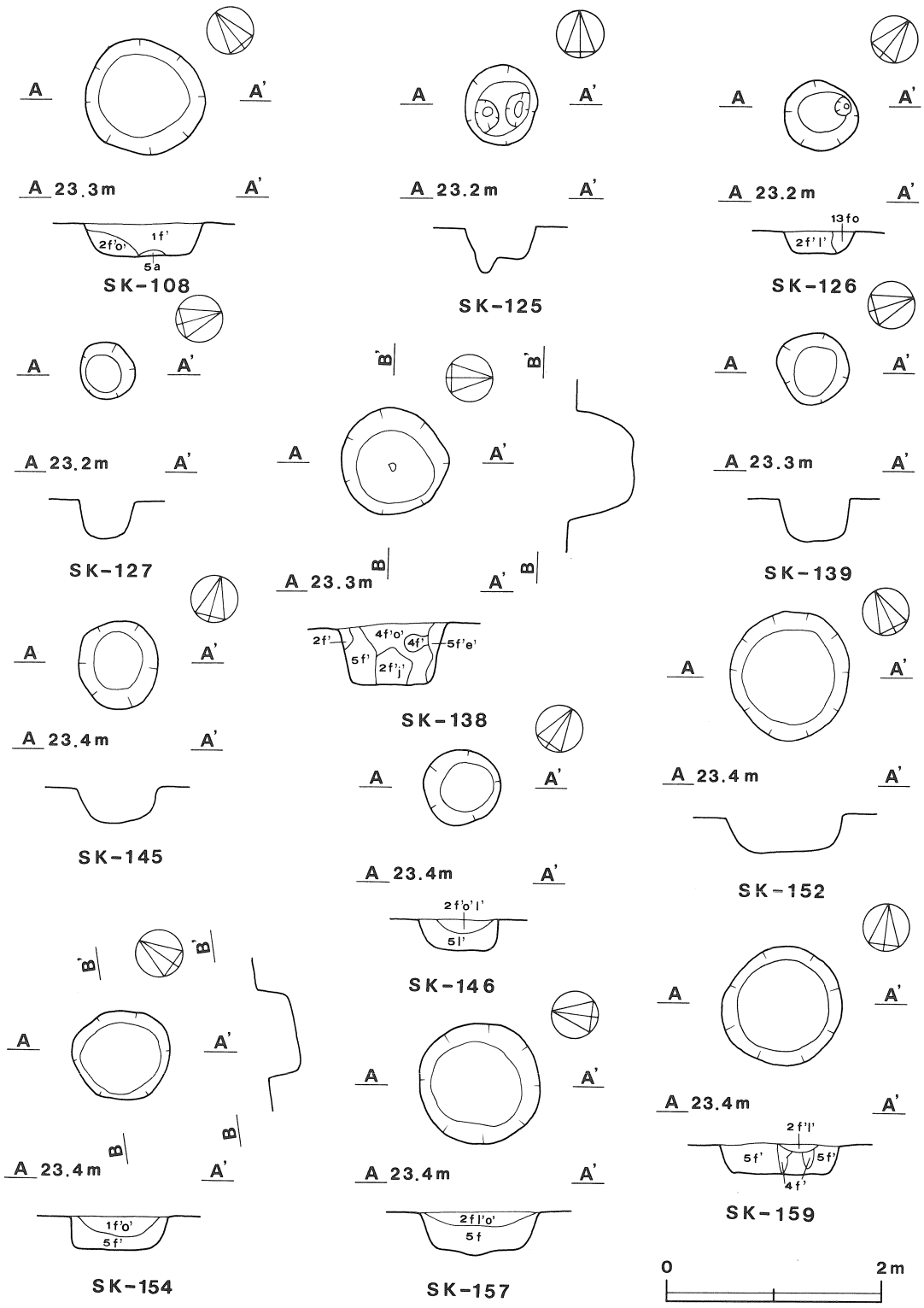
| 番号 | 位置 | 長径方向 | 平面形 | 規模 長径×短径(m) | 規模 深さ(cm) | 壁面 | 底面 | 覆土 | ピット数 | 出土遺物 縄文土器片(点) | 形態分類 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 456 | 攪乱穴 | | | | | | | | | | F | |
| 457 | F5b$_1$ | N－40°－E | 楕円形 | 1.52×1.22 | 50 | 外傾 | 平坦 | 2 | — | | AⅡ2b | SⅠ36炉と重複 |
| 458 | | | | | | | | | | | | |
| 459 | G4a$_1$ | N－37°－E | 〃 | 1.63×1.10 | 27 | 〃 | 凹凸 | 4 | — | | AⅡ1b | |
| 460 | G4a$_2$ | N－55°－E | 不整楕円形 | 1.25×0.68 | 30 | 〃 | 起伏 | 2 | — | | AⅡ1b | |
| 461 | F4j$_3$ | N－81°－E | 楕円形 | 2.10×1.50 | 30 | 〃 | 凹凸 | 5 | 2 | (4) | AⅢ1a | |
| 462 | F3g$_5$・g$_6$ | N－51°－E | 長方形 | 2.55×2.15 | 28 | 〃 | 平坦 | 1 | 4 | | DⅢ1a | |
| 463 | F3g$_3$ | N－39°－E | 〃 | 2.64×1.87 | 30 | 〃 | 〃 | 1 | — | (8) | DⅢ1b | |
| 464 | F3g$_6$ | N－48°－W | 〃 | 2.50×2.18 | 50 | 〃 | 〃 | 1 | — | | DⅢ2b | |
| 465 | F3h$_7$ | N－58°－W | 〃 | 2.40×2.10 | 77 | 垂直 | 〃 | 1 | — | | DⅢ2b | |
| 466 | 攪乱穴 | | | | | | | | | | F | |
| 467 | F3h$_4$ | N－24°－E | 不整長方形 | 2.16×1.50 | 90 | 〃 | 〃 | 4 | 2 | 第610図23 (12) | DⅢ2a | |
| 468 | F3i$_4$・i$_5$ | N－58°－W | 長方形 | 1.58×1.00 | 70 | 〃 | 〃 | 2 | — | 第610図24 (1) | DⅡ2b | |
| 469 | | | | | | | | | | | | |
| 470 | F3i$_0$ | N－31°－E | 〃 | 1.30×1.12 | 14 | なだらか | 〃 | 1 | — | | AⅡ1b | |
| 471 | F3a$_9$ | N－40°－E | (長方形) | 1.80×(1.75) | 36 | 外傾 | 〃 | 3 | — | | DⅡ1b | SD－4と重複 |
| 472 | F3f$_0$ | | 円形 | 径0.82 | 35 | 〃 | 〃 | 2 | 1 | | DⅠ1a | |
| 473 | F3f$_3$ | N－36°－E | 方形 | 2.20×2.05 | 40 | 〃 | 〃 | 1 | — | (1) | AⅢ1b | |
| 474 | F3i$_8$ | N－45°－E | 楕円形 | 1.36×0.96 | 65～105 | 〃 | 〃 | 7 | — | | AⅡ3b | |



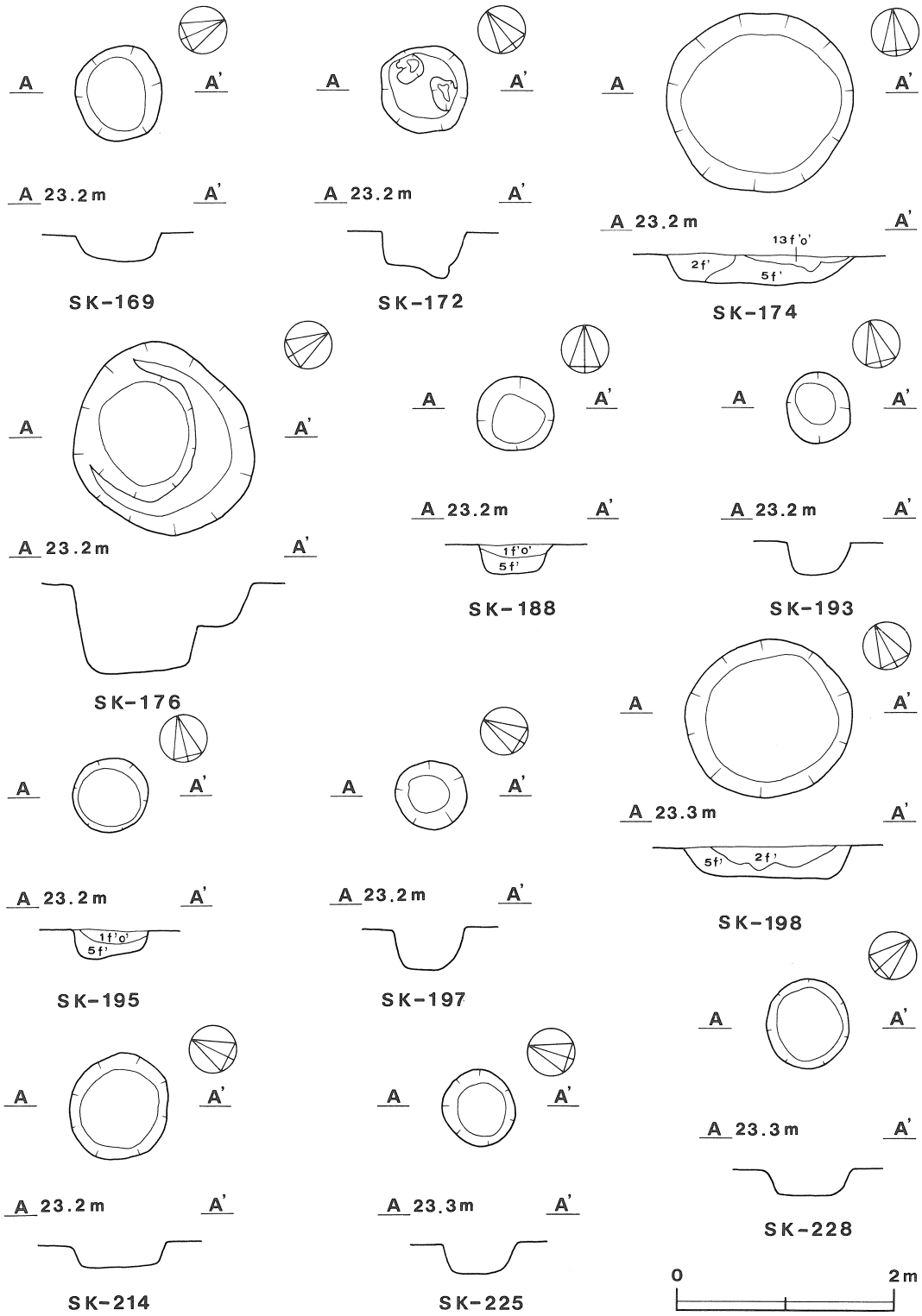

第558図　土壙実測図　(1)



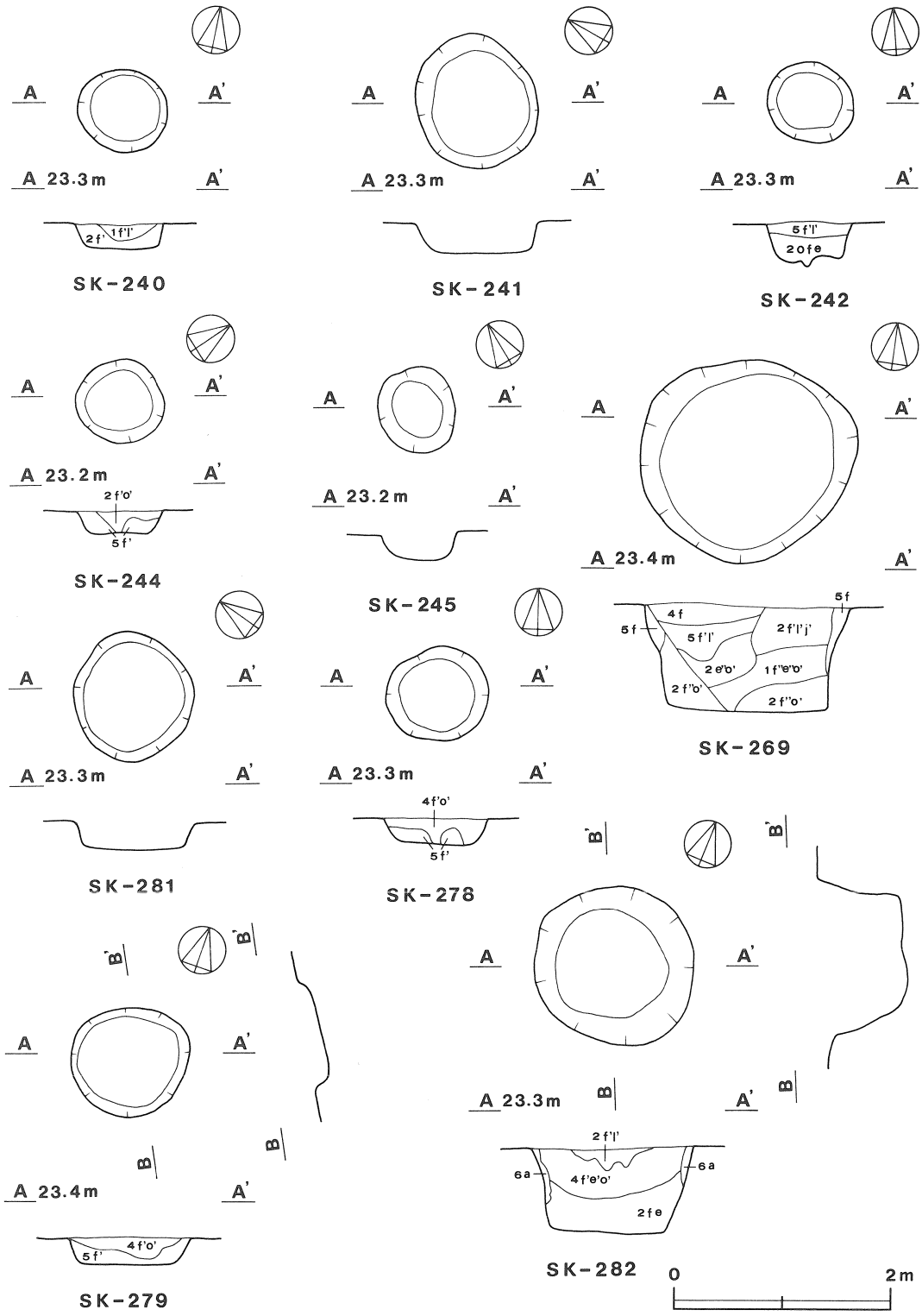

第559図　土壙実測図 (2)



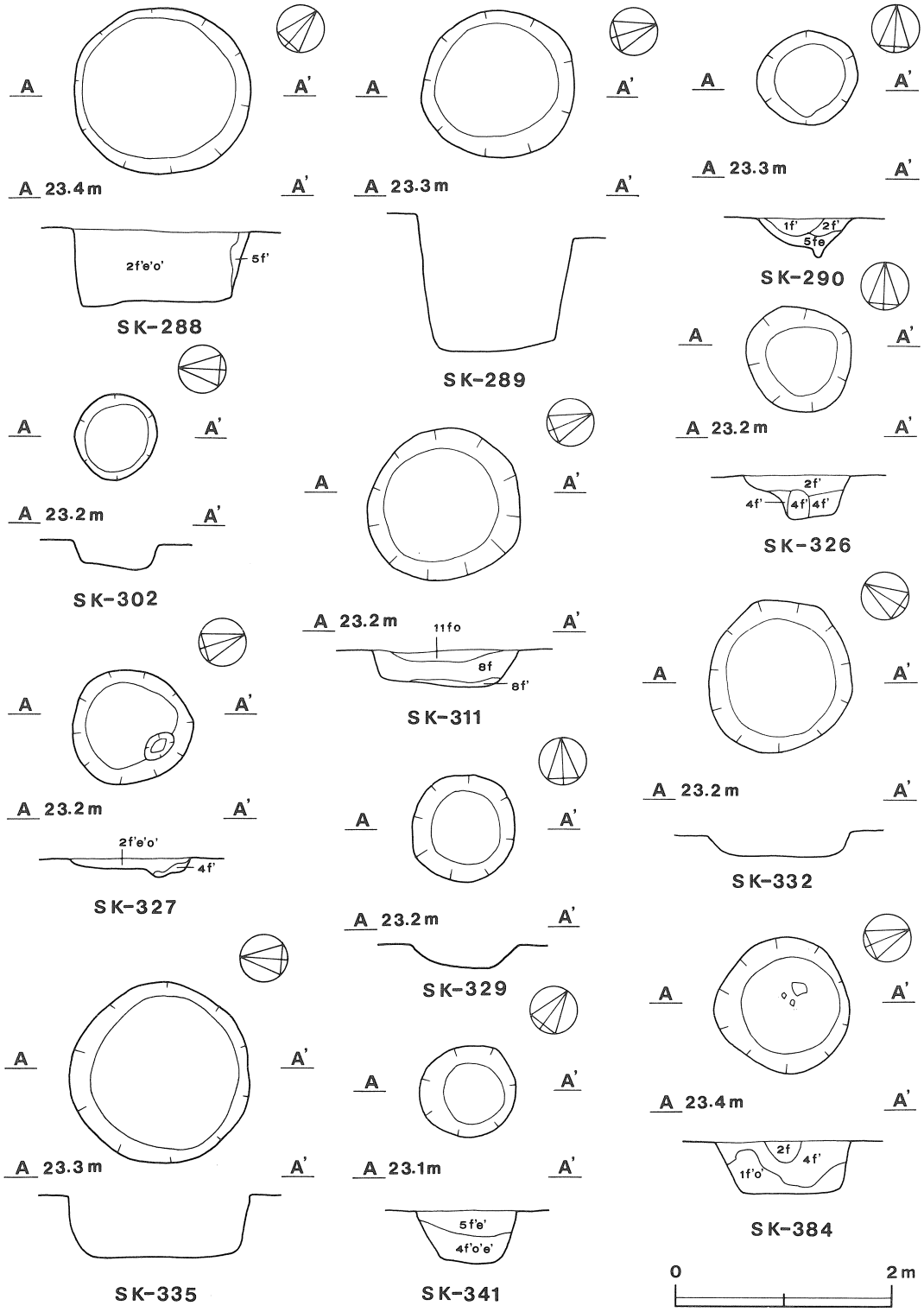

第560図　土壙実測図 (3)



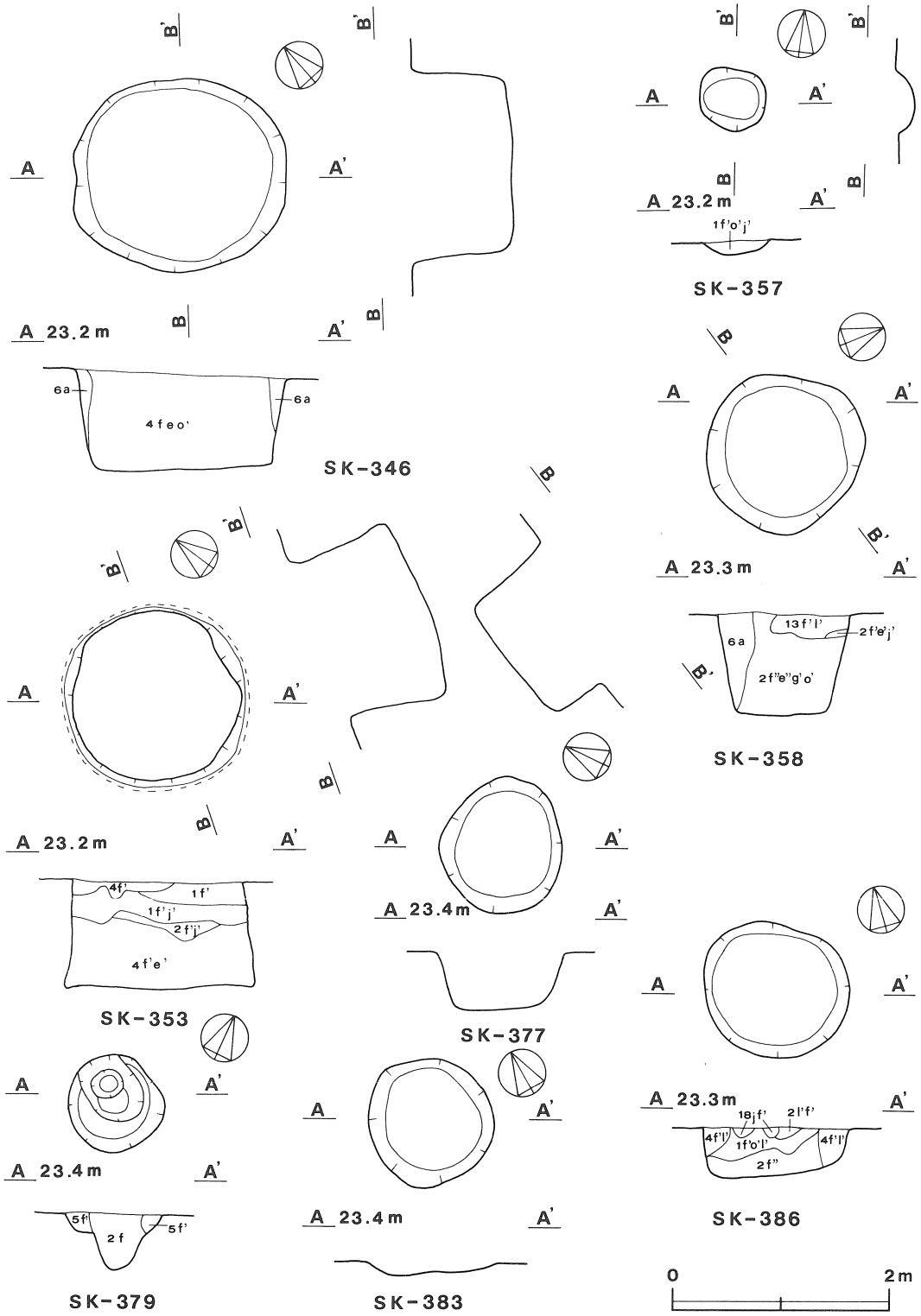

第561図　土壙実測図　(4)



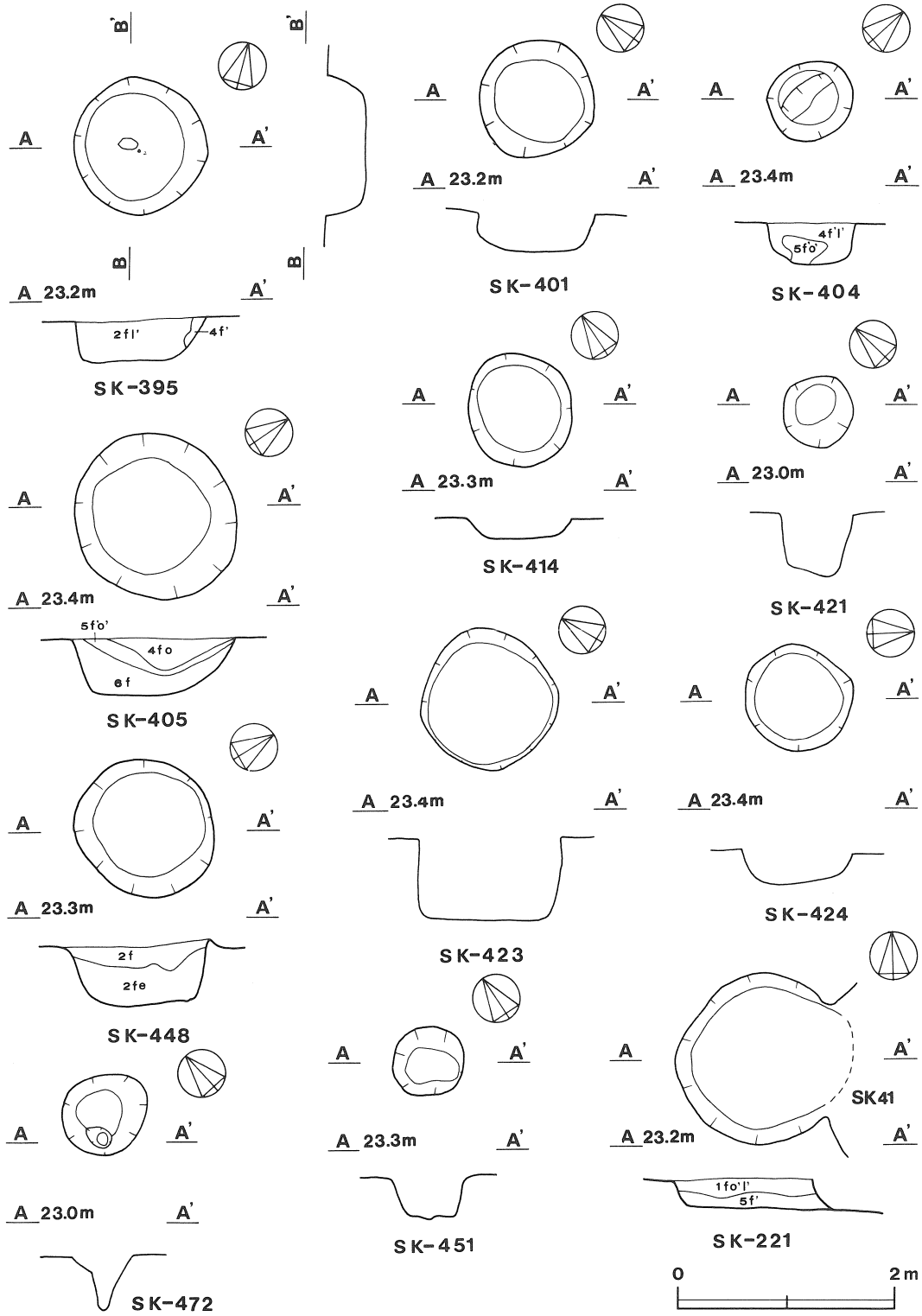

第562図　土壙実測図　(5)



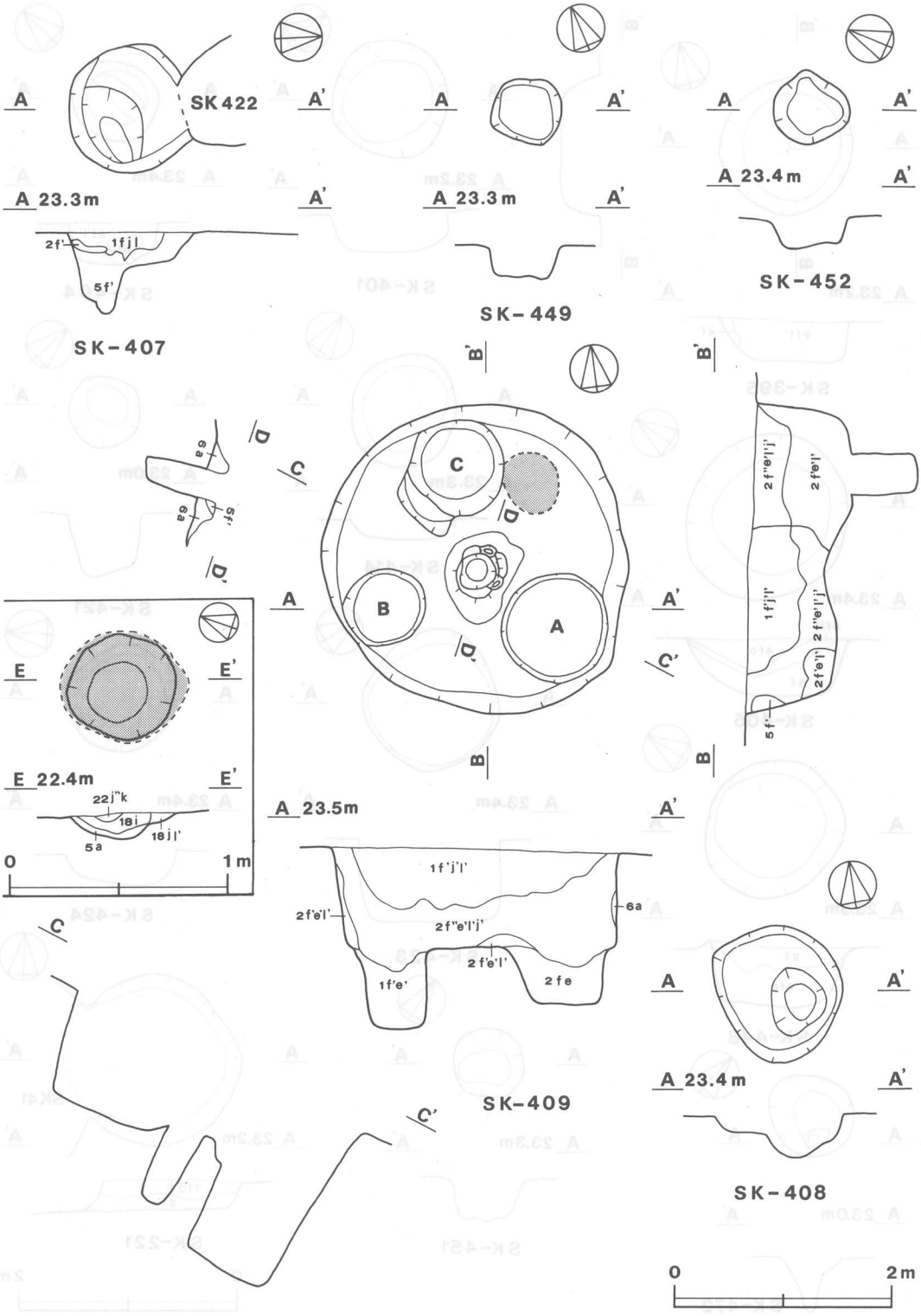

第563図　土壙実測図 (6)



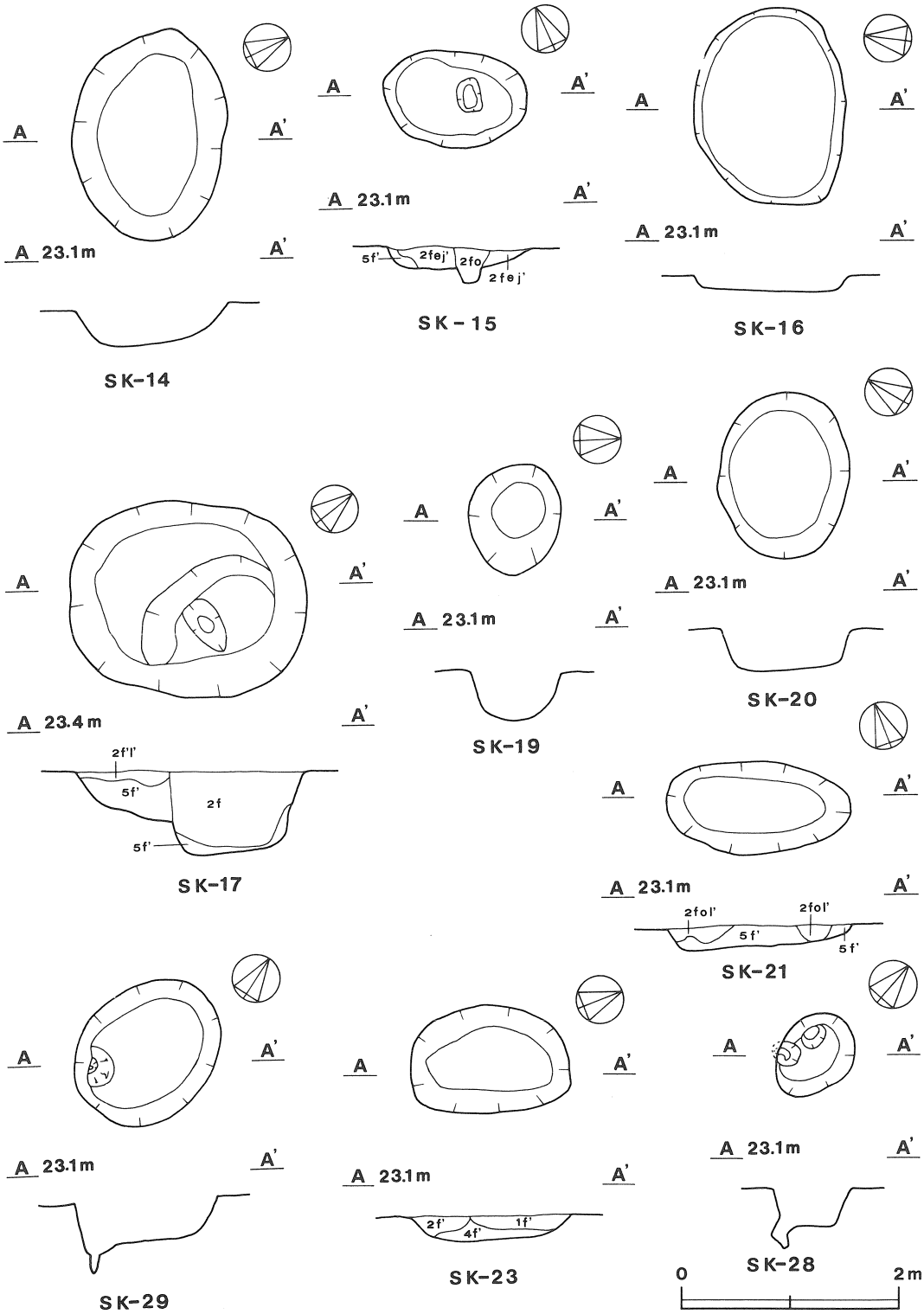

第564図　土壙実測図 (7)




第565図　土壙実測図 (8)




第566図　土壙実測図　(9)




第567図　土壙実測図 (10)